宮城県文化財調査報告書第144集

舘南囲遺跡ほか

平成3年3月

宮城県教育委員会

序　　文

宮城県内には現在およそ6,000ケ所の埋蔵文化財の存在が知られています。それらには数十万年前の旧石器時代から百数十年前の近世までの長い人間の活動の歴史が刻みこまれており、県民はもとより国民共有の貴重な文化遺産であることはいうまでもありません。

しかし、埋蔵文化財はまさしく土地に密着していることから、その時々の種々の開発行為と大きな関わりをもつことも否めない事実であります。殊に昭和40年代からのいわゆる“高度経済成長期”においては多数の埋蔵文化財がその影響下に晒されました。

一方、昨今、経済優先への反省から、人々の志向する価値観が物質的豊さから精神的豊さへと大きく転換し始めています。それに伴い、現代文化の基層・背景をなす人類の思考・行動の軌跡を明らかにし、それをもとにして将来あるべき生活像を模索しようという機運が高まりつつあることも事実であります。このような状況の中で、当時の人々の生活痕跡が具体的な形で残されている、いうなれば、直接歴史を体験できる内容を包含している場である埋蔵文化財に対しても強い関心が寄せられるようになってきております。

埋蔵文化財の保護に携わる者として、あらためてその責務の重大性を認識するとともに、なお一層の研鑽を重ねる所存であります。

本書は平成2年度に発掘調査を実施した9遺跡の調査成果を収録したものであります。それぞれの地域史解明に資するところがあれば幸いとするところです。

最後に、調査にあたりご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げるとともに、今後とも文化財の保護保存について特段のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成3年3月

宮城県教育委員会 教育長　大立目　謙 直

目　　次

調査に至る経過 ……2
舘南囲遺跡 ……5
小堤城跡 ……5
台町古墳群 ……137
下南山遺跡 ……179
高田遺跡 ……189
大畑遺跡 ……201
深沢山遺跡 ……213
音無遺跡 ……217
蒲切沢遺跡 ……227

例　　言

1．本書は平成二年度に宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査のうち、国庫補助事業、受託事業、および単独の調査報告書として別途刊行予定のものを除く遺跡の調査報告書である。

2．開発工事等にかかる埋蔵文化保護のための協議や発掘調査にあたっては、次の関発担当部局や発掘届提出者および地元教育委員会から多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

　建設省東北地方建設局、亘理町建設課、福島県農地建設課、宮城県道路公社、大河原土木事務所、村田町建設課、大衡村建設課

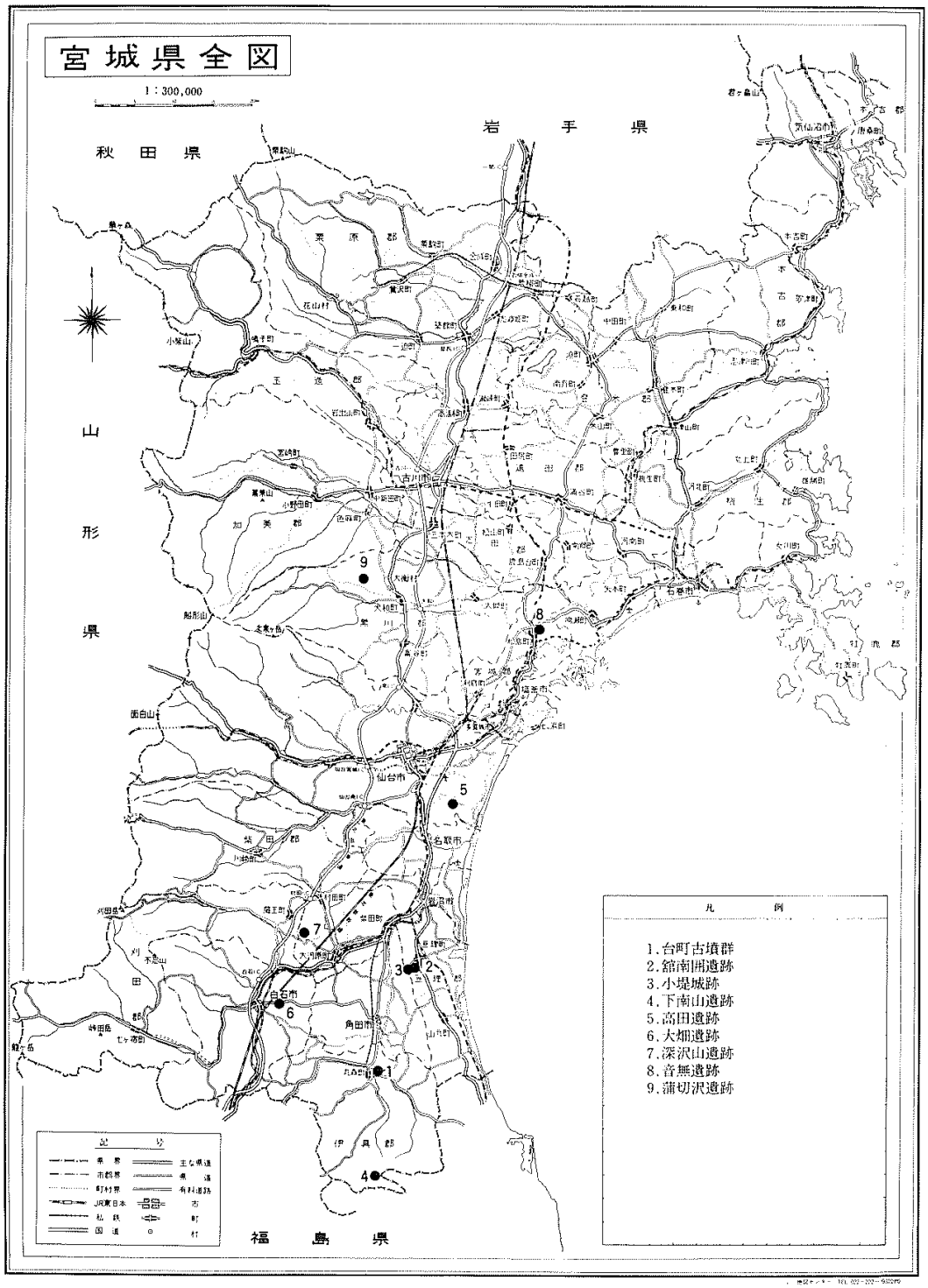
3．本書で使用した土色については『新版標準土色帖』（1973）を参照した。

4．本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は建設省国土地理院発行の 1／25,000 の地図を複製して使用したものである。

5．本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

　調査に至る経過－小井川和夫、台町古墳群－古川一明、舘南囲・小堤城跡－古川一明・鈴木真一郎・大和幸生、下南山遺跡－真山悟、高田遺跡・大畑遺跡－近藤和夫、深沢山遺跡－菊地逸夫、音無遺跡－高橋栄一、蒲切沢遺跡－白鳥良一・古川一明

6．発掘調査で出土した遺物および調査記録類などは宮城県教育委員会ないしは地元町村教育委員会で保管している。


宮城県全図
1：300,000
秋田県
岩手県
山形県
福島県
凡例
1.台町古墳群
2.舘南囲遺跡
3.小堤城跡
4.下南山遺跡
5.高田遺跡
6.大畑遺跡
7.深沢山遺跡
8.音無遺跡
9.蒲切沢遺跡

収録遺跡位置図

調査に至る経過

〔舘南囲遺跡〕

亘理町南西部にあり、東へゆるやかに傾斜する標高 25～30mの丘陵上に立地する。古くから石包丁出土地として知られ、また土師器などの古代の遺物も散布している。

平成元年 4 月、急遽、遺跡内を通る町道の改良計画が提示され、これが調査の契機となった。亘理町では平成 3 年 2 月の開校を目指し本遺跡の北西部の丘陵地に中学校の建設を進めていたが､この計画はその通学路として町道を拡幅･整備しようとするものであった。このため、計画と遺跡との係わりを把握するため平成元年 7 月遺構確認調査を実施したところ、発掘調査対象域は計画路線の内、東西延長約 200mにおよぶと考えられた。しかし既に元年度の調査計画は確定しており年度内にこの調査を完了させることは困難であることから、元年・2 年の 2 カ年にわたって実施することとし、元年 10 月に東半部、2 年 4 月に西半部を調査した。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡などの他、近世以前に遡る旧東街道の痕跡と思われる道路跡とともに 15～20mの一定の間隔の溝で区切られると見られる中世の建物跡多数が検出され、それらは後に述べる小堤城跡との関係から、居館の周囲に展開する屋敷群・集落跡であると考えられた。

さらに平成 2 年 6 月、調査区の北隣接地で育苗ハウス建設のための畑地造成計画が提示された。調査実施期などについて協議を重ねたが、次年度の田植えに間に合わせる必要があるという地権者の強い意向があり同年 10 月緊急に調査を実施した。その結果、四面庇付建物跡・竪穴遺構などが検出された。前記の調査結果ともあわせ一区画の屋敷の構成が主屋と付属屋から成っていることが想定された。

〔小堤城跡〕

舘南囲遺跡調査地点の南約 100mに位置し､周囲が土塁で囲まれたほぼ方形の城跡で 100×130mの規模を持つ｡鎌倉時代末に亘理に移住した鎌倉御家人千葉氏の末裔武石氏の居城と伝えられ、後亘理伊達家の菩提寺・大雄寺となり現在に至っている。

平成2年4月､庫裏建て替えのための基礎工事の際中世陶器などの遺物が出土したため、舘南囲遺跡と併行して調査を行った。調査の結果、複数回の整地地業の痕跡が確認され江戸時代後半～明治時代前半の大雄寺の遺構とともに中世期とみられる一本柱列跡などの遺構が検出された。

〔台町古墳群〕

丸森町東部に所在し、阿武隈川流域の沖積地内へ延びる丘陵上に立地する。主軸長 33m

の前方後円墳を中心として径 5～25mの大小の円墳 170 余基が東西 350m・南北 700mの範囲に展開する、東北地方においても屈指の大古墳群でその大部分は宮城県史跡として指定されている。

今回の調査は、昭和 62 年 12 月、丘陵のすぐ北側を東流する阿武隈川の改修に伴い、古墳群が立地する丘陵の西裾にとりつく新たな堤防の築堤工事計画が提示されことを契機とする。工事予定地には古墳の存在は知られていなかったが、隣接地域であることから翌 63 年 3 月に分布調査を実施したところ古墳と考えられるわずかな高まりが認められた。このため、さらに翌平成元年 8 月この高まりについて確認調査を実施した結果、高まりは積土によるものであること、周囲に溝が巡ること、積土上部から土師器壺が出土したことなどから古墳であることが確認された。

以上の結果をふまえ本年度は工事予定地全域を対象として調査を実施した。その結果予定地内および周辺で 4 基の古墳の存在が明らかになり、この内 2 基が堤防の盛土下に埋まることから発掘調査を実施した。残る 2 基は、それぞれ一部に盛土が及ぶ箇所がありその部分についてのみ調査した。調査の詳細については本文を参照されたい。

〔下南山遺跡〕

福島県境に近い丸森町南部の筆甫地域に所在し、500～600mの山々に囲まれた標高 400m前後の丘陵上に立地する遺跡である。

昭和 54 年、福島県農政局はこの地区を流れる宇多川を堰き止め、下流域の相馬・新地地区の上水道水・農業用水の安定確保を図るための松ケ房ダム建設計画を策定した。その計画を受けて宮城県教育委員会が実施した昭和 56 年の分布調査の結果、その湛水域内に本遺跡が含まれていることが明らかになったが、山林や荒れ地の部分もありその範囲等の詳細は必ずしも明確ではなかった。

この調査は、平成 4 年の湛水開始に対応して実施する発掘調査をひかえ、遺跡範囲の再認識と内容の把握を目的に実施したものである。

〔高田遺跡〕

仙台市南東部の標高 3～4m前後の沖積地に立地する。平成元年、仙台南道路第Ⅱ期工事計画に伴い分布調査・試掘調査を実施した結果、弥生時代の遺物包含層が検出され、遺跡の範囲が従来知られていた範囲よりも拡大し、路線敷内まで及んでいることが明らかになった。

今回の調査は、宮城県道路公社の依頼を受け、道路建設工事に伴う本格的な発掘調査に先立ち包含層の広がりや遺構状況の確認を目的として実施したものである。また工事工程上、現道と交差する部分に事前にカルバート・ボックスを埋設し交通を確保する必要があ

ることから、その部分を対象とした事前調査を併せて実施した。

〔大畑遺跡〕

白石市東部の自然堤防上に広く展開する遺跡で、土師器・須恵器の他瓦も採集され古代官衙跡の存在も予想されていた。

この調査は、国道 113 号線のバイパス建設が遺跡内を東西に貫いて計画されていることから遺跡の範囲・内容を早期に確認する必要があるため実施したものである。用地買収の完了した小範囲を対象とした調査であったが、真北方向を基準とした総柱建物跡や溝など古代苅田郡衙の一部かとも考えられる遺構が検出された。調査区が限定されたことからまだその一部のみが明らかになった段階であり、今後調査を継続していく必要がある。

〔深沢山遺跡〕

村田町南部にあり、北東方向へ傾斜する丘陵斜面に立地する。標高約 50mである。遺跡が立地する丘陵域にゴルフ場建設が計画されたことに伴って昭和 62 年 12 月に実施した分布調査によって新たに発見された。遺跡そのものはゴルフ場予定地外であったが、それに通ずる町道の改良計画との関わりが生じた。当初は遺跡中央部を横断するような計画であったが、協議の結果、遺跡への影響が最も少ないと考えられる丘陵縁辺部へ法線が変更された。今回の調査はその部分についての遺構確認を目的に実施したものである。

〔音無遺跡〕

松島町西部の標高 15mほどの丘陵上に立地する。今回の調査は三陸縦貫自動車道仙台松島道路建設に伴い併走する国道 45 号線が一部つけかえられることになりその路線が丘陵の北端部に及ぶことから、宮城県道路公社の委託を受けて実施したものである。

〔蒲切沢遺跡〕

大衡村西部にあり、小さな沢に内かう北向き緩斜面に立地する。今回の調査の契機は、遺跡からさらに西部の丘陵地にゴルフ場建設が計画されその進入路としての村道改良事業が本遺跡にも及ぶことになったことによる。平成元年 7 月以来協議を重ね、道路拡幅に伴う切土面を自然法面から擁壁に変えるなど遺跡への影響を最小限に留めるよう工法を変更することとした。本調査はその工事に対応して実施したものである。

舘南囲遺跡
小堤城跡

調 査 要 項

遺 跡 名：舘南囲遺跡（たてみなみかこいいせき）
　　宮城県遺跡地図(昭和 63 年版)・遺跡地名表登載番号；13005 遺跡記号：ＭＫ
所 在 地：宮城県亘理郡亘理町字雪穴・舘南囲・泉ケ入
調査期間：第 1 次調査　1989 年（平成元年）7 月 4 日～7 月 11 日
　　第 2 次調査　1989 年（　〃　）10 月 11 日～11 月 17 日
　　第 3 次調査　1990 年（平成二年）4 月 9 日～6 月 8 日
　　第 4 次調査　1990 年（　〃　）10 月 1 日～10 月 31 日
調査面積：第 2 次調査　調査対象面積；約 2,500 ㎡　発掘調査面積；約 600 ㎡
　　第 3 次調査　調査対象面積；約 2,500 ㎡　発掘調査面積；約 1,000 ㎡
　　第 4 次調査　調査対象面積；　650 ㎡　発掘調査面積；　600 ㎡
調査原因：町道改良工事
調査主体：亘理町教育委員会
調査担当：第 1 次調査　白鳥良一・菊地逸夫・古川一明・吉田雅之・大和幸生
　　第 2 次調査　白鳥良一・阿部博志・手塚均・菊地逸夫・古川一明・吉田雅之
　　須田良平・大和幸生・伊藤裕・鈴木真一郎・岩見和泰・木皿直幸
　　第 3 次調査　小井川和夫・斎藤吉弘・古川一明・須田良平・鈴木真一郎
　　木皿直幸・村上利雅
　　第 4 次調査　小井川和夫・古川一明・鈴木真一郎・木皿直幸・村上利雅
調査協力：亘理町建設課

遺 跡 名：小堤城跡（おづつみじょうあと）
　　宮城県遺跡地図（昭和 63 年版）・遺跡地名表登載番号：13022 遺跡記号：ＯＺ
所 在 地：宮城県亘理郡亘理町字泉ケ入
調査期間：1990 年（平成二年）5 月 9 日～5 月 28 日
調査面積：調査対象面積；20,000 ㎡　発掘調査面積；120 ㎡
調査原因：大雄寺庫裡建設工事
調査主体：亘理町教育委員会
調査担当：小井川和夫・古川一明・鈴木真一郎・木皿直幸・村上利雅
調査協力：亘理町建設課

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と範囲

舘南囲遺跡は宮城県亘理町舘南・雪穴・泉ケ入に所在する。小堤城跡は舘南囲遺跡の西に隣接している。ＪＲ常磐線の亘理駅の南西約 2Km に位置し、亘理町の中心街からは国道 6 号線をはさんでその西郊にあたる。

舘南囲遺跡はかつて石包丁などが出土したことから弥生時代の遺跡として登録されていた。その範囲は今回の調査区の東端部周辺とみられていたが、今回の調査では古墳時代・古代・中世・近世の遺構・遺物が主に発見され、これら各時代の遺構が重複する複合遺跡であることが明らかになった。さらに、周辺の畑地での遺物の散布状況を検討した結果、さらに南西に遺跡が広がっていることが明らかになった。その範囲は発掘調査を実施した字雪穴（あざゆきあな）の地域を北限とし、南側は亘理伊達家の廟所として知られる大雄寺の門前から東側一帯の字泉ケ入・館南囲（あざいずみがいり・たてみなみかこい）の広い範囲に及ぶことが確認された。このため、これらの地域を包括して舘南囲遺跡の範囲と認定することにした。

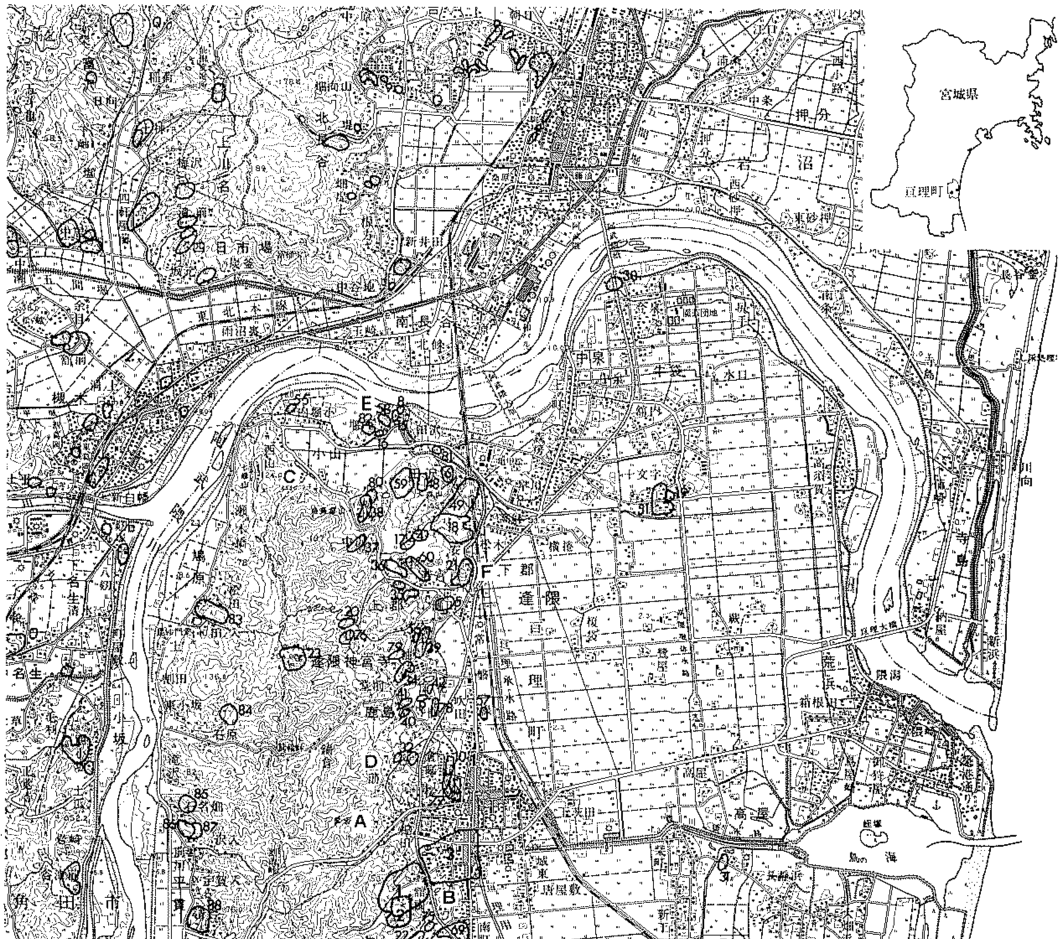
小堤城跡は舘南囲遺跡の西に隣接する中世の館跡とされている遺跡である。その中核は土塁よって取り囲まれた現在の大雄寺境内で、土塁の周囲に巡る平坦地まで含めた遺跡の広がりは東西約 150m・南北約 250mに及んでいる。

2．周辺の地形

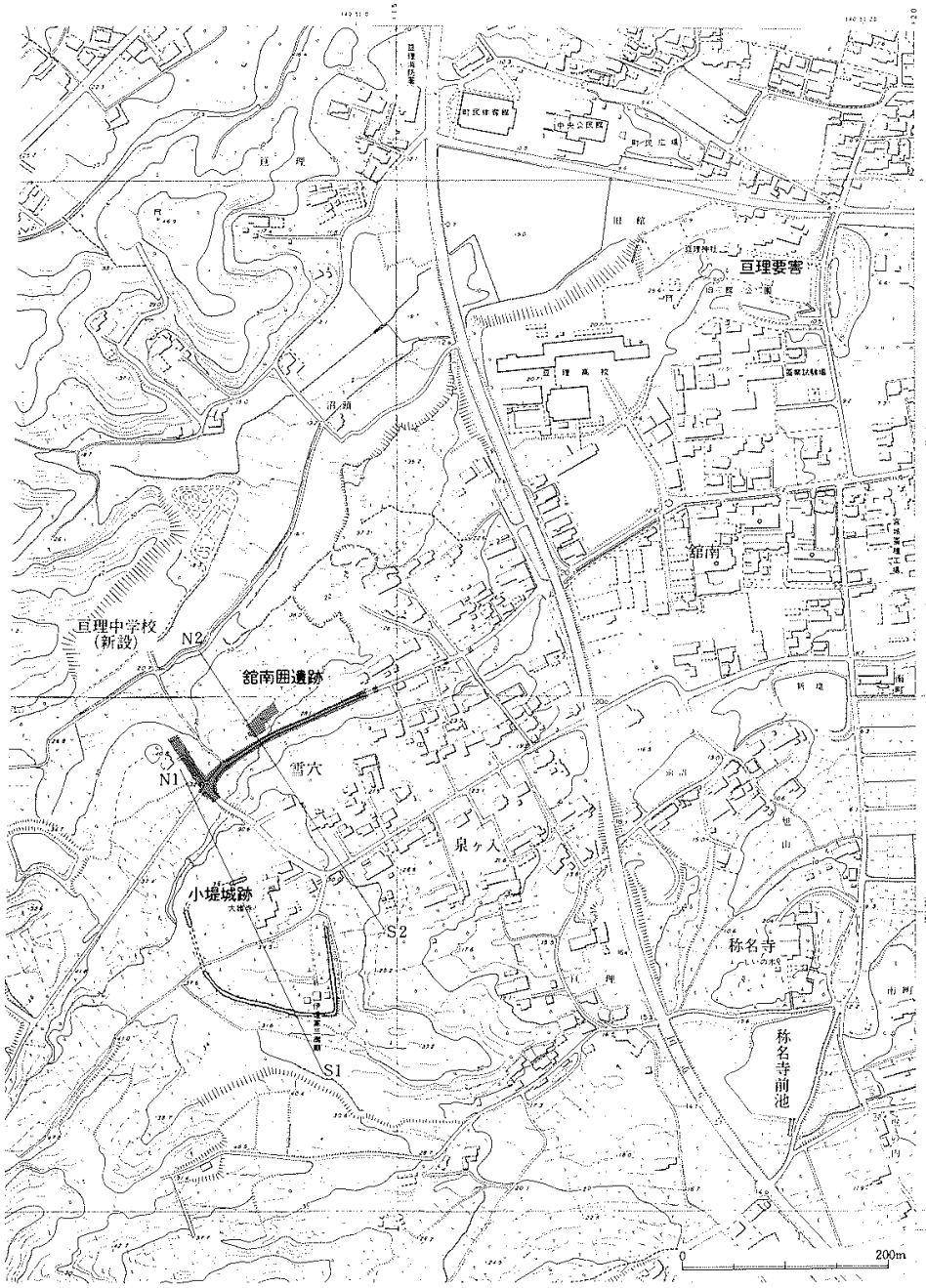
遺跡は阿武隈山地の一部である亘理地塁山地の東麓にあり、東方には亘理海岸平野が開けている。遺跡付近の標高は 25～40mで、東方にゆるやかに傾斜している。阿武隈山地東麓は西から東へ流れる中小規模の河川によって解析され起伏に富んでいる。遺跡の立地する舘南・雪穴・泉ケ入の地域は、北側は字沼頭の沢状の底地、南側は前沼・新堤から南西に入り込む沢状の低地によって限られている。

NO	遺　跡　名	時　　代	NO	遺　跡　名	時　　代
1	舘南囲遺跡	弥生・古墳・古代・中世	51	十文字館跡	中世
2	小堤城跡	縄文・古代・中世	62	池田遺跡	古代
3	亘理城跡	古墳・中世・近世	80	小城内館跡	中世
9	竹ノ花横穴古墳群	古墳	83	鳩原城跡	中世
11	桜小路横穴古墳群	古墳	87	北楯城跡	中世
18	三十三間堂遺跡	弥生・奈良・平安	88	南楯城跡	中世
21	石間館跡	中世	89	道館跡	中世
23	三門城跡	中世	91	古内城跡	中世
34	柚ケ沢横穴古墳群	古墳	A	愛宕神社	
39	雁田横穴古墳群	古墳	B	称名寺	
43	宮前遺跡	古墳・奈良・平安	C	緒名太神社	
49	小松堂館跡	弥生・古代・中世	D	天足別神社	
25	長井戸古墳群	古墳	E	阿福伯河神社	
			F	石間神社	

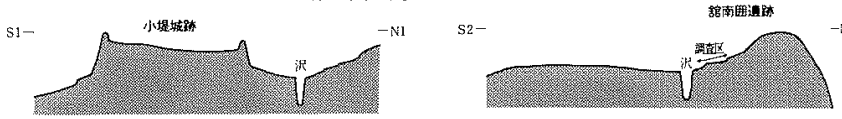
周辺の主な遺跡



第１図　遺跡の位置


亘理要害
館南
亘理中学校
(新設)
N2
館南囲遺跡
N1
雪穴
泉ヶ入
小堤城跡
S2
S1
称名寺
称名寺前池
0
200m

第２図　周辺の地形


S1
小堤城跡
N1
沢
S2
館南囲遺跡
N2
調査区
沢

3．周辺の遺跡

今回の調査では古墳時代・古代・中世・近世の各時代の遺構・遺物が発見された。ここでは本遺跡を中心とし、亘理町周辺に分布するこれら各時代の遺跡について概観する。

まず古墳時代前期の遺跡としては本遺跡の南約 3㎞に前方後方墳 1 基と円・方墳 4 基からなる長井戸古墳群がある。また、同時期の集落跡である宮前遺跡が南方約 2㎞にある。

古墳時代後期には雁田・袖ケ沢・桜小路・竹の花など多くの横穴墓群が造営されている。この時期の集落跡としては、本遺跡と同一の丘陵上で北東約 1㎞に所在する亘理城跡（亘理要害）の調査で、城跡の下層から古墳時代後期の住居跡が発見されている。

奈良・平安時代の遺跡としては、本遺跡の北約 4㎞に平安時代前半頃の亘理郡衙跡である三十三間堂遺跡がある。また、上記の宮前遺跡ではこの時期の住居跡も発見されている。さらに前記した横穴墓群では、奈良・平安時代の遺物も出土し、これらが墳墓として長期間使用されたことが明らかにされている。

中世の遺跡としては小堤城をはじめ、丘陵地を中心に多数の館跡が分布している。ただし、古記録や発掘調査などにより具体的な年代や館主がわかるものは少なく、今後の調査の進展がまたれる。

近世の遺跡としては本遺跡と同一の丘陵上で北東約 1㎞に所在する亘理城跡がある。ここでは、発掘調査により亘理伊達氏の居所としての仙台藩亘理要害の遺構の一部（門跡、石垣など）が発見されている。現在の亘理の中心街は亘理要害の城下の町を基礎として発展したものである。

4．小堤城跡（大雄寺）ついて

小堤城跡は中世において亘理地域を領有した武石（亘理）氏の居城跡と推定されている（亘理町史・上巻）。

そこでまず、武石氏の亘理周辺での活動を概観しておく。奥州藤原氏の滅亡後、源頼朝が、平泉において論功考賞をおこなった際、伊具・亘理・宇多三郡は千葉常胤の三男・胤盛に与えられた。胤盛の子孫は武石氏を名乗り、以後、中世を通じて亘理周辺を領有する豪族として亘理に居を構えた。その居館跡が小堤城跡と推定されている。

「伊達世臣家譜」―「涌谷伊達氏家譜」および、涌谷亘理家所蔵（現宮城県図書館蔵）「亘理氏系図」などによれば、武石氏は、乾元元年（西暦 1302 年）武石氏四世・宗胤の代にそれまで居所としていた下総から奥州亘理の地に居を移したとされている。

上記の家譜・系図が作成されたのはいずれも近世であり、小堤城跡自体に関する文献がないため、その館主についてはなお検討を要するが、今回の調査で発見された遺物などか

ら想定される年代は、武石氏四世・宗胤が下総から亘理の地に層を移したとされる時期、乾元元年（西暦 1302 年）とほぼ合致する。

上記の家譜・系図によると、その後、武石氏は七世の広胤の代に氏号を武石氏から亘理氏に改め、さらに、天正十九年、亘理氏は十六世、亘理元宗の代に亘理から涌谷に移り、十八世の定宗の代に氏号を亘理氏から（涌谷）伊達氏に改めている。

次に大雄寺の歴史について概観する。

伊達政宗の家臣伊達成実が、慶長七年（西暦 1602 年）亘理に入府した。成実は、父実元の菩提寺であった信夫郡の雄山寺を亘理（小堤城）に移し、ここを亘理伊達氏の菩提寺とした。その後、正徳二年（西暦 1712 年）寺号を大雄寺とした。以後、近世を通じ亘理伊達家の菩提寺として存続した。

Ⅱ　調査の経過と方法

1．舘南囲遺跡の調査の経過

舘南囲遺跡の調査原因となった町道改良工事は、調査区の北側に建設されることになった亘理中学校への通学路を確保するためのものである。具体的には、国道 6 号線から西側に延びる道幅 6m前後の砂利道の旧道（総延長約 500m）を、幅約 12mで 2 車線、両側に歩道と側溝の付くアスファルト舗装道路に改良するというものであった。

上記の工事計画書の提出を受け保存のための協議をおこなったが、路線の変更は不可能であったため工事予定路線全線を対象として、任意のトレンチを設定し遺跡の範囲確認を目的とする第 1 次調査を行った。その結果、工事予定路線の西半部で、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が発見された。

第 1 次調査の結果を受け、工事予定路線の西半部について事前調査を行うこととしたが、予算編成の関係から工区が 3 つに分けられ、これに伴い調査費用も 2 年度に分割されることとなった。このため調査対象地を東西に分け、東部を対象とした第 2 次調査をまず行い、次年度に西部を対象とした第 3 次調査を実施した。第 2・3 次調査の期間中、現地説明会を開催し、周辺住民の遺跡の内容と範囲に対する認識が深められた。

なお、舘南囲遺跡の町道改良工事第 3 次調査の調査期間中、町道改良工事とは別に、第 3 次調査区北側に隣接する畑地で個人によるビニールハウスの建設計画が新たに示された。ビニールハウスの建設に際しては、土地を水平に切り盛りする工事が伴い下部の遺構に影響が及ぶ可能性があった。計画内容を検討し、盛土による保存のための協議をおこなったが果たされず、舘南囲遺跡第 4 次調査として事前調査を実施した。これは予算的に別個の調査ではあるが調査内容は不可分のものであるためここに併せて報告する。

2．小堤城跡の調査の経過

舘南野遺跡の町道改良工事第 3 次調査の調査期間中、大雄寺の庫裡改築工事計画が示された。この計画では庫裡の基礎部分を布掘り状に掘削する工事が伴い下部の遺構に影響がおよぶ可能性があった。計画内容を検討し、保存のための協議をおこなったが果たされず、事前調査を実施した。これも予算的に別個の調査ではあるが調査内容は不可分のものであるためここに併せて報告する。

3．調査の方法

舘南囲遺跡の第 2・3 の調査は幅 12mの計画道路路線幅全域について表土を剥離して調査をおこなった。第 4 次調査はビニールハウスの建設用地のうち、削平を受ける部分について表土を剥離し調査をおこなった。

調査区の名称はそれぞれの次数をとって、第 2・3・4 次調査区と呼称した。各調査区

内の遺構は、計画道路の直線部分のセンター杭(ＮＯ21)を原点とし、これと同センター杭(ＮＯ23)を結ぶ直線を基準とした平面直角座標によって位置関係を記録した。なお、この座標軸は国家座標第Ｘ系に対して北で西におよそ 25 度偏している。

各基準点の国家座標第Ｘ系における値は以下のとおりである

ＮＯ21（Ｘ＝＋1,425　Ｙ＝－219,018）

ＮＯ23（Ｘ＝＋1,389　Ｙ＝－219,035）

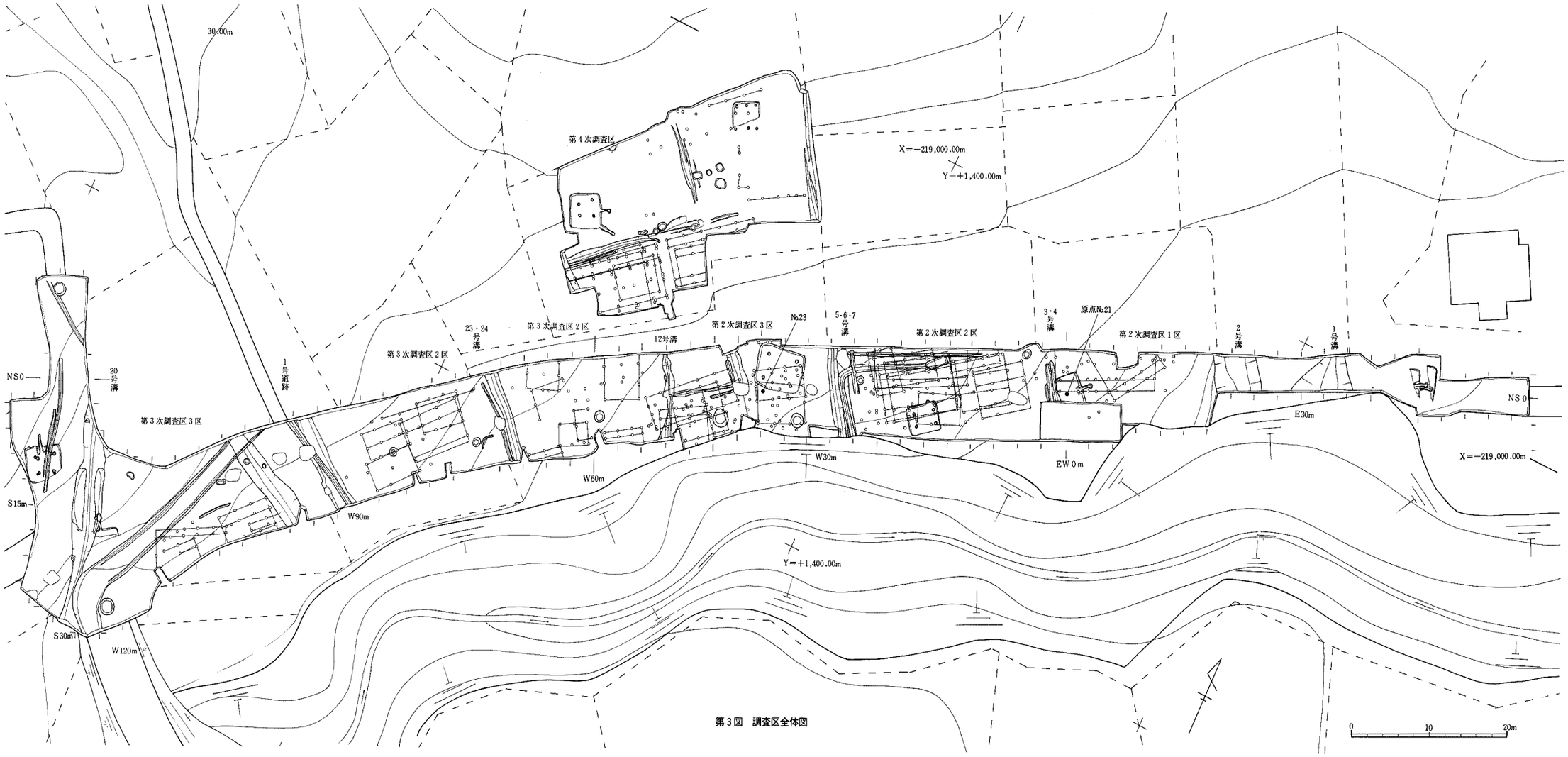
調査区内は上記の座標を基準として 1×1mのグリットにわけ、グリットの位置は南北方向をアルファベット（ＮＯ20・21 を結ぶ基準線の北をＥ、南をＦ）・東西方向を距離数（原点を 100 とし、西を 101、東を 99）で示した。ピットの番号はこのグリットごとに付け、遺物の取り上げおよび堆積土の注記をおこなった。

調査区・遺構については縮尺 1／20 の平面・断面図を作成し、35 ミリフィルムのモノクロ・リバーサルおよび 4×5 モノクロによる記録写真を撮影した。

小堤城跡の調査は大雄寺の庫裡の基礎工事によって掘削される南北 10m×東西 13mの用地内について表土を剥離して調査をおこなった。調査区の名称は大雄寺庫裡調査区と呼称した。調査区内の遺構は、舘南囲遺跡で設定した平面直角座標によって位置関係を記録した。調査区・遺構の記録方法も舘南囲遺跡と同様である。なお、大雄寺周囲の土塁の位置・範囲については現地踏査により 1／2500 の都市計画図にフリーハンドで記入したもので、測量によるものではない。

III　舘南囲遺跡の調査成果

今回の調査で発見された遺構は、古代以前のものと中世以降のものとがあり、古代以前の遺構にはさらに古墳時代、古代の二時期のものがある。古墳時代の遺構は唯一、第 1 号土壙のみであるが、古代の遺構は竪穴住居跡 10 軒と土壙 2 基があり、中世以降の遺構は掘立柱建物跡、道路跡、溝跡、土壙、火葬遺構など多様な遺構が多数検出されている。以下では 1. 古代以前、2. 中世以降の順で遺構・遺物の内容をみていく。


30.00m
第4次調査区
X=−219,000.00m
Y=+1,400.00m
第3次調査区2区
第2次調査区3区
No.23
5-6-7号溝
第2次調査区2区
3・4号溝
原点No.21
第2次調査区1区
2号溝
1号溝
23・24号溝
12号溝
20号溝
1号道跡
第3次調査区3区
NS0
S15m
S30m
W120m
W90m
W60m
W30m
EW0m
E30m
NS0
X=−219,000.00m
Y=+1,400.00m
0
10
20m

第3図　調査区全体図

1．古代以前の遺構と遺物

(1)　古墳時代

第１号土壙（第４図）

［位置］調査区中央北よりのN-3、W-15 付近に位置する。

［検出面］地山上面で確認された。

［重複］第９号掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。

［平面形・規模・方位］長軸 265cm、短軸 110cm の隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-50°-Eである。全般に削平を受けており残存状態は悪い。

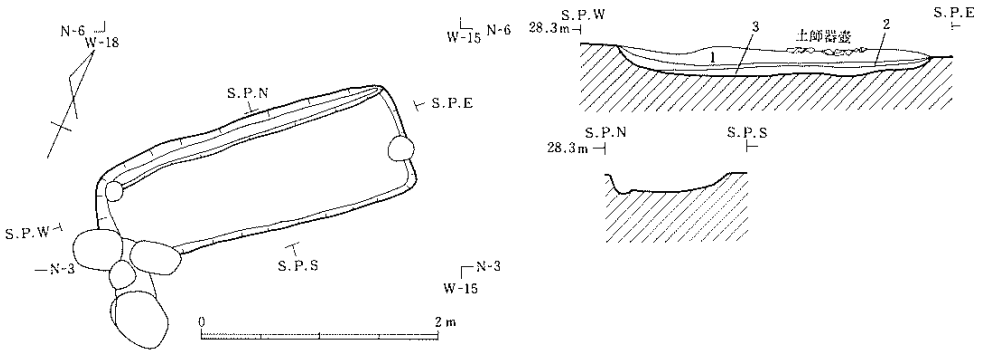
［堆積土］すべて地山混じりの人為的埋土である。底面に酸化鉄が集積している。

［底面］底面は皿状に窪んでいる。北壁沿いに幅 20cm、深さ 3cm の溝がある。

［壁面］確認面からの深さは、残りのよい西壁で約 20cm である。溝のある北壁部分はほぼ垂直に立ち上がり、これ以外の三方の壁面の立ち上がりは緩やかである。

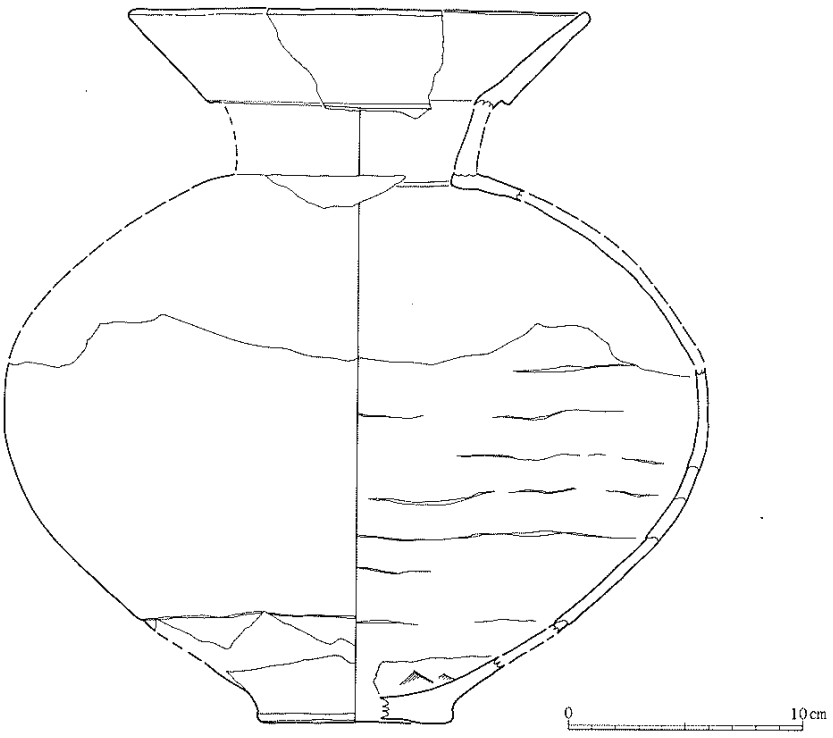
［出土遺物］埋土上部から土師器甕の一個体分（第５図１）の破片がまとまって出土した。復元はできなかったが推定器高約 30.5cm の壷である。口径約 19.5cm、底径約 8.2cm、最大胴径約 30cm である。底部は上げ底状をなし、体部は偏平な球胴形で、口縁部はやや外傾する複合口縁である。器面調整は、内外面とも摩滅が著しく調整は不明であるが内面底部付近にヘラナデ痕がみられる。胴部中央に焼成後の意図的な穿孔とみられる円形の破損部分がある。

［遺構の性格と年代］この土師器壷は出土状態から意図的に破砕され、土壙上部に遺棄された土器と考えられ、葬送に関係する儀礼に使用された供献用の土器とみられる。器形



層No.	土色		土性	備考	
1	褐色	7.5YR4/4	粘質シルト	地山粒を含む。	人為的埋土
2	褐色	7.5YR4/6	シルト	地山粒を含む。	人為的埋土
3	黄褐色	―――――	シルト質粘土	地山粒を多く含む。暗褐色の粘質土が混じり、底面には酸化鉄が集積する。	人為的埋土

第４図　第１号土壙



第５図　第１号土壙出土遺物

の特徴から東北地方南部の土師器編年における塩釜式（氏家和典：1957）に比定される。土壙の形態・規模や土器の出土状態からから、この土壙は墓壙と考えられ、年代は墓壙上部から出土した土師器壺が塩釜式に比定されることから古墳時代前期と考えられる。

(2)古代

第１号竪穴住居跡（第６図）

［位置］調査区中央東よりのＳ-0-Ｎ、Ｗ-0-Ｅに位置する。

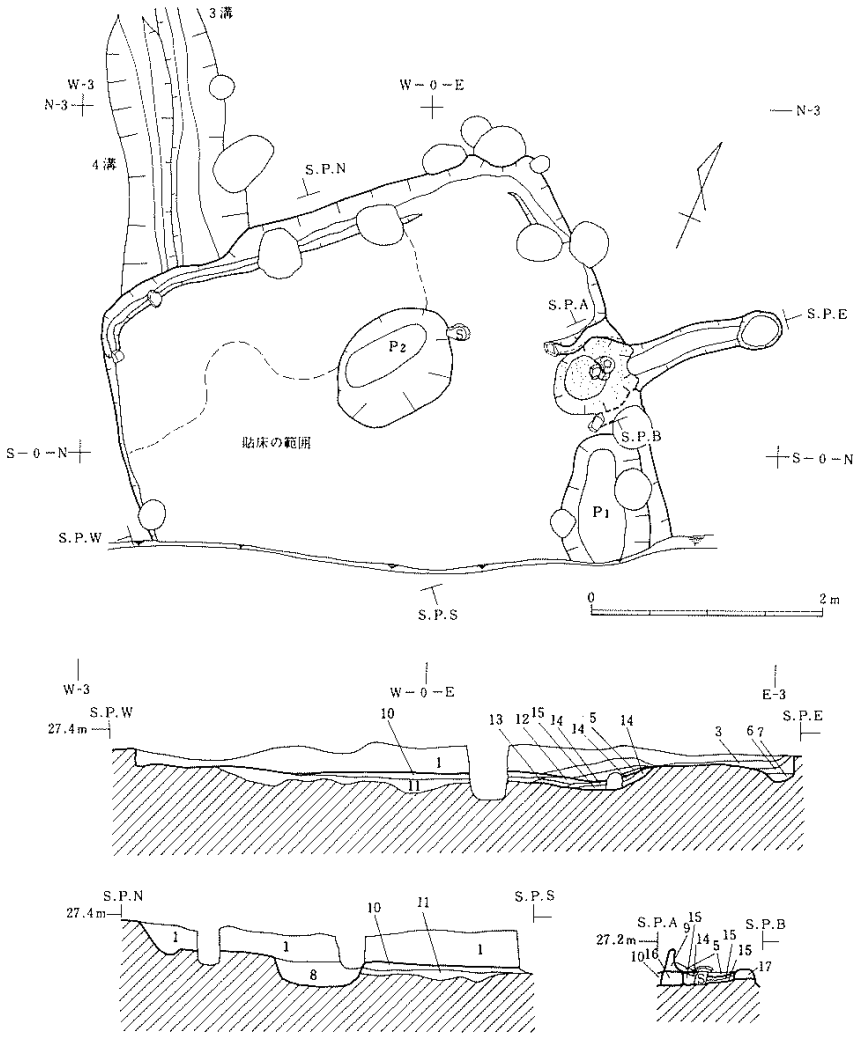
［確認面］地山上面で確認された。

［重複］第４号掘立柱建物跡と第３・４号溝と重複し、これらよりも古い。

［平面形・規模・方位］南辺は削平のために失われているが、北辺で 4.4m、東辺で 3.6m以上の隅丸方形を呈すると思われる。東辺でＮ-45°-Ｗである。

［堆積土］１枚認められた。この層は住居を広く覆う自然流入土である。下部に炭化物や小礫を多く含み、上部には灰白色の火山灰がブロック状に含まれている。

［床面］北西隅は地山、その他は貼床がなされる（中央から南側ほど厚く、最も厚い部分で 20㎝ある）。床面はほぼ平坦で北側が高く、南に向かって緩やかに傾斜する。

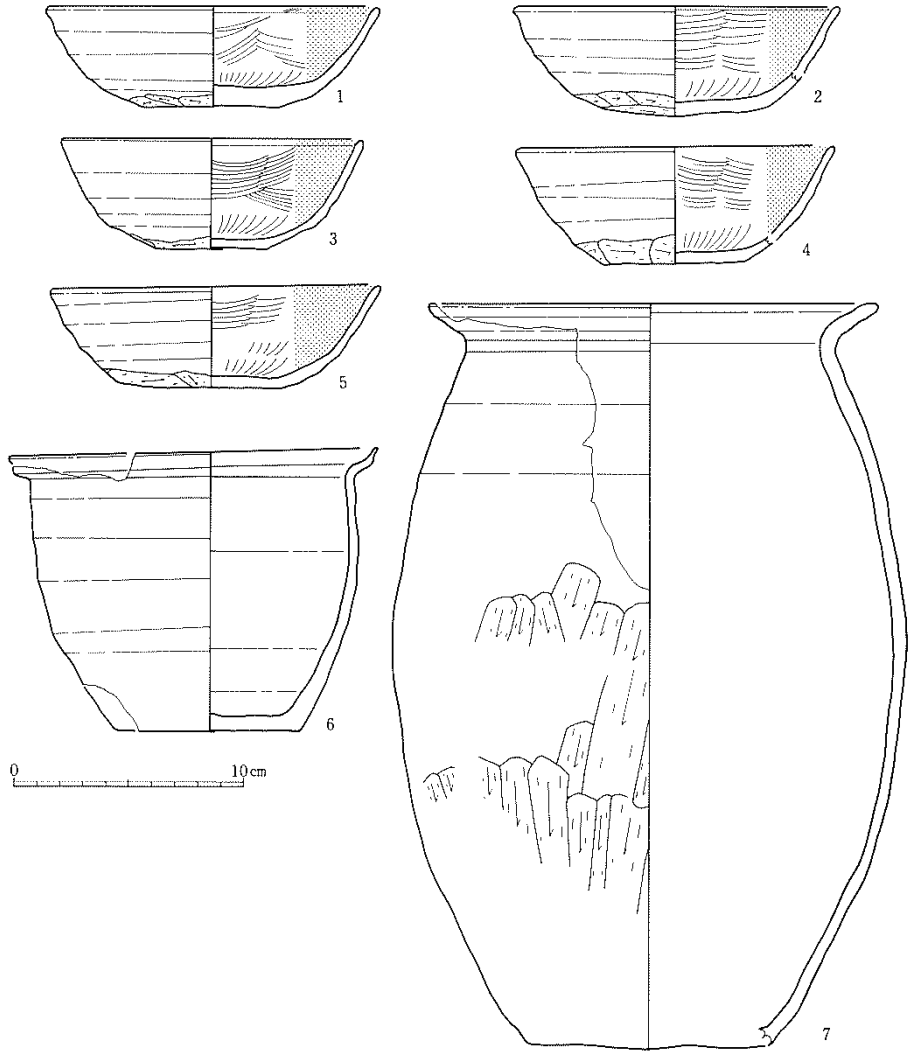


層No.	土	色	土性	備	考
1	褐色	7.5YR4/3	シルト	小礫・炭化物を含み、上部に灰白色の火山灰を含む。	住居、周溝堆積土
2	暗赤褐色	10YR3/3	シルト	焼土を含む。	カマド崩落土
3	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	炭化物を少量含む。	煙道崩落土
4	にぶい黄褐色	10YR4/4	シルト	焼土・炭化物を含む。	煙道崩落土
5	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	焼土を含む。	煙道崩落土
6	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト		埋出しピット堆積土
7	暗褐色	10YR3/4	シルト	炭化物を含む。	埋出しピット堆積土
8	暗褐色	―――	シルト		ピット2堆積土
9	にぶい赤褐色	5YR4/4	シルト	固く焼け締まる。	新カマド側壁
10	褐色	10YR4/4	シルト	非常に締まりがよい。	貼床
11	暗褐色	10YR3/4	シルト	地山を多量に含む。	掘り方埋土
12	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	焼土を含む。	カマド崩落土
13	黒褐色	10YR2/2	シルト	炭化物を含む。	カマド崩落土
14	赤褐色	2.5YR4/8	シルト	焼土層	カマド崩落土
15	褐色	10YR4/4	シルト	焼土を含む。	カマド崩落土
16	明褐色	7.5YR5/6	シルト	固く焼け締まる。	旧カマド側壁
17	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	固く焼け締まる。	旧カマド側壁

第6図　第1号竪穴住居跡

［壁］地山を掘り込んで壁としている。壁高は最も保存のよい北壁で約 30cm である。

［カマド］カマドは東壁に付設されている。側壁は、前端に石を据え、粘土を積み上げて構築している。側壁内の燃焼部は最大幅 60cm・奥行き 50cm である。煙道は地山をトンネル状に掘り抜いたもので、長さ約 100cm、幅 30cm で、先端部には径 30cm ほどの煙出し



No.	種　類	層　位	外面　調整	内面　調整	底　部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録	図版
1	土師器・坏	カマド支脚	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	14.4	5.8	4.4	BⅡa	Bb3	6-1
2	土師器・坏	カマド支脚	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	14.2	6.0	5.8	BⅡa	Bb4	6-2
3	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	13.1	5.0	4.8	BⅡa	Bb36	6-3
4	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	14.3	7.2	4.8	BⅡa	Bb2	6-4
5	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ・ナデ	13.8	6.2	5.1	BⅡa	Bb1	6-5
6	土師器・甕	周溝	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ？	16.0	8.1	12.4	BⅠa	Bb5	6-6
7	土師器・甕	カマド側壁	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ・？	――――	19.5	10.5	32.6	BⅡ	Bb50	6-7

第 7 図　第 1 号竪穴住居跡出土遺物

ピットが付く。燃焼部底面は若干掘り窪められており、奥壁近くには支脚とみられる拳大の石が置かれ、その上に土師器の坏2枚が伏せて重ねられていた。燃焼部底面、側壁内面は火熱により赤色化している。カマドの底面を除去した段階で、さらに下面から焼け面が検出された。この焼け面は古いカマドの痕跡と考えられ、カマドが同位置で作り替えられたものとみられる。新しいカマドは、古いカマドを取り壊して床を掘り返し、古いカマドの構築材を埋めて構築されている。新しいカマドの支脚の石は古いカマドの底面に据えられていたものがそのまま使われたと考えられる。

［柱穴］検出されなかった。

［周溝］北辺と東辺の一部に認められた。幅20～30㎝、深さは床面から3㎝である。

［床面施設］カマド南側の床面で長軸110㎝以上、短軸80㎝、深さ30㎝の平面形が楕円形のピット（P1）が発見され、土器を出土することから貯蔵穴と考えられる。また、住居中央北よりの床面で長軸120㎝、短軸80㎝、深さ20㎝の楕円形のピット（P2）が発見された。

［出土遺物］図示した遺物はカマドの支脚に転用された坏、貯蔵穴出土の坏など7点である。

【土師器】（第7図1～7）

＜坏＞すべてロクロ調整の坏である。いずれも体部下半に手持ちヘラケズリが施され、底部の切り離しは不明である。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。1・2はカマドの支脚に転用されたものである。

＜甕＞いずれもロクロ調整の甕である。6は小形の甕、7は長胴の甕でいずれも外面胴部中央以下にヘラケズリが加えられている。

第2号竪穴住居跡（第8図）

［位置］調査区中央南側のS-3、W-18付近に位置する。

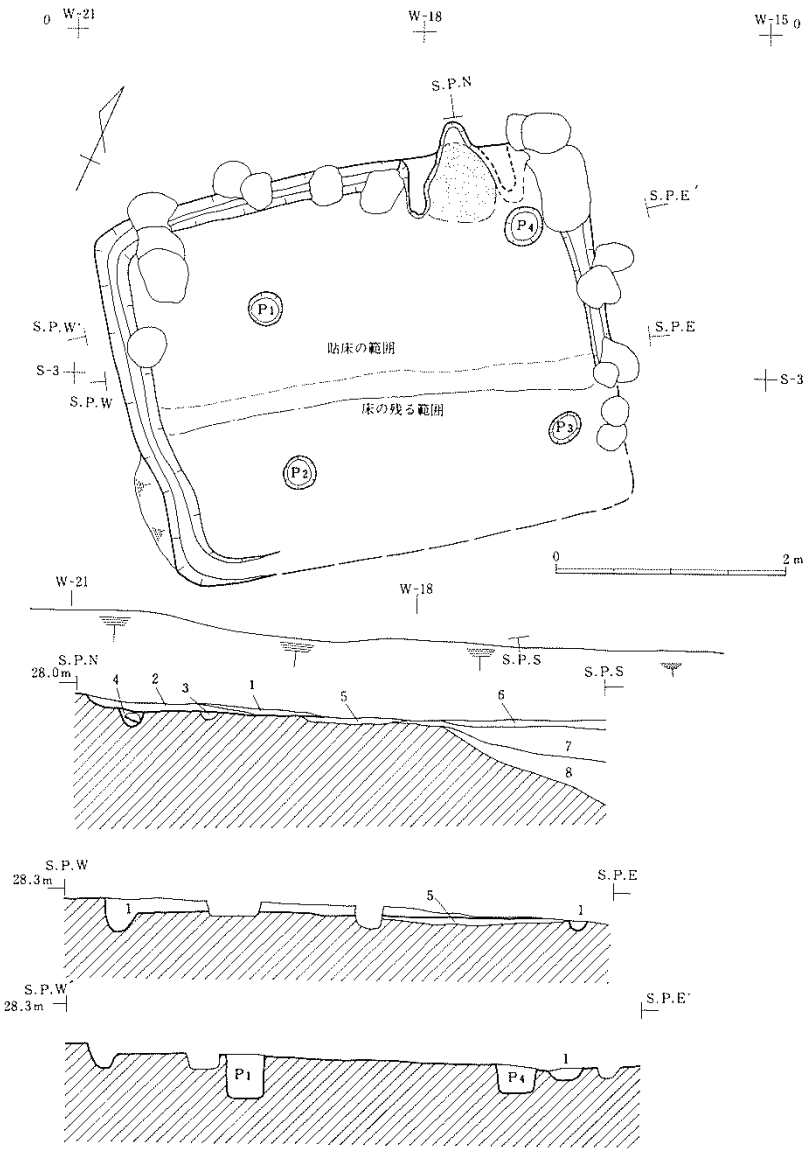
［確認面］地山上面で確認された。

［重複］第9・10・13・14号掘立柱建物跡と重複し、これらよりも古い。

［平面形・規模・方位］南辺が削平のため失われている。東西4.3m、南北の残存長3.3mで、平面形はやや東西に長い隅丸長方形を呈する。方位は東辺でN-33°-Wである。

［堆積土］2枚認められた。1層は住居を覆う自然流入土、2層はカマド周辺に分布し焼土を含むことからカマド崩落に伴う堆積層と考えられる。

［床面］北側は地山を床とし、中央部は固くしまった褐色シルト土と地山混じりの貼床を床としている。厚さは6㎝である。南半部分は削平のため不明であるが、床面下の土層



層No.	土　色	土　性	備　考	
1	暗褐色	シルト	固く締まる。	住居堆積土
2	暗赤褐色	シルト	炭化物・焼土を含む。	カマド周辺堆積土
3	赤褐色	砂質シルト		ピット5堆積土
4	褐色	シルト	地山粒を含む。	周溝堆積土
5	褐色	シルト	地山粒を含む。	貼床
6	褐灰色	シルト	砂礫を含む。	整地層
7	褐色	シルト質粘土		整地層
8	褐色	シルト	斑状に砂・粘土を含む。	整地層
P1	褐色	シルト		ピット1堆積土
P4	暗褐色	シルト		ピット4堆積土

第8図　第2号竪穴住居跡

の状況から、この住居は斜面を切盛りして作られたと考えられ、そのために南側全体が貼床もしくは整地面を床として使用していたと考えられる。

［壁］西側、北側は地山を壁としている。残存する壁高は 10～20㎝である。

［カマド］北辺の北東隅に付設されている。燃焼部は最大幅 60㎝以上・奥行き 60㎝で、側壁は粘土によって構築されているが、撹乱のため右側の側壁が失われている。側壁内面と底面は火熱により赤色化している。

［柱穴］床面において、やや東側に偏るが、ほぼ対角線上に位置するＰ1～Ｐ4 の 4 個が検出された。柱穴掘り方は径 25～35㎝の円形で、深さは 23～45㎝である。柱痕跡は検出されなかった。柱間隔は東西で 2.3m、2.4m、南北で 1.5m、1.8mである。

［周溝］東西北の 3 辺で確認された。南辺部は削平され明確でない。幅約 25㎝、床面からの深さ約 10㎝で、底面は南側に傾斜している。カマド下部では土器を覆いとして使い暗渠状になっている。

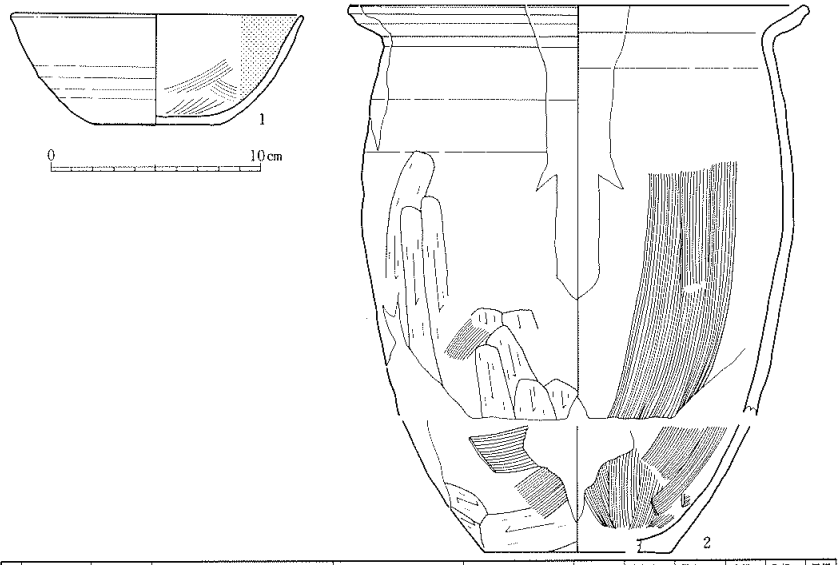
［床面施設］検出されなかった。

［出土遺物］図示した遺物はいずれもカマド下の暗渠の覆いとして転用された土器である。他に、堆積土からフイゴの羽口の小片が出土している。

【土師器】（第 9 図 1～2）

＜坏＞1 はロクロ調整の坏である。底部は回転糸切り離し無調整である。

＜甕＞2 はロクロ調整の長胴の甕である。外面にヘラケズリ・ヘラナデが施されている。



№	種　類	層　位	外面　調整	内面　調整	底　部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録	図版
1	土師器・坏	カマド周溝	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	13.9	5.9	5.3	BⅡc	Bb29	7-1
2	土師器・甕	カマド周溝	ロクロナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ	ロクロナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	22.0	8.9	(28.0)	BⅡ	Bb46	―

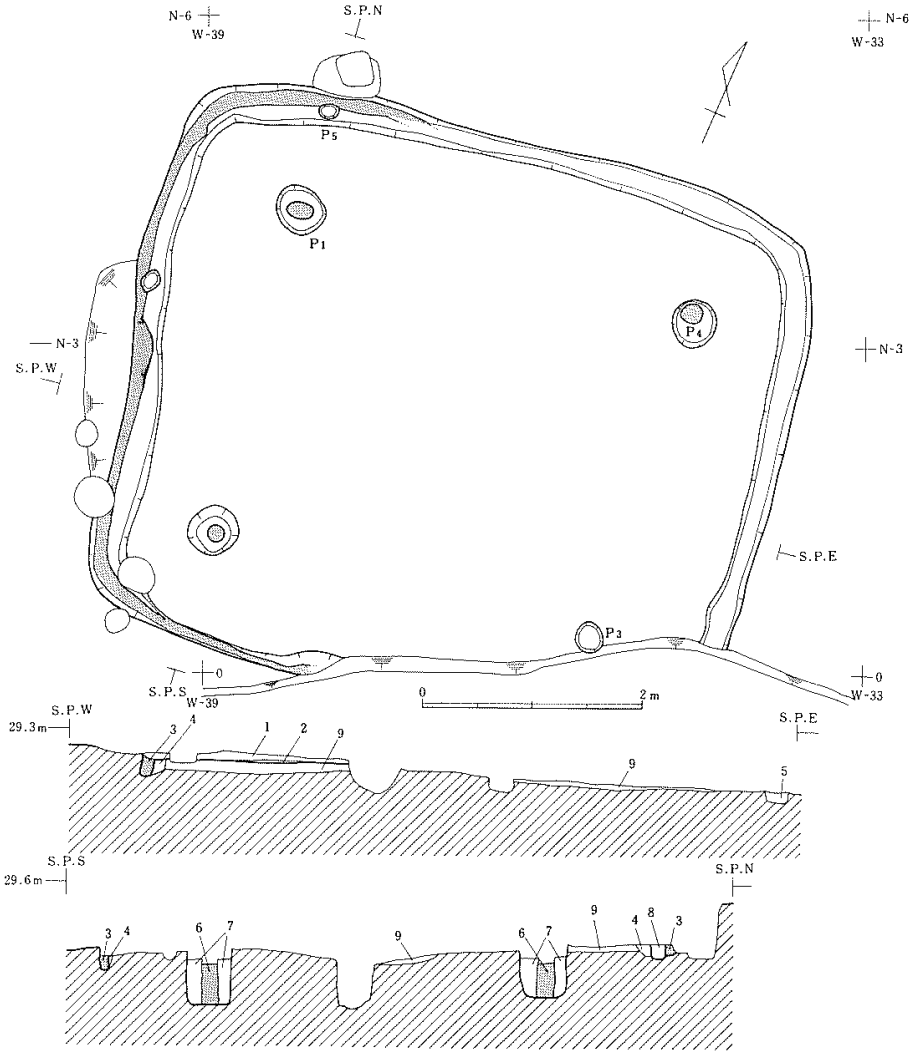
第 9 図　第 2 号竪穴住居跡出土遺物

第 3 号竪穴住居跡（第 10 図）

［位置］調査区中央北側のN-3、W-33 付近に位置する。

［確認面］地山上面で確認された。

［重複］第 15・16 号掘立柱建物跡と重複し、これらよりも古い。



層No.	土色	土性	備考	
1	暗褐色	シルト	炭化物を含む。	住居流入土
2	赤褐色	シルト	焼土・炭化物を含む。	生活面堆積土
3	黒褐色	シルト	炭化物を含む。	壁材痕跡
4	褐色	シルト	地山ブロック混じり	壁材掘り方埋土
5	暗褐色	シルト	炭化物を含む。	壁材掘り方埋土
6	黒褐色	シルト		柱穴柱痕跡
7	暗暗褐色	シルト	地山粒を多く含む。	柱穴掘り方埋土
8	黒褐色	シルト		壁柱穴
9	褐色	シルト	斑状に地山粒を含む。	住居掘り方埋土

第10図　第 3 号竪穴住居跡

［平面形・規模・方位］南辺と東辺の一部は削平のために失われている。残存長は北辺 5.9m、西辺 5.3mで、平面形は隅丸方形である。方位は東辺でN-11°-Wである。

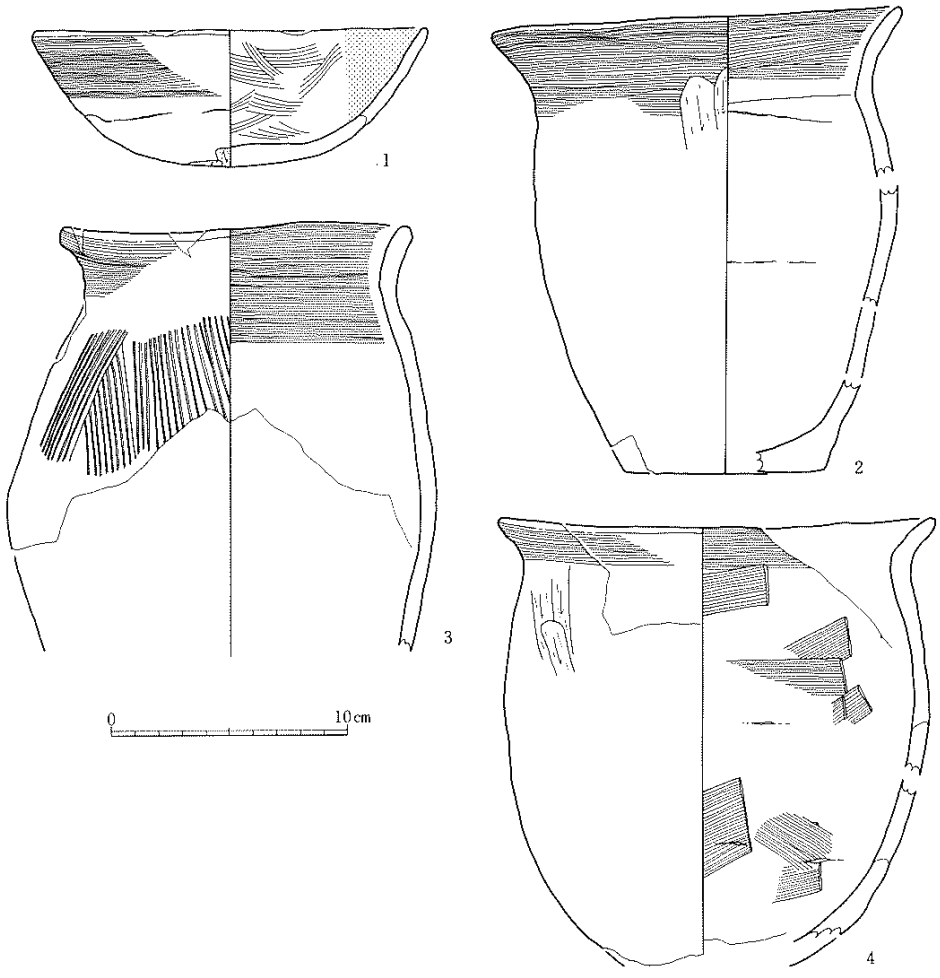
［堆積土］2 枚認められた。1 層は自然流入土で、2 層は生活時の堆積層と考えられる。

［床面］床面は西側の一部だけが残っている。住居掘り方埋土を床としている。

［壁］地山を掘り込んで壁としている。残存する壁高は最高 10㎝ である。

［カマド］検出されなかった。

［柱穴］柱穴は床面の対角線上に P1～P4 の 4 つが確認された。柱穴掘り方は径 25～45



No.	種類	層位	外面 調整	内面 調整	底部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録	図版
1	土師器・坏	掘り方埋土	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理		16.7		5.8	A II	B b 23	7-2
2	土師器・甕	掘り方埋土	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ	17.4	8.6	19.5	A I	B b 26	—
3	土師器・甕	掘り方埋土	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ	———	14.9	———	(18.3)	A I	B b 41	—
4	土師器・甕	掘り方埋土	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	———	17.2	———	(20.0)	A II	B b 47	7-3

第11図　第 3 号竪穴住居跡出土遺物

㎝の円形を基調とし、柱痕跡は径 13～20㎝の円形、深さは 26～50㎝である。柱間隔は東西で 3.5m、3.7m、南北で 3m弱である。

［周溝］周溝の西、北側では住居壁に沿って幅 10㎝程の暗褐色の堆積土が認められた。壁材の痕跡と思われる。東側では明確に捉えられなかった。また、北壁と西壁に、径 15㎝の円形のピット（P5・P6）が認められた。壁材をおさえた柱と考えられる。

［出土遺物］図示した土器は住居掘り方埋土出土で、いずれも火熱を受けている。

【土師器】（第 11 図 1～4）

＜坏＞1 は非ロクロ調整の丸底の坏である。外面にヨコナデ・ヘラケズリが施され、輪積痕が残る。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

＜甕＞2～4 は、いずれも非ロクロ調整の甕である。長胴の甕で、4 は胴に張りがある。胴部外面の器面調整は 2・4 がヘラケズリ、3 はハケメである。

第 4ａ号竪穴住居跡（策 12 図）

［位置］調査区東側のＳ-0-Ｎ、Ｅ-48 付近に位置する。

［確認面］地山上面で確認された。

［重複］第 4ｂ号住居跡と第 4ｃ号住居跡と重複し、第 4ｂ号住居跡より古く、第 4ｃ号住居跡よりも新しい。

［平面形・規模・方位］削平を受けており、全体形は不明であるが、東辺で 3.5m以上、北辺で 15m以上の方形を基調とすると思われる。方位は東辺でＮ-23°-Wである。

［堆積土］2 枚認められた。1、2 層は住居を覆う自然流入土である。

［床面］地山を床面としている。

［壁］東・北壁は地山を掘り込んで壁としている。残存する壁高は最大 20㎝である。

［カマド］東壁に付設されている。側壁は粘土と土器によって構築され、燃焼部底面は平坦である。底面中央部には支脚として転用された土師器甕が倒立している。燃焼部幅 65㎝・奥行 75㎝で、側壁内面および燃焼部底面は火熱により赤色化している。

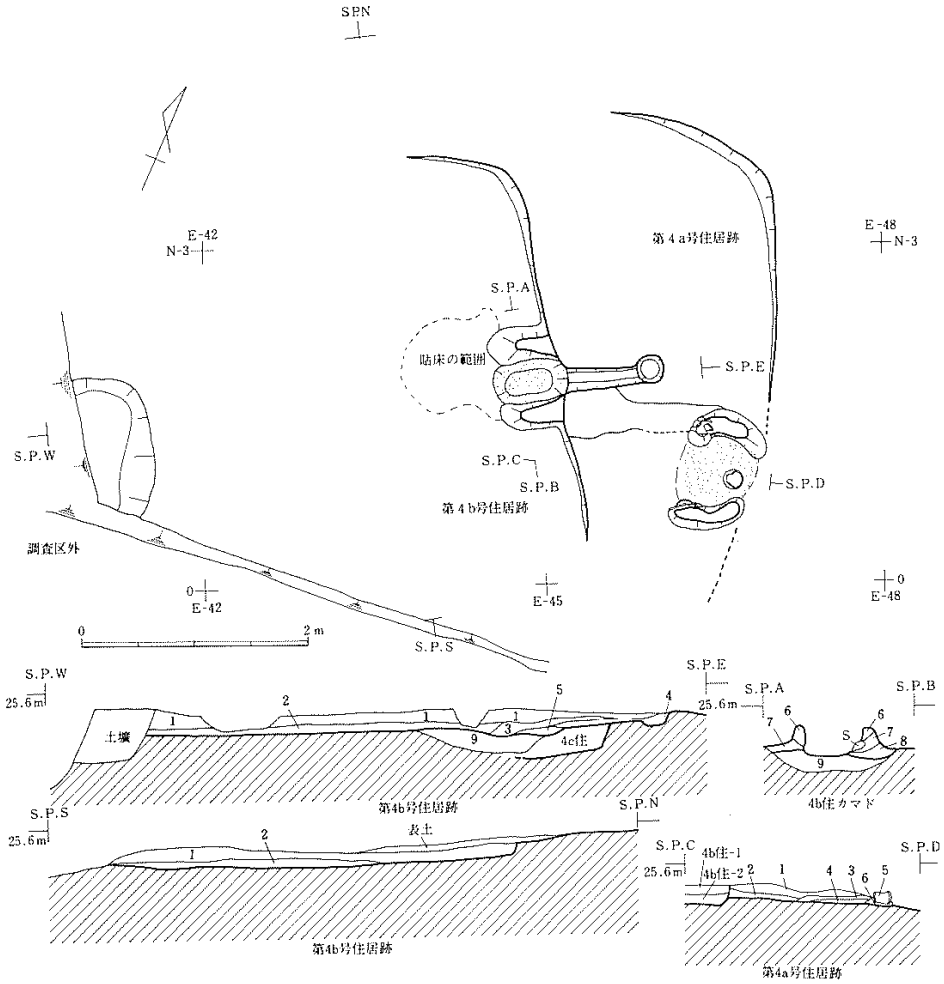
［柱穴・周溝・床面施設］検出されなかった。

［出土遺物］図示したものは床面出土土器と、カマド側壁・支脚に用いられた土器がある。

【土師器】（第 13 図 1～6）

＜坏＞ 1 はロクロ調整の坏である。底部および体部下半に手持ちヘラケズリの再調整が施されたもので、切り離しは不明である。

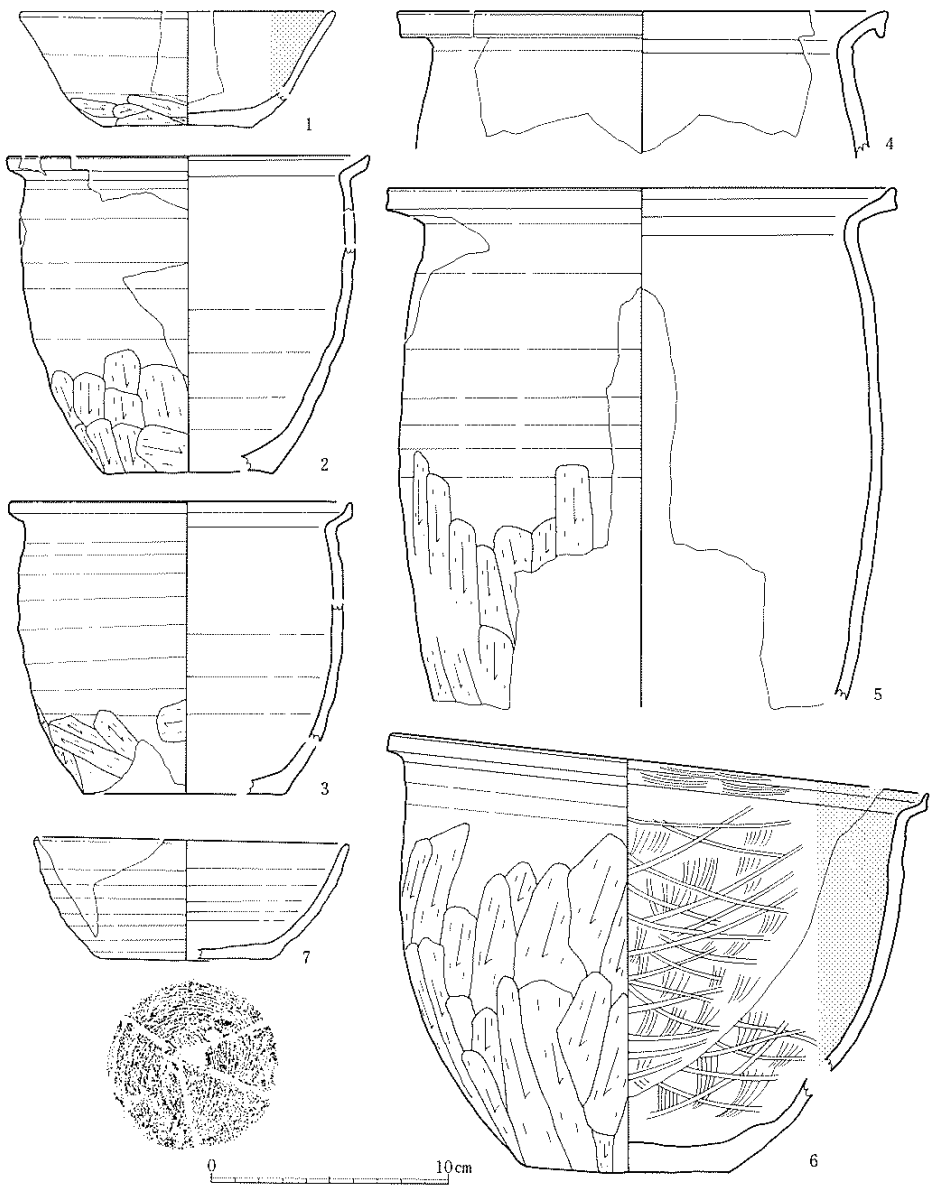
＜甕＞ 2～5 は、いずれもロクロ調整の甕である。2、3 は小形の甕で、胴部下半がへ



層No.	土	色	土性	備考	
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	砂礫を多く含む。	住居堆積土
2	褐色	10YR4/4	シルト	砂礫を含む。	住居堆積土
3	褐色	10YR4/4	シルト	焼土・炭化物を含む。	カマド崩落土
4	暗褐色	10YR3/4	シルト	焼土・炭化物を含む。	煙道崩落土
5	暗褐色	7.5YR3/4	シルト	焼土・炭化物を多く含む。	カマド天井崩落土
6	黄褐色		粘土		カマド構築土
7	暗褐色		砂・礫		カマド構築土
8	暗赤褐色		シルト	焼土	カマド構築土
9	暗褐色		砂・礫	焼土・炭化物を含む。	カマド掘り方埋土

層No.	土	色	土性	備考	
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	砂礫を含む。	住居堆積土
2	褐色	10YR4/4	シルト	砂礫を含む。	住居堆積土
3	褐色	10YR4/4	シルト	焼土・炭化物を含む。	カマド崩落土
4	暗褐色	10YR3/4	シルト	焼土・炭化物を少量含む。	カマド使用時の堆積土
5	褐色	7.5YR3/4	シルト		カマド支脚構築土
6	褐色	10YR5/3	シルト	炭化物を少量含む。	カマド支脚構築土
7	赤褐色	10YR3/4	シルト		カマド側壁

第12図　第4a号竪穴住居跡,第4b号竪穴住居跡



No.	種　類	層　位	外面　調整	内面　調整	底　部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録No.	図版
1	土師器・坏	カマド側壁	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	14.4	6.4	4.9	BⅠ	Bb27	7-1
2	土師器・甕	カマド側壁	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	ヘラケズリ・押しナデ	15.2	7.2	13.4	BⅠa	Bb39	7-2
3	土師器・甕	カマド支脚	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	?	14.4	8.5	12.4	BⅠa	Bb24	—
4	土師器・甕	床　面	ロクロナデ	ロクロナデ	———	25.0	———	(6.0)	BⅡ	Bb30	—
5	土師器・甕	カマド	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	———	21.0	———	(22.0)	BⅡ	Bb40	—
6	土師器・鉢	カマド側壁	ロクロナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ	22.7	8.9	18.6	——	Bb25	7-3
7	須恵器・坏	カマド側壁	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	13.3	7.2	5.3	BⅠ	Ba5	7-4

第13図　第4a号竪穴住居跡出土遺物

ラケズリされている。2 はカマド側壁、3 はカマド支脚に転用されれていたものである。4 は破片資料で、口縁端部が下方に引き出されている。5 は胴部以下がヘラケズリされている。

＜鉢＞ 6 はロクロ調整の鉢である。外面は胴部中央から下半にヘラケズリが施され、内面は縦方向と斜め方向のヘラミガキ・黒色処理が施されている。

【須恵器】（第 13 図 7）

＜坏＞ 7 は平底の坏で、底部の切り離しは回転糸切りで無調整である。

第 4b 号竪穴住居跡（第 12 図）

［位置］調査区東側のＮ-2、Ｅ-45 付近に位置する。

［確認面］地山上面で確認された。

［重複］第 4ａ号住居、第 4ｃ号住居と重複し、これらより新しい。

［平面形･規模･方位］残存するのは東辺と北辺の一部のみである。北辺は 1m以上、東辺で 3.5m以上で、方形を基調としていると考えられる。方位は東辺でＮ-35 °-Wである。

［堆積土］2 枚認められた。いずれも住居を覆う自然流入土で、多くの砂利が混入する。

［床面］カマド焚き口部分周辺に貼床が残されている。他の部分は不明である。

［壁］地山を掘り込んで壁としている。残存する壁高は最高で約 10㎝ である。

［カマド］カマドは東壁に付設されている。側壁は粘土を積み上げて構築し、底面は若干掘り窪めている。燃焼部は最大幅 50㎝、奥行き 65㎝ で、燃焼部底面と側壁内面は火熱により赤色化している。煙道は地山をトンネル状に掘り抜いたもので、長さ約 60㎝、幅 20㎝、深さ 10㎝ ほどである。先端には径 25㎝、深さ 10㎝ の煙出しピットが付く。

［柱穴・周溝・床面施設］検出されなかった。

［出土土器］図示したものは床面およびカマド出土のものである。

【土師器】（第 14 図 1～5）

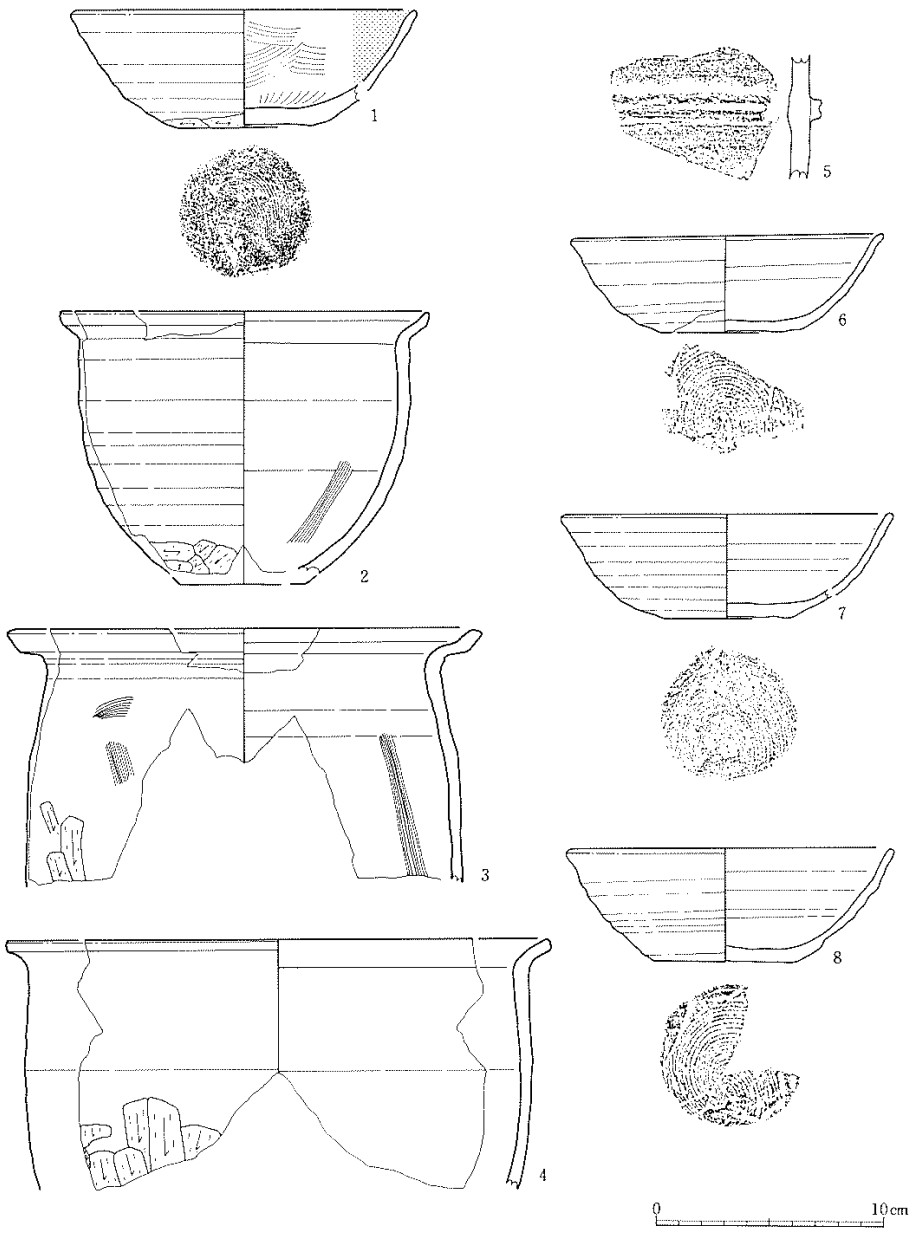
＜坏＞ 1 はロクロ調整の坏で、回転糸切り後底部縁辺が手持ちヘラケズリされている。

＜甕＞ 2～4 はいずれもロクロ調整の甕である。2 は小形の甕で、胴部下半がヘラケズリされている。3、4 は大形の甕で、胴部中央以下がヘラケズリされている。

＜甑＞ 5 はロクロ調整の甑と考えられるものである。胴部外面に隆帯が廻るものであるが、破片であり全体形は不明である。

【須恵器】（第 14 図 6～9）

＜坏＞ いずれも回転糸切り無調整の坏である。



址	種　類	層　位	外面　調整	内面　調整	底　部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録址	図版
1	土師器・坏	床面	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	15.2	6.0	5.2	BIIb	Bb6	8-1
2	土師器・甕	床面	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ・ナデ	―――――	16.2	―――	(12.5)	BIa	Bb28	―
3	土師器・甕	カマド	ロクロナデ・ナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ・ナデ	―――――	20.7	―――	(11.3)	BII	Bb32	―
4	土師器・甕	カマド下層	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	―――――	23.9	―――	(10.9)	BII	Bb31	―
5	土師器・甑	床面	ロクロナデ	ロクロナデ	―――――	―――	―――	―――	―――	Bb51	―
6	須恵器・坏	床面	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	13.7	6.2	4.4	BII	Ba3	8-2
7	須恵器・坏	堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	14.6	5.7	4.6	BII	Ba2	8-3
8	須恵器・坏	カマド堆積	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	14.4	6.2	5.1	BII	Ba1	8-4

第14図　第4b号竪穴住居跡出土遺物

第４ｃ号竪穴住居（第 15 図）

［位置］調査区東側のＮ-2、Ｅ-45 付近に位置する。

［確認面］地山上面で確認された。

［重複］第４ａ号住居跡と第４ｂ号住居跡と重複し、これらより古い。

［平面形・規模・方位］カマド部分のみが検出された。全体形・規模は不明である。カマドの軸方向はＮ-80 °- Ｅである

［カマド］東壁に付設されている右側壁は地山を削り出して構築し、燃焼部底面は浅く掘り窪められいる。奥壁近くに拳大の石を置き支脚としている。煙道部は地山をトンネル状に掘り抜いたもので、長さ 120㎝、幅 25㎝で、先端部は窪んでいる。燃焼部は幅 75㎝、奥行き 85㎝以上で、燃焼部底面、側壁内面は火熱により赤色化している。

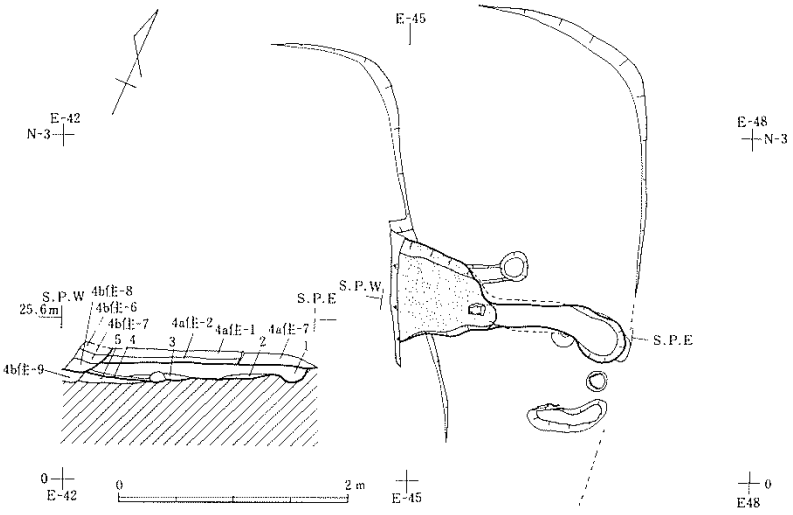
［出土遺物］図示できた遺物はカマド燃焼部、煙道部出土の土師器甕２点である。

【土師器】（第 16 図 1～2）

＜甕＞ いずれもロクロ調整の甕である。1 は小形の甕で、胴部下半にヘラケズリ調整が施される。2 は大形の甕で、胴部中央からヘラケズリ調整が施される。

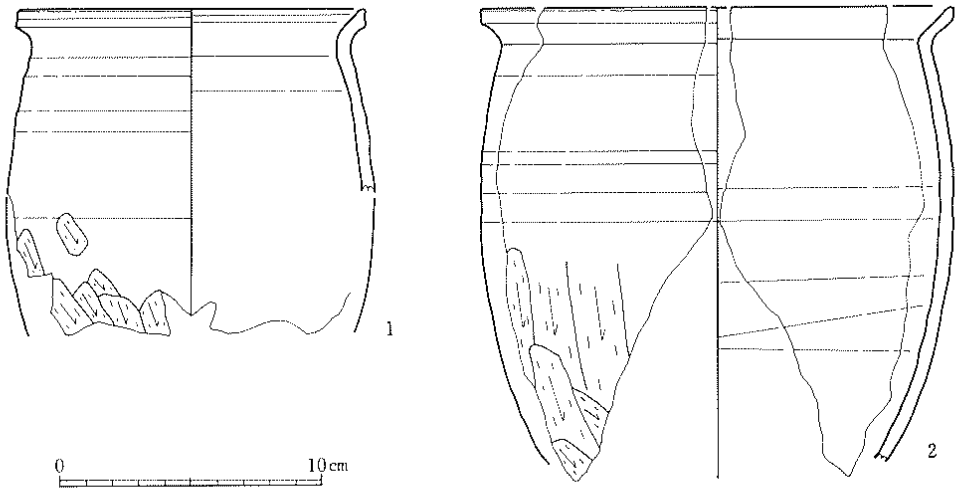
第６号竪穴住居跡（第 17 図）

［位置］調査区西側のＳ-18、W-123 付近に位置する。



層No.	土	色	土 性	備 考	
1	褐色	7.5YR4/4	シルト	焼土・炭化物を含む。	住居堆積土
2	黒褐色	7.5YR3/2	シルト	しまりなし	煙道堆積土
3	褐色	7.5YR4/3	シルト	焼土・炭化物を含む。	カマド堆積土
4	黒褐色	10YR3/1	シルト	炭化物層	カマド前面床堆積土
5	褐色	7.5YR4/6	粘土混じり砂礫	焼土を含む。	カマド掘り方埋土

第15図　第4c号竪穴住居跡



No.	種類	層位	外面 調整	内面 調整	底部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録No.	図版
1	土師器・甕	煙道堆積土	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	———	13.2	———	(12.5)	B Ⅰa	B b7	—
2	土師器・甕	カマド	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	———	18.0	———	(18.1)	B Ⅱ	B b33	—

第16図　第4c号竪穴住居跡出土遺物

［確認面］地山上面で確認された。

［重複］第 20 号溝と第 1 号焼土遺構と重複し、これらより古い。

［平面形・規模・方位］削平を受けており北辺と北東隅が残るだけである。北辺 2.8m 以上、東辺 0.8m以上で、方形を基調とすると思われる。方位は北辺でN-60°-Eである。

［堆積土］すべて失われている。

［床面・壁］削平によって失われている。

［カマド］カマドは北壁に付設されている。燃焼部側壁は残存状態が極めて悪く、燃焼部中央に火熱による赤色化した面が認められた。煙道は燃焼部奥壁付近が残っていただけである。煙出しピットが第 1 号焼土遺構の下で確認された。径 40 ㎝のほぼ円形を呈し、深さは 40㎝ である。

［柱穴］確認されなかった。

［周溝］北辺と東辺で認められた。幅 20㎝、深さは 10㎝ で、カマド下部は土器で覆いをして暗渠状にしている。

［床面施設］カマド東側で長軸 90㎝、短軸 50㎝、深さ 20 ㎝の土壙（P2）が検出された。

［出土遺物］図示した遺物は、暗渠の覆いに転用された土器と土壙出土のものである。

【土師器】（第 18 図 1～7、第 19 図 1～2）

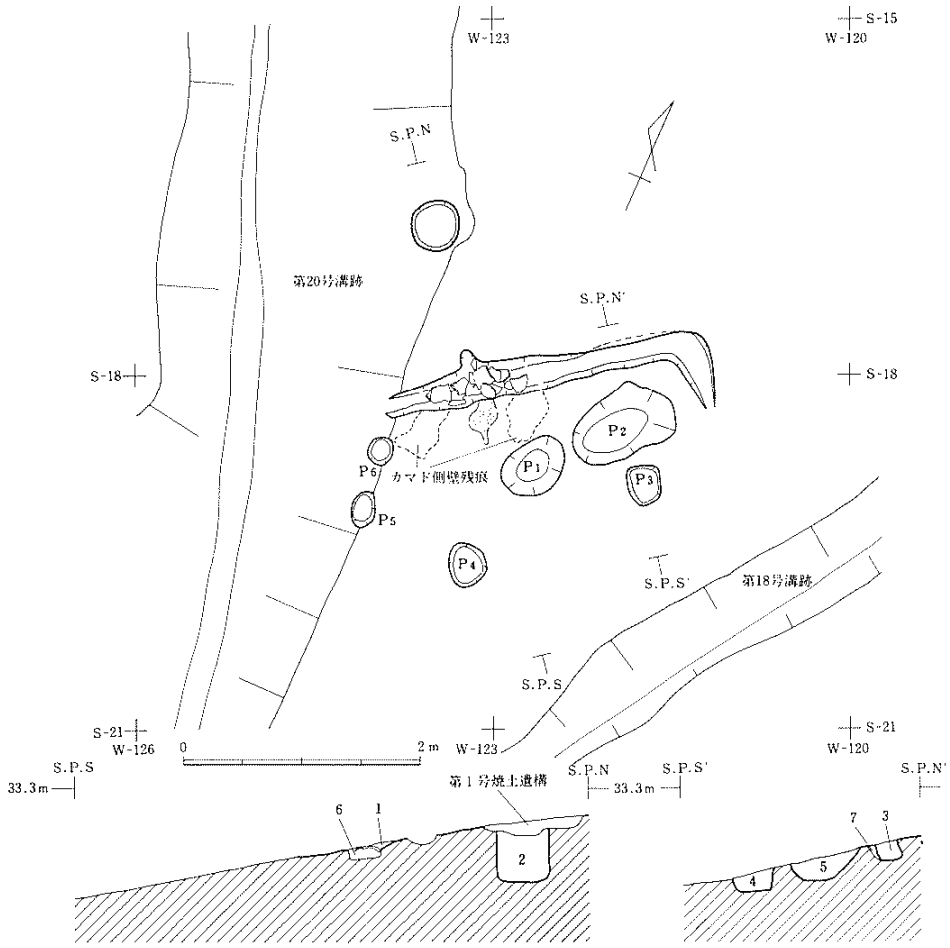
＜坏＞ 1・2 は、いずれも非ロクロ調整の坏である。丸底の坏で口縁部には幅の狭いヨコナデが施され、軽い稜が形成される。体部下半はヘラケズリが施されたあとにヘラミガ

キが施され、内面にもヘラミガキが施されている。2 の口縁端部に赤彩痕跡が残る。

＜碗＞ 3 は非ロクロ調整の碗である。平底で内面は黒色処理されている。

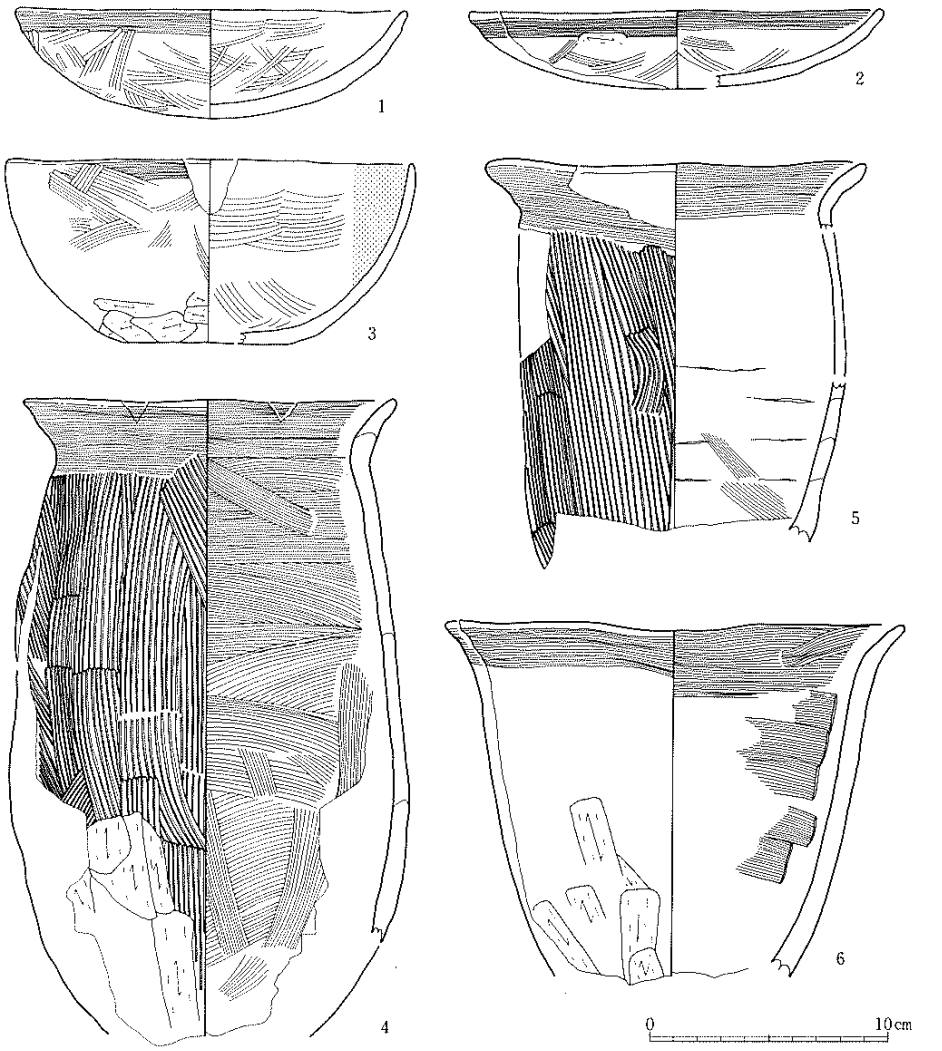
＜甕＞ いずれも非ロクロ調整の甕である。4・5 は長胴の甕で胴下部が膨らみ、胴部外面はハケメ、ヘラケズリされている。5 は口縁部が開く鉢状の甕で、胴部外面はヘラケズリされている。19−1 は胴部中央に最大径がある甕で、胴部外面の器面調整はヘラナデである。

＜甑＞ 19−2 は無底式の甑で、胴部外面の器面調整はハケメである。



層No.	土　色	土性	備　考	
1	褐色	シルト	焼土・炭化物を含む。	カマド堆積土
2	暗赤褐色	シルト	炭化物・地山粒を含む。	煙出しピット堆積土
3	暗褐色	シルト		周溝堆積土
4	暗褐色	シルト		ピット 3 堆積土
5	暗褐色	シルト	斑状に地山粒を多く含む。	ピット 2 堆積土
6	暗褐色	シルト		暗渠内堆積土
7	暗褐色	シルト	斑状に地山粒を多く含む。	周溝掘り方埋土

第17図　第 6 号竪穴住居跡



No.	種　類	層　位	外面　調整	内面　調整	底　部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録No.	図版
1	土師器・坏	周溝	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	――――	16.4	――	4.6	A I	B b19	8-5
2	土師器・坏	P2堆積土	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ	――――	17.1	――	3.3	A I	B b20	8-6
3	土師器・椀	カマド下	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	17.1	6.9	7.7	――	B b22	8-7
4	土師器・甕	周溝	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・横位のナデ	――――	15.1	――	(27.2)	A I	B b42	8-8
5	土師器・甕	周溝	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	――――	15.9	――	17.2	A I	B b43	8-9
6	土師器・甕	周溝	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	――――	19.2	――	(15.3)	A IV	B a35	――

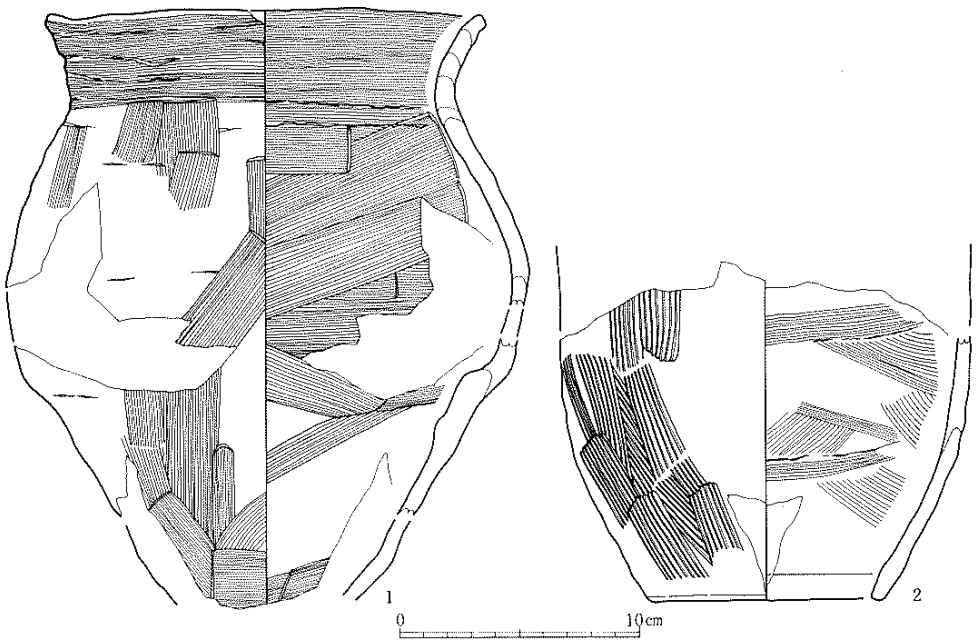
第18図　第６号竪穴住居跡出土遺物（1）

第７号竪穴住居跡（第 20 図）

［位置］調査区西側のＳ-9、W-130 付近に位置する。

［確認面］地山面で確認された。

［重複］第 21 号溝と重複し、これよりも古い。



No.	種類	層位	外面 調整	内面 調整	底部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録No.	図版
1	土師器・甕	カマド下	ヨコナデ・ヘラナデ・(ヘラケズリ)	ヨコナデ・ヘラナデ	――――	18.4	――	(25.2)	A V	B b44	9-1
2	土師器・甕	周溝	ハケメ	ナデ・ミガキに近いナデ	――――	――	9.7	(14.2)	――	B b34	―

第19図　第６号竪穴住居跡出土遺物（2）

［平面形・規模・方位］南辺と南東隅は削平のために失われている。東西 4.4m、南北の残存長 3.9mで、平面形は隅丸方形である。方位は東辺でN-32°－Wである。

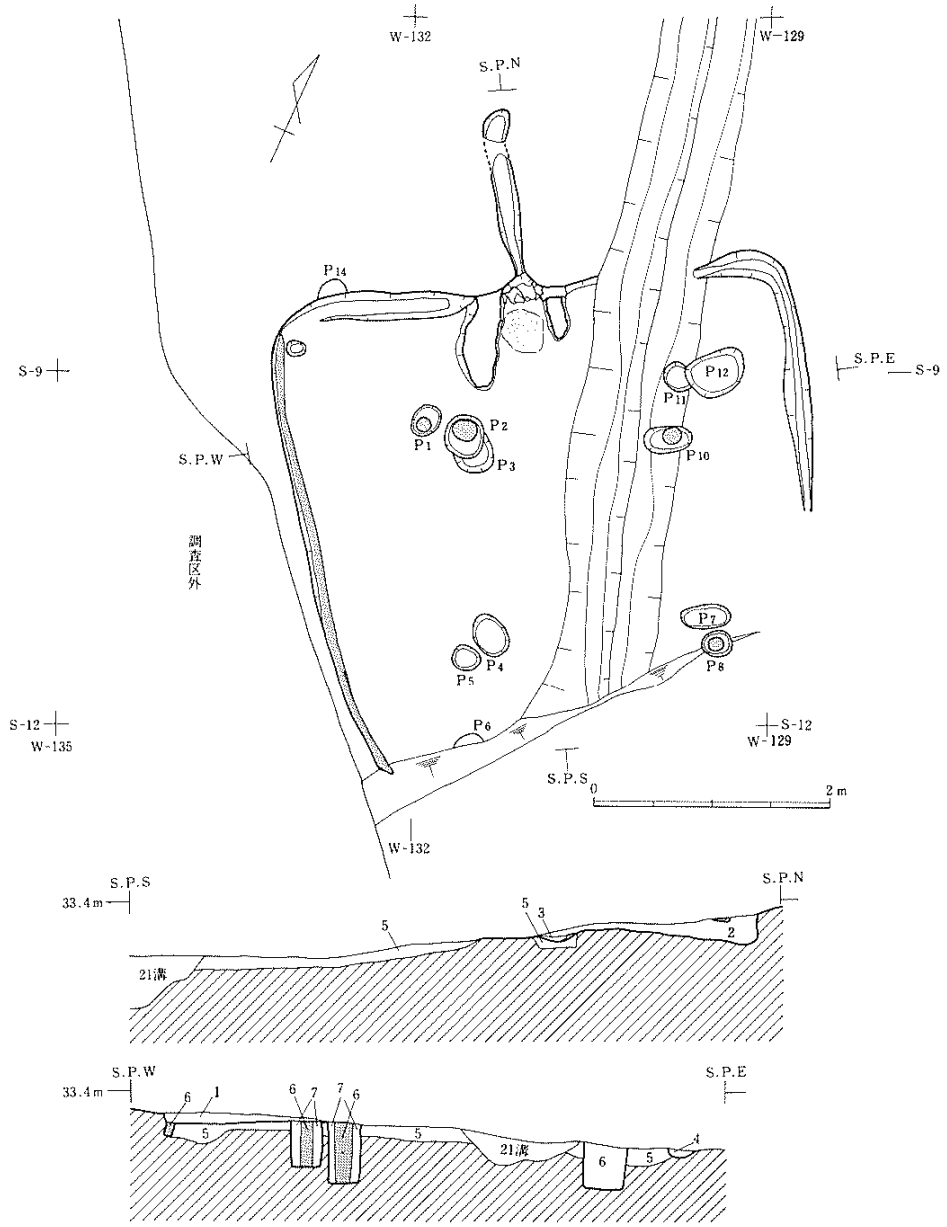
［堆積土］１枚認められた。住居を覆う自然流入土である。

［床面］床はカマド周辺だけ残っている。掘り方埋土を床面としている。

［壁］地山を掘り込んで壁としている。残存する壁高は 8～12㎝ である。

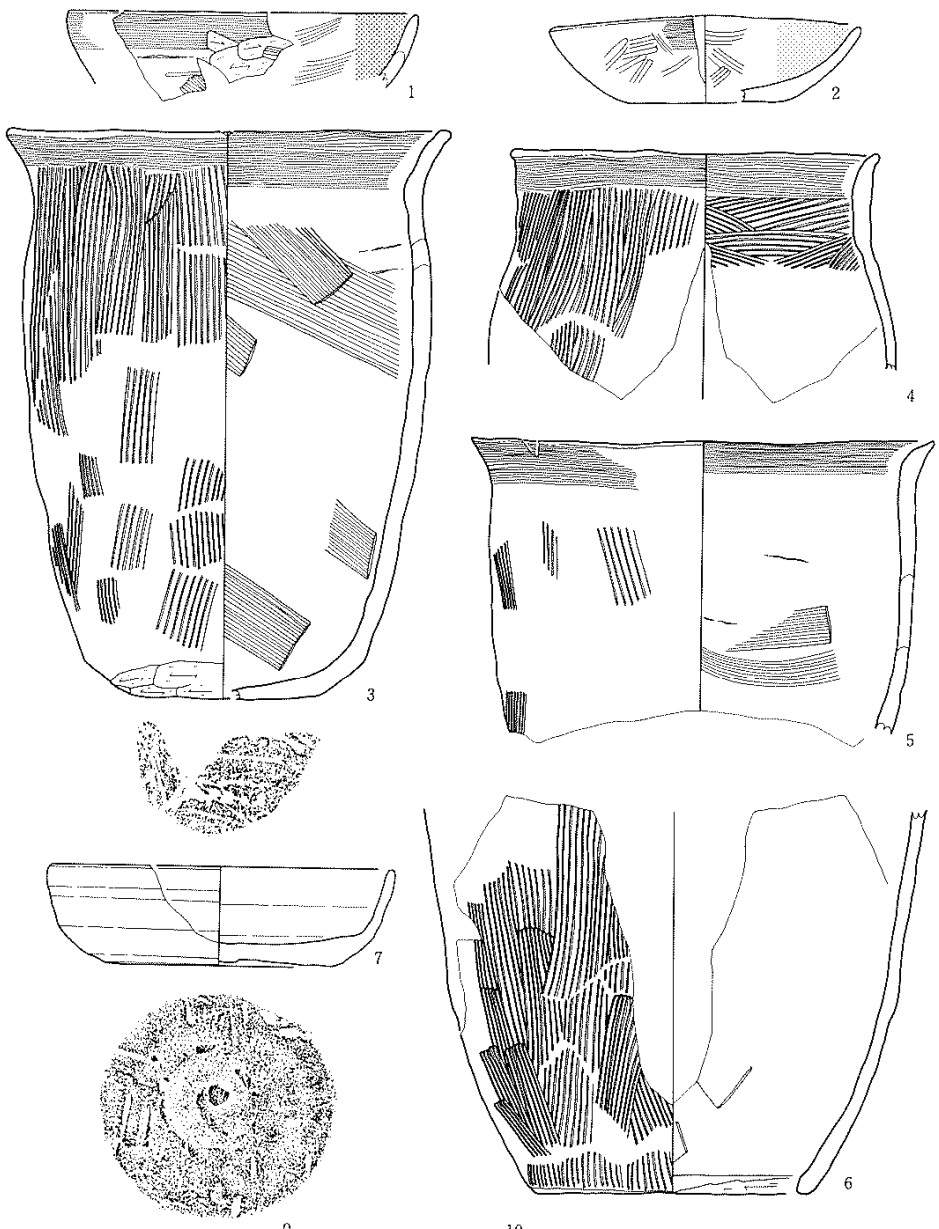
［カマド］北壁中央部に付設されている。側壁は粘土によって構築され、底面は浅く掘り窪められ、奥壁底面には土器片が敷かれている。燃焼部は最大幅 45㎝、奥行き 70㎝ で、側壁・底面は火熱によって赤色化している。煙道は地山をトンネル状に掘り抜いたもので一部の壁には粘土を貼り付けている。長さ 140㎝ で、断面は径 25㎝ の円形である。

［柱穴］住居のほぼ対角線上で、切合いを含め 10 個の柱穴(Ｐ1～Ｐ5、Ｐ7～Ｐ8、Ｐ10～Ｐ12)が検出された。北側の柱穴２つは３回の重複があり、南側の柱穴は２回の重複が認められた。柱穴掘り方は径 25 ㎝の円形、一辺 30㎝ の方形、長軸 40㎝・短軸 20㎝ の楕円形など多様な形である。柱痕跡はＰ1、Ｐ2、Ｐ8、P10 から検出され、床面からの深さは 40～55㎝ である。柱の組合せで、古い柱はＰ3、Ｐ4、Ｐ7、Ｐ10 で、柱間隔は南北 1.5m、東西 1.8m である。新しい柱はＰ1、Ｐ5、Ｐ8、Ｐ11 で、柱間隔は南北 2.0m、東西 2.1mである。北側



No.	土	色	土 性	備 考	
1	黄褐色	10YR5/6	シルト		自然流入土
2	褐色	10YR4/4	シルト		カマド堆積土
3	暗赤褐色	2.5YR3/6	粘土	焼土を含む。	カマド堆積土
4	褐色	10YR4/4	粘土		周溝堆積土
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	礫混じり粘土		住居跡掘り方埋土
6	褐色	———			柱穴柱痕跡
7	にぶい黄褐色	———			柱穴掘り方

第20図　第７号竪穴住居跡



No.	種　類	層　位	外面　調整	内面　調整	底　部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録No.	図版
1	土師器・坏	カマド	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	―――――	15.1	―――	(3.9)	AⅢ?	Bb18	―
2	土師器・坏	堆積土	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	手持ちヘラケズリ	13.9	5.7	3.8	AⅢ	Bb21	―
3	土師器・甕	堆積土	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	木葉痕	19.3	8.2	24.6	AⅠ	Bb45	9-2
4	土師器・甕	カマド周溝	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	―――――	15.9	―――	(10.8)	AⅢ	Bb38	―
5	土師器・甕	床面	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	―――――	19.0	―――	(18.3)	AⅢ	Bb46	―
6	土師器・甕	カマド周溝	ハケメ	ヘラナデ・ヘラケズリ	―――――	―――	11.7	(17.0)	―――	Bb37	―
7	須恵器・坏	床面	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	14.9	10.0	4.3	A	Ba1	9-3

第21図　第７号竪穴住居跡出土遺物（1）

のもっとも新しい一対の柱はP2、P12で柱間隔は東西2.2mである。

［周溝］東辺、北辺で周溝が認められた。幅15～20㎝、床面からの深さ10㎝である。カマド下部は暗渠状になっている。また、西側壁際に幅10㎝の暗褐色の堆積が認められた。壁材の痕跡と思われる。堆積土の違いから前者は住居掘り方埋土を掘り込んでつくられ、後者は住居掘り方埋土と共に埋められている。

［出土遺物］図示した遺物は、床面、カマド付近から出土した遺物で、土師器坏、甕、甑、須恵器坏、鑿、砥石がある。

【土師器】（第21図1～6）

＜坏＞ 2点ある。いずれも非ロクロ調整の坏である。1は丸底の坏で、外面はヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。2は平底の坏で、外面はヨコナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

＜甕＞ 3点ある。いずれも非ロクロ調整の長胴の甕である。胴部外面の器面調整はいずれもハケメで、3の底部には木葉痕が見られる。

＜甑＞ 6は非ロクロ調整の無底式の甑である。外面の器面調整はハケメで、底部内側にはヘラケズリが加えられている。

【須恵器】（第21図7）

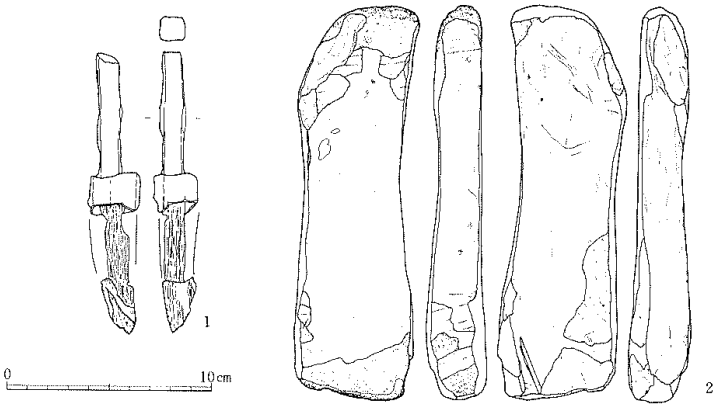
＜坏＞ 平底の坏で、底部は回転ヘラ切りで、ナデの再調整が施される。

【鉄製品】（第22図1）

＜鑿＞ 刃部が欠損している。柄の部分には木質が残り、締め金具が付いている。

【石製品】（第22図2）

＜砥石＞ 凝灰岩製の砥石で、周辺部は金属器によって整形されている。



No.	種　類	層　位	最大長(cm)	最大幅(mm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質	登録地
1	鑿	掘り方埋土	138.3	25.6	25.6		鉄・木材	Bc1
2	砥　石	床面	193.0	58.0	27.1	374	凝灰岩	Bd1

第22図　第7号竪穴住居跡出土遺物（2）

第 10 号竪穴住居跡（第 23 図）

［位置］第 4 次調査区西側のN-21、W-61 付近に位置する。

［確認面］地山上面で確認された。

［重複］認められない。

［平面形・規模・方位］南辺が削平されている。一辺 3.8mの隅丸方形を呈すると思われる。方位は東辺でN-30°-Wである。

［堆積土］2 枚認められた。1、2 層は住居を覆う自然流入土である。

［床面］地山をそのまま床とした部分と、溝状に掘り込み、そこに地山混じりの褐色土を貼り床面としている部分がある。厚さは最も厚いところで 20㎝程である。

［壁］地山を掘り込んで壁としている。壁高は最も保存のよい北壁で約 25㎝である。

［カマド］東辺中央に付設されている。側壁は撹乱で部分的にしか残っていないが、地山を切り出して作られている。燃焼部は最大幅 60㎝、奥行き 70㎝である。燃焼部奥壁は段状に立ち上がり、煙道、奥壁前部も段状に掘り込まれている。煙道は地山をトンネル状に掘り抜いたもので、長さ 80㎝、断面は径 15㎝の円形を呈している。煙出しピットは径 35㎝の円形で、深さ 35㎝である。

［柱穴］住居の対角線上でP1～P3、P7 の 4 個の柱穴を検出した。柱穴掘り方は径 30㎝で円形のものと、長軸 30㎝、短軸 20㎝の楕円形のものがあり、すべての柱の柱痕跡が確認された。柱痕跡は径 12㎝の円形で床面からの深さは 40㎝である。柱間隔は東西 1.8m，1.8m、南北で 2.0m，1.4mである。この他に、カマド脇に一対の柱穴が認められた。位置的にみて、カマド上部の梁を支える柱穴と考えられる。

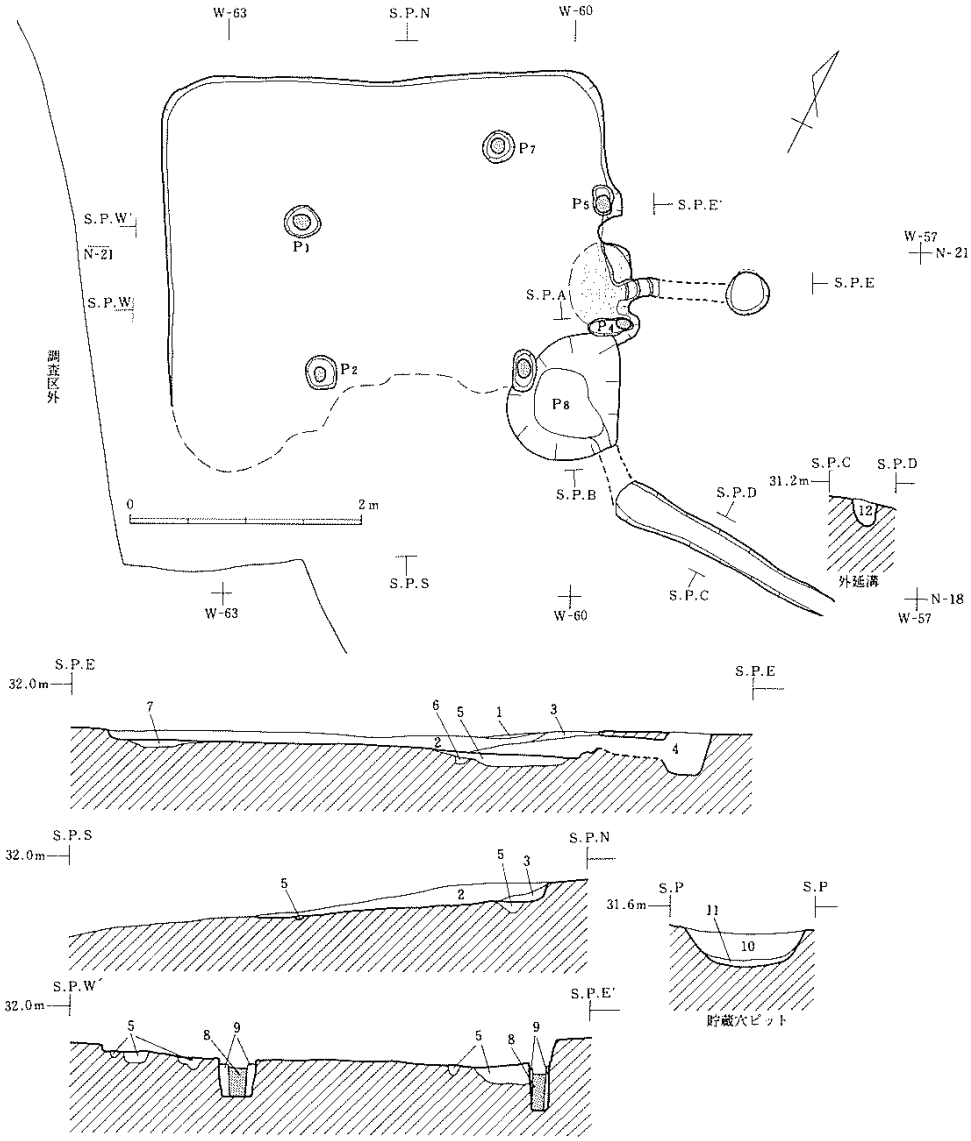
［床面施設］カマドの南側の住居南東隅に貯蔵穴ピットが検出された。平面形は不整な円形で、長軸 125㎝、短軸 105㎝、深さ 30㎝である。堆積土は 2 枚認められ、1 層が自然流入土、2 層が埋土であり、2 層上面からほぼ完形の土師器坏 9 点をはじめとして多量の土器が出土した。このことから 2 層上面が機能面であったと思われる。

［その他の施設］住居南東隅から南東方向に延びる幅 25㎝の溝が検出された。この溝は住居壁から 30㎝外側までは地山をトンネル状に掘り抜いたものである。

［出土遺物］図示したものは床面や貯蔵穴状ピット、住居堆積土出土の遺物で、土師器、刀、砥石などがある。

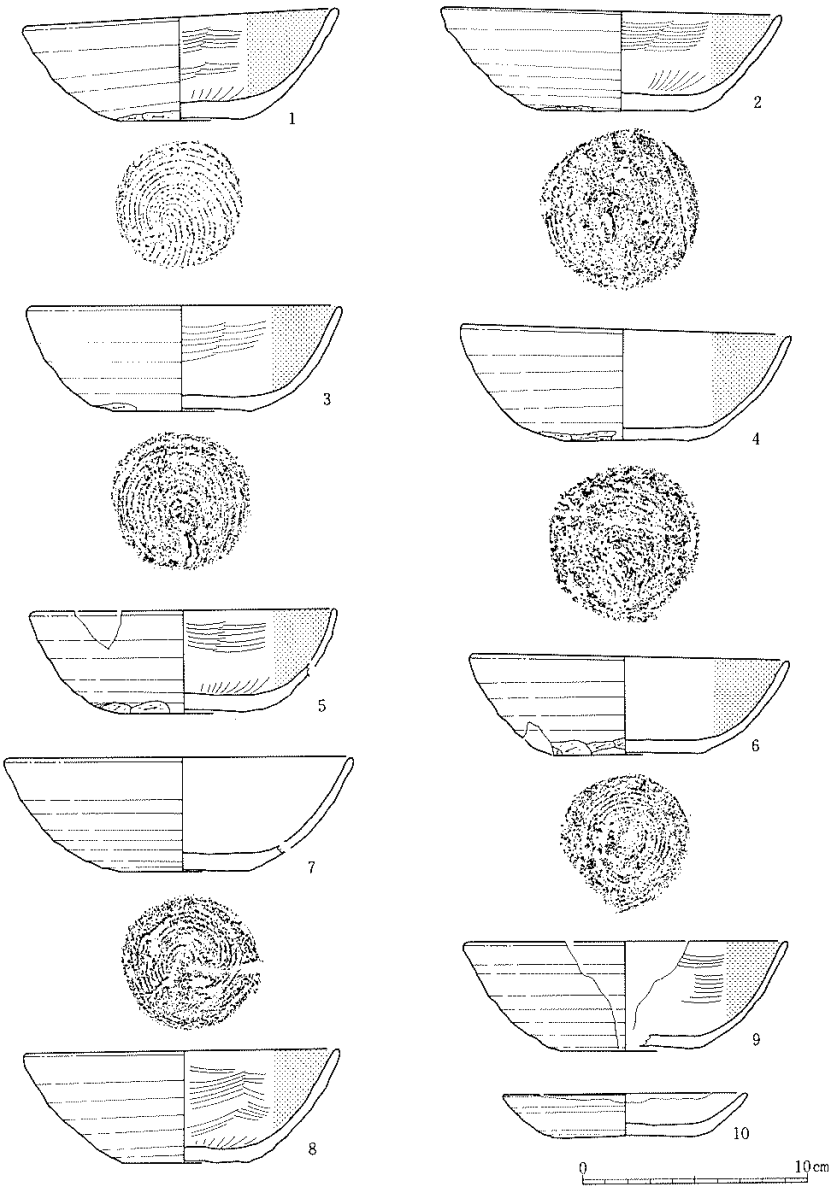
【土師器】（第 24 図 1～10、第 25 図 1）

＜坏＞ 10 点ある。いずれもロクロ調整の坏で、1～9 は内黒、10 は非内黒である。1～6 は回転糸切り後、底部付近が手持ちヘラケズリされている。7～9 は回転糸切り無調整の坏である。10 は皿状の器形で、底部はヘラケズリが施され、切り離しは不明である。



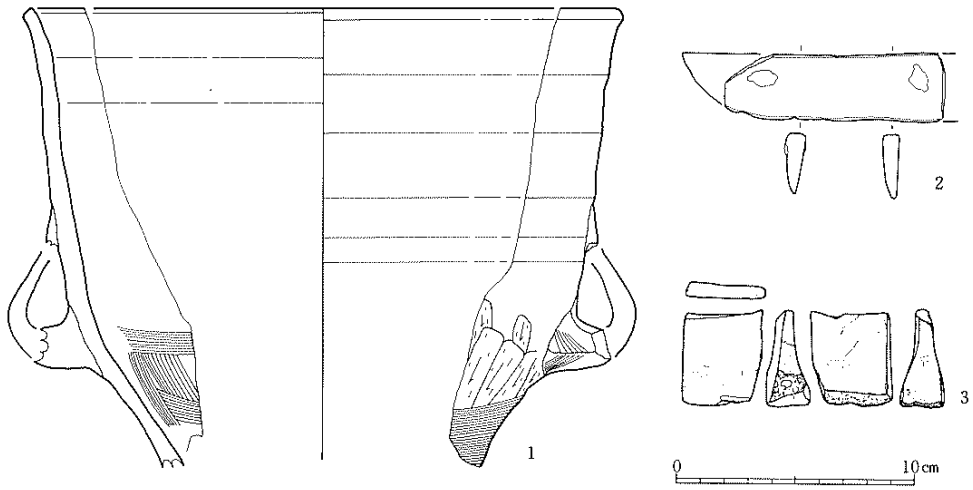
層No.	土色		土性	備考	
1	暗褐色	10YR3/4	シルト		自然流入土
2	暗褐色	7.5YR3/3	シルト	地山粒を少量含む。	自然流入土
3	暗褐色	10YR3/3	シルト		カマド周辺堆積土
4	褐色	10YR3/2	シルト	地山粒・炭化物・焼土を含む。	カマド周辺堆積土
5	暗赤褐色	10YR2/3	シルト	地山粒・炭化物を含む。	掘り方埋土
6	褐色	7.5YR4/3	シルト	地山粒を含む。	掘り方埋土
7	黄褐色	7.5YR4/3	シルト	地山粒を含む。	掘り方埋土
8	褐色	10YR2/2	シルト		柱痕跡
9	暗赤褐色	10YR3/4	シルト		柱穴掘り方埋土
10	褐色	10YR3/2	粘質シルト	地山粒・炭化物を含む。	貯蔵穴自然流入土
11	暗赤褐色	7.5YR4/3	粘質シルト	地山粒を含む。	貯蔵穴掘り方埋土
12	褐色	7.5YR3/4	シルト	地山粒を少量含む。	外延溝自然流入土

第23図　第10号竪穴住居跡



No.	種類	層位	外面　調整	内面　調整	底　部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録	図版
1	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	14.0	5.6	4.9	BIIb	Bb8	9-4
2	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	15.1	7.0	4.6	BIIb	Bb9	9-5
3	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	13.9	6.0	4.7	BIIb	Bb10	9-6
4	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	不明・黒色処理	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	14.4	5.5	5.2	BIIb	Bb11	9-7
5	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	13.8	5.8	4.6	BIIb	Bb12	—
6	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	不明・黒色処理	回転糸切り・手持ちヘラケズリ	14.2	6.6	4.6	BIIb	Bb15	9-8
7	土師器・坏	堆積土	ロクロナデ	ヘラミガキ・不明	回転糸切り	15.5	5.6	5.1	BIIc	Bb16	9-9
8	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	14.1	5.6	5.1	BIIc	Bb13	—
9	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り	14.4	5.6	4.8	BIIc	Bb14	—
10	土師器・坏	貯蔵穴	ロクロナデ	不明	手持ちヘラケズリ	10.8	6.3	1.9	BIII	Bb17	—

第24図　第10号竪穴住居跡出土遺物（1）



No.	種　類	層　位	外面　調整	内面　調整	底　部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	分類	登録	図版
1	土師器・甕	堆積土	ロクロナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ	ロクロナデ・ナデ	―――――	25.1	――	(19.3)	――	B b49	―
2	刀	貼り床	最大長(mm):92.3	最大幅(mm):27.0	最大厚(mm):7.0				――	B c 2	―
3	砥石	貯蔵穴	最大長(mm):41.4	最大幅(mm):32.8	最大厚(mm):10.8	重さ(g):21			――	B d 2	―

第25図　第10号竪穴住居跡出土遺物（2）

＜甑＞ 25－1 はロクロ調整の甑で、体部中央部に一対の把手が付く。外面はナデ・ヘラケズリされている。

【鉄製品】（第 25 図 2）

＜刀＞ 刀身の先端部の破片で、切先部分が欠損している。

【石製品】（第 25 図 3）

＜砥石＞ 凝灰岩製の小形の砥石で一端が折れている。

第 14 号土壙（第 26 図上）

［位置］第 4 次調査区中央のN-24、W-45 に位置する。

［平面形・規模・方位］長辺 140㎝、短辺 110㎝ の隅丸長方形、長軸方向はE-23-N。

［堆積土］焼土・炭化物を含む褐色粘土で埋め戻されている。

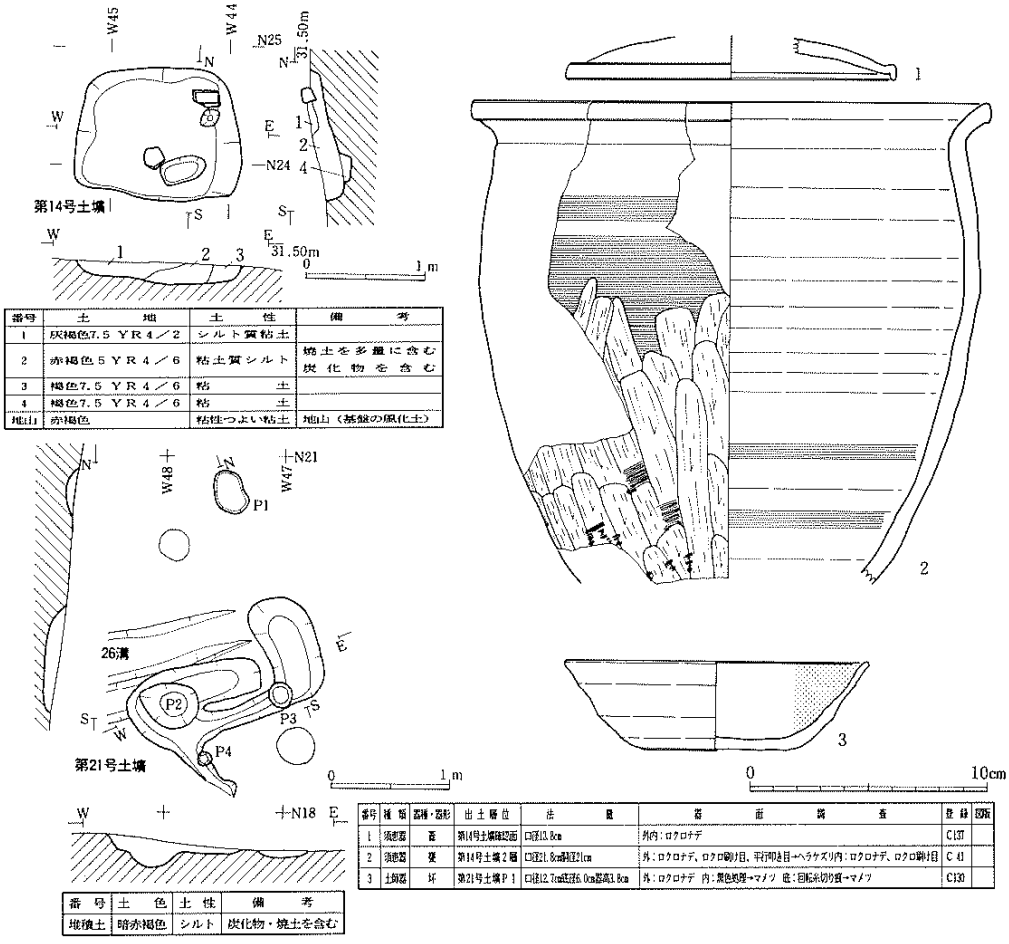
［底面］平滑で南側に傾斜している。南東よりに浅いピットがある。

［壁面］壁は確認面からの深さが 10㎝ 前後で、底面からの立ち上がりは急である。

［出土遺物］堆積土上部から火を受けた石の破片とともに須恵器蓋および甕の破片が出土している。いずれも埋め戻された土に混入した遺物で、直接本土壙に伴うものではない。

第 21 号土壙（第 26 図下）

［位置］第 4 次調査区中央のN-19、W-48 に位置する。



第26図　第14・21号土壙とその出土遺物

［重複］第 26 号溝跡と重複しこれよりも古い。

［平面形・規模・方位］不規則な平面形態で「L」字状の溝が連結した形態である。

［堆積土］焼土・炭化物を含む赤褐色シルトが堆積している。

［底面］「L」字状の溝が連結した部分に浅いピット 2・3・4 がある。

［壁面］壁は確認面からの深さが 5㎝ 前後で、底面からの立ち上がりは急である。

［出土遺物］底面から完形の土師器坏が出土している。本土壙に伴う遺物とみられる。

2．中世以降の遺構と遺物

調査区の東端部を除くほぼ全域で、中世以降の溝跡・道路跡・掘立柱建物跡・柱列・竪穴建物・井戸跡・土壙・火葬遺構などが検出された。以下では第 2・3・4 次の各次数の調査区ごとに発見された遺構をみていくことにする。各遺構出土遺物は後に一括して示す。

なお、第 2・3 次の両調査区では、20～25m間隔で南北方向の溝跡や道路跡が検出され、溝跡・道路跡で挟まれた各地域内の遺構の分布状況にもまとまりがみられたことから、これらの溝跡・道路跡が一定の屋敷地を区画する施設であった可能性が考えられた。したがって、第 2・3 次調査区については、これらの溝跡・道路跡を境界としてそれぞれをさらに三つの区に分け、遺構をみていくことにする

1．第 2 次調査　1 区

第 2 次調査 1 区とした地域は東端が 1・2 号溝跡、西端が 3・4 号溝跡で画された地域である（第 27・28 図）。ここには 4・5 号掘立柱建物跡が位置している。

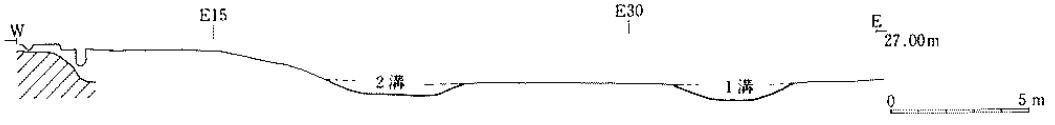
溝跡

第 1 号溝跡；調査区東部に位置する。南北方向の沢状の地形で、南側は幅が広がり深くなる。断面は浅い「U」字状で、砂礫が自然堆積している。出土遺物はない。

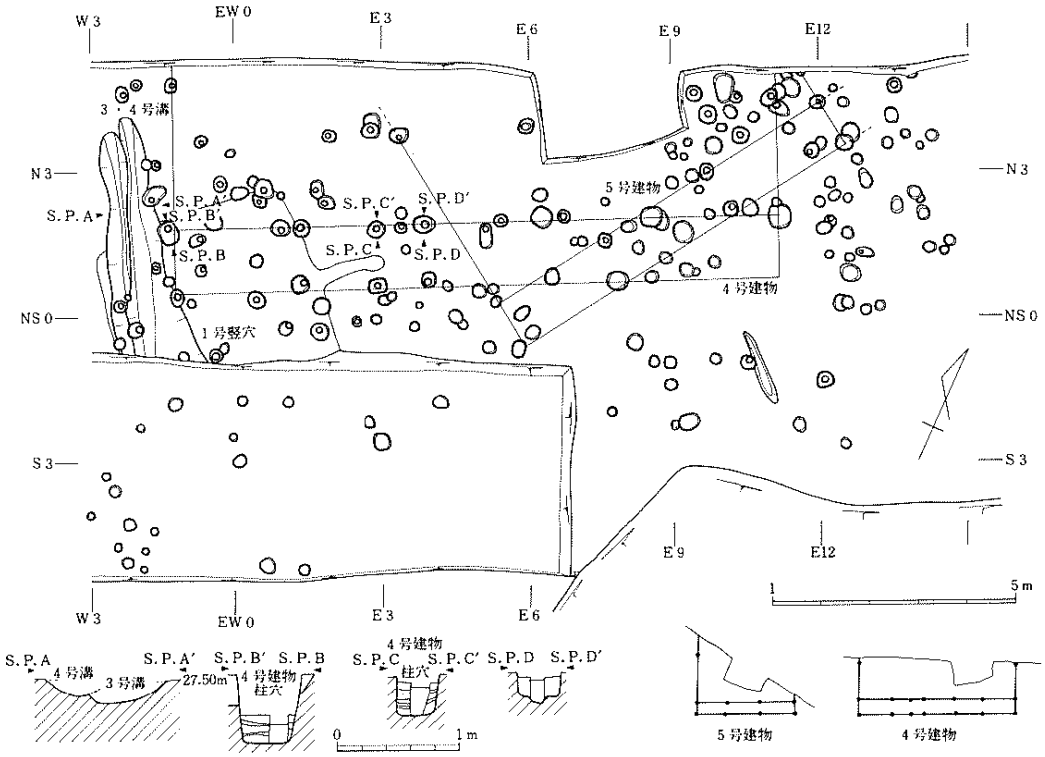
第 2 号溝跡；1 号溝跡の西側約 5mに位置する。南北方向の溝跡で南側が深くなる。断面は浅い逆台形で、砂礫が自然堆積している。出土遺物はない。

第 3 号溝跡；2 号溝跡の西約 20mに位置し、これにほぼ平行する南北方向の溝跡である。北端部と南半は削平されている。1 号竪穴住居跡と重複しこれより新しい。断面は「U」字状で、シルト質土壙が自然堆積している。出土遺物はない。

第 4 号溝跡；3 号溝跡と位置・方向・規模がほぼ一致する溝跡である。3 号溝の西側にわずかにずれていて、4 号溝が新しい。断面は「U」字状で、シルト質土壙が自然堆積している。出土遺物はない。



第27図　第１・２号溝跡



第28図　第２次調査区１区

掘立柱建物跡

第 4 号掘立柱建物跡；建物北半は調査区外に及んでいる。また、建物南東部の柱穴は削平されている。東西 5 間、南北 1 間以上の東西棟で南側に半間分の縁もしくは廂が付く建物とみられる。柱穴は掘り方が一辺約 40㎝の隅丸方形、柱痕跡は径 12㎝前後の円形である。

第 5 号掘立柱建物跡；建物の北半は調査区外に及んでいる。東西 3 間、南北 2 間以上の東西棟で南側に半間分の縁もしくは廂が付く建物とみられる。柱穴は掘り方が一辺約 30㎝の隅丸方形、柱痕跡は径 12 ㎝前後の円形である。4 号建物跡と重複しているが新旧関係不明。

2．第 2 次調査　2 区

第 2 次調査 2 区とした地域は東端が 3・4 号溝跡、西端が 6・7 号溝跡で画された地域である（第 29 図）。ここには 1・6～14 号掘立柱建物跡、2・22 号土壙、5・31・32 号溝跡が位置している。

溝跡

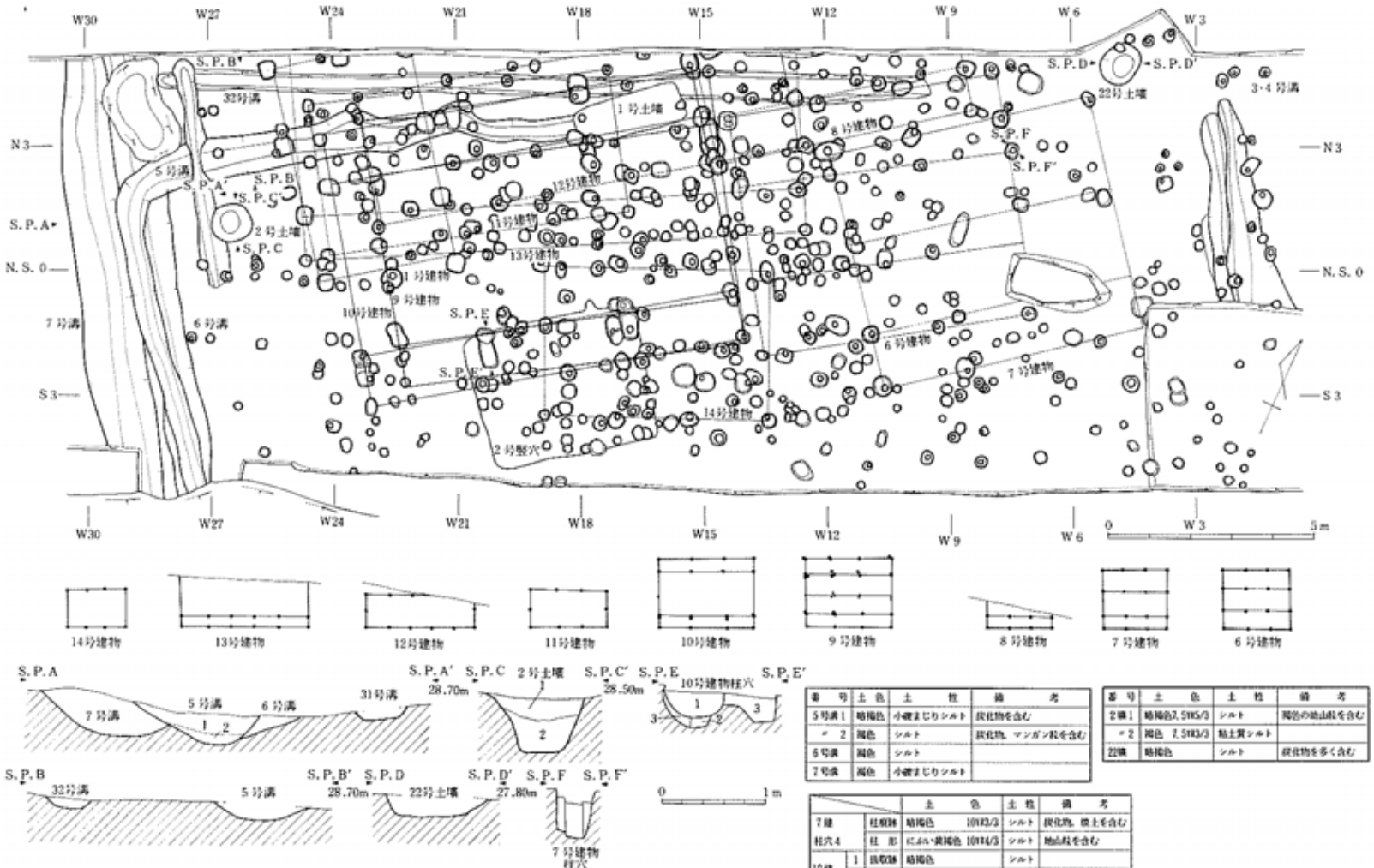
第 5 号溝跡;4 号溝跡の西 25mに位置する。調査区北辺で東側に直角に折れ曲がる溝跡で、6・7 号溝跡、1 号土壙、1・10 号掘立柱建物跡と重複し、いずれよりも新しい。底面はほぼ平坦で、シルト質土壙が自然堆積している。堆積土から土師器・土師質土器・中世陶器・青磁の破片が出土している。

第 6 号溝跡;4 号溝跡の西約 25mに位置し、これらとほぼ平行する南北方向の溝跡である。南半は 5 号溝跡と重複し、北半は撹乱を受けている。北方は調査区外に及び、北側に隣接する第4次調査区の28号溝跡とほぼ同一線上にあることから一連の溝跡である可能性がある。断面は「U」字状で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

第 7 号溝跡；6 号溝の西側にわずかにずれた位置にある南北方向の溝跡である。6 号溝とほぼ重複し、7 号溝跡が新しい。第 4 次調査区の 29 号溝跡と同一直線上にあることから一連の溝跡である可能性がある。断面は「U」字状で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

第 31 号溝跡；6 号溝跡の東隣に位置し、これとほぼ並行する南北方向の溝跡である。南半は削平されている。5 号溝跡・2 号土壙と重複し、いずれよりも新しい。底面はほぼ平坦で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

第 32 号溝跡；5 号溝跡の北辺に位置し、これとほぼ並行する東西方向の溝跡である。31 号溝跡、1・9～12 号掘立柱建物跡と重複し、いずれよりも新しい。底面は平坦で、グライ化したシルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。



番号	土色	土性	備考
5号溝1	暗褐色	小礫まじりシルト	炭化物を含む
〃 2	褐色	シルト	炭化物、マンガン粒を含む
6号溝	褐色	シルト	
7号溝	褐色	小礫まじりシルト	

番号	土色	土性	備考
2層1	暗褐色7.5YR5/3	シルト	褐色の地山粒を含む
〃 2	褐色 7.5YR3/3	粘土質シルト	
22層	暗褐色	シルト	炭化物を多く含む

			土色	土性	備考
7建 柱穴4		柱痕跡	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物、焼土を含む
		柱堀形	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	地山粒を含む
10建 柱穴17	1	抜取跡	暗褐色	シルト	
	2	柱痕跡	黒褐色	シルト	
	3	堀形	黒褐色	シルト	炭化物まじる

第29図 第2次調査区2区

掘立柱建物跡

第 1 号掘立柱建物跡；南北 3 間、東西 2 間の南北棟で床束とみられる柱穴がある。柱穴は掘り方が一辺約 40㎝ の方形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形である。第 9・10 号掘立柱建物跡と重複しこれらよりも古い。

第 6 号掘立柱建物跡；建物の南東部の柱穴は削平により失われている。東西 3 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟で南側に半間分の縁もしくは廂が付く建物である。柱穴は掘り方が一辺約 40㎝ の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形である。2 棟の建物跡（7・8 号）と重複しているが新旧関係は不明。

第 7 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟で南側に 1 間分の縁もしくは廂が付く建物とみられる。柱穴は掘り方が一辺約 40㎝ の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形で、北側の柱穴底面には偏平な河原石を利用した礎石が据えられているものが三カ所ある。5 棟の建物跡（6・8・12～14 号）と重複しているが新旧関係は不明。

第 8 号掘立柱建物跡；建物の北半は調査区外に及んでいる。東西 3 間、南北 1 間以上の東西棟で南側に半間分の縁もしくは廂が付く建物と推定される。柱穴は掘り方が径約 20㎝ の円形、柱痕跡は径 12㎝ 前後の円形である。3 棟の建物跡（6・7・12 号）と重複し、12 号建物跡よりも新しい。他の新旧関係は不明。

第 9 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟で南北に半間分の縁もしくは廂が付く建物である。柱穴は掘り方が径約 30～40㎝ の円形である。ほぼ同位置で同規模の建物を 2～3 回建て替えており、柱の抜取り痕跡の埋め土からは青磁・中世陶器・土師質土器などが出土している。6 棟の建物跡（1・10～14 号）と重複し、10 号建物跡よりも新しい。他の新旧関係は不明。

第 10 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟で南北に半間分の縁もしくは廂が付く建物である。柱穴は掘り方が一辺約 40㎝ の隅丸方形である。北側の柱穴底面には偏平な河原石を利用した礎石が据えられているものが一ヵ所ある。柱は抜取りを受けており、抜取り痕跡埋め土からは白磁・土師質土器・鉄製品などが出土している。6 棟の建物跡（1・9・11～14 号）と重複し、9 号建物跡よりも古い。他の新旧関係は不明。

第 11 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は掘り方が一辺約 30㎝ の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形である。5 棟の建物跡（1・9・10・12・13 号）と重複しているが新旧関係は不明。

第 12 号掘立柱建物跡：東西 5 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は掘り方が 30×40㎝ の楕円形で、柱穴底面には偏平な河原石を利用した礎石が据えられているものが二ヵ所ある。柱は抜取りを受けており、抜取り痕跡埋め土からは鉄滓が出土している。6 棟の建物跡

（1・7・8・9～11 号）と重複し、8 号建物跡よりも古い。他の新旧関係は不明。
第 13 号掘立柱建物跡；東西 5 間、南北 2 間の東西棟で、東から 3 間目に間仕切りとみられる柱穴がある。柱穴は掘り方が径約 30㎝ の円形、柱痕跡は径 10㎝ 前後の円形である。7 棟の建物跡（1・6・7・9～11・14 号）と重複しているが新旧関係は不明。
第 14 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間の東西棟である。柱穴は掘り方が径約 35㎝ の楕円形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形である。4 棟の建物跡（7・9・10・13 号）と重複しているが新旧関係は不明。

土壙

第 2 号土壙；確認面での平面形が径 100㎝ の円形で、深さ 60㎝、底径 50㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器・木製品などが出土している。
第 22 号土壙；確認面での平面形が径 100㎝ の不整な円形で、深さ 20㎝、底径 50㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器が出土している。

3．第 2 次調査　3 区

第 2 次調査 3 区とした地域は東端が 6・7 号溝跡、西端が 12 号溝跡で画された地域である（第 30 図）。ここには 15～20 号掘立柱建物跡、1・2 号井戸跡、8～11 号溝跡が位置している。

溝跡

第 8 号溝跡；7 号溝跡の西約 10mに位置する。6・7 号溝跡にほぼ平行する南北方向の溝跡で、南半部は削平されている。第 4 次調査区の 30 号溝跡と同一線上にあることから一連の溝跡である可能性がある。19 号掘立柱建物跡と重複しこれよりも新しい。断面は「U」字状で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。
第 9 号溝跡；8 号溝跡の西隣に位置し、これと並行している。8 号溝跡 19・20 号掘立柱建物跡と重複し、掘立柱建物跡より新しい。8 号溝跡との新旧は不明である。断面は「U」字状で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。
第 10 号溝跡；8・9 号溝跡と直交する東西方向の溝跡である。3 号竪穴住居跡、8・9・12 号溝跡・20 号掘立柱建物跡と重複し、3 号竪穴住居跡より新しく、その他のいずれよりも古い。断面は浅い「U」字状で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。
第 11 号溝跡；10 号溝跡の南隣に位置し、これと並行する東西方向の溝跡である。断面は浅い「U」字状で、シルトが自然堆積している。出土遺物はない。
第 12 号溝跡；9 号溝跡の西約 7mに位置する南北方向の溝跡である。18・19 号掘立柱建物

跡と重複し、これらより新しい。断面は浅い「V」字状で、グライ化したシルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

掘立柱建物跡

第 15 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟である。柱穴は掘り方が一辺約 40㎝ の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形である。16 号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

第 16 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟である。柱穴は掘り方が径約 30㎝ の円形、柱痕跡は一辺 15㎝ の方形のものがある。2 号井戸跡、15 号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

第 17 号掘立柱建物跡；東西 5 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟である。柱穴は掘り方が一辺約 40㎝ の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ の円形である。9～12 号溝跡、1 号井戸跡、3 棟の建物跡（18～20 号）と重複し溝跡よりも古い。井戸跡や他の建物跡との新旧関係は不明。

第 18 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間以上の東西棟で北側に半間分の縁もしくは廂が付く建物である。柱穴は掘り方が一辺約 40㎝ の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ の円形である。12 号溝跡、3 棟の建物跡（18～20 号）と重複し溝跡よりも古い。他の建物跡との新旧関係は不明。

第 19 号掘立柱建物跡；南東部の柱穴は削平により失われているが、東西 3 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟と考えられる。柱穴は一辺 15㎝ の方形である。9～12 号溝跡、1 号井戸跡、3 棟の建物跡（17・18・20 号）と重複し溝跡よりも古い。井戸跡や他の建物跡との新旧関係は不明。

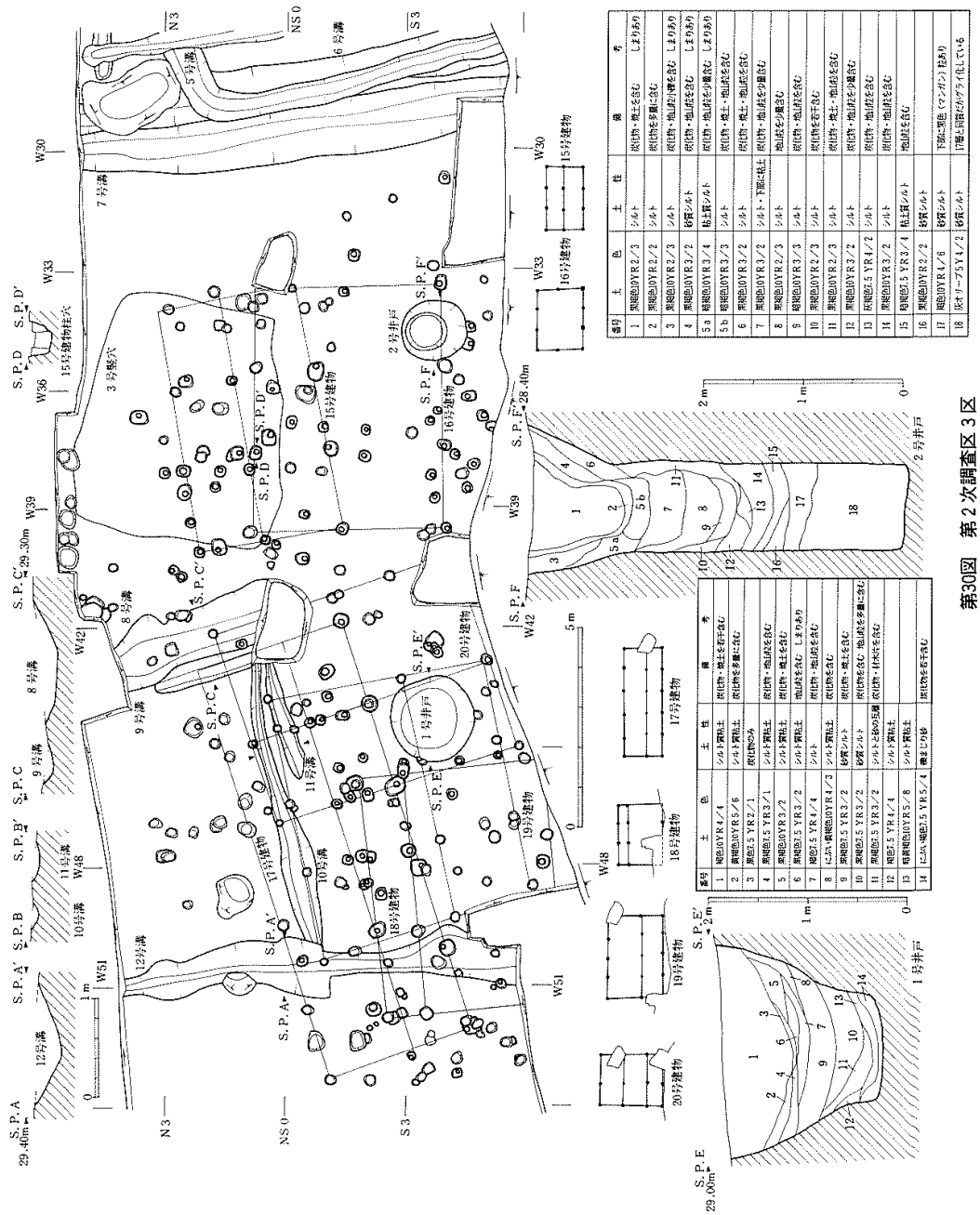
第 20 号掘立柱建物跡；建物の南東部の柱穴は調査区外に及ぶものとみられることから、東西 2 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟で南側に半間分の縁もしくは廂が付く建物と考えられる。柱穴は掘り方が一辺約 25㎝ の方形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形である。1 号井戸跡、3 棟の建物跡（17～19 号）と重複しているが新旧関係は不明。

井戸跡

第 1 号井戸跡；確認面での平面形が径 210㎝ の円形で、深さ 170㎝、底径 110㎝ の素掘りの井戸である。底面は平坦で、壁は底面から 50㎝ まで垂直に立ち上がり上部では開いている。堆積土は焼土・炭化物を含む褐色粘土の自然堆積土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器の破片が出土している。

第 2 号井戸跡；確認面での平面形が径 150㎝ の円形で、深さ 380㎝、底径 90㎝ の素掘りの井戸である。底面は平坦で、壁は底面から 300㎝ まで垂直に立ち上がり上部では開

いている。堆積土は焼土・炭化物を含む褐色粘土の自然堆積土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器・木製品などが出土している。



第30図　第２次調査区３区

4．第3次調査　1区

第3次調査1区とした地域は東端が12号溝跡、西端が23・24号溝跡で画された地域である（第31図）。ここには2・3・21～25号掘立柱建物跡、3号土壙が位置している。

溝跡

第23号溝跡;12号溝跡の西約20mに位置する南北方向の溝跡である。断面はごく浅い「U」字状で、グライ化したシルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

第24号溝跡；23号溝跡の西隣に位置し、これと並行する南北方向の溝跡である。断面はごく浅い「U」字状で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡；建物の北半が調査区外に及んでいる可能性があるため、南北2間以上、東西2間の床束をもつ南北棟と推定される。柱穴は掘り方が一辺約50㎝の隅丸方形で、柱痕跡は径15㎝前後の円形である。

第3号掘立柱建物跡；建物の北半が調査区外に及んでいる可能性があるため、南北2間以上、東西2間の床束をもつ南北棟と推定される。柱穴は掘り方が一辺約40㎝の隅丸方形で、柱痕跡は径15㎝前後の円形である。

第21号掘立柱建物跡；建物南半部は調査区外に及んでいるが、東西3間の東西棟で北側に縁もしくは廂が付く建物と考えられる。柱穴は一辺約25㎝の隅丸方形である。

第22号掘立柱建物跡；建物北東部を検出したのみで、大半は調査区外に及んでいるが、東西2間以上の東西棟で北側に縁もしくは廂が付く建物と考えられる。柱穴掘り方は一辺約25㎝の隅丸方形、柱痕跡は径15㎝前後の円形である。

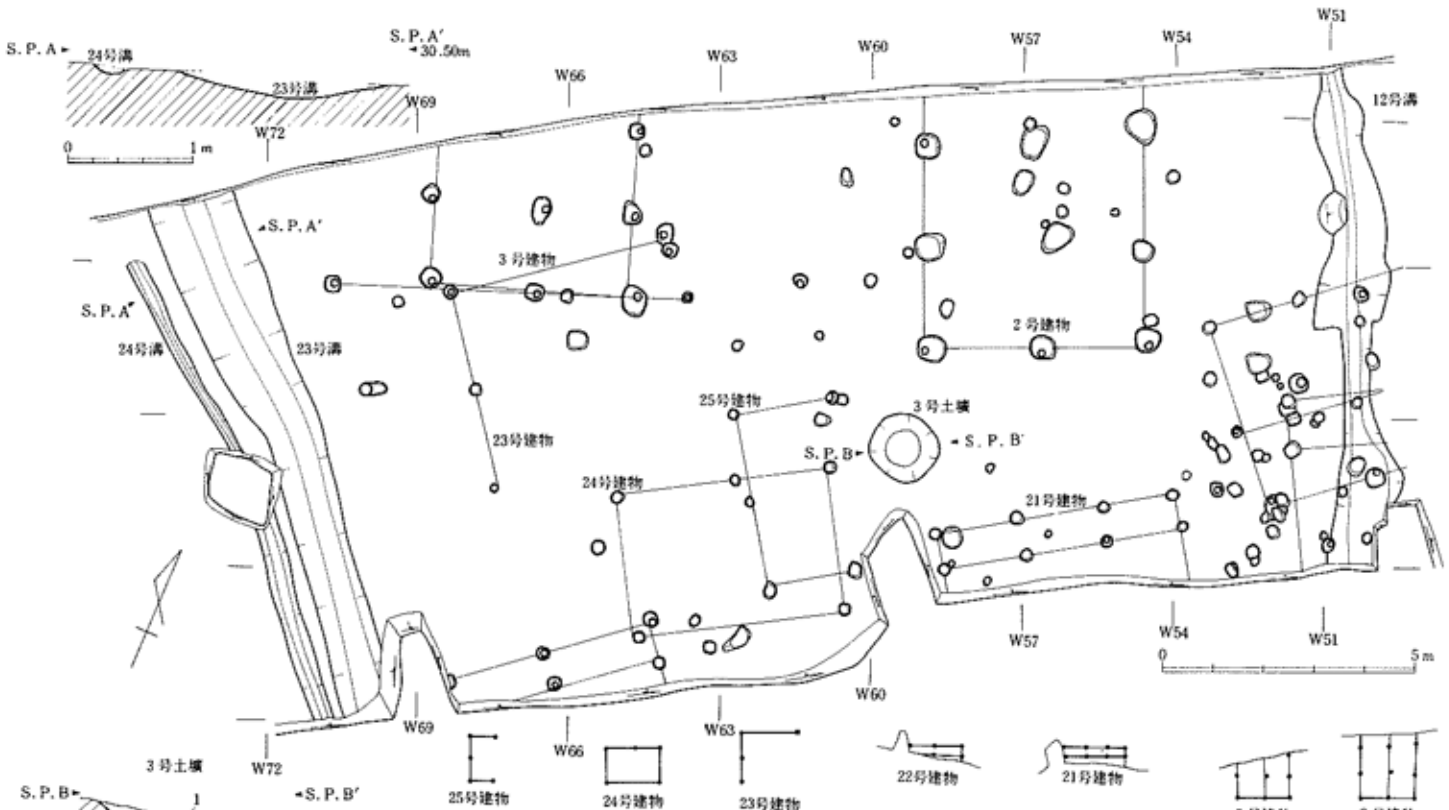
第23号掘立柱建物跡;南東部の柱穴は削平により失われたものと考えられ、東西2間以上、南北2間の東西棟と推定される。柱穴掘り方は径約25㎝の円形、柱痕跡は一辺15㎝前後の方形である。3号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

第24号掘立柱建物跡；東西2間、南北1間の東西棟と推定される。柱穴は一辺約25㎝の隅丸方形である。22・25号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

第25号掘立柱建物跡;東半部の柱穴は削平により失われたものと考えられ、東西1間以上、南北2間の東西棟と推定される。柱穴は一辺約25㎝の方形である。24号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

土壙

第3号土壙；確認面での平面形が一辺130㎝の隅丸方形で、深さ60㎝、底径60㎝の穴である。底面はほぼ平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器が出土している。



番号	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR3/1	シルト	炭化物 地山粒を含む
2	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘性あるシルト	明褐色粘土を斑状に含む
3	暗褐色 10YR3/3	粘土	地山粒を含む
4	にぶい褐色 7.5YR5/4	粘土	

第31図　第３次調査区１区

5．第3次調査　2区

第 3 次調査 2 区とした地域は東端が 23・24 号溝跡、西端が 13・14 号溝跡（1 号道路跡の東側溝）で画された地域である（第 32 図）。ここには 26～29 号掘立柱建物跡、4・6 号土壙が位置している。

溝跡

第 13 号溝跡；12 号溝跡の西約 45mに位置する南北方向の溝跡である。南半で 14 号溝跡と重複しこれよりも新しい。底面はほぼ平坦であるが、北半の底面中央が一段深い溝状になっている。内部にはグライ化したシルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

掘立柱建物跡

第 26 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 1 間の東西棟である。柱穴は径 20㎝ 前後の円形である。27 号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

策 27 号掘立柱建物跡；南半部の柱穴は削平により失われたものと考えられ、東西 3 間、南北 1 間の東西棟で、南北に半間ずつの縁もしくは廂が付く建物である。柱穴掘り方は径 40㎝ 前後の円形、柱痕跡は一辺 15㎝ 前後の方形である。柱穴埋め土から中世陶器・土師質上端が出土している。3 棟の建物跡（26・28・29 号）と重複しているが新旧関係は不明。

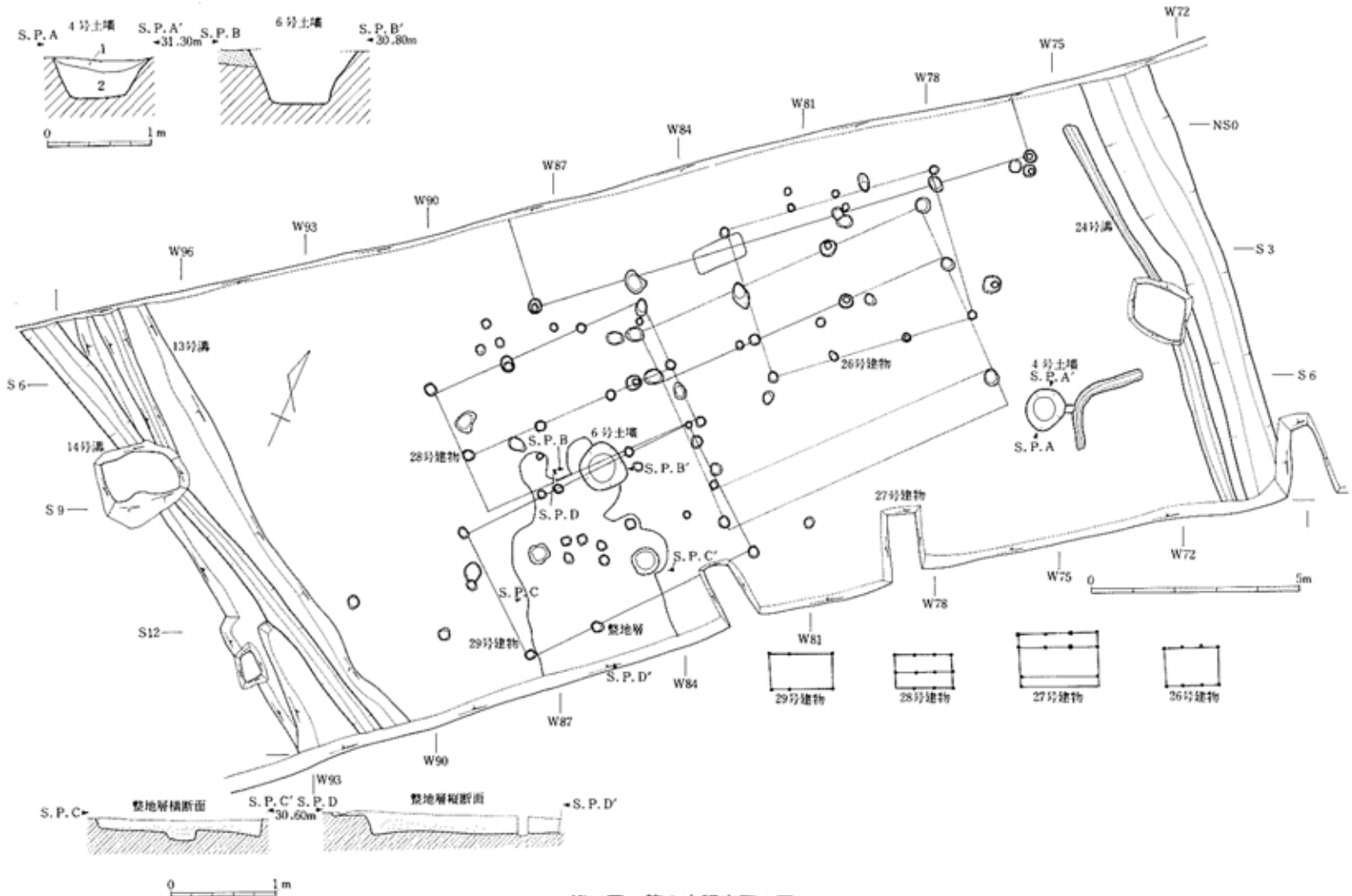
第 28 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟である。柱穴は径 25㎝ 前後の不整な円形である。27・29 号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

第 29 号掘立柱建物跡；東西 3 間、南北 1 間の東西棟である。柱穴は径 25 ㎝前後の不整な円形である。柱穴埋め土から土師質土器小皿が出土している。27・28 号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

土壙

第 4 号土壙；確認面での平面形が径 100㎝ の円形で、深さ 40㎝、底径 50㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器が出土している。

第 6 号土壙；確認面での平面形が一辺 110 ㎝の隅丸方形で、深さ 50㎝、底径 60㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器が出土している。



第32図　第３次調査区２区

6．第３次調査　３区

第 3 次調査 3 区とした地域は東端が 1 号道路跡、西端が 20 号溝跡で画された地域である（第 33・34 図）。ここには 30～33 号掘立柱建物跡、5・7・10・23・24 号土壙、25 号溝跡、1・2 号火葬遺構、2 号道路跡が位置している。

溝跡

第 14 号溝跡；1 号道路跡の東側側溝である。13 号溝跡にほぼ重複しこれよりも古い。底面は平坦で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

第 15 号溝跡；1 号道路跡の西側側溝である。14 号溝跡の西約 5mに位置しこれと平行する南北方向の溝跡である。南半で 30 号掘立柱建物跡と重複しこれよりも新しい。底面は平坦で、シルト質土壌が自然堆積し、下層はグライ化している。出土遺物はない。

第 20 号溝跡；調査区西部に位置する南北方向の溝跡である。2 号道路跡・火葬遺構と重複しいずれよりも古い。確認された延長約 24mのうち、中央部の長さ 7mの範囲に限り、側壁に幅 1m前後の段が削り出されている。その他の部分は断面が「V」字状のいわゆる薬研堀である。内部には、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

第 25 号溝跡；31 号建物跡の北側 1.5mに位置する東西方向の溝跡で、31 号建物に伴う可能性がある。断面は浅い「U」字状で、シルト質土壌が自然堆積している。出土遺物はない。

道路跡

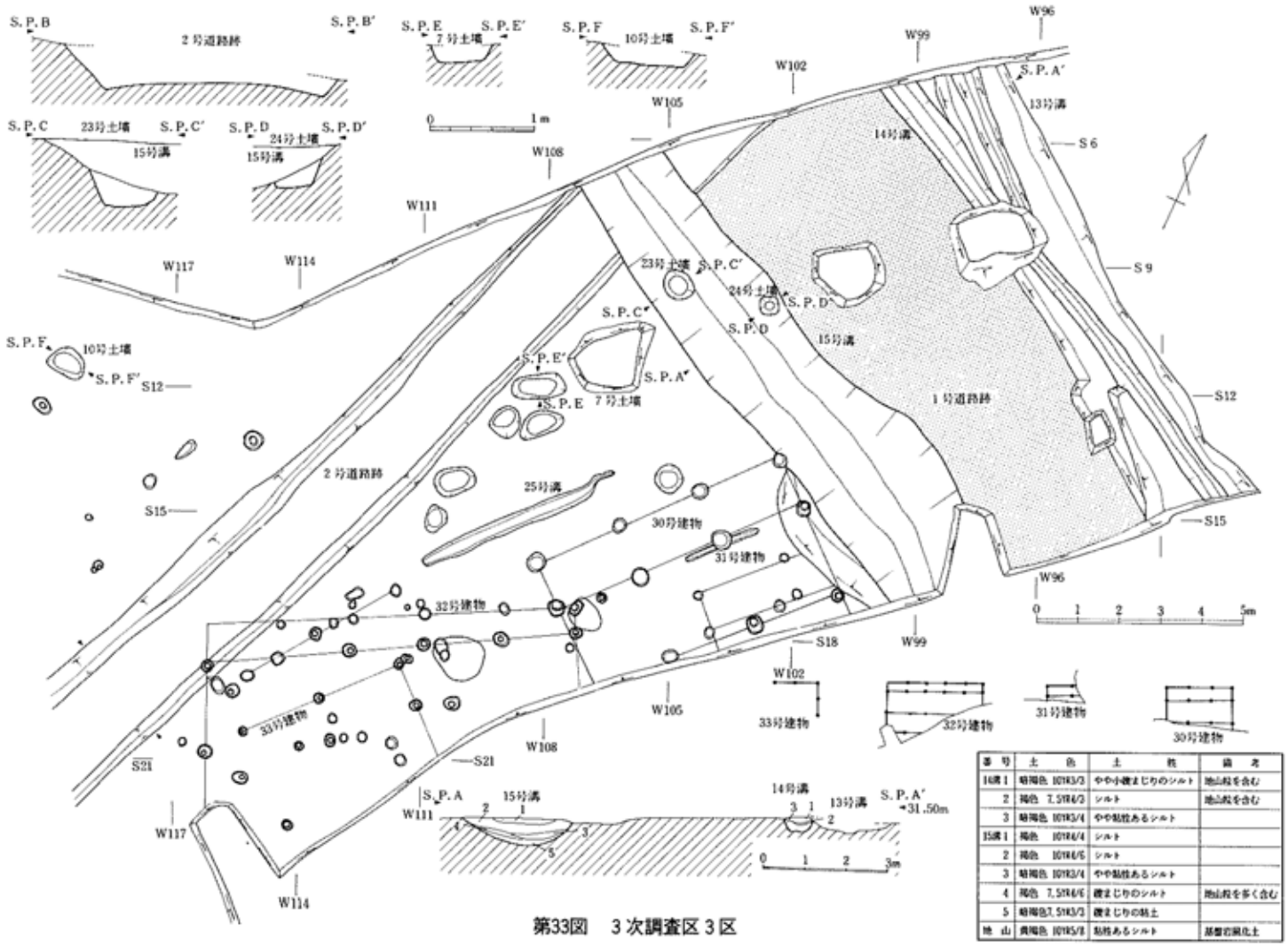
第 1 号道路跡；上記の 14・15 号溝跡を東西の側溝とする南北方向の道路跡で、確認面では南側に緩やかに傾斜している。両側溝の内側で計測した道路幅は 5mである。確認面は地山の黄色粘土層であり、本来の路面は削平されてしまったと考えられ、整地や舗装などの痕跡は確認できなかった。出土遺物はない。

第 2 号道路跡；1 号道路跡を壊して作られた東西方向の道路跡で、路面は西側に傾斜し、西端部で南に振れている。確認面は地山の黄色粘土層で、路面はこの地山を溝状に掘り込んで造成されている。路面の幅は 2mで、断面形は路面の排水をよくするためか中央が高く、両側が低くなっている。堆積土は自然堆積のシルト層で出土遺物はない。

掘立柱建物跡

第 30 号掘立柱建物跡；建物南部は調査区外に及んでいる可能性があり、東西 3 間、南北 1 間以上の東西棟で北に半間分の縁もしくは廂が付く建物である。柱穴は掘り方が一辺 40㎝前後の隅丸方形、柱痕跡は径 20㎝前後の円形である。1 号道路跡の西側側溝、31・32 号建物跡と重複し道路跡よりも古い。32 号建物跡との新旧関係は不明。

第 31 号掘立柱建物跡；建物南部は調査区外に及び、東部は 1 号道路跡により削平されている。東西 1 間以上、南北 1 間以上の東西棟で北に半間分の縁もしくは廂が付く建物の北西



第33図　3 次調査区 3 区

番号	土色	土性	備考
14溝 1	暗褐色 10YR3/3	やや小礫まじりのシルト	地山粒を含む
2	褐色 7.5YR4/3	シルト	地山粒を含む
3	暗褐色 10YR3/4	やや粘性あるシルト	
15溝 1	褐色 10YR4/4	シルト	
2	褐色 10YR4/6	シルト	
3	暗褐色 10YR3/4	やや粘性あるシルト	
4	褐色 7.5YR4/6	礫まじりのシルト	地山粒を多く含む
5	暗褐色7.5YR3/3	礫まじりの粘土	
地山	黄褐色 10YR5/8	粘性あるシルト	基盤岩風化土

隅部と推定される。柱穴は径 25㎝ 前後の円形である。1 号道路跡の西側側溝、30 号建物跡と重複している。新旧関係は不明。

第 32 号掘立柱建物跡；建物南半部は調査区外に及び、西北部は 2 号道路跡により削平されている。東西 5 間、南北 1 間以上の東西棟で北に半間分の縁もしくは廂が付く建物と推定される。柱穴は一辺 30㎝ 前後の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形である。2 号道路跡、30・33 号建物跡と重複し、道路跡よりも古い。建物跡との新旧関係は不明。

第33号掘立柱建物跡;西南部の柱穴は削平により失われたものと考えられ、東西2間以上、南北 2 間の東西棟と推定される。柱穴掘り方は一辺 30㎝ 前後の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ 前後の円形である。32 号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

土壙

第 5 号土壙；2 号道路跡の曲がり角内側に位置し、2 号道路跡に関係する遺構の可能性がある。確認面での平面形が径 180㎝ の円形で、深さ 50㎝、底径 120㎝ の穴で、内部に木桶が設置されている。掘り方の底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。木桶は幅 20㎝ の側板、底板を竹釘でとめた精巧なもので上部は腐朽し下部だけが残っていた。出土遺物はない。

第 7 号土壙；確認面での平面形が 130×60㎝ の楕円形で、深さ 20㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。出土遺物はない。

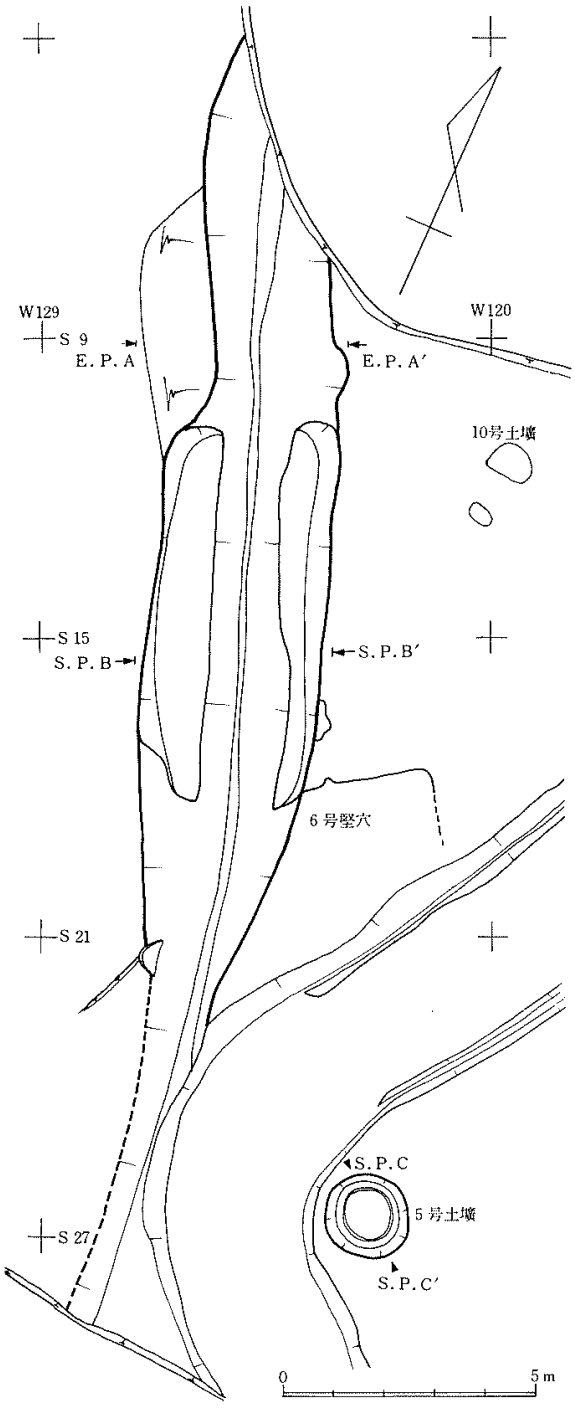
第 23 号土壙；1 号道路の西側側溝である 15 号溝と重複し、これよりも古い。確認面での平面形が径 70㎝ の不整な円形で、深さ 30㎝、底径 50㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器が出土している。

第 10 号土壙；北西部の S -8、W -119 に位置する。確認面での平面形が 90×60㎝ の楕円形で、深さ 20㎝ の穴である。底面はほぼ平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。出土遺物はない。

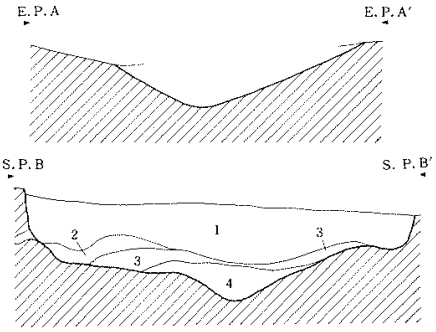
第 24 号土壙；1 号道路の西側側溝である 15 号溝跡と重複し、これよりも古い。確認面での平面形が一辺 50㎝ の方形で、深さ 30㎝、底径 40㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は褐色粘土である。堆積土中から中世陶器・土師質土器が出土している。

火葬遺構（第 35 図）

壁面、底面が火熱により赤く変色し、堆積土に焼けた骨の破片を含む遺構が 2 基発見された。いずれも 20 号溝跡がほぼ埋まりきった時期に営まれた遺構である。これらは遺体を「だび」にふした火葬に関係する遺構と考えられるので火葬遺構と呼称する。

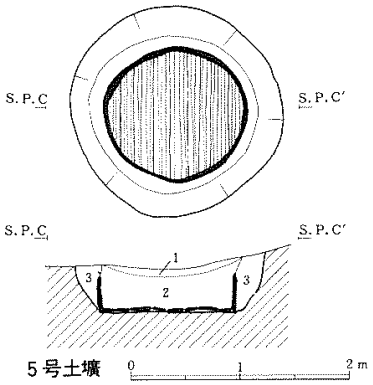


第34図　20号溝跡



20号溝土層断面図

層no	土　色	土　性	混入物など
1	褐色　(10YR 4/4)	シルト	
2	黒褐色 (10YR 2/3)	シルト	砂礫
3	黒褐色 (10YR 2/2)	砂	
4	黒色　(10YR 2/1)	シルト	砂礫

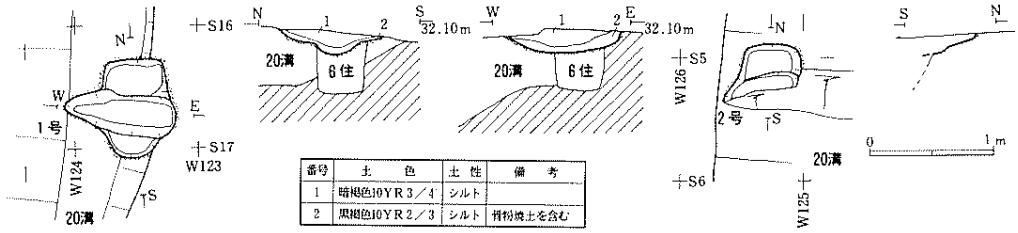


5 号土壙

層no	土　色	土　性	混入物など
1	黒色　(10YR 2/1)	シルト	
2	黒褐色 (10YR 2/3)	粘土	
3	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	

第１号火葬遺構；調査区西部のＳ-17、W-123 に位置する。確認面での平面形は 80×50㎝の長方形の土壙で、これを横断する溝状の突出部が付く。確認面からの深さは 30㎝で、底面は溝状の部分が一段深く、壁は底面から開きながら立ち上がる。溝状の部分は西側から東側に向かって傾斜しており、西側が焚き口だったと推定される。堆積土は焼土や焼けた骨の破片を含む褐色粘土である。

第２号火葬遺構；調査区西部のＳ-5、W-125 に位置する。20 号溝跡と重複し、溝跡がほぼ埋まりきった時期に営まれた遺構である。南半分を誤って掘り下げてしまったため全体の規模形態は不明であるが、残存する北半部の状況からみて１号火葬遺構とほぼ同形、同規模のものであったとみられる。溝状の部分は同じく西側から東側に向かって傾斜しており、西側が焚き口だったと推定される。堆積土は焼土や焼けた骨の破片を含む褐色粘土である。



番号	土色	土性	備考
1	暗褐色10YR3／4	シルト	
2	黒褐色10YR2／3	シルト	骨粉焼土を含む

第35図　火葬遺構

7．第 4 次調査区

第 4 次調査区は、第 2 次調査区 3 区および第 3 次調査区 1 区の北側に隣接した地域である（第 36 図）。ここには 34～38 号掘立柱建物跡、11～21 号土壙、26～30 号溝跡、1 号竪穴建物が位置している。

溝跡

第 26 号溝跡；東西方向の溝跡である。断面は「U」字状で、シルトが自然堆積している。35 号掘立柱建物跡の北辺に沿っていることからその雨落ち溝とみられる。出土遺物はない。

第 27 号溝跡；第 26 号溝跡の東の同一線上に位置する東西方向の溝跡である。断面は「U」字状で、シルトが自然堆積している。37 号掘立柱建物跡の北辺に沿っていることからその雨落ち溝とみられる。出土遺物はない。

第 28 号溝跡；東端部に位置する南北方向の溝跡である。第 2 次調査区の 6 号溝跡と同一線上にある。シルトが自然堆積している。出土遺物はない。

第 29 号溝跡；28 号溝跡と重複し、その西にわずかにずれた位置にある南北方向の溝跡である。北半部は削平されている。第 2 次調査区の 7 号溝跡と同一線上にある。断面は「V」字状で、シルトが自然堆積している。出土遺物はない。

第 30 号溝跡；第 4 次調査区中央部に位置する南北方向の溝跡である。第 2 次調査区の 8 号溝跡と同一線上にある。断面は「V」字状で、シルトが自然堆積している。出土遺物はない。

掘立柱建物跡

第 34 号掘立柱建物跡；建物南西部は調査区外に及んでいる。東西 3 間以上、南北 2 間以上の床束をもつ東西棟で北に半間分の縁もしくは廂が付く建物である。柱穴は掘り方が一辺 30～40㎝の隅丸方形、柱痕跡は一辺 15㎝の方形である。35・36 号建物跡と重複しいずれよりも古い。

第 35 号掘立柱建物跡；建物南西部は調査区外に及んでいる。東西 5 間、南北 2 間の床束をもつ東西棟で北に半間分の縁もしくは廂が付く。柱穴は掘り方が一辺 40㎝前後の隅丸方形、柱痕跡は一辺 15㎝の方形である。ほぼ同位置で同規模の建物を 2 回建て替えている。柱穴埋め土からは白磁・土師質土器などが出土している。34・36 号建物跡と重複し、34 号よりも新しく、35 号より古い。

第 36 号掘立柱建物跡；東西 2 間、南北 2 間の東西棟で、北に半間分の縁もしくは廂が付く建物である。柱穴は掘り方が一辺約 30㎝の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝前後の円形である。34・35 号建物跡と重複しいずれよりも新しい。

第 37 号掘立柱建物跡；建物南東部は調査区外に及んでいる。東西 5 間、南北 2 間の床束を

もつ東西棟で南北に半間分の縁もしくは廂が付く建物である。柱穴は掘り方が一辺 40㎝前後の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ の円形である。38 号建物跡と重複しているが新旧関係不明。

第 38 号掘立柱建物跡；建物の大半は調査区外に及んでおり、検出されたのは建物の北西隅部と考えられる。東西 1 間以上、南北 1 間の東西棟で北に半間分の縁もしくは廂が付く建物と推定される。柱穴は掘り方が一辺 40㎝ 前後の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ の円形である。37 号建物跡と重複しているが新旧関係は不明。

土壙

第 11 号土壙；平面形が 110×80㎝ の長方形で、深さ 50㎝ である。底面は平坦で、壁は底面から垂直に立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

第 12 号土壙；平面形が 70×60㎝ の楕円形で、深さ 60㎝ である。底面は平坦で、壁は底面から垂直に立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

第 13 号土壙；平面形が一辺 80㎝ の方形で、深さ 30㎝ である。底面は平坦で、壁は底面から垂直に立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

第 14 号土壙；平面形が 140㎝×110㎝ の隅丸長方形、長軸方向はＥ-23-Ｎである。底面は平坦で、南東よりに浅いピットがある。壁面は深さが 10㎝ 前後で、底面からの立ち上がりは急である。堆積土は焼土・炭化物を含む褐色粘土で、人為的に埋め戻されたと考えられる。堆積土上部から火を受けた石の破片とともに須恵器蓋および甕の破片が出土している。いずれも埋め戻された土に混入した遺物で、直接本土壙に伴うものではない。

第 15 号土壙；平面形が径 90㎝ の円形で、深さ 60㎝、底径 90 ㎝である。底面は平坦で、壁は底面からオーバーハング気味に立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

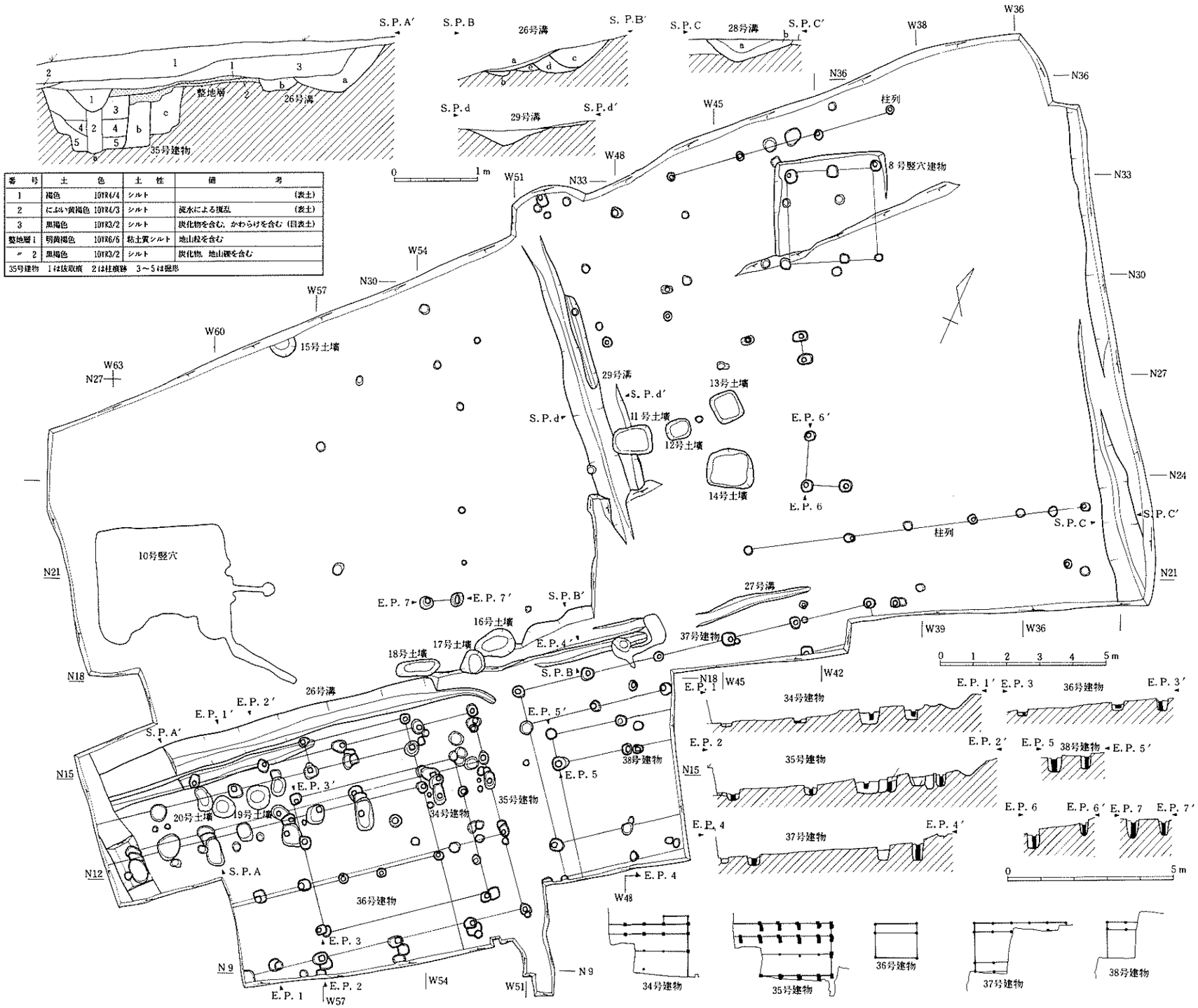
第 16 号土壙；平面形が 120×80㎝ の楕円形で、深さ 30㎝ である。断面形は「U」字状で、壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

第 17 号土壙；平面形が 80×70㎝ の楕円形で、深さ 20㎝ である。断面形は浅い「U」字状で、壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

第 18 号土壙；平面形が 120×50㎝ の楕円形で、深さ 20㎝ である。断面形は「U」字状で、壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

第 19 号土壙；平面形が径 60㎝ の円形で、深さ 40㎝ である。断面形は「U」字状で、壁は開き気味に立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

第 20 号土壙；平面形が径 60㎝ の円形で、深さ 30㎝ である。断面形は「U」字状で、壁



番号	土色		土性	備考
1	褐色	10YR4/4	シルト	(表土)
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	流水による撹乱 (表土)
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物を含む，かわらけを含む (旧表土)
整地層 1	明黄褐色	10YR6/6	粘土質シルト	地山粒を含む
〃 2	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物，地山礫を含む
35号建物 1は抜取痕 2は柱痕跡 3～5は埋形				

第36図　第４次調査区

は開き気味に立ち上がる。堆積土は褐色粘土で自然堆積土である。出土遺物はない。

竪穴建物

調査区北東部に位置する。建物の南辺は削平により失われている。平面形態は、東西330㎝、南北 350㎝ のほぼ正方形で確認面からの深さ 20㎝ の竪穴状の掘り込みを伴う建物跡である。地山の粘土を掘り込んで壁・床を形成しており、床は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は南辺と北辺沿いに並んで 3 対確認されている。柱穴の掘り方は径 30㎝前後の隅丸方形、柱痕跡は径 15㎝ の円形である。

8．その他の遺構

20 号溝跡の西側で溝跡 2 条・井戸跡 1 基が発見されている。この地域では柱穴は検出されていない。

第 21 号溝跡；調査区西端部に位置する南北方向の溝跡である。南北部は削平されている。7 号竪穴住居跡と重複しこれよりも新しい。断面は浅い「U」字状で、シルトが自然堆積している。出土遺物はない。

第 22 号溝跡；調査区西北端部に位置する南北方向の溝跡である。北部は削平されている。3 号井戸跡と重複しこれよりも新しい。断面は「凹」字状で、シルトが自然堆積している。出土遺物はない。

井戸跡

第 3 号井戸跡；調査区西北端のN-11、W-129 に位置する。確認面での平面形が径 140 ㎝の円形で、深さ 400 ㎝以上の素掘りの井戸である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。堆積土は褐色粘土で埋め戻されている。堆積土中から近代の陶磁器が出土している。

3 号井戸跡は堆積土中から近代以降の遺物が出土したため底まで掘り下げなかった。深さは 4m以上ある。

柱列

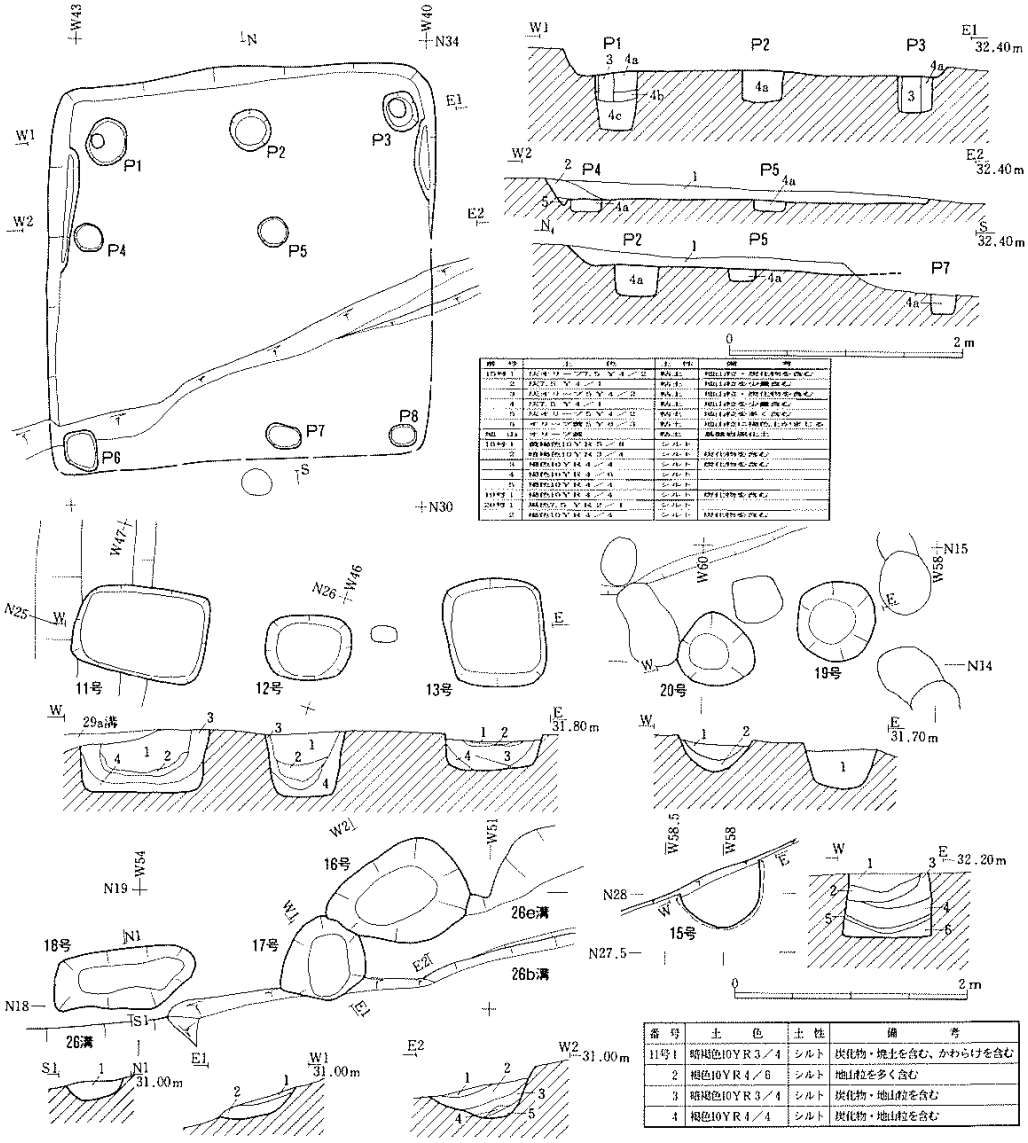
掘立柱建物跡として認定できなかった柱穴のうち、掘り方の大きさや形態が類似し、等間隔で直線的に並ぶ柱穴列を柱列として登録した。13 列ある。遺構の性格を特定できるものはないが、掘立柱建物跡の一部もしくは柵や塀などの可能性が想定されるものである。

出土遺物

舘南囲遺跡の調査では、各地区の遺構堆積土などから陶磁器・石製品・金属製品・木製品などの遺物が出土した。ここではこれらを種別毎に一括して示す。

磁器（第 38 図 1～14）

青磁（1～10）、青白磁（11）、白磁（12～14）がある。器形・文様が推定できるものでは青磁刻花文碗（1～4）、青磁縞蓮弁文碗（5～7）、口ハゲの白磁碗（12）、白磁四耳？



番号	土色	土性	備考
11号1	暗褐色10YR3／4	シルト	炭化物・焼土を含む、かわらけを含む
2	褐色10YR4／6	シルト	地山粒を多く含む
3	暗褐色10YR3／4	シルト	炭化物・地山粒を含む
4	褐色10YR4／4	シルト	炭化物・地山粒を含む

番号	土色	土性	備考
12号1	暗褐色10YR3／4	シルト	炭化物・地山粒を含む
2	黒褐色10YR2／2	シルト	
3	褐色10YR4／4	粘土質シルト	炭化物を含む
4	褐色10YR4／6	砂質シルト	

番号	土色	土性	備考
13号1	暗褐色10YR3／4	シルト	炭化物・焼土を含む
2	褐色10YR4／6	シルト	地山粒を多く含む
3	暗褐色10YR3／4	シルト	炭化物・地山粒を含む
4	褐色10YR4／4	シルト	炭化物・地山粒を含む

番号	土色	土性	備考
1	暗褐色7.5 YR3／3	粘性つよい粘土	地山粒を含む
2	褐色7.5 YR4／3	粘性つよい粘土・砂まじる	地山粒を多量に含む
3	黒褐色7.5 YR3／2	粘土	地山粒を若干含む
4 a	暗褐色7.5 YR3／4	粘土	地山粒（砂）を含む
4 b	褐色10YR4／3	砂まじり粘土	地山粒を多量に含む
4 c	褐色10YR4／3	砂	旧表土（褐色土）がまじり固くしまる
5	褐色7.5 YR4／3	砂まじり粘土	地山粒を含む
地山	明赤褐色	砂を含む粘土	基盤岩風化土

番号	土色	土性	備考
17号1	黄褐色10YR5／8	シルト	
2	暗褐色10YR3／4	シルト	炭化物・地山粒を含む

番号	土色	土性	備考
18号1	黒褐色10YR2／3	シルト	地山粒を含む

第37図　第４次調査区竪穴建物、土壙

壺（14）がある。

いずれも中国産で、龍泉窯系の製品とみられる 1〜3 の青磁刻花文碗や、12 の口ハゲの白磁碗は 13 世紀中頃から 14 世紀前半の年代が想定される。縞蓮弁文碗はいずれも小破片で器形･文様が明確でないが 6 は片切彫により細身の連弁を表現したもので 13 世紀末頃から 14 世紀代前半の年代が想定されよう。

これらの磁器の出土地点は、第 2 次調査 2 区の 9・10 号建物跡周辺、第 2 次調査 3 区の 1･2 号井戸跡､第 4 次調査の 35 号建物跡周辺およびその北側の 33 号溝跡に限られている。

陶器（第 38 図 15〜24、第 39〜41 図、第 42 図 1〜6）

施釉陶器（第 38 図 15〜17）、し器系陶器（第 38 図 18〜第 42 図 4）、須恵器系陶器（第 42 図 5・6）がある。

施釉陶器は瀬戸・美濃産で 15 の褐釉香炉、16 の灰釉折縁皿はいずれも 14 世紀代の製品と考えられる。し器系陶器は東海産のものと、東北地方の在地産のものとがある。東海産のものでは渥美（第 38 図 18〜24）、常滑（第 39〜41 図、第 42 図 1〜4）があり、渥美は壺・甕・鉢、常滑は甕・鉢がみられる。渥美の第 38 図 18 の壺や、常滑の第 39 図 1 の甕、第 40 図 4･10 の鉢などは器形や細部の特徴からいずれも 13 世紀末頃から 14 世紀代前半の年代が想定される。在地産とみられるし器系・須恵器系陶器は産地・年代とも限定できる資料がない。

土師質土器（第 42 図 7〜18、第 43 図 1〜32）

坏（第 42 図 7〜18、第 43 図 1〜16）、小皿（第 43 図 17〜28）、碗（第 43 図 29〜32）がある。図示したもの以外にも器形の推定できない小破片が多数出土している。

坏、皿の底部にはいずれも回転糸切りの痕跡が残されており、坏ではそれに重なって板状の圧痕（第 42 図 8）がみとめられるものが多い。焼成は軟質で器表面が摩滅しているものが大半で、胎土にはいずれも金雲母および赤色の粒子が含まれている。

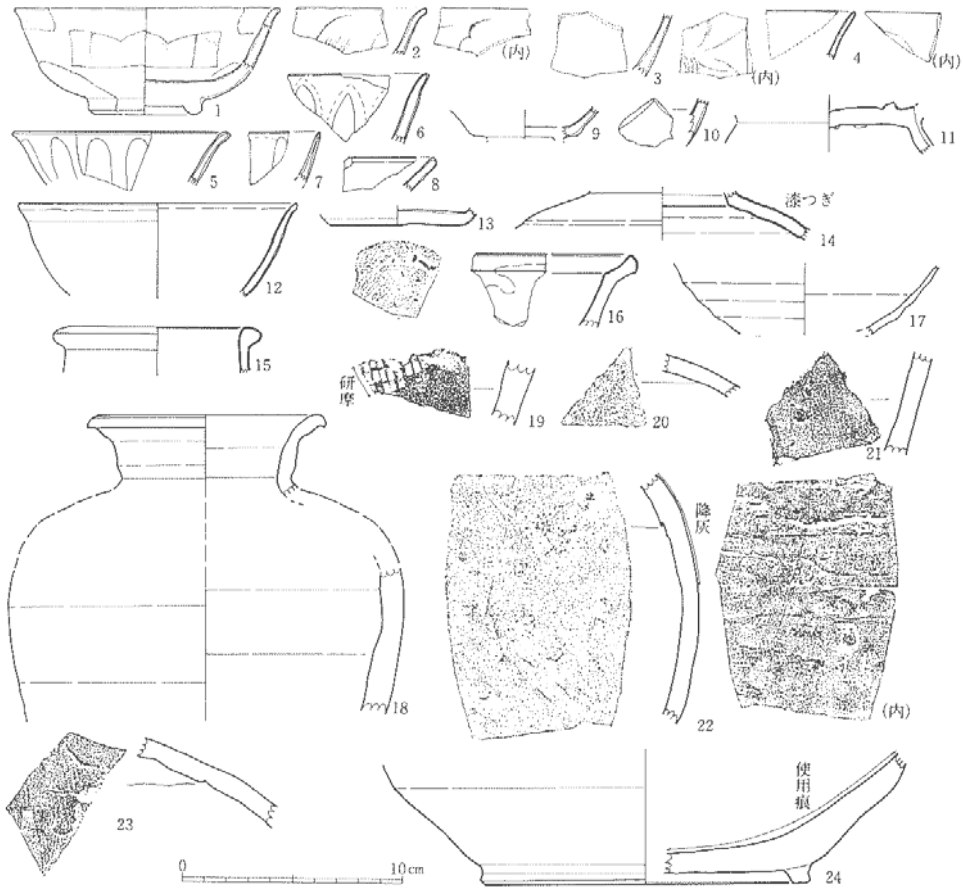
土製品（第 43 図 33）

羽口の破片である。表土出土の遺物である。

石製品（第 44 図 1〜8）

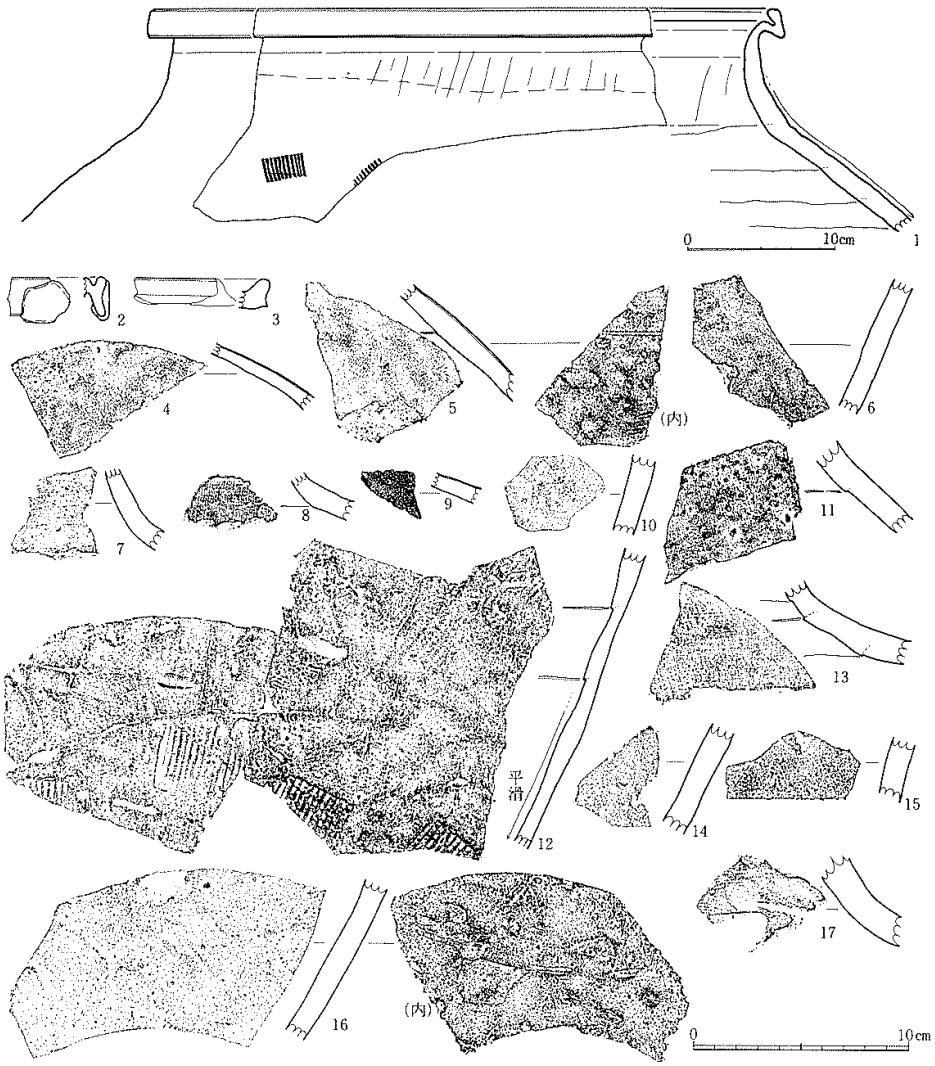
石鍋（1）、硯（2）、玉（3）、砥石（4〜8）がある。

1 の石鍋は滑石製で表面には加工時の工具の痕跡が残っている｡2 は粘板岩製の硯の縁部である。3 は青色でやや歪みのある玉でガラス製とみられる。砥石はいずれも凝灰岩製で断面が六角形で棒状のもの（4）、分銅形のもの（5・6）、四角柱のもの（7）、自然面を残す不整形のもの（8）など多様である。



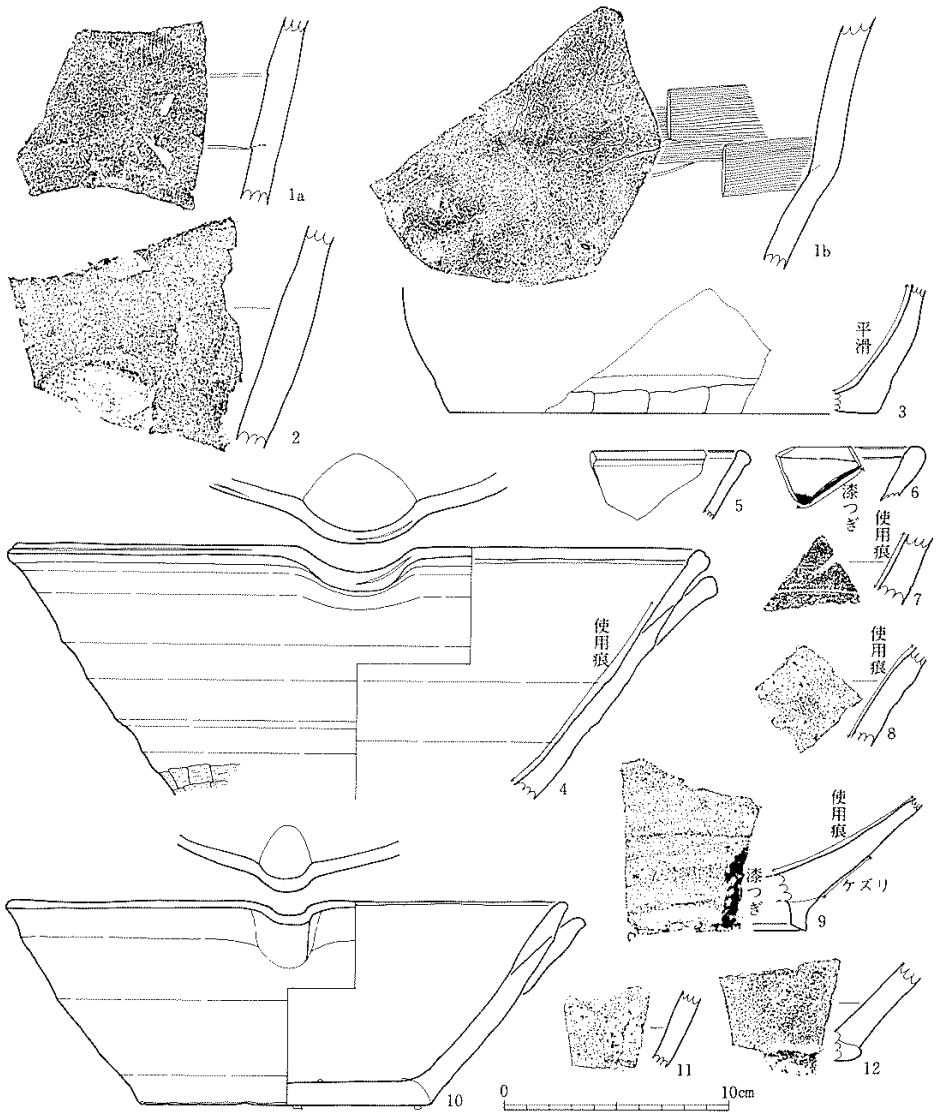
NO	登録NO	器種	出土地点・層位	口径	底径	特徴	備考	産地	年代
1 2	C－9 C－89	青磁 碗 （同一個体）	1号井戸跡 31号溝跡	(12)	(6)	劃花蓮文		龍泉窯系	13C末～14C
3	C－101	青磁	10号掘立柱建物跡	－		〃		〃	〃
4	C－99	青磁 碗	9号掘立柱建物跡	(15)		〃			
5	C－10	青磁 碗	1号井戸跡	(11)		鎬蓮弁文			
6	C－73	青磁 碗	33号溝跡	(13)		〃	片切彫		
7	C－26	青磁 碗	2号井戸跡	－		〃			
8	C－25	青磁	〃	(12)					
9	C－11	青磁	1号井戸跡	－					
10	C－126	青磁	35号掘立柱建物跡	－					
11	C－133	青白磁	8号住居跡	－	(10)		火はね		
12	C－116	白磁 碗	35号掘立柱建物跡	(14)		口ハゲ			13C中～14C前
13	C－138	白磁							
14	C－97	白磁 壺	35号掘立柱建物跡				漆接ぎ		
15	C－95	施釉陶器 香炉	E104グリット ピット10	(8)			鉄釉	瀬戸	14C
16	C－125	〃 大皿	35号掘立柱建物跡	(26)		折り縁	灰釉	〃	〃
17	C－77	〃 碗	31号溝跡				〃		
18	C－4	し器系陶器 壺	1号井戸跡	(12)				渥美	
19	C－54	〃 甕	15号溝跡			押印		〃	
20	C－98	〃 壺	G105グリット ピット1					〃	
21	C－49	〃 甕	3号溝跡					〃	
22	C－169	〃 壺	センター杭NO13付近					〃	
23	C－170	〃 壺	出土地点不明					〃	
24	C－156	〃 鉢	センター杭NO14付近		(15)	高台	内面摩耗	〃	
	D－2	〃 壺	表面採取	(14)					

第38図　舘南囲遺跡中世出土遺物（1）青磁・白磁、瀬戸・美濃、渥美



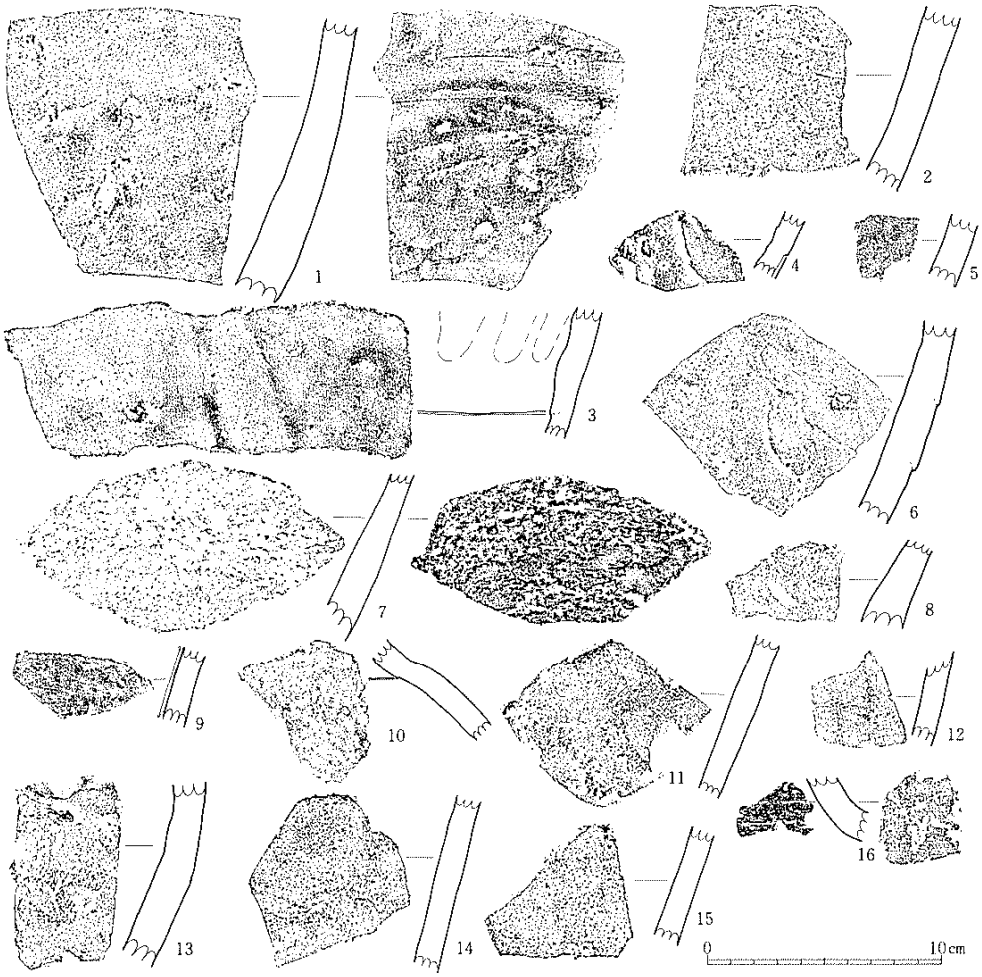
NO	登録NO	器	種	出土地点・層位	口径	底径	特 徴	備 考	産 地	年 代
1	C－ 1	し器系陶器	甕	1号井戸跡	(43)		押印	自然釉	常滑	13C末～14C
2	C－ 94	〃	甕	E103グリット ピット2					〃	
3	C－ 74	〃	甕	26号溝跡	(40)				〃	
4	C－ 160	〃	甕	センター杭NO16付近				自然釉	〃	
5	C－ 18	〃	甕	2号井戸跡				〃	〃	
6	C－ 91	〃	甕	4号掘立柱建物跡					〃	
7	C－ 45	〃	甕	1号溝跡					〃	
8	C－ 42	〃	甕	I28、I29グリット整地層				自然釉	〃	
9	C－ 38	〃	甕	32号土壙（該当無）				〃	〃	
10	C－ 120	〃	甕	35号掘立柱建物跡					〃	
11	C－ 21	〃	甕	2号井戸跡				自然釉	〃	
12	C－ 93	〃	甕	E103グリット ピット1			押印		〃	
13	C－ 7	〃	甕	1号井戸跡					〃	
14	C－ 37	〃	甕	31号土壙（該当無）					〃	
15	C－ 78	〃	甕	26号溝跡					〃	
16	C－ 46	〃	甕	1号溝跡					〃	
17	C－ 147	〃	甕	出土地点不明					〃	

第39図　舘南囲遺跡中世出土遺物（2）常滑産中世陶器



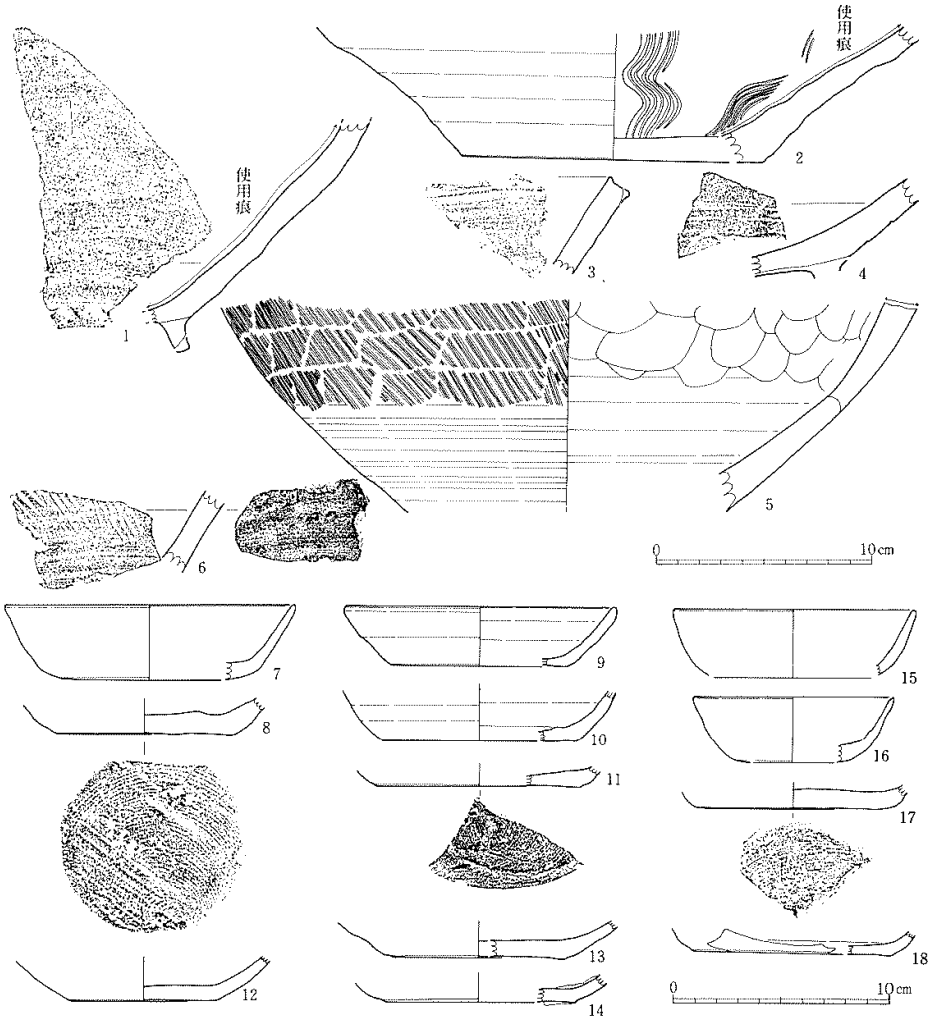
NO	登録NO	器種	出土地点・層位	口径	底径	特徴	備考	産地	年代
1	C－6b C－6a	し器系陶器	壺	1号井戸跡					常滑	
2	C－63	〃	壺	20号溝跡					〃	
3	C－168	〃	壺	表面採取		(26)			〃	
4	C－2	〃	鉢	1号井戸跡	31cm		片口・内面摩耗	・自然釉	〃	
5	C－70	〃	鉢	32号溝跡	(34)			〃	〃	
6	C－91	〃	鉢	9号掘立柱建物跡				漆接ぎ	〃	
7	C－8	〃	鉢	1号井戸跡				内面摩耗	〃	
8	C－42	〃	鉢	2号井戸跡				〃	〃	
9	C－38	〃	鉢	出土地点不明			高台・漆接ぎ	・内面摩耗	〃	
10	C－3	〃	鉢	1号井戸跡	25cm	13cm	片口・無高台		〃	
11	C－159	〃	壺	センター杭NO15付近				自然釉	〃	
12	C－19	〃	鉢	2号井戸跡			無高台	〃	〃	

第40図　舘南囲遺跡中世出土遺物（3）常滑産中世陶器



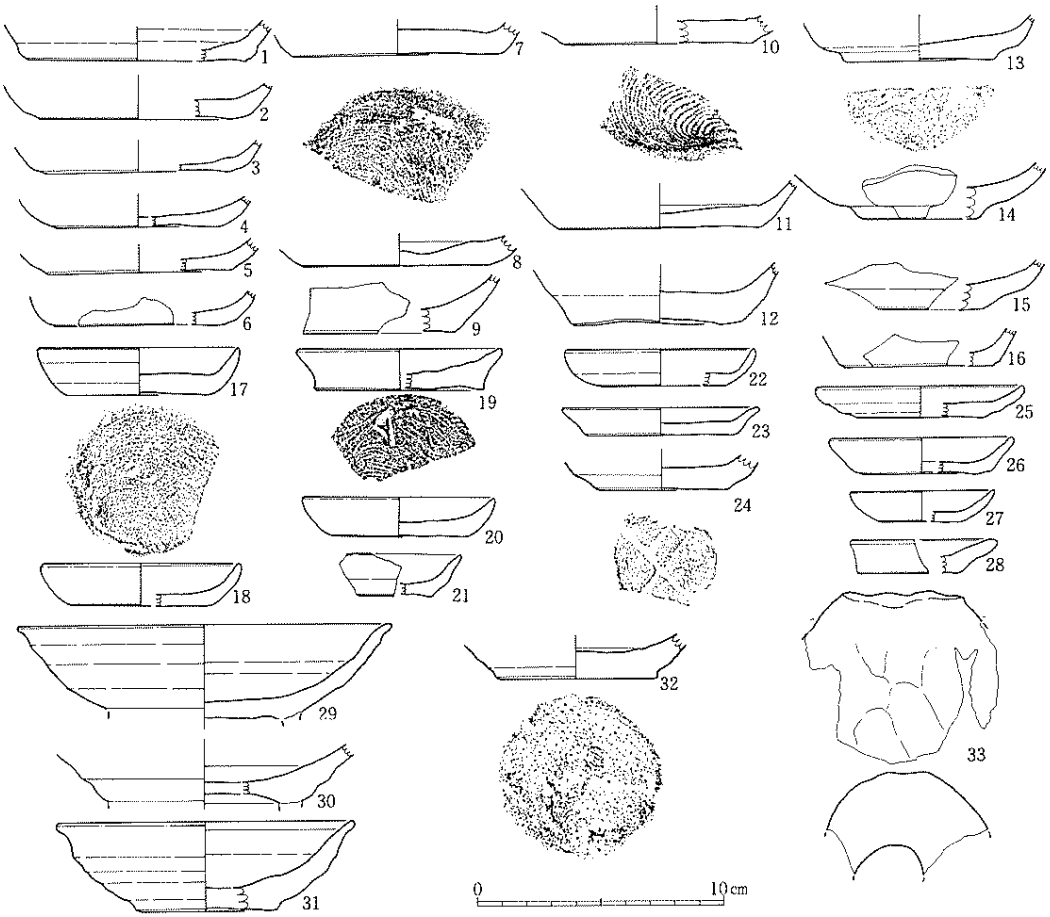
NO	登録NO	器　種	出土地点・層位	口径	底径	特　徴	備　考	産　地	年　代
1	C－ 153	し器系陶器 壺						在地系	
2	C－ 155	〃 壺	センター杭NO14付近					〃	
3	C－ 20	〃 壺	2号井戸跡				自然釉	〃	
4	C－ 160	〃 壺	20号溝跡					〃	
5	C－ 18	〃 壺	4 b号住居跡床面					〃	
6	C－ 36	〃 壺	7号					〃	
7	C－ 92	〃 壺	G 99グリット ピット1					〃	
8	C－ 107	〃 壺	27号掘立柱建物跡					〃	
9	C－ 195	〃 鉢	4 a号住居跡カマド			擂鉢	内面摩耗	〃	
10	C－ 171	〃 壺	表土					〃	
11	C－ 61	〃 壺	20号溝跡					〃	
12	C－ 145	〃 壺	表面採取					〃	
13	C－ 72	〃 壺	33号溝跡					〃	
14	C－ 139	〃 壺	出土地点不明					〃	
15	C－ 79	〃 壺	31号溝跡					〃	
16	C－ 50	〃 壺	3号溝跡					〃	

第41図　舘南囲遺跡中世出土遺物（4）地元産中世陶器



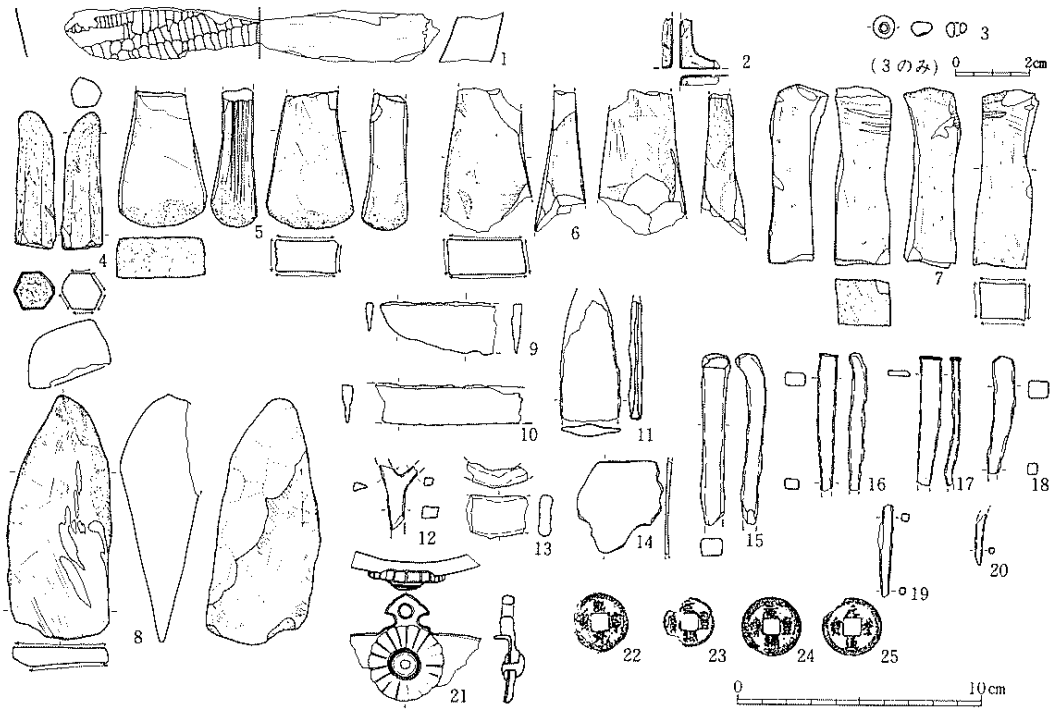
NO	登録NO	器種	出土地点・層位	口径	底径	特徴	備考	産地	年代
1	C－162	し器系陶器 鉢	センター杭NO16付近			高台	内面摩耗	在地系	
2	C－60	〃 鍋	20号溝跡			無高台		〃	
3	C－100	〃 鉢	F107グリット ピット1	(24)		擂鉢		〃	
4	C－144	〃 鉢	表面採取			擂鉢・高台	内面摩耗	〃	
5	C－23	須恵器系陶器 鍋	1129グリット 整地層			タタキ目	漆接ぎ	〃	
6	C－47	〃 鍋	1号溝跡			〃		〃	
7	C－180	土師質土器 坏	1号井戸跡	13.5	8.0		金雲母		
8	C－182	〃 坏	〃	12.5	8.0	底部糸切	〃		
9	C－195	〃 坏	〃		(9.0	〃	〃		
10	C－187	〃 坏	〃			〃	〃		
11	C－183	〃 坏	〃			〃	〃		
12	C－186	〃 坏	〃			〃	〃		
13	C－174	〃 坏	2号井戸跡			〃 ・板圧痕	〃		
14	C－86	〃 坏	溝跡 帰属遺構不明				〃		
15	C－51	〃 坏	13号溝跡				〃		
16	C－82	〃 坏	26号溝跡				〃		
17	C－83	〃 坏	〃			底部糸切	〃		
18	C－85	〃 坏	〃			〃	〃		

第42図　舘南囲遺跡中世出土遺物（5）地元産中世陶器、土師質土器



NO	登録NO	器種	出土地点・層位	口径	底径	特徴	備考	年代
21	C－108	土師質土器 小皿	29号掘立柱建物跡				金雲母	
22	C－181	〃	1号井戸跡	(8)	(5)		〃	
23	C－114	〃	35号掘立柱建物跡	(8)	(6)		〃	
24	C－53	〃	15号溝跡		(5)	底部糸切	〃	
25	C－178	〃	1号井戸跡	(8)	(5)	〃	〃	
26	C－177	〃	〃	(8)	(5)	〃	〃	
27	C－129	〃	35号掘立柱建物跡			底部糸切	〃	
28	C－84	〃	26号溝跡				〃	
29	C－43	〃 高台坏	J129グリット 整地層	15.0			〃	
30	C－148	〃	〃				〃	
31	C－55	〃 坏	〃	12.0	5.5		〃	
32	C－105	〃	〃		6.5	底部糸切り	〃	
33	C－154	土製品 羽口	センター杭N013付近				〃	

第43図　舘南囲遺跡中世出土遺物（6）土師質土器、土製品



No.	登録NO	器種	出土地点・層位	口径	底径	特徴	備考	産地	年代
1	C－ 12	滑石製 石鍋	1号井戸跡						
2	C－ 140	粘板岩製 砥	出土地点不明						
3	C－ 29	ガラス製 玉	2号井戸跡						
4	C－ 32	凝灰岩製 砥石	〃						
5	C－ 30	〃	〃						
6	C－ 31	〃							
7	C－ 90	〃	D 95ｸﾞﾘｯﾄﾞ ﾋﾟｯﾄ3						
8	C－ 158	〃	2－①区表土						
9	C－ 71	鉄製 刀				身幅2cm	切先部		
10	C－ 112	〃				身幅1.5cm	刀身部		
11	C－ 150	〃 剣？				片面に縞状の高まり			
12	C－ 75	〃 鎌？				二又	二又鎌		
13	C－ 151	〃不明板状鉄製品					鉄鍋の耳か？		
14	C－ 152	〃					鉄鍋の一部か？		
15	C－ 76	〃 釘							
16	C－ 66	〃							
17	C－ 113	〃							
18	C－ 109	〃							
19	C－ 14	〃							
20	C－ 89	〃							
21	C－ 16	銅製 整金具							
22	C－ 17	〃 銭				熙寧元寶			
23	C－ 35	〃				元豊通寶			
24	C－ 117	〃				元豊通寶			
25	C－ 118	〃				元豊通寶			

第44図 舘南囲遺跡中世出土遺物（7）石・鉄・銅製品

金属製品（第 44 図 9～25）

鉄刀（9・10）、剣先状鉄製品（11）、鏃（12）、板状鉄製品（13・14）、鉄製角釘（15～20）、銅製吊金具（21）、銅銭（22～25）がある。

鉄刀はいずれも身幅が 2㎝ 以下の小形の刀身である。11 の剣先状の鉄製品は片面中央に縞状の峰がみられるもので鑓かんなの可能性がある。ただし刃先に反りがなく断定はできない。12 は二又の鏃もしくはやすの先とみられる。13・14 は板状の鉄製品で、13 は厚手で屈曲していることから鉄鍋の内耳部分の可能性がある。14 は薄い板状でわずかに湾曲していることから鉄鍋の体部の破片と推定される。15～20 の鉄製角釘は断面がいずれも四角形で頭部は折り曲げられている。5mm以上の太い釘（15～18）と 5mm以下の細い釘（19・20）がある。なお、17 は薄手であることからくさびとして使用されたものかもしれない。

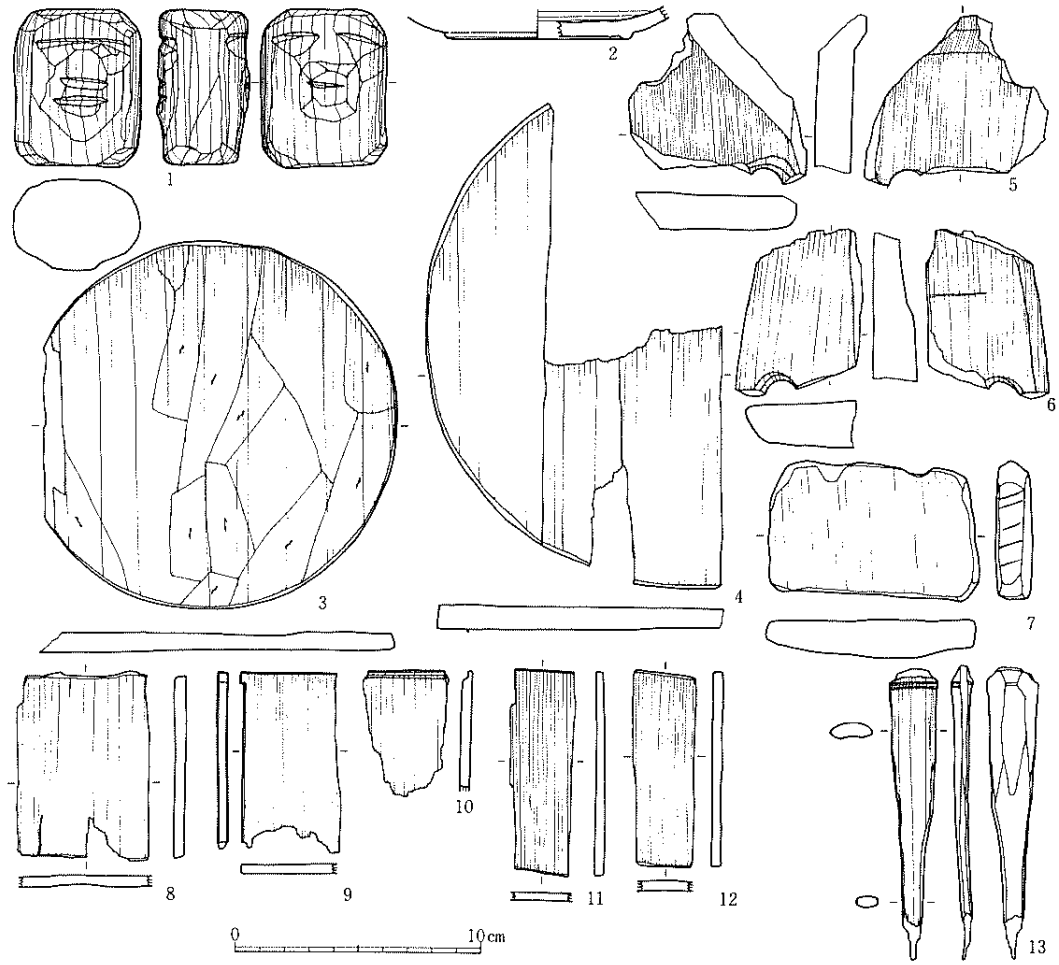
21 は薄い板状の容器の縁に、菊花状の装飾の施された吊手の付いた金具が鳩目状の鋲で留められたものである。懸仏の吊金具に類似する。薄い板状の容器は口縁部が内面に折れる折り縁で、口径 10㎝ 前後と推定される。胴部は残存部の曲率から 2 状を呈すると推定される。銅銭は熙寧元寶（22）1 枚と元豊通寶（23～25）3 枚が発見されている。

木製品

2 号井戸跡から木製品が出土している。木偶、漆器、曲げ物、下駄、札状木製品、竹製品などがある。札状木製品としたものは薄く端部に微細な加工がみられるものもある。竹製品は竹を縦方向に四分割したものの一端を尖らせたものである。

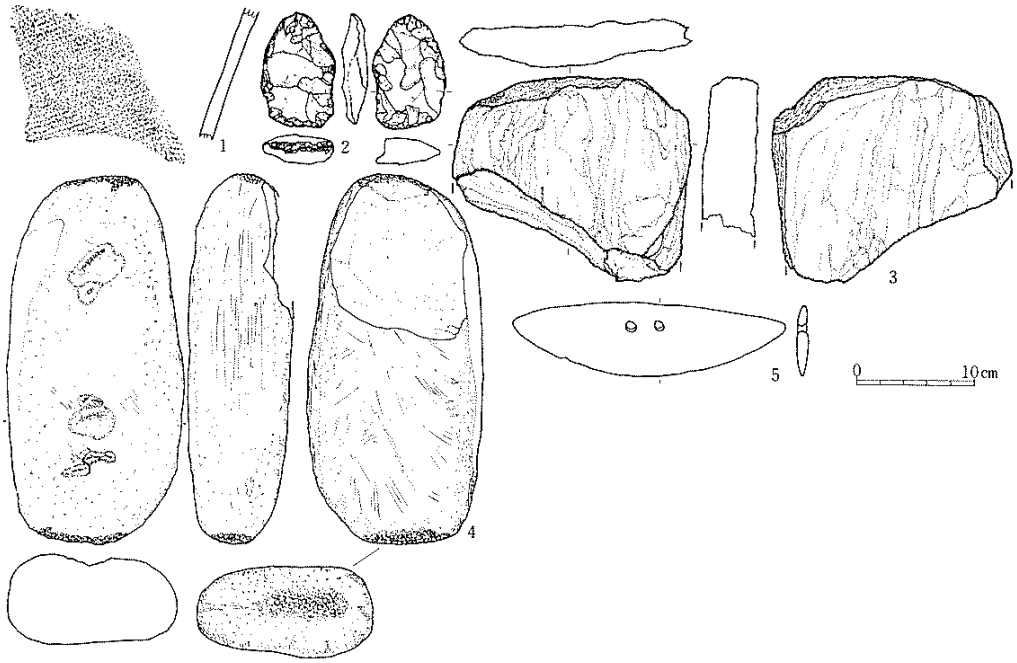
その他

縄文時代もしくは弧生時代の土器、石器が井戸跡などから出土している。



No.	登録NO	器種	出土地点・層位	口径	底径	特徴	備考	産地	年代
1	C－200	木偶	2号井戸跡						
2	C－210	漆器 椀	〃		7.0	内外黒漆			
3	C－203	曲げ物 底板	〃		15.0				
4	C－204	〃	〃		21.0				
5	C－201	木製 下駄	〃						
6	C－202	〃	〃						
7	C－212	〃	〃						
8	C－207	札状 木製品	〃						
9	C－208	〃	〃			末端に突起			
10	C－209	〃	〃			短辺に段			
11	C－206	〃	〃						
12	C－205	〃	〃						
13	C－211	竹製品	〃						

第45図 舘南囲遺跡中世出土遺物（8）木製品



No.	登録NO	器　種	出土地点・層位	口径	底径	特　徴	備　考	産地	年　代
1	C－ 164	弥生土器　深鉢	2号井戸跡						
2	C－ 33	剥片石器　尖頭器							
3	C－ 13	打製石器　石鍬	1号井戸跡						
4	C－ 34	礫石器　凹・叩石	2号井戸跡						
5		石庖丁	旧表採資料						

第46図　舘南囲遺跡、その他の出土遺物

Ⅳ　小堤城跡の調査成果

小堤城跡については、大雄寺の庫裡の改築工事に伴う発掘調査の結果、整地層・柱穴群・竪穴遺構・井戸跡などが発見され、中世・近世の遺物が出土した。この調査と並行して大雄寺の周囲に現存する土塁状の高まりとその周囲の地形の状況を調査し、1 万分の 1 の都市計画図に記入して城館の構造を検討した（第 47 図）。以下、その成果を示す。

土塁状の高まり

踏査の結果、大雄寺周囲の土塁状の高まりは、西辺中央部と北辺の東西両隅部が削平されているが、残存する他の部分や地権者の話などから復元すると本来は平面形が台形を呈する形に巡っていたことが確認された。現状での土塁状の高まりの規模は場所により異なるが、外周の基底を起点とした計測では幅が 5〜8m、高さ 2〜3mで、断面形態は台形を呈している。

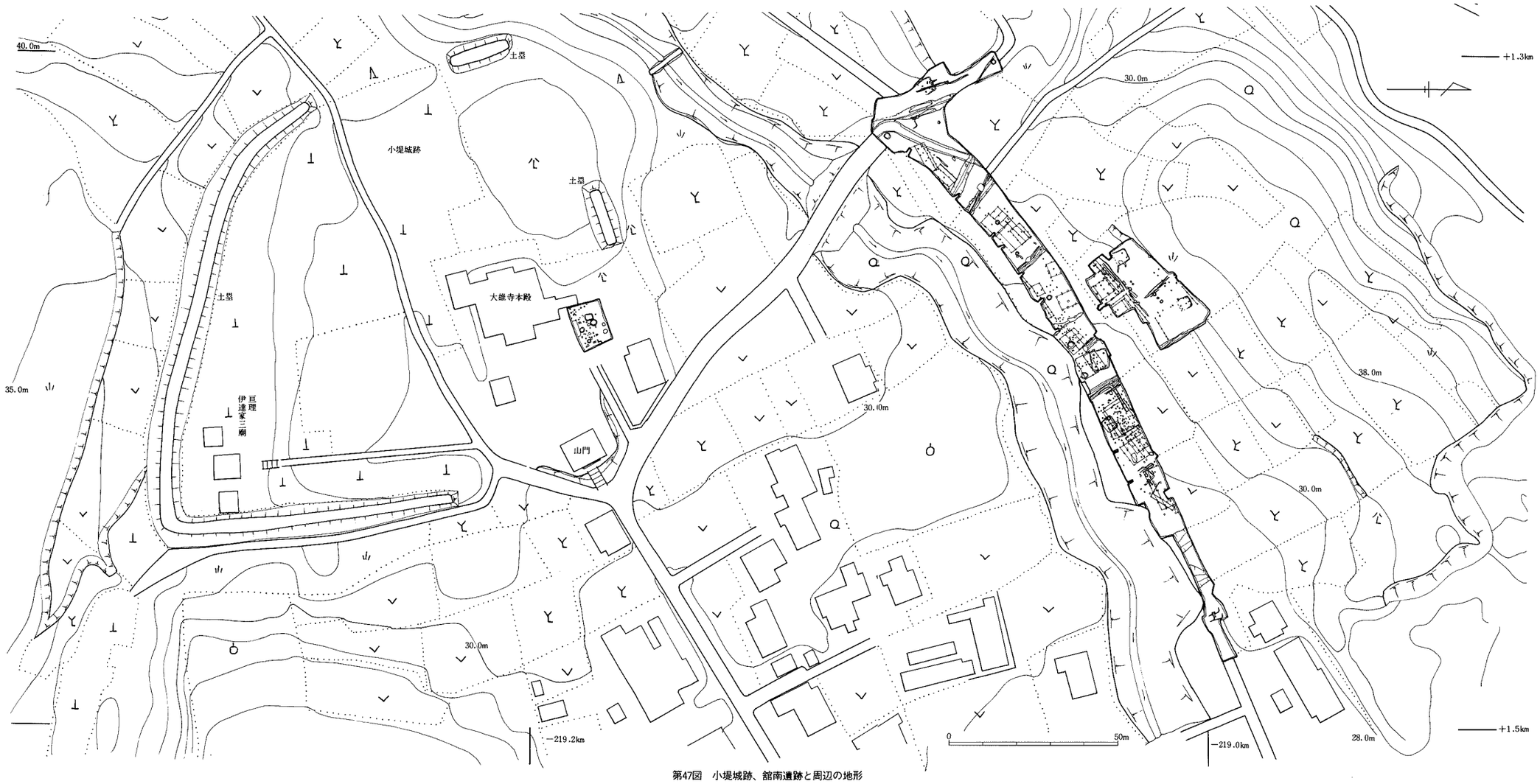
周囲の地形について

土塁の外周の地形をみると、北辺は土塁北東部に三角形のわずかな平坦地がある。その北には比高差 2m前後の深い沢があり、これによって北岸の舘南囲遺跡と画されている。南辺は土塁外周に幅 15m前後の平坦地が巡るが、その南側には大きな沢状の地形が入り込んでいる。西辺は畑地の造成により旧地形が改変されているが、南西隅には南側から連続するように土塁外周に幅 15m前後の平坦地が巡る。南東から北西に走る幅 3m前後の切り通し状の農道部分は西辺を画する堀切である可能性も考えられる。東辺では南東隅から東側に自然地形の細い尾根の延びがみられるがその北側は浅い沢状の地形が入り込み、南辺と同様に土塁外周に幅 10m前後の平坦地が巡っている。南辺の北東隅は大雄寺の門前となり山門部分は東側より一段高く、その南側の部分に境内への通用路が設けられている。地形が改変され、本来の土塁や地形の状況は不明であるが、この部分では以前から土塁が途切れていたようで、ここが土塁内部への出入口であったものと推定される。

土塁内部の状況と調査地点

土塁内部の現況は大雄寺の境内となっている。南辺から東辺にかけての土塁内側が一段高く、ここが亘理伊達家の墓所となっている。他はほぼ平坦で、西側が一般の墓所、北東部に大雄寺の本堂・庫裡があり、今回の調査地点は北東隅の庫裡の部分にあたる。

土塁内外の比高差や周囲の地形からみて、南側から東側にかけての部分では土塁内側に 2m近くの厚い盛土がなされていると推定される。



第47図　小堤城跡、舘南遺跡と周辺の地形

1．発見された遺構と遺物

調査は大雄寺の庫裡新築にともなう基礎工事により破壊される東西 13m×南北 10mの範囲についておこなった。

基本層位（第 48 図）

調査区内は全域にⅠ～Ⅲの 3 層の整地層が分布し、その下に整地以前の旧表土層が確認され、さらに地表下約 1mで地山の砂礫層が確認された。旧表土上面は西から東へ緩やかに傾斜している。

旧表土層は黒色のシルト層で縄文中期の土器が出土している。整地層Ⅱ・Ⅲは黒褐色系のシルト質土でいずれも多量の土師質土器破片と炭化物片を含むもので、中世の整地層である。整地層Ⅰは砂礫を含む褐色シルト質土で、近世の陶磁器片や瓦を含むもので、近世以降の整地層である。

1．発見遺構

柱穴群・柱穴列 1 条・土壙 2 基・竪穴遺構 2 基・井戸跡 2 基がある。

整地層Ⅱの上面で 101・102 号井戸跡が、整地層Ⅲの上面で柱列・竪穴遺構・土壙が検出された。前者は近世の大雄寺に関わる遺構であり、後者は中世の小堤城に関わる遺構と考えられる。以下ではこれらの遺構、遺物について古い順にみていく。

柱穴群・柱穴列

調査区南半を中心に径 30～50㎝ の柱穴が 53 個発見された。このうち調査区中央部でほぼ等間隔にならぶ 6 個の柱穴がみられた。柱間寸法は 2.1m（7 尺）で方向はN-54-Eである。他の柱穴は調査区の南側に展開する掘立柱建物跡の一部と考えられるが、調査区が狭いため組合せは不明である。

土壙

第 101 号土壙；確認面での平面形が径 110㎝ の円形で、深さ 30㎝、底径 80㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面から開きながら立ち上がる。堆積土は暗褐色シルトである。

第 102 号土壙；確認面での平面形が径 100㎝ の不整な円形で、深さ 20㎝、底径 70㎝ の穴である。底面は平坦で、壁は底面からなだらかに立ち上がる。堆積土は灰褐色シルトである。

竪穴遺構

第 101 号竪穴；調査区南辺に位置する。遺構の南半は調査区外に延びている。平面形態は、東西 450㎝、南北 100㎝ 以上で深さ 50㎝ である。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。内部に柱穴などの施設はない。

第 102 号竪穴；調査区中央に位置する。平面形態は、東西 150㎝、南北 230㎝ で確認面からの深さは 10㎝ である。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東隅の壁際に溝があるが、柱穴・入口などの施設はみられない。

井戸跡

第 101 号井戸跡；調査区中央に位置する。平面形態は、径 180㎝ の円形で、確認面からの深さは 4m以上である。壁は垂直に立ち上がる。壁が崩落する危険性があったため底まで掘り下げなかった。堆積土から多量の近世の遺物が出土している。

第 102 号井戸跡；調査区南部に位置する。101 号竪穴遺構と重複しこれよりも新しい。平面形態は、径 180×150㎝ の楕円形で深さは 3m以上ある。壁は垂直に立ち上がる。壁が崩落する危険性があったため底まで掘り下げなかった。出土遺物はない。

2．出土遺物

旧表土、整地層および井戸跡から中世陶磁器・石製品・金属製品・木製品・縄文土器などの遺物が出土した。ここではこれらを中世・近世・その他に分けて示す。

中世の遺物

中世の遺物には磁器、陶器、石・金属製品がある。これらは柱穴（ピット）、土壙、整地層から出土したものであるが､表面採集資料で中世の遺物と判断されるものも図示した。

磁器（第 50 図 1）

青磁である。多角形の口縁部破片である。細片のため全体形は不明。

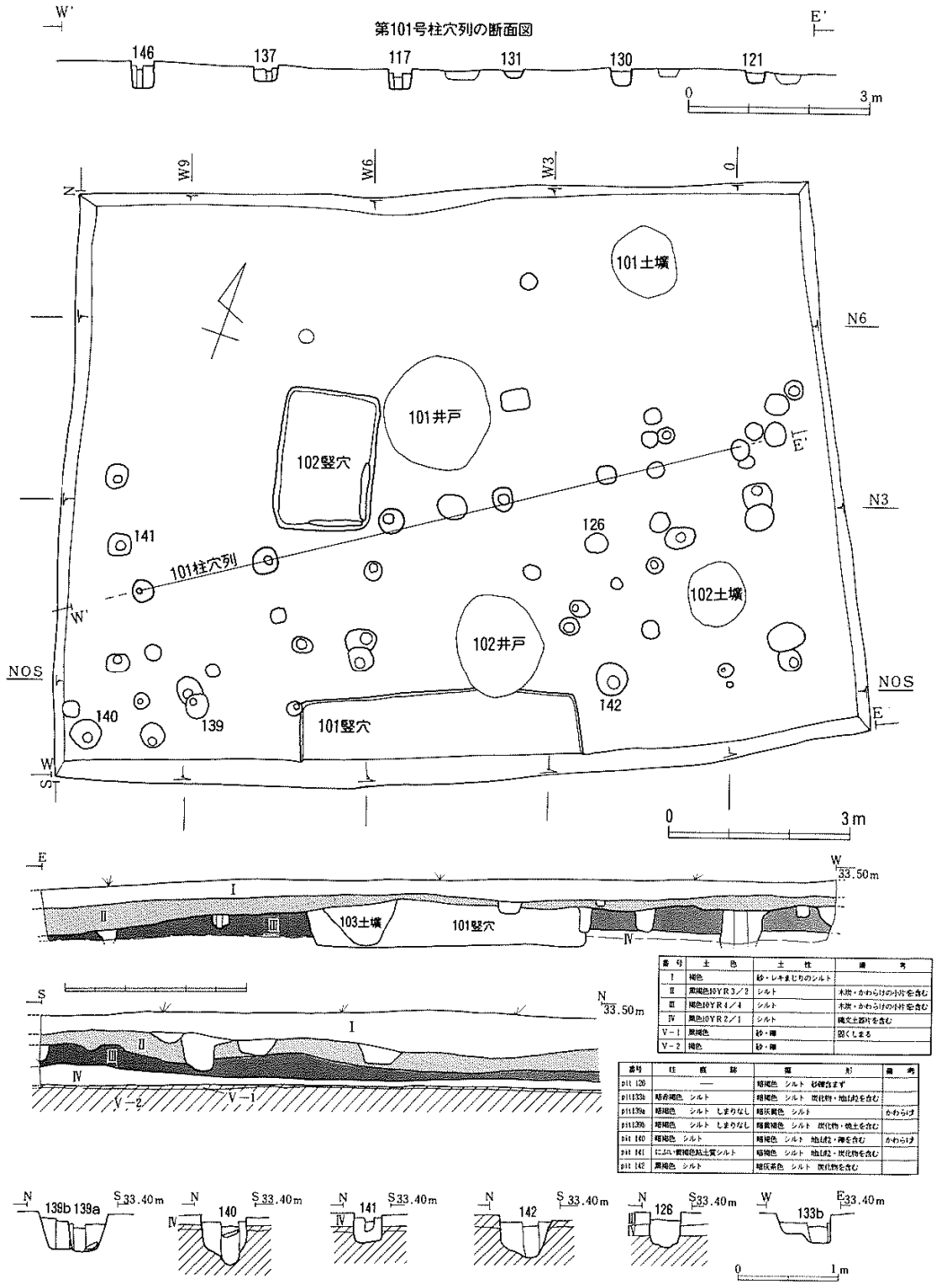
陶器（第 50 図 2～13）

施釉陶器（第 50 図 2～4）、し器系陶器（同 5～13）がある。

施釉陶器は瀬戸産でいずれも灰釉で、瓶もしくは壺の体部破片である。4 の肩部には沈線により文様が描かれている。13～14 世紀代の製品と考えられるが明確でない。し器系陶器は東海産のものと、東北地方の在地産のものとがある。東海産のものでは渥美（5）、常滑（6～11）があり、渥美は壺、常滑は甕の破片がみられる。小破片や体部のみの破片であるため年代は推定できない。

土師質土器（第 51 図 1～20）

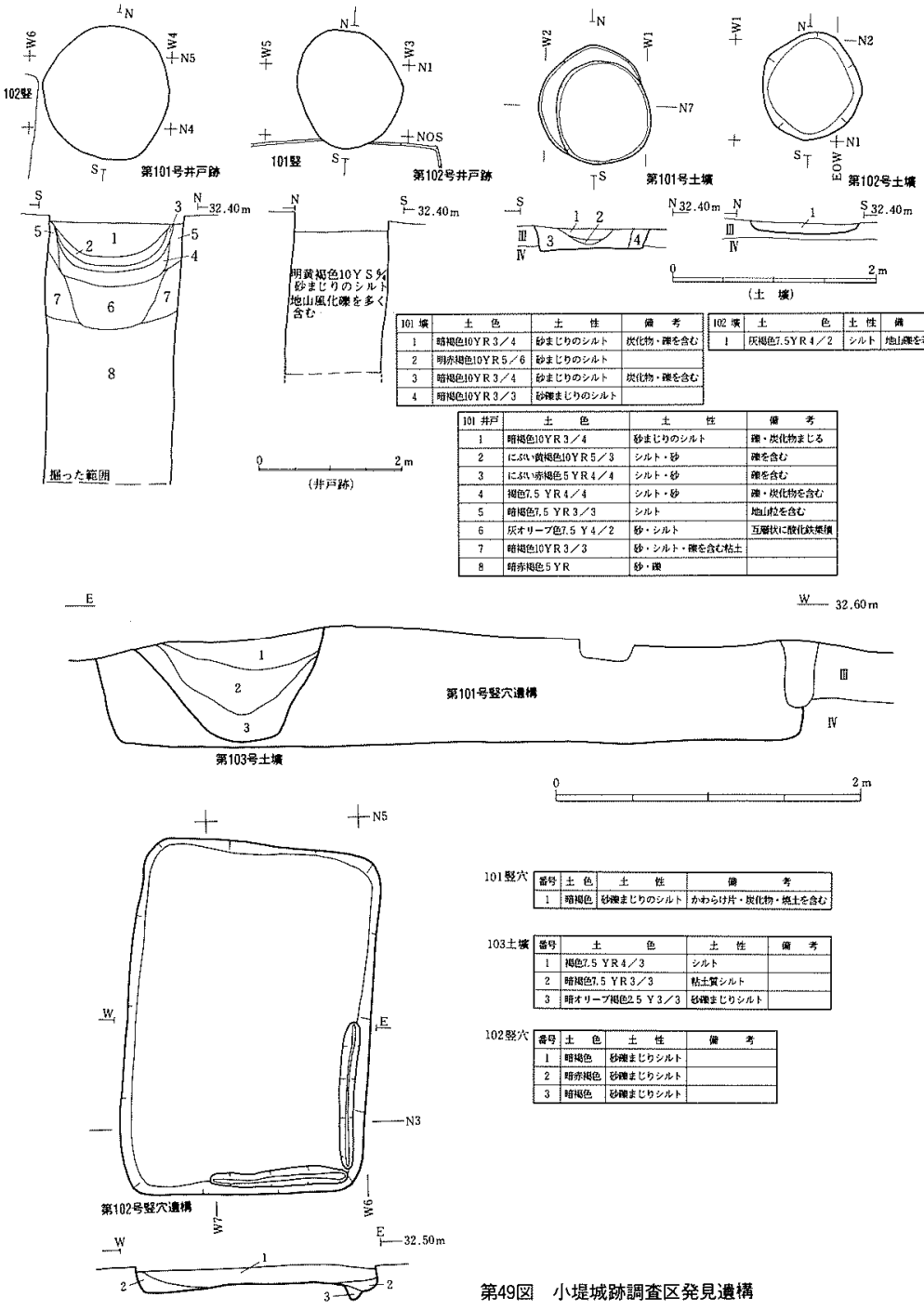
坏（1～9）、小皿（10～20）がある。図示したもの以外にも器形の推定できない小破片が多数出土している。いずれもロクロ調整によるものである。坏、小皿の底部にはいずれ



番号	土色	土性	備考
I	褐色	砂・レキまじりのシルト	
II	黒褐色10YR3／2	シルト	木炭・かわらけの小片を含む
III	褐色10YR4／4	シルト	木炭・かわらけの小片を含む
IV	黒色10YR2／1	シルト	礫と土器片を含む
V－1	灰褐色	砂・礫	固くしまる
V－2	褐色	砂・礫	

遺構	性質	層相	備考
pit 126	―	暗褐色 シルト 砂礫含まず	
pit 133b	暗赤褐色 シルト	暗褐色 シルト 炭化物・地山粒を含む	
pit 139a	暗褐色 シルト しまりなし	暗灰黄色 シルト	かわらけ
pit 139b	暗褐色 シルト しまりなし	暗黄褐色 シルト 炭化物・焼土を含む	
pit 140	暗褐色 シルト	暗褐色 シルト 地山粒・礫を含む	かわらけ
pit 141	にぶい黄褐色粘土質シルト	暗褐色 シルト 地山粒・炭化物を含む	
pit 142	黒褐色 シルト	暗灰黄色 シルト 炭化物を含む	

第48図　小堤城の調査区



101 壙	土色	土性	備考
1	暗褐色10YR3/4	砂まじりのシルト	炭化物・礫を含む
2	明赤褐色10YR5/6	砂まじりのシルト	
3	暗褐色10YR3/4	砂まじりのシルト	炭化物・礫を含む
4	暗褐色10YR3/3	砂礫まじりのシルト	

102 壙	土色	土性	備考
1	灰褐色7.5YR4/2	シルト	地山礫を若干含む

101 井戸	土色	土性	備考
1	暗褐色10YR3/4	砂まじりのシルト	礫・炭化物まじる
2	にぶい黄褐色10YR5/3	シルト・砂	礫を含む
3	にぶい赤褐色5YR4/4	シルト・砂	礫を含む
4	褐色7.5YR4/4	シルト・砂	礫・炭化物を含む
5	暗褐色7.5YR3/3	シルト	地山粒を含む
6	灰オリーブ色7.5Y4/2	砂・シルト	互層状に酸化鉄集積
7	暗褐色10YR3/3	砂・シルト・礫を含む粘土	
8	暗赤褐色5YR	砂・礫	

101竪穴

番号	土色	土性	備考
1	暗褐色	砂礫まじりのシルト	かわらけ片・炭化物・焼土を含む

103土壙

番号	土色	土性	備考
1	褐色7.5YR4/3	シルト	
2	暗褐色7.5YR3/3	粘土質シルト	
3	暗オリーブ褐色2.5Y3/3	砂礫まじりシルト	

102竪穴

番号	土色	土性	備考
1	暗褐色	砂礫まじりシルト	
2	暗赤褐色	砂礫まじりシルト	
3	暗褐色	砂礫まじりシルト	

第49図　小堤城跡調査区発見遺構

も回転糸切りの痕跡が残されており、坏ではそれに重なって板状の圧痕（1・2）がみとめられるものが多い。焼成は軟質で器表面が摩滅しているものが大半で、胎土にはいずれも金雲母および赤色の粒子が含まれている。これらは舘南囲遺跡出土のものと共通した特徴を有することから、13 世紀後半から 14 世紀前半の年代が想定される。

瓦質土器（第 51 図 21）

火鉢などの大型品の口縁部とみられるが全体形はわからない。

石製品（第 51 図 22・23）

石鍋（22）、硯（23）がある。

石鍋は滑石製で表面に加工時の工具の痕跡が残っている。2 は粘板岩製の硯の底部破片である。

金属製品（第 51 図 24・25）

鉄製角釘（24）、銅製香炉（25）がある。

鉄製角釘は断面が四角形の細い釘である。香炉は腰が屈曲する薄い板状の容器で、口縁部は肥厚し、蓋受け部の突帯が巡る。

近世の遺物

近世の遺物には磁器、陶器、石・金属製品がある。これらはいずれも 101 号井戸跡の堆積土出土のもので、井戸を埋め立てる際に一括して投棄されたものと考えられる。

磁器（第 52～57 図 11）

染付け（第 52～57 図 6）と白磁（第 57 図 7～11）がある。染付けには碗、猪口、向付、鉢、皿、蓋、徳利、白磁には猪口、紅皿、手塩皿がある。このうち、染付け碗と白磁手塩皿は同じ器形・文様をもつ組み物が含まれており、残りの良いものを選んで図示した。

出土量を比較すると、染付け碗の数量が 6 割と多く、小皿が 2 割でこれに次ぐ。これらは、端反り碗など明確な新しい特徴は認められないものの、18 世紀後半から 19 世紀にかけての生産年代の想定される製品が混在していることは明白である。

磁器の大半は九州の肥前産とみられるが、器表面にツヤがあり、釉薬が盛り上がるなどの特徴をもつ染付け碗（54 図 2～6）や白磁紅皿（57 図 9）は東海地方の瀬戸産と考えられる。また、胎土がくすんだ灰白色を呈する染付け碗（54 図 1）は宮城県内の切込の製品である可能性が高い。

陶器（第 57 図 12・58 図～62 図 10）

灰吹き、碗、香炉、坏、皿、片口碗、蓋、土瓶、し瓶、摺鉢、灯明皿、ほう烙がある。

この大半は福島県の大堀相馬の製品（58・59 図、60 図 1～3）で、碗や香炉には鉄釉、銅緑釉の流し掛けの技法、皿・片口には鉄絵の草花文（59 図 1・2・4・5）、土瓶には走

馬の文様（60 図 1）などがみられる。60 図 4・5 は褐色の地に飴色の釉を流し掛けたもので、その特徴は亘理町内の近世窯の製品と考えられている「末家（ばっけ）焼き」に類似する。末家焼きは近代以後断絶し、窯跡の所在や焼成品の内容は必ずしも明確でないが、これらは末家の製品と考えられる。この他の陶器は生産地を特定できない。

なお、高台内に「仏（佛）」の墨書のある碗が 2 点（59 図 3・4）、「方」と読める墨書が香炉に 1 点（58 図 16）ある。また、高台内に「剛山」、胴部外面に「廿七之内」のヘラ描きのある香炉（60 図 5）がある。前者は墨書であることや内容からみて大雄寺に直接関係するものとみられる。後者は生産地で記入されたものであるが、高台内の「剛山」について法名の一部もしくは号と考えれば、仏前もしくは墓前に供えるべく縁者が窯元に特注した製品とみることができる。

土師質土器（第 62 図 11～19）

灯明皿（11）、坏（12～14）、小皿（15～19）がある。図示したもの以外にも小破片が多数出土している。いずれもロクロ成形によるもので底部は糸切り底である。焼成は硬質である。14・18・19 は口縁部にススやタール状の付着物がみられることから灯明皿として使用されたことがわかる。

瓦（第 62 図 20）

玉縁の付く丸瓦の破片である。基部に結縛のためとみられる焼成後の穿孔がある。凹面は布目が残り、凸面にはヘラミガキが加えられている。凸面の表面は銀色で光沢のあるいわゆるくすべ焼きである。

土人形（第 62 図 21）

犬を象った素焼の土人形である。彩色は確認できない。

石製品（第 63 図 1～3）

いずれも粘板岩製の砥石の破片である。

ガラス製品（第 63 図 4）

青色のガラス製の玉である。

金属製品（第 63 図 5～19）

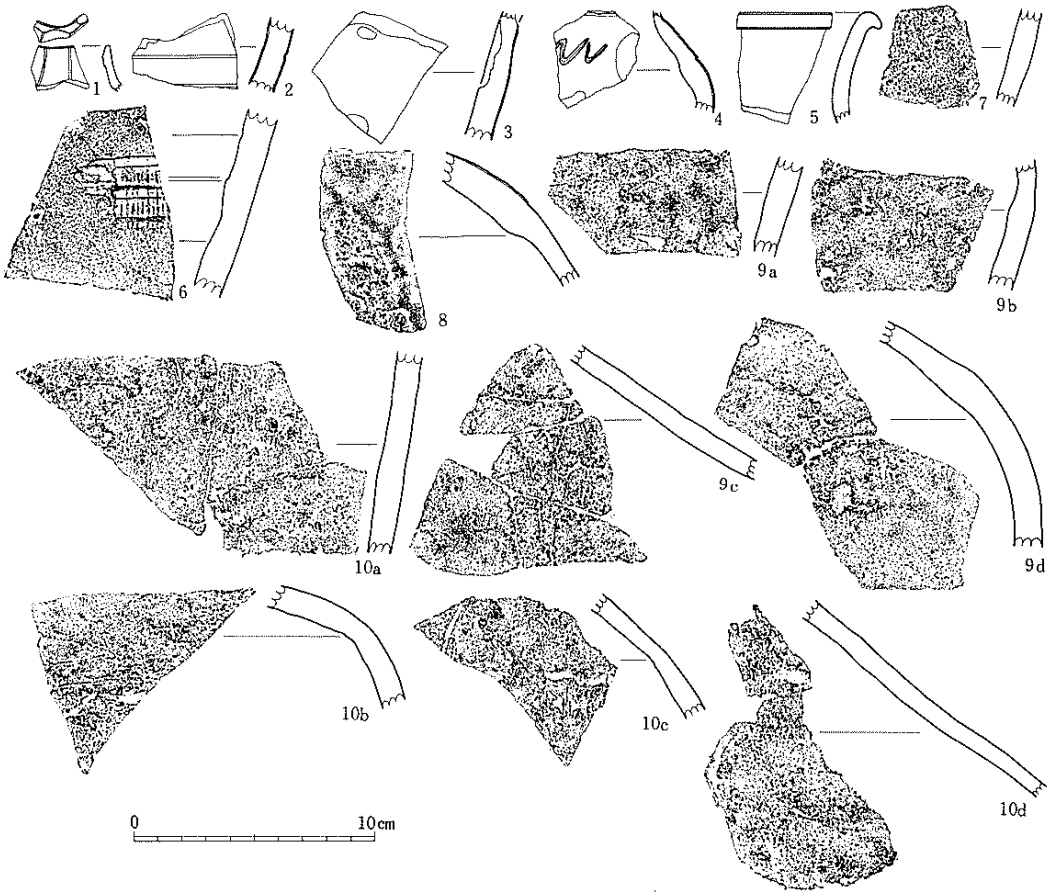
鉄製品には杓（5）、角釘（6～10）、鎌（11・12）、煙管（13・14）、銅製匙（15）、容器（16）、銅銭（17～19）がある。

杓は身と把手の間に捻りを加えたものである。角釘はいずれも頭部を折り曲げたものである。鎌は 11 の茎部に目釘とリング状のはばきが残存する。煙管はらうが失われているが一括品とみられるもので雁首には毛彫りが施されている。銅製の匙（15）と容器（16）はいずれも仏具とみられる。16 は薄い板の容器で口縁部は肥厚し直立する。口縁部が直線的

であることから方形の容器と考えられる。銅銭はいずれも「寛永通寶」である。

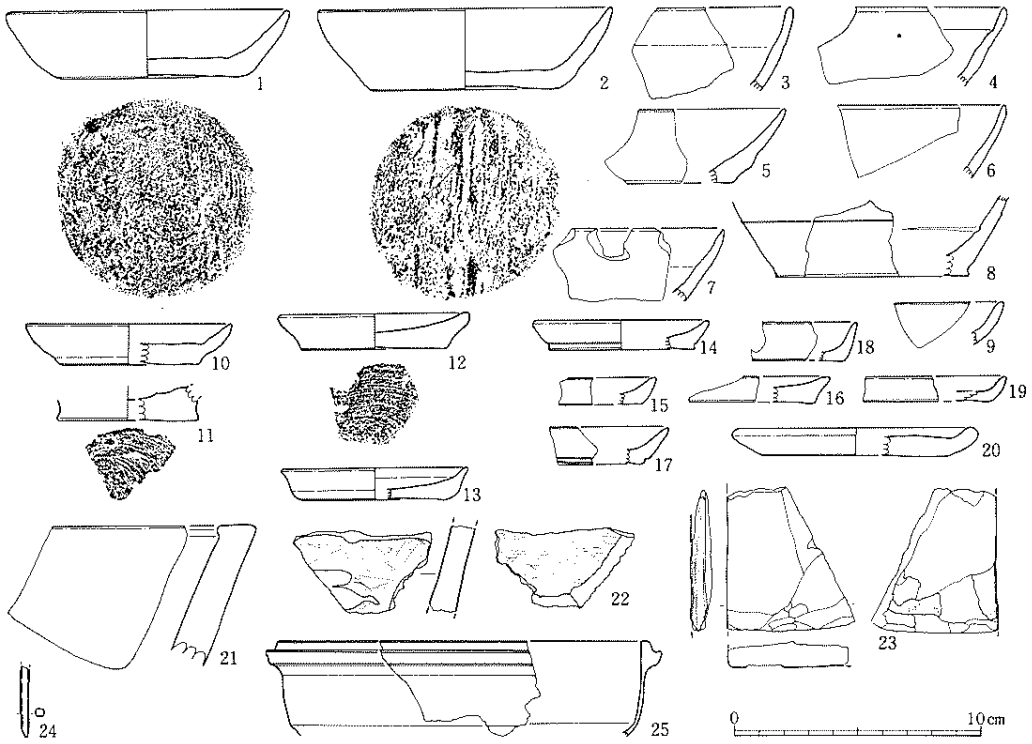
その他の遺物

平安時代の土師器（63 図 20）、縄文時代中期大木 8ｂ式土器（同 21～24）が出土している。この他にも整地層下の旧表土層から土師器、須恵器、縄文土器の破片が出土している。



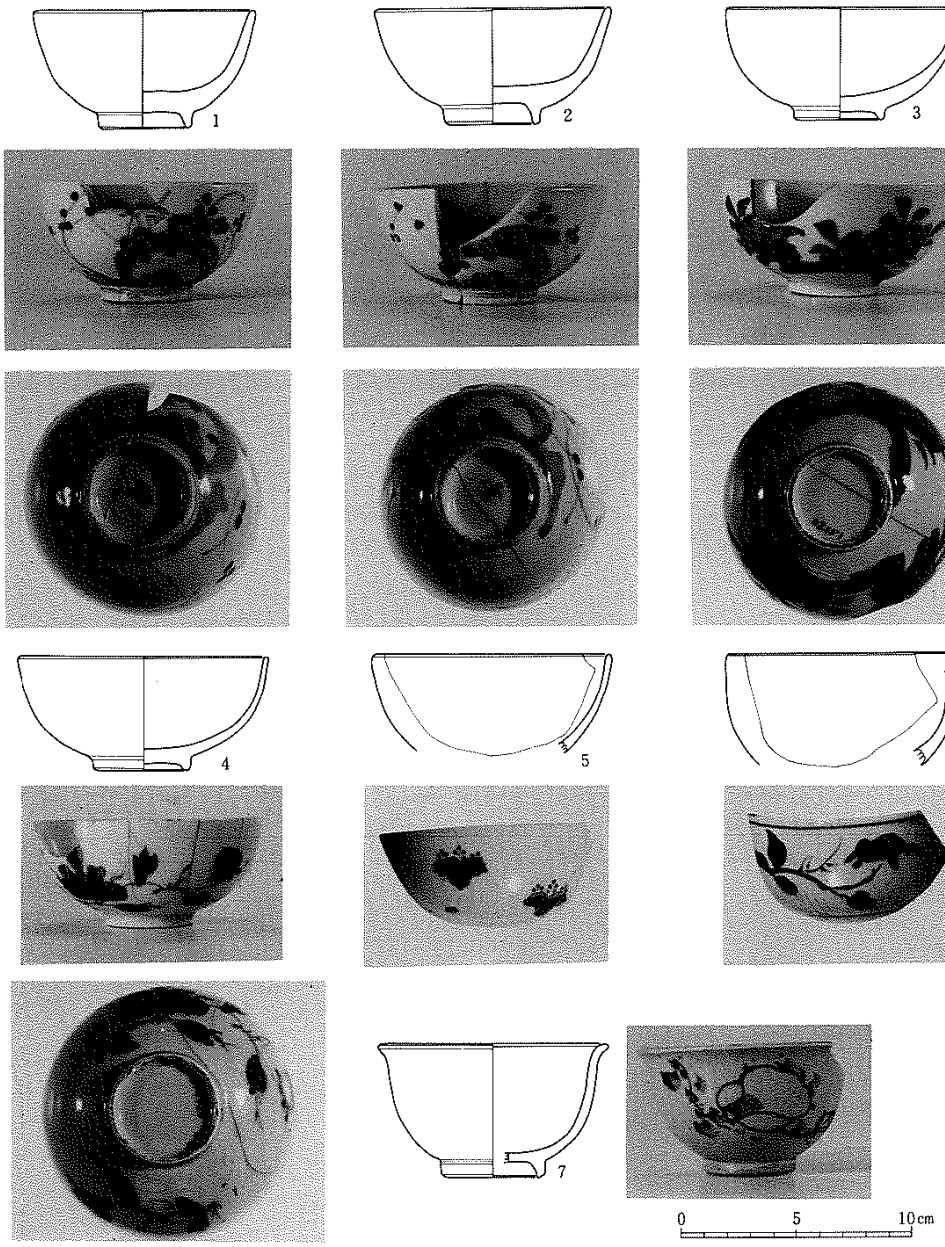
No.	登録NO	器　種	出土地点・層位	口径	底径	特　徴	備　考	産　地	年　代
1	E－ 29	青磁	ピット 111						
2	E－ 21	施釉陶器							
3	E－ 41	〃							
4	D－ 3	〃							
5	D－ 2	須恵器系陶器							
6	E－ 31	し器系陶器　甕	ピット 128			押印		常滑	
7	E－ 6	〃	整地層 2					〃	
8	E－ 42	〃	表面採取				自然釉	〃	
9	E－ 43	〃	〃					〃	
10	E－ 44	〃	〃					〃	

第50図　小堤城跡出土遺物（１）中世１



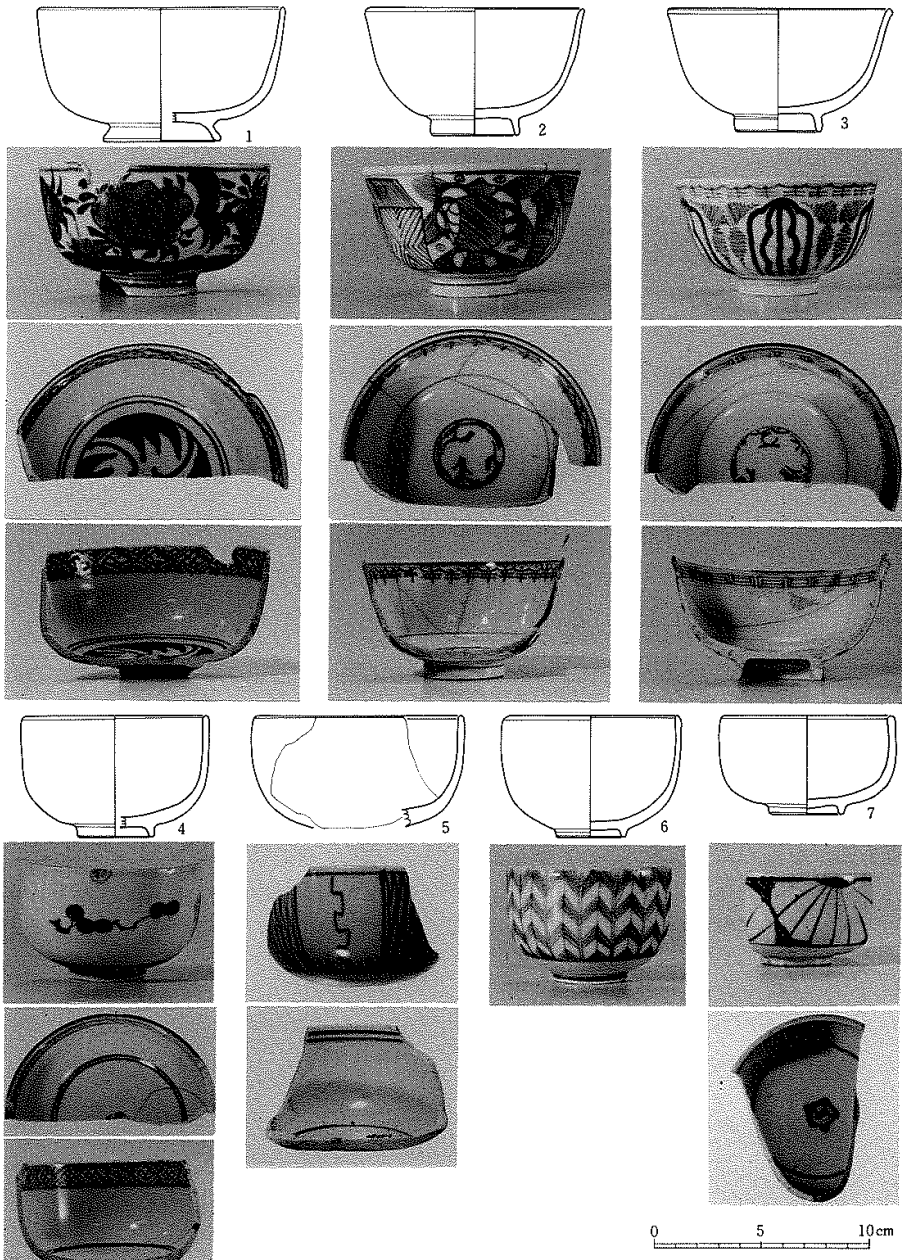
NO	登録NO	器　種	出土地点・層位	口径	底径	特　徴	備　考		年　代
1	E－ 34	土師質土器　皿	ピット　39		8.0	底部糸切り・板圧痕		・金雲母	
2	E－ 35	〃	ピット　40	12.0	8.0	〃	〃	〃	
3	E－ 12	〃	整地層					〃	
4	E－ 14	〃	整地層　2					〃	
5	E－ 22	〃	ピット　1					〃	
6	E－ 23	〃	〃					〃	
7	E－ 25	〃	ピット 105					〃	
8	E－ 42	〃	101号土壙			底部糸切り		〃	
9	E－ 49	〃　小皿	表面採取					〃	
10	E－ 13	〃	整地層　2			底部板圧痕		〃	
11	E－ 11	〃	整地層					〃	
12	E－ 9	〃	〃			底部糸切り・板圧痕		〃	
13	E－ 16	〃	整地層　2			〃	〃	〃	
14	E－ 7	〃	整地層			〃	〃	〃	
15	E－ 4	〃	101号土壙					〃	
16	E－ 30	〃	ピット　112			底部糸切り		〃	
17	E－ 16	〃				〃	〃	〃	
19	E－ 8	〃	整地層			底部糸切り・板圧痕		〃	
20	E－ 15	〃	整地層　2			〃	〃	〃	
21	E－ 24		ピット　2						
22	E－ 56	滑石製　石鍋	表面採取						
23	E－ 57	結板岩製　硯	〃						
24	E－ 28	鉄　製　角釘							
25	E－ 60	銅製　鋲							

第51図　小堤城跡出土遺物（2）中世2



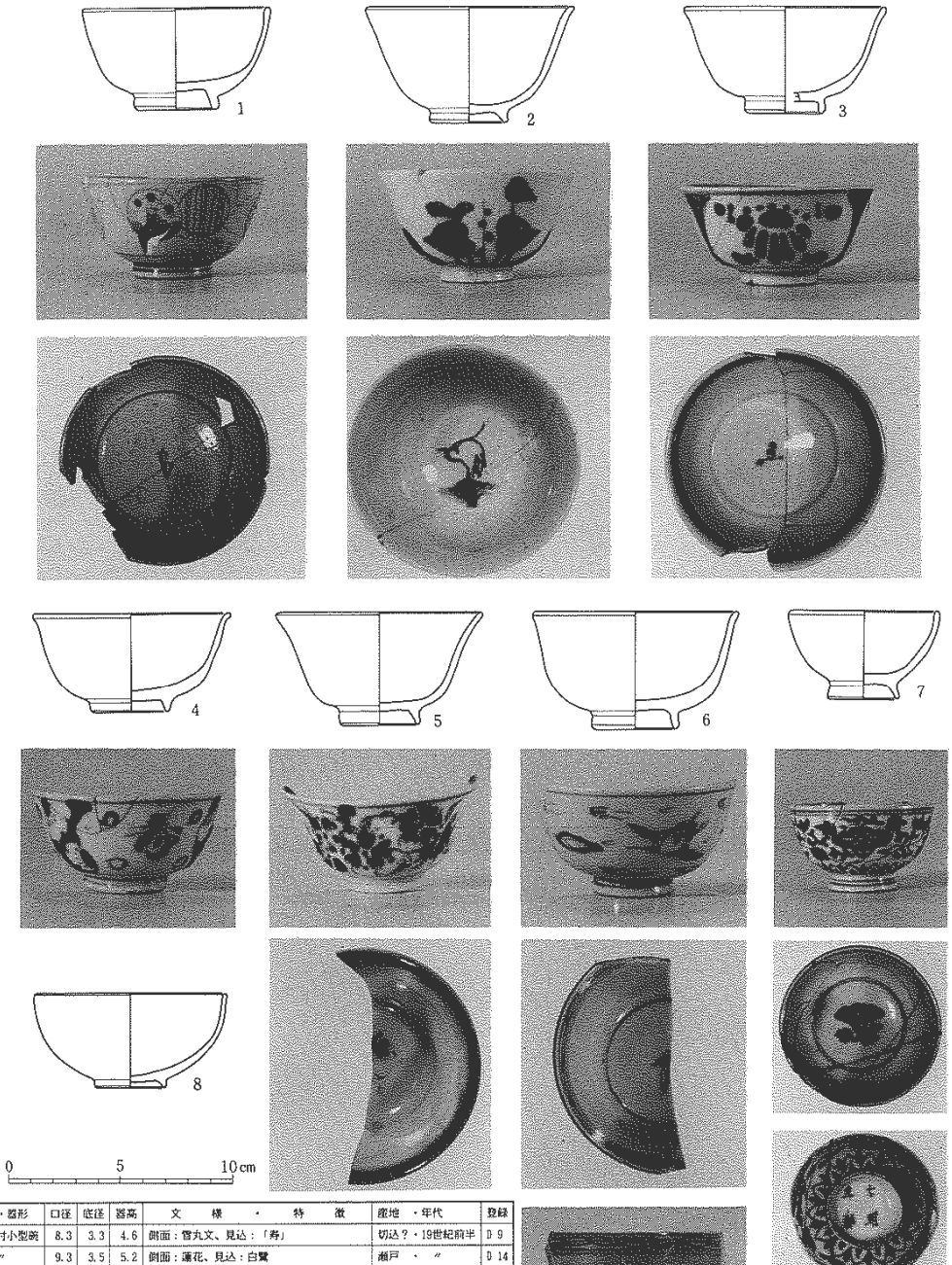
No.	器種・器形	口径	底径	器高	文様・特徴	産地・	登録
1	磁器染付 碗	9.6	4.0	5.2	くらわんか、側面：梅樹、	肥前・18世紀後半	D 7
2	〃	10.2	4.2	5.1	〃	〃・ 〃	D 8
3	〃	9.9	3.9	4.9	側面：花樹	〃・ 〃	D 5
4	〃	10.9	4.2	5.0	側面：牡丹	〃・ 〃	D 6
5	〃	10.4	--	--	側面：樹葉（型紙摺）	〃・ 〃	D 15
6	〃 蓋物	9.9	--	--	側面：牡丹、口縁内釉そぎ	〃・ 〃	D 12
7	〃 碗	10.0	4.5	5.8	端反り、側面：椿	不明・19世紀	D 11

第52図　小堤城跡出土遺物（3）近世1



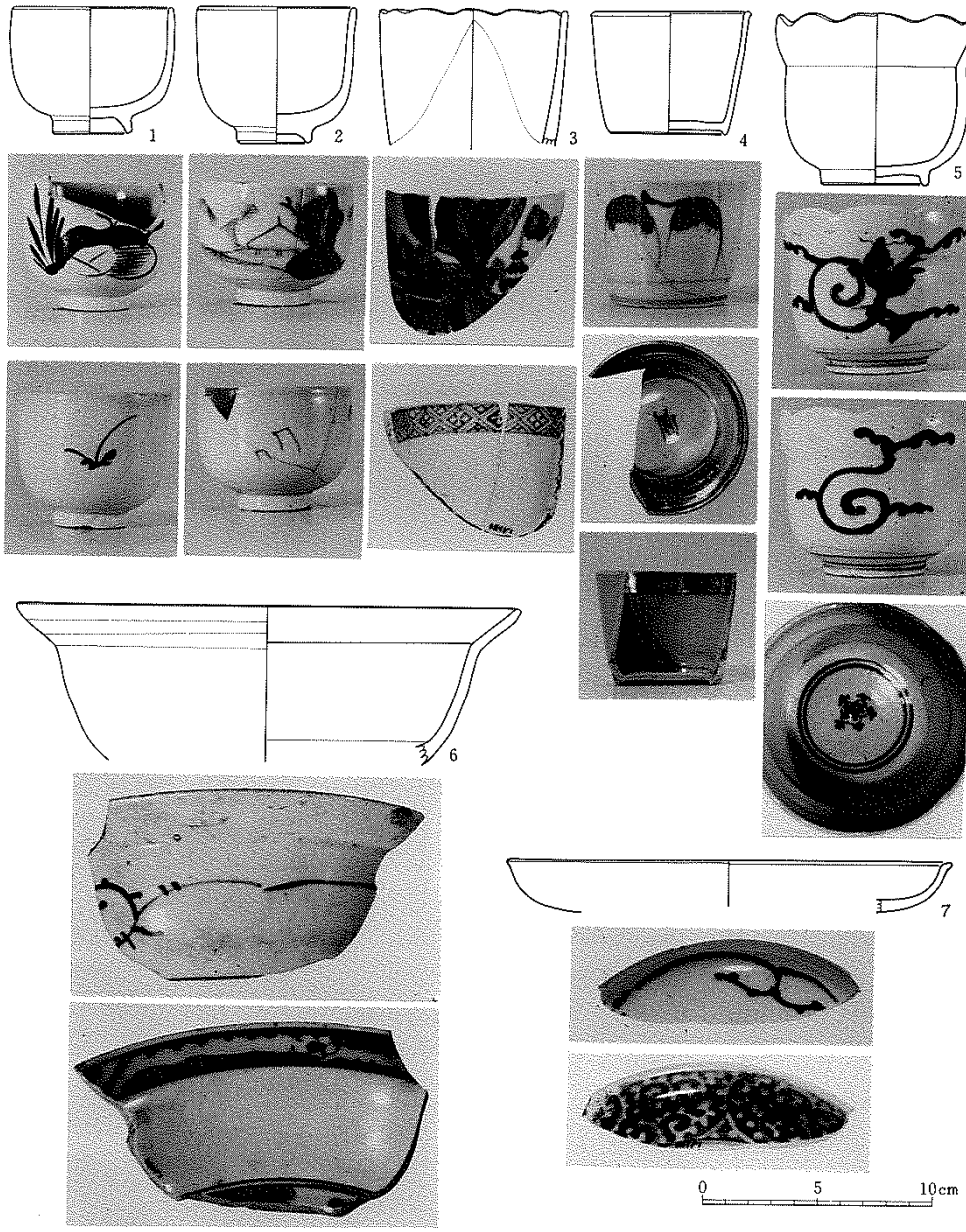
No.	器種・器形	口径	底径	器高	文様・特徴	産地・年代	登録
1	磁器染付　蓋物	11.5	5.5	6.2	側面：草花、内面・見込：四方たすき波兎文	肥前・18～19世紀	D 4
2	〃	10.2	4.2	6.1	側面：倉・小槌、内面：輪宝、見込：松竹梅	〃・19世紀	D 18
3	〃	10.2	4.0	5.8	側面：？、内面：雷文、見込：松竹梅	〃・〃	D 23
4	〃　茶碗	8.7	3.6	5.7	側面：松、内面・見込：四方たすき五弁花文	〃・18世紀後半	D 10
5	〃	9.9	--	--	側面：碁目	〃・〃	D 23
6	〃	8.3	3.3	5.7	側面：矢羽根	〃・〃	D 25
7	〃	8.0	3.4	4.6	側面：菊散らし、見込：くずれた五弁花文	〃・〃	D 24

第53図　小堤城跡出土遺物（４）近世２



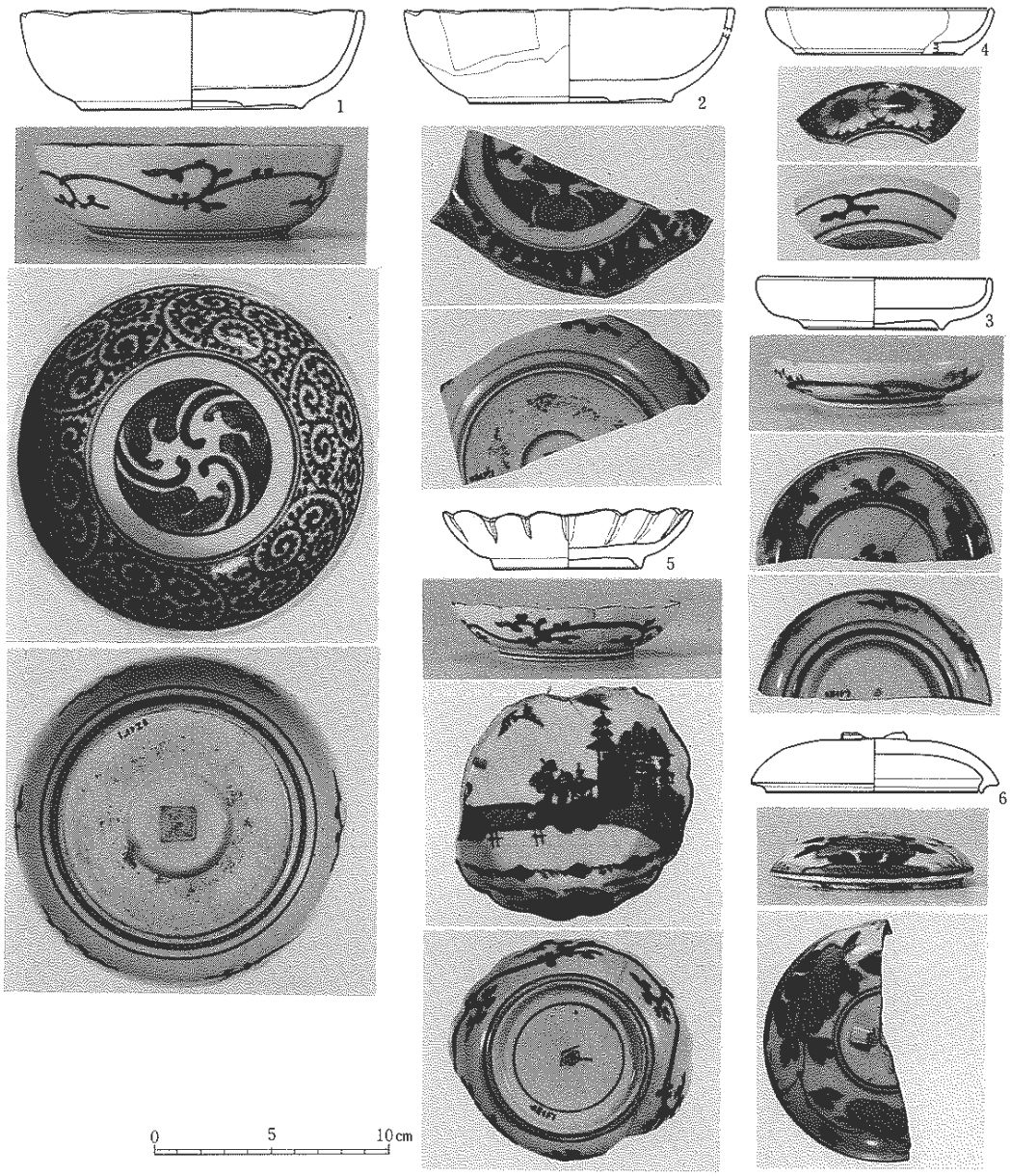
No.	器種・器形	口径	底径	器高	文　様　・　特　徴	産地　・年代	登録
1	磁器染付小型碗	8.3	3.3	4.6	側面：雪丸文、見込：「寿」	切込？・19世紀前半	D 9
2	〃	9.3	3.5	5.2	側面：蕾花、見込：白鷺	瀬戸　・　〃	D 14
3	〃	9.0	3.6	4.8	側面：「寿」・、見込：？	〃　・19世紀中頃	D 22
4	〃	8.8	3.5	4.5	側面：？、見込：「　」？	〃　・　〃	D 26
5	〃	9.2	3.6	5.1	側面：草花、見込：花	〃　・　〃	D 17
6	〃	9.2	3.9	5.3	側面：鶴・霊、内面：網目、見込：「寿」	〃　・19世紀前半	D 20
7	〃　蓋	6.7	3.2	4.0	側面：草花、見込：花、高台：「大明年製」	肥前　・19世紀	D 43
8	色絵磁器　碗	8.6	3.2	4.2	側面：窓絵・草花・蝶、見込：草花、漆接ぎ		D 72

第54図　小堤城跡出土遺物（5）近世3



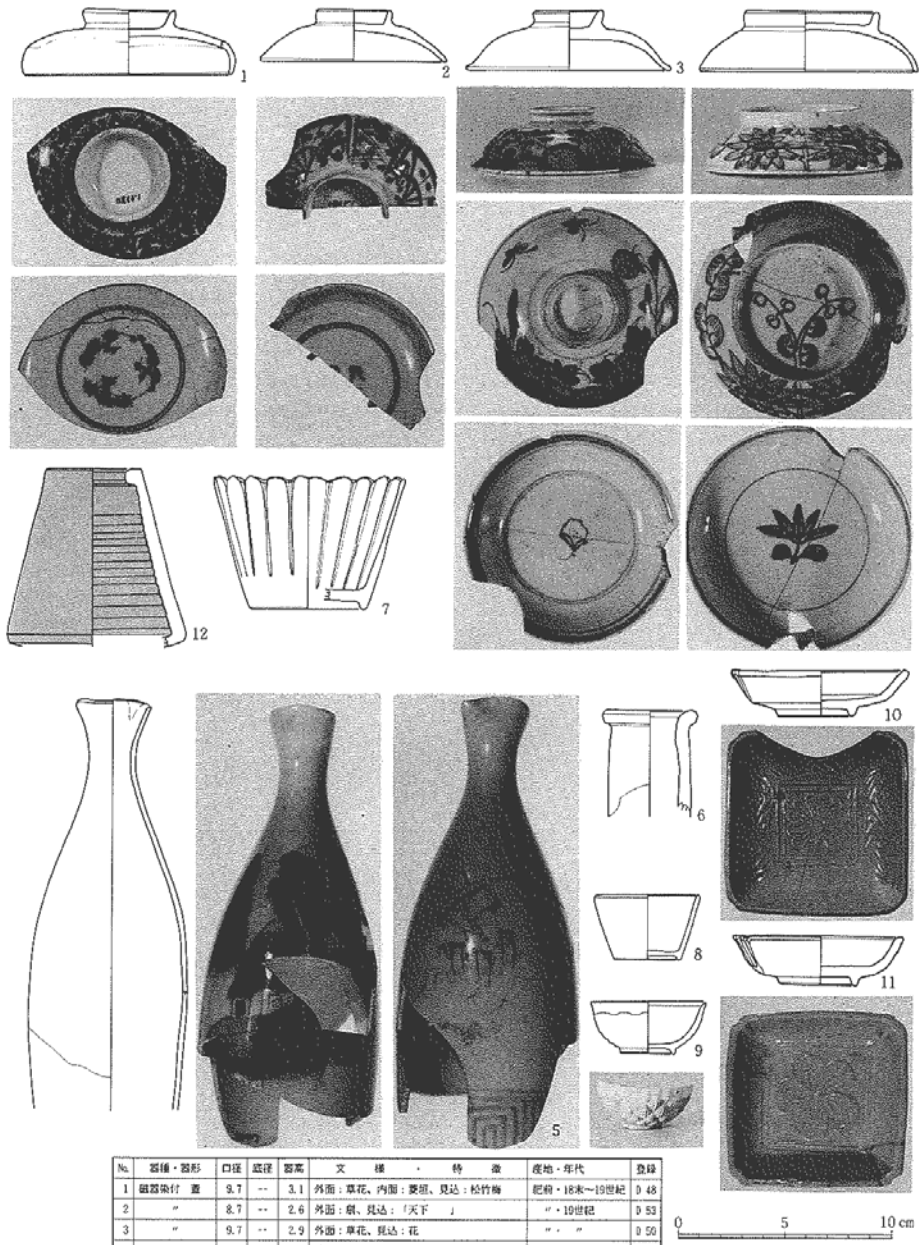
No.	器種・器形	口径	底径	器高	文様・特徴	産地・年代	登録
1	磁器染付半筒碗	6.9	3.4	5.6	側面：山水・帆掛け舟	肥前・19世紀	D 28
2	〃	6.9	3.3	6.0	側面：草花・蝶	〃・18末～19世紀	D 29
3	〃 猪口	8.2	--	--	側面：意絵・山水、内面：菱垣、漆掻、蛇目高台	〃・19世紀	D 39
4	〃	6.9	5.0	5.4	側面：草花 、内面・見込：四方たすき	〃・ 〃	D 41
5	〃 向付	8.5	4.6	7.5	側面：龍・雲、見込：五弁花文	〃・18世紀	D 38
6	〃 鉢	22.0	--	--	側面：唐花、口縁部：波濤文、見込：？	〃・	D 63
7	〃 皿	19.2	--	--	墨ハジキ、側面：唐草、内面：蛸唐草	〃・	D 49

第55図　小堤城跡出土遺物（6）近世4



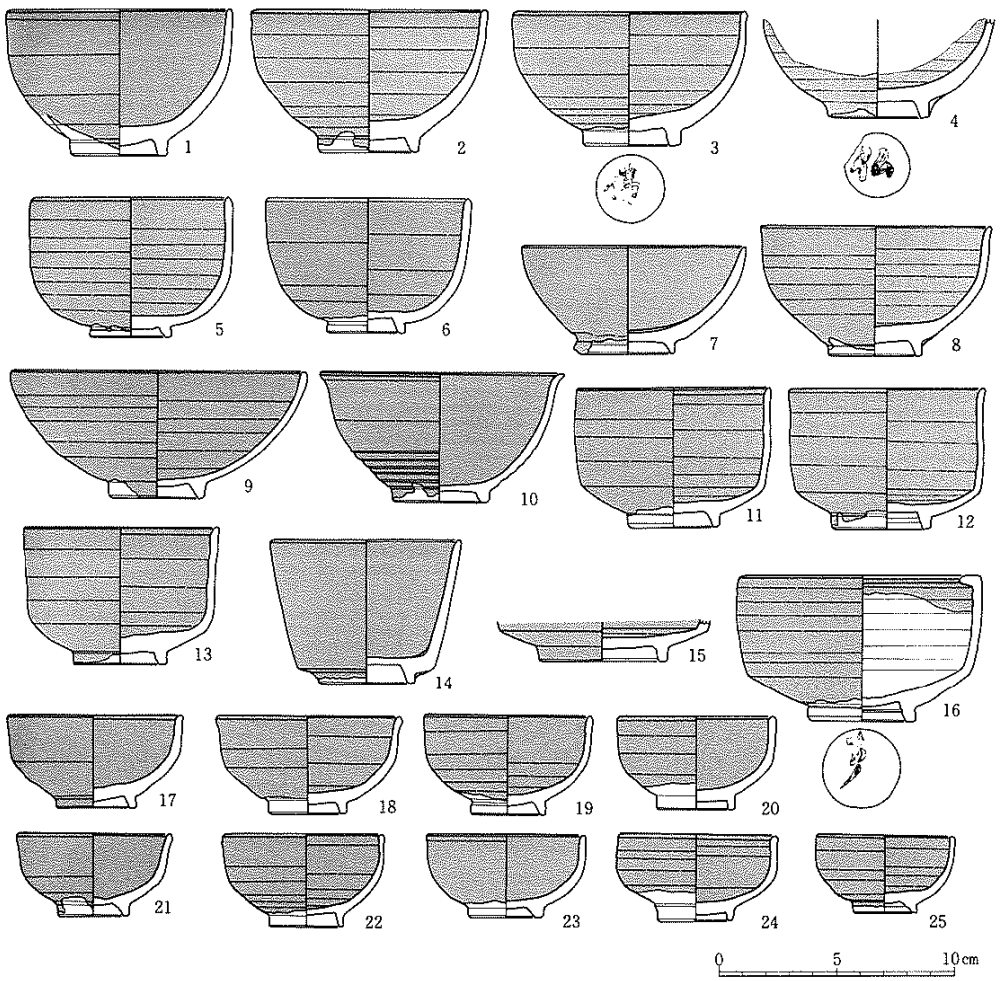
No.	器種・器形	口径	底径	器高	文様・特徴	産地・年代	登録
1	磁器染付 小皿	14.7	9.4	4.3	外:唐草,内:蛸唐草,見込:波涛,底:「渦福」蛇目高台	肥前・18末～19世紀	D 62
2	〃	14.0	8.6	4.1	外:唐草,内:草,見込:?,底:「渦福」蛇目高台	〃・18世紀	D 47
3	〃	10.0	6.0	2.3	側面:唐草、内面:花	〃・〃 前半	D 52
4	〃	9.1	7.1	2.0	側面:唐草,内面:花,見込:五弁花,蛇目高台	〃・〃 後半	D 51
5	〃	10.6	6.3	2.6	側面:唐草、内面:山水、底:「渦福」、口紅	〃・18世紀	D 68
6	〃	10.6	--	--	外面:草花	〃・18世紀	D 64

第56図　小堤城跡出土遺物（7）近世5



No.	器種・器形	口径	底径	器高	文様・特徴	産地・年代	登録
1	磁器染付 蓋	9.7	--	3.1	外面：草花、内面：菱垣、見込：松竹梅	肥前・18末～19世紀	D 48
2	〃	8.7	--	2.6	外面：扇、見込：「天下 」	〃・19世紀	D 53
3	〃	9.7	--	2.9	外面：草花、見込：花	〃・〃	D 50
4	〃	10.2	--	3.0	外面：草花 、見込：花、素描き	〃・〃	D 54
5	〃 徳利	3.6	--	--	側面：山水・帆掛船、体部下：雷文	〃・〃	D 66
6	〃	4.5	--	--		不明・〃	D 67
7	白磁 猪口	9.0	5.4	6.3		瀬戸・18世紀後半	D 42
8	〃 猪口	5.0	3.2	3.1		〃・19世紀	D 44
9	〃 紅皿	5.4	2.6	2.5	外面：輪状浮文、型造り	肥前・19世紀	D 46
10	〃 手塩皿	7.9	3.7	2.3	内面：梅花、型造り	瀬戸・18世紀	D 55
11	〃	8.2	3.6	2.2	内面：梅花、型造り	〃・〃	D 59
12	陶器 灰吹？	4.5	--	--	灰釉、暗緑色、口縁部摩滅	不明	

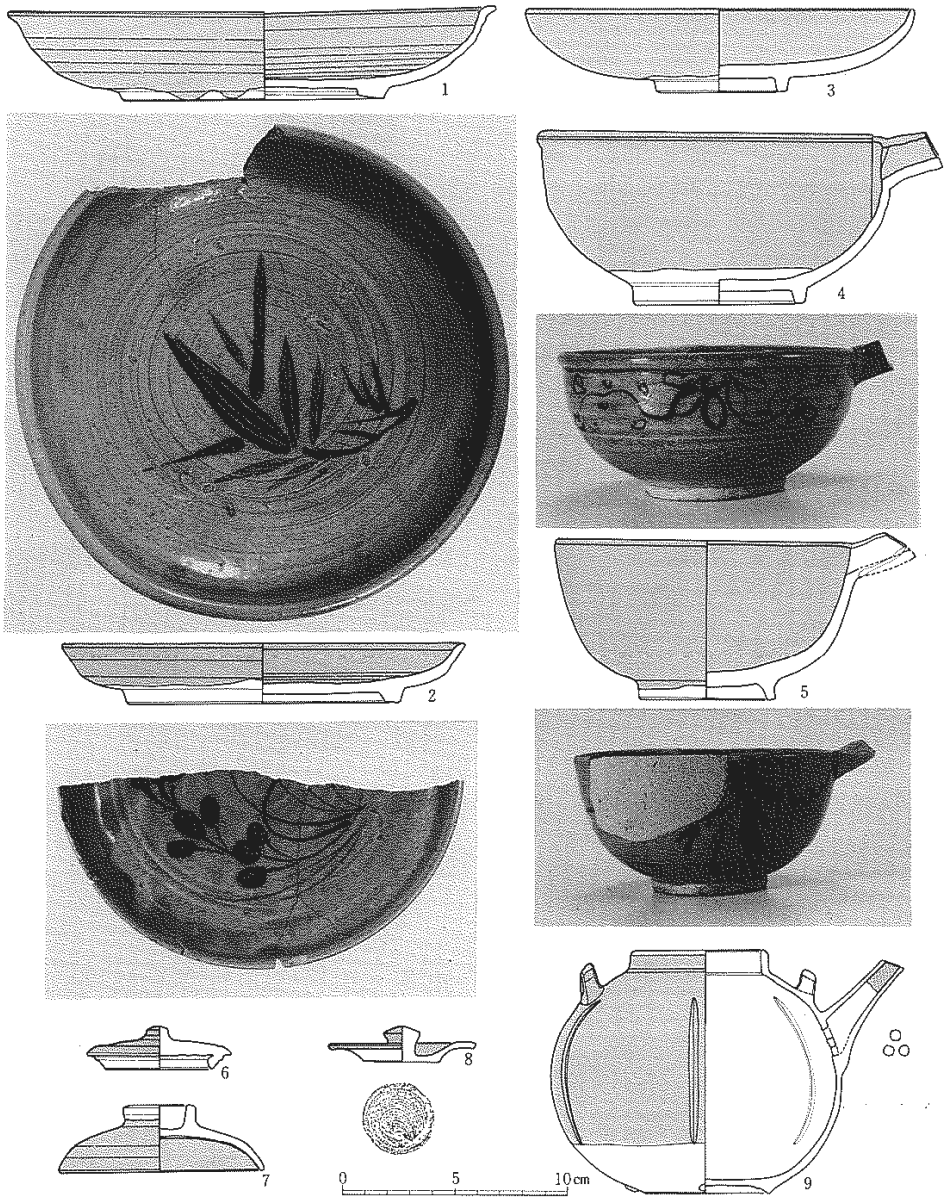
第57図　小堤城跡出土遺物（8）近世6



No.	器種・器形	口径	底径	器高	釉 色	文 様 ・ 特 徴	産地 ・年代	登 録
1	陶器 碗	9.6	4.1	6.2	黄白色	嵌入	不明 ・	D 94
2	〃	10.0	4.2	6.2	灰白色	〃	〃 ・	D 86
3	〃	9.8	4.2	5.8	淡緑色	〃 高台内「佛」墨書	大堀相馬・19世紀	D 90
4	〃	--	4.3	--	〃	〃 高台内「仏」墨書	〃 ・ 〃	D108
5	〃	8.6	3.5	6.0	灰白色	〃 銅緑釉の流し掛け	〃 ・ 〃	D 97
6	〃	8.7	3.4	5.8	〃	〃	〃 ・ 〃	D 96
7	〃	9.5	4.0	4.6	黄緑色	〃	〃 ・ 〃	D 95
8	〃	9.8	4.0	5.6	暗緑色	〃	〃 ・ 〃	D 89
9	〃	12.6	4.1	5.4	緑灰色		〃 ・ 〃	D 87
10	〃	10.4	4.1	5.5	灰白色	嵌入、銅緑釉流し掛け	〃 ・ 〃	D 85
11	〃	8.2	3.9	5.9	暗緑色	〃 鉄釉流し掛け	〃 ・ 〃	D 91
12	〃	8.3	4.3	6.0	暗緑色	〃 〃	〃 ・ 〃	D 92
13	〃	8.3	4.0	5.9	暗緑色	〃 〃	〃 ・ 〃	D 93

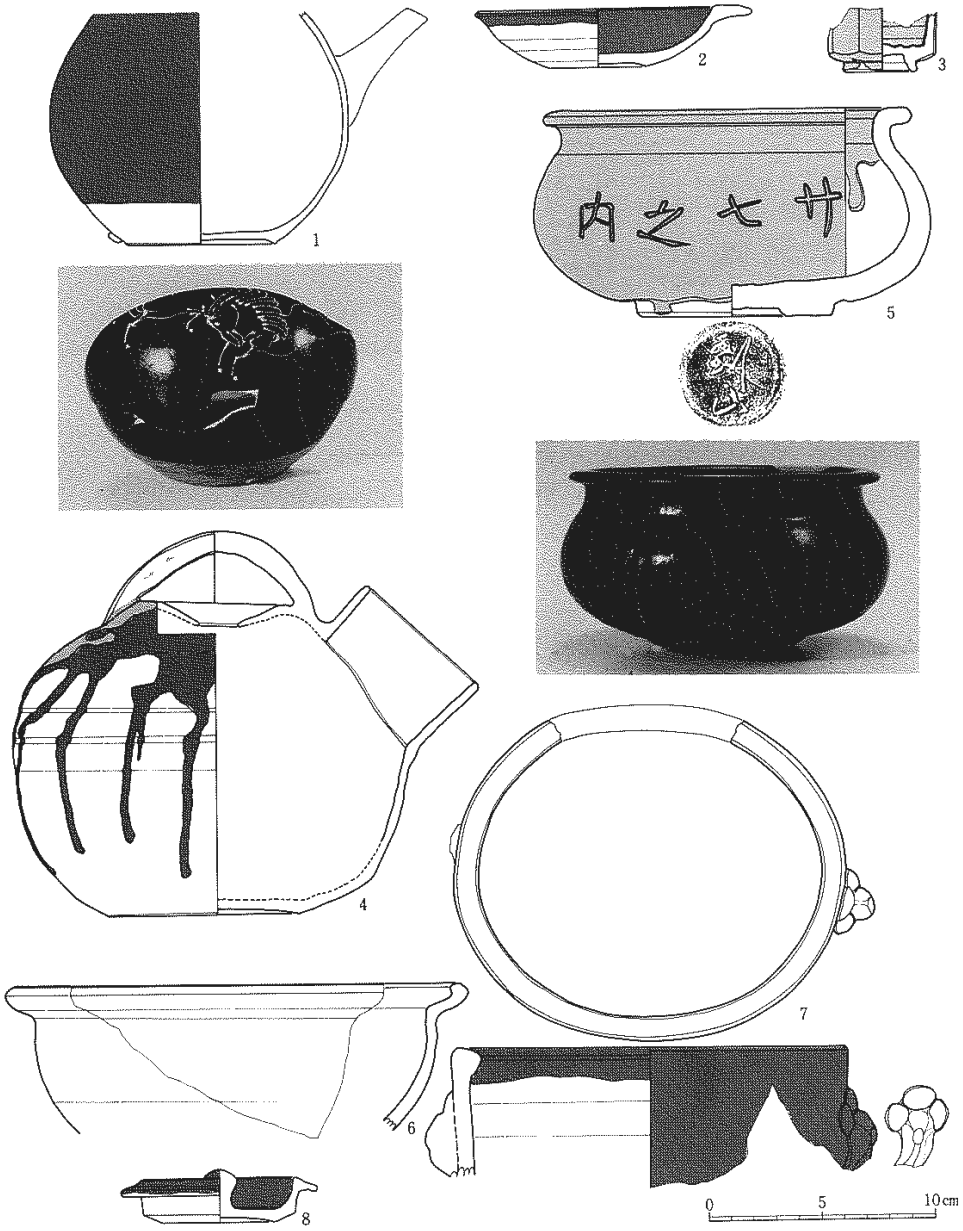
no	器種・器形	口径	底径	器高	釉 色	文 様 ・ 特 徴	産地 ・年代	登 録
14	〃	8.1	4.1	6.2	灰白色	〃	〃 ・ 〃	D 98
15	〃 香炉	--	5.4	--	灰白色	〃	〃 ・ 〃	D 77
16	〃	10.4	5.1	6.3	暗緑色	〃 高台内「方」墨書	〃 ・ 〃	D83+88
17	〃 小坏	7.4	3.4	4.1	緑灰色	〃	〃 ・ 〃	D 99
18	〃	7.9	3.4	4.2	黄白色	〃	〃 ・ 〃	D100
19	〃	7.2	3.2	4.2	灰白色	〃	〃 ・ 〃	D102
20	〃	6.3	3.3	4.0	〃	〃	〃 ・ 〃	D103
21	〃	6.6	3.0	3.5	緑灰色	〃	〃 ・ 〃	D107
22	〃	6.9	3.2	4.0	緑灰色	〃	〃 ・ 〃	D101
23	〃	6.8	3.3	3.5	緑灰色	〃	〃 ・ 〃	D105
24	〃	6.8	3.2	3.6	緑灰色	〃	〃 ・ 〃	D106
25	〃	5.9	2.7	3.4	緑灰色	〃	〃 ・ 〃	D104

第58図　小堤城跡出土遺物（９）近世７



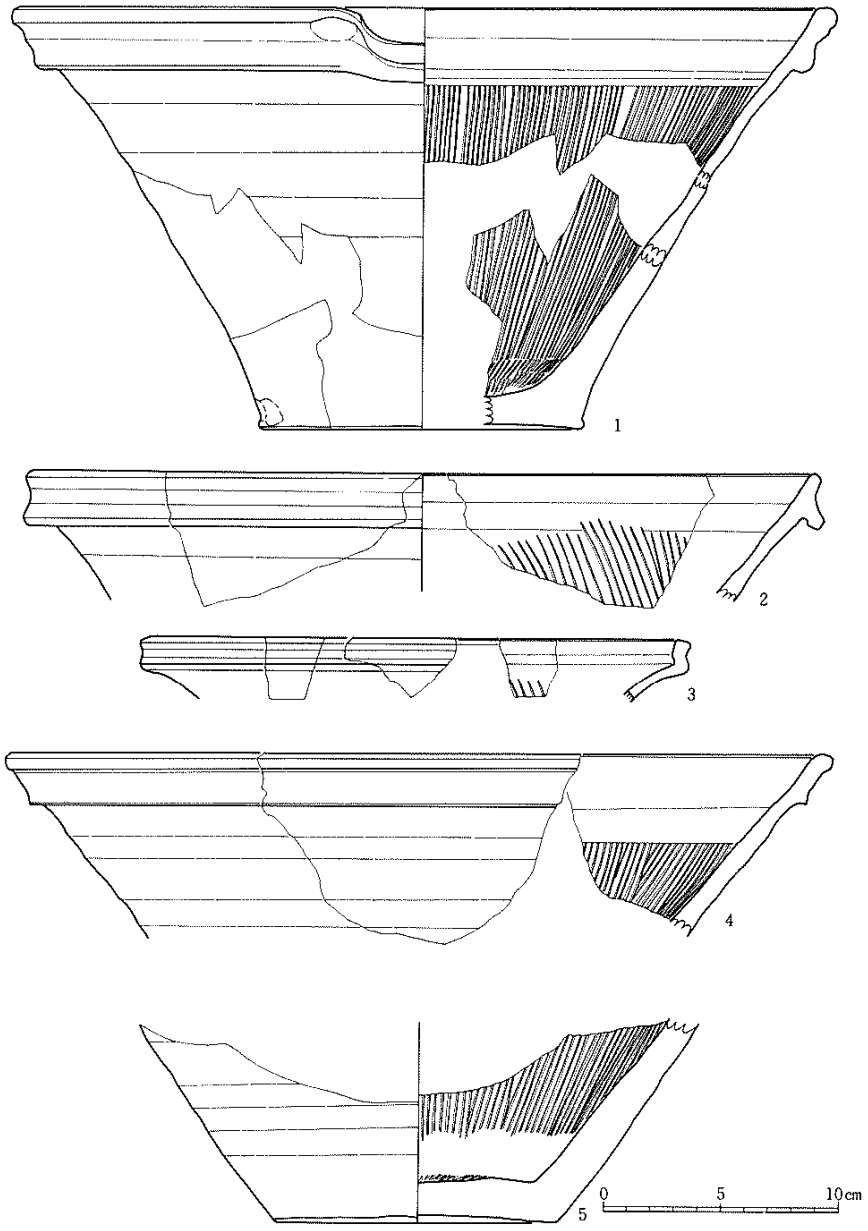
No.	器種・器形	口径	底径	器高	釉色	文様・特徴	産地・年代	登録
1	陶器 皿	21.5	11.5	4.1	黄緑色	鉄絵笹葉文	大堀相馬・19世紀	D 79
2	〃	17.8	12.0	2.8	〃	〃草花文	〃 ・ 〃	D80,81
3	〃	17.2	5.8	3.8	〃	嵌入	〃 ・ 〃	D 78
4	〃 片口碗	15.7	7.6	7.7	〃	鉄絵草花文	〃 ・ 〃	D 75
5	〃	13.4	6.0	7.1	〃	〃 〃	〃 ・ 〃	D 76
6	〃 蓋	6.4	2.0	--	黄緑色	〃	〃 ・ 〃	D110
7	〃	9.1	3.0	--	〃	〃	〃 ・ 〃	D109
8	〃	6.5	1.7	--	黄白色	〃、回転糸切り	〃 ・ 〃	D111
9	〃 土瓶	6.0	5.5	10.9	青灰色	〃、茶漉し穴3孔	〃 ・ 〃	D 74

第59図　小堤城跡出土遺物（10）近世8



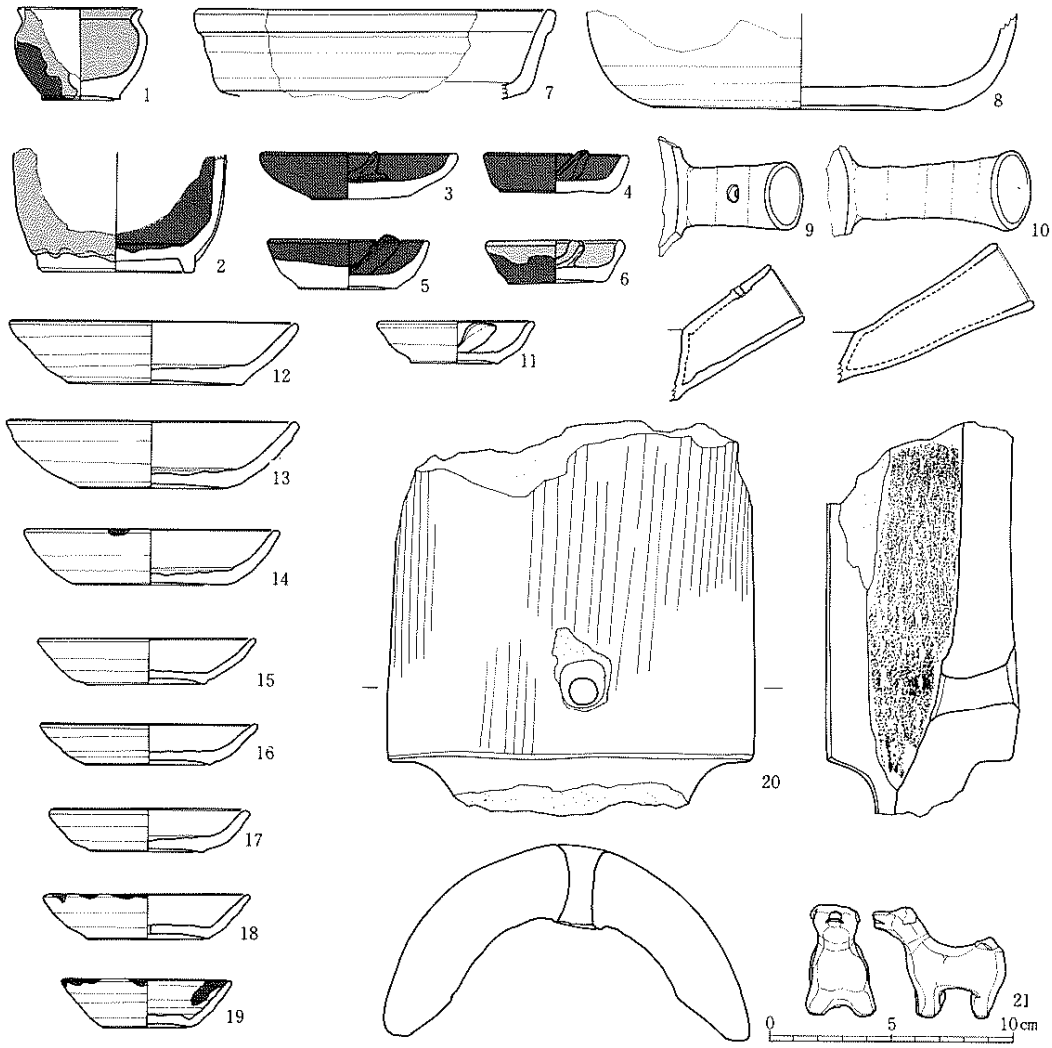
No.	器種・器形	口径	底径	器高	釉色	文様・特徴	産地・年代	登録
1	陶器 土瓶	--	6.	--	黒色	駒絵	大堀相馬・18世紀後	D135
2	〃 皿	10.8	4.3	2.6	〃		〃？ 〃	D136
3	〃 碗	--	3.3	--	〃		〃？ 〃	D156
4	〃 し瓶	6.8	8.4	17.0	褐色	銅緑・鉄釉流し掛け	末家 〃	D150
5	〃 香炉	16.3	8.4	9.2	〃	銅緑釉流し掛け 高台内「 山」ヘラ描き 「廿七之内」ヘラ描き	〃 〃	D148
6	〃	19.7	--	--	〃	鉄釉	不明 〃	D149
7	〃	17.5	--	--	〃	鉄釉、獣足把手	〃 〃	D147
8	〃 蓋	8.6	--	2.5	〃	鉄釉		D137

第60図　小堤城跡出土遺物（11）近世9



No.	器種・器形	口 径	底 径	器 高	釉 色	文 様 ・ 特 徴	産地 ・年代	登 録
1	陶器 擂鉢	35.0	13.8	(18.0)	褐 色	底部：回転糸切り		D141
2	〃	(33.0)	--	--	〃			D144
3	〃	(23.4)	--	--	〃			D145
4	〃	(35.0)	--	--	〃			D143
5	〃	--	12.0	--	〃	底部：回転糸切り		D142

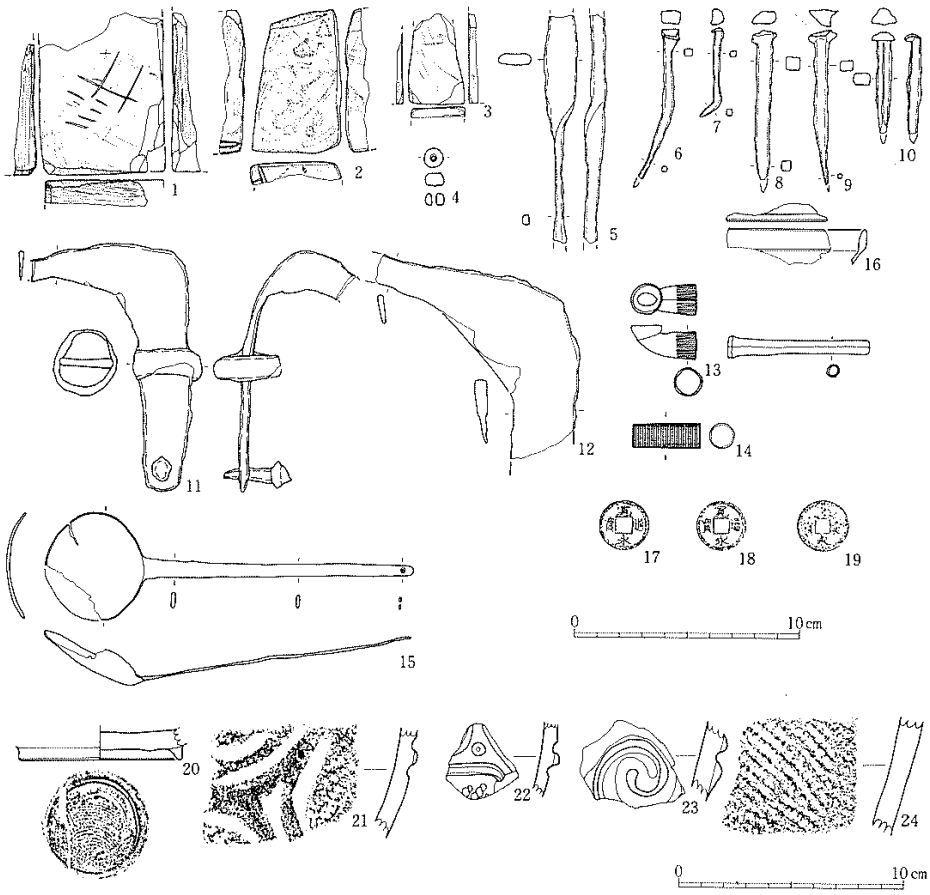
第61図　小堤城跡出土遺物（12）近世10



No.	器種・器形	口径	底径	器高	釉色	文様・特徴	産地・年代	登録
1	陶器 鉢	5.1	3.2	3.8	褐色	銅緑釉流し掛け	不明・	D157
2	〃	--	6.5	--	〃	鉄釉流し掛け	〃・	D155
3	〃 灯明皿	8.1	4.0	2.0	〃	鉄釉、糸切り底	〃・	D151
4	〃	5.9	4.4	1.6	〃	〃	〃・	D153
5	〃	6.6	4.0	2.0	暗緑色	〃	〃・	D152
6	〃	5.7	4.0	1.8	〃	〃	〃・	D154
7	〃 ほう烙	14.8	--	--	赤褐色		〃・	D162
8	〃	--	--	--	〃		〃・	D165
9	〃	--	--	--	〃	柄の部分のみ	〃・	D163
10	〃	--	--	--	〃	〃	〃・	D164
11	土師質 灯明皿	6.4	3.6	1.8	素焼	底部：回転糸切り		D 91

no	器種・器形	口径	底径	器高	釉色	文様・特徴	産地・年代	登録
12	〃 皿	11.9	7.2	2.6	〃	〃		D169
13	〃	12.0	6.1	2.8	〃	〃		D166
14	〃	10.6	6.2	2.3	〃	〃		D167
15	〃	9.0	5.0	1.9	〃	〃		D168
16	〃	9.0	5.2	1.8	〃	〃		D170
17	〃	8.2	4.7	1.7	〃	〃		D171
18	〃	8.5	5.0	1.9	〃	〃		D172
19	〃	7.0	3.6	2.0	〃	〃		D181
20	瓦	--	--	--	いぶし	凹面：布目、ミガキ		D186
21	土人形（犬）	--	--	--	素焼			D185

第62図　小堤城跡出土遺物（13）近世11



No.	登録NO	器種	出土地点・層位	口径	底径	特徴	備考	年代
1	D－137	粘板岩製 砥石	１０１号井戸跡					
2	D－188	〃	〃					
3	D－189	〃	〃					
4	D－192	ガラス製 玉	〃					
5	D－207	鉄製 杵	〃			ねじりを加える		
6	D－208	〃 角釘	〃					
7	D－209	〃	〃					
8	D－210	〃	〃					
9	D－211	〃	〃					
10	D－212	〃	〃					
11	D－205	鉄製 鎌	〃					
12	D－206	〃	〃					
13	D－198 D－199	煙管 雁首 吸い口	〃					
14	D－195	〃	〃					
15	D－193	銅製 匙	〃					
16	D－196	〃 ？	〃					
17	D－200	銅 銭	〃			寛永通寶		
18	D－201	〃	〃			〃		
19	D－202	〃	〃			〃		
20	E－1	土師器 高台坏	１０２号井戸跡		7.0	底部糸切り		平安時代
21	E－27	縄文土器 深鉢	ピット 106			隆沈線文		大木８ｂ
22	E－20	〃	ピット 1			〃		〃
23	E－33	〃	ピット 39			〃		〃
24	D－1	〃	土壙 101			地文ＬＲ・縦回転		

第63図　小堤城跡出土遺物（13）近世11、その他

Ⅴ　考察

舘南囲遺跡・小堤城跡の調査では、舘南囲遺跡において古代・中世の遺構・遺物が、小堤城跡では、中世・近世の遺構・遺物がそれぞれ発見された。ここでは舘南囲遺跡の古代の遺構・遺物と、舘南囲遺跡・小堤城跡の中世の遺構・遺物について考察を加える。

1．舘南囲遺跡の古代の遺構と遺物について

古代の遺物には土師器・須恵器の他に刀、鑿、砥石などがある。以下土師器・須恵器について検討し、遺構の年代や集落構成について考察を加えたい。

(1)　土師器の特徴と類別

出土した土師器には坏、碗、甕、鉢、甑等の器種がある。ここでは坏と甕について形態・器面調整から検討したい。

〈坏〉製作にロクロを使用していないもの（A類）と使用したもの（B類）があり、器形、器面調整の違いによりさらに細分される。

ＡⅠ類：丸底で、体部がなだらかに内湾し、口縁部に軽い稜が形成されるもの。器面調整は外面口縁が幅の狭いヨコナデ、体部下半がヘラケズリ後ヘラミガキで、内面はヨコナデ、ヘラミガキで非内黒である。外面口縁部に赤彩の残るものがある。

Ⅱ類：丸底で、体部から口縁まで内湾しながら外傾するもの。器面調整は外面口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリ、ヘラミガキで、内面は黒色処理されている。

Ⅲ類：平底で、体部から口縁まで内湾しながら外傾するもの。器面調整は外面口縁部がヨコナデ、体部がヘラミガキで、内面は黒色処理されている。

ＢⅠ類：平底で、体部から口縁まで直線的に外傾するもの。器面調整は底部及び体部下半にヘラケズリが加えられている。

Ⅱ類：平底で、体部から口縁部が内湾気味に外傾するもの。底部付近の調整有無により、(a)底部全体を手持ちヘラケズリ、(b)回転糸切り後、体部下半や底部縁辺を手持ちヘラケズリ、(c)回転糸切り無調整、の３種がある。

Ⅲ類：平底で、体部から口縁まで直線的に外傾し、器高が低く皿状を呈するもの。底部全体が手持ちヘラケズリされている。内面は非内黒である。

〈甕〉製作にロクロを使用していないもの（A類）と使用したもの（B類）があり、器形・器面調整、法量の違いにより細分される。

ＡⅠ類：頚部が「く」字状に折れ、長胴のもの。胴部外面はハケメ、ヘラケズリされる。

Ⅱ類：頚部が「く」字状に折れ、胴部が張るもの。胴部外面はヘラケズリされる。

Ⅲ類：頚部がゆるやかに屈曲し、胴部が張るもの。胴部外面はハケメが施される。

Ⅳ類：胴部が外傾しながら立ち上がり、鉢状を呈するもの。外面はヘラケズリされる。

Ⅴ類：口縁部が短く屈曲し、胴部の張りが強いもの。胴部外面は雑なヘラナデである。

ＢⅠ類：鉢状を呈する口径 15㎝ 前後の小形の甕。胴部下半が(a)ヘラケズリされるもの(b)無調整のものがある。

Ⅱ類：長胴で口径 20㎝ 前後の大形の甕。

(2)　須恵器の特徴と類別

須恵器には坏、甕がある。ここでは坏について器形・製作技法から検討したい。

〈坏〉底部切り離しが､回転ヘラ切りのもの（A類）回転糸切りのもの（B類）の 2 種がある。

Ａ　類：体部から口縁にかけて内湾しながら立ち上がるもの。底部は一部ナデ調整されている。底径が大きく、器高が低く皿状を呈する。

ＢⅠ類：体部が内湾しながら外傾し、口縁端部が内湾しながら外傾するもの。口径に対する底径の比が、0.5 以上と大きい。

Ⅱ類：体部が内湾しながら外傾し、口縁端部が軽く外反するもの。口径に対する底形の比が 0.5 以下と小さい。

(3)　出土土器の供伴関係

分類した土器はすべて竪穴住居跡から出土したものである。住居に伴う土器の中にはカマドの構築に使用されたもの、床面上、カマド内・貯蔵穴状ピット内から出土したもの、暗渠の覆いとして転用されたものなどがある。これらは住居構築時、使用時、廃絶時の各

	土師器　坏									土師器　甕								土師器			須恵器　坏			鉄製品	石製品
	AⅠ	AⅡ	AⅢ	BⅠ	BⅡa	BⅡb	BⅡc	BⅢ		AⅠ	AⅡ	AⅢ	AⅣ	AⅤ	BⅠ	BⅡa	BⅡb	碗	鉢	甑	A	BⅠ	BⅡ		
1住					○										○		○								
2住							○								○										
3住		□								□	□														
4a住				○											○	○			○			○			
4b住						○									○	○				○			○		
4c住															○	○				○					
6住	○									○			○	○				○		○					
7住		△	○							○		○	○							○	○			○	○
10住						○	○	○												○				○	○

竪穴住居跡出土遺物の供伴関係（○印は住居に伴うもの・△印は堆積土出土・□印は住居掘り方埋土出土）

段階のものを含んでいるが、その時間差は小さいと考えられるので一括して取り扱うことにする。また、住居内堆積土から出土した土器の中には床面出土の土器と接合関係が認められるものが多く、これらも住居に伴う土器として取り扱うことにする。この他、住居掘り方埋土出土の土器については内容的に大きな相違も認められないので一括廃棄された土器と考えられるので一括して扱った。その結果、各住居間において類型の供伴関係にまとまりが認められ、大きく2つの土器群として捉えることができた。

第Ⅰ群土器

第3号住居掘り方埋土出土土器、第6号住居跡周溝内および第7号住居跡出土土器である。確認される器種には土師器坏・甕・碗・甑、須恵器坏がある。土師器はすべてロクロを用いずに製作されたものである。坏は丸底のＡⅠ・Ⅱ類と平底のＡⅢ類があり、このうち非内黒のＡⅠ類には赤彩がみられる。甕はＡⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類があり、胴部がハケメ調整のものが主体である。須恵器坏は、底部が回転ヘラ切り離しによるＡ類である。

第Ⅱ群土器

第1・4ａ・4ｂ・10号住居跡出土土器に代表される。確認される器種として土師器坏・甕・鉢・甑、須恵器坏がある。土師器はすべてロクロを用いて製作されたものである。このうち土師器甕については器形・製作技法とも佳居間での大きな相違はみられない。しかし、土師器坏・須恵器坏については、第 4ａ号住居跡出土土器とそれ以外の住居跡出土土器の相違が顕著で、これをもってⅡ群土器はさらにⅡａ・ｂ群に細別される。

Ⅱａ群土器：第4ａ号住居跡出土土器である。確認される器種として土師器坏・甕・鉢、須恵器坏がある。土師器坏は、体部が外傾しながら直線的に立ち上がるＢⅠ 類である。須恵器坏は口縁端部が内湾気味に外傾するＢⅠ類である。（第4ａ・4ｃ住居跡）

Ⅱｂ群土器：第1・4ｂ・10号住居跡出土土器である。確認される器種として土師器坏・甕・甑、須恵器坏がある。土師器坏には、体部から口縁部が内湾気味に外傾するＢⅡ類と、皿状を呈するＢⅢ類とがある。須恵器坏は口縁端部が軽く外反するＢⅡ類である。（第1・2・4ｂ、10住居跡）

(4)　出土土器の年代と問題点

前項のように竪穴住居跡出土土器はⅠ・Ⅱの2群に大別され、第Ⅱ群はさらにⅡａ・ｂ群に分けられた。ここでは、これら各土器群の編年的位置について検討していきたい。

第Ⅰ群土器

土師器は、いずれも製作に際してロクロを使用せず、坏では平底と丸底のものが共存するなどの特徴がみられる。これらの特徴から、第Ⅰ群土器の土師器は東北地方南部地域の土師器編年における国分寺下層式（氏家和典：1967）に比定される。

本遺跡が位置する宮城県南部地域における国分寺下層式期の資料は少なく宮城県名取市清水遺跡第Ⅵ・Ⅶ群土器（丹羽他：1981）が若干まとまってある程度である。国分寺下層式については細分される可能性が指摘されており（加藤・阿部：1980）、清水第Ⅵ群土器はその中でも古い段階、清水第Ⅶ群土器はその終末段階のものと考えられている。第Ⅵ・Ⅶ群土器の内容を比較すると、第Ⅵ群土器の坏は有段・有稜の丸底坏が主体で、体部外面の器面調整はヘラケズリである。甕は体部の器面調整としてハケメが多く用いられている。第Ⅶ群土器は、坏は丸底風の平底坏が主体となり、体部外面の調整技法はヘラケズリの他にヘラミガキが多用されている。甕は胴部の器面調整としてヘラケズリが多く用いられている。

これらと本遺跡第Ⅰ群土器とを比較した場合、以下のような点が指摘される。

1：第Ⅰ群土器の坏では外面の器面調整にヘラミガキがみられ、清水第Ⅶ群土器に近い。

2：第Ⅱ群土器の甕の胴部の器面調整はハケメを主体とする点で清水第Ⅶ群土器に近い。

このように本遺跡第Ⅰ群土器は清水遺跡第Ⅵ･Ⅶ群土器の両群に近い様相を示している。

共伴する須恵器坏は、回転ヘラ切り後、軽いナデ調整を加えたもので、口径に比して底径が大きく体部が内湾気味に立ち上がるものである。これと器形・法量・製作技法の点できわめて類似するものが、宮城県大和町鳥屋窯跡群出土資料（東北学院考古学研究部：1975）にみられる。鳥屋窯跡群資料については多賀城創建期前後の窯跡資料との比較検討により、8 世紀前半の年代が与えられており、本遺跡の坏もほぼ同様の年代的位置付けが可能であろう。

以上のことから、第Ⅰ群土器の土師器は国分寺下層式期でも中ごろのものであると考えられる。実年代については明確な根拠を欠くが、共伴する須恵器坏の年代観から 8 世紀前半頃と推定され本遺跡第Ⅰ土器群はおおむね 8 世紀前半の年代を与えることができる。

第Ⅱ群土器

土師器は、製作に際しいずれもロクロを使用している。この特徴から、第Ⅱ群土器の土師器坏は東北地方南部地域の土師器編年における表杉ノ入式（氏家：1957）に比定される。ただし、前項において述べたように各住居跡出土の土師器坏･須恵器坏に相違が認められ、第Ⅱ群土器は、Ⅱａ、Ⅱｂ群に分けられた。両土器群の関係は、Ⅱｂ群土器の出土した第4ｂ号住居跡が、Ⅱａ耕土器の出土した 4ａ号住居跡を切って構築されていることから、Ⅱａ群土器はⅡｂ群土器より古い、という新旧関係が遺構の重複関係から確認できる。

両土器群の内容を、坏型土器を中心に比較すると以下のような指摘ができる。

1：いずれも土師器坏の底部周辺に手持ちヘラケズリの再調整が施されるものが多い。

2：土師器坏の器形を比較すると、Ⅱａ群土器は体部が直線的に外傾するが、Ⅱｂ群土器は体部・口縁部が内湾しながら外傾するものである。

3：土師器坏の底径を、口径を１とする底径割合で比較すると、Ⅱａ群土器の平均は１：0.44、Ⅱｂ耕土器の平均は１：0.41 であり、Ⅱａ耕土器の底径が大きい。

4：須恵器坏の器形を比較すると、Ⅱａ群土器は口縁端部が内湾しながら外傾するが、Ⅱｂ群土器の口縁部は軽く外反するものである。

以上の属性の差は、時間差に起因するものと考えられる。そこでこれらの位置付けを、周辺の他遺跡の使用と比較しながらおこなってみたい。宮城県南部地域における表杉ノ入式期の主な土器群として、近隣の資料としては本遺跡の南約 2㎞に位置する亘理町宮前遺跡の第Ⅳ群土器（丹羽：1983）・名取市清水遺跡第Ⅷ群土器（丹羽他：1981）・白石市青木遺跡 21 号住居跡出土土器（小川：1980）・同家老内遺跡第 2 号住居跡出土土器（真山：1981）・蔵王町東山遺跡土器溜出土土器（真山：1981）・同安久東遺跡第 2 号住居跡出土土器（土岐山：1980）などがある。これらの表杉ノ入式期の資料については坏を中心とした分析がなされ、土器の連続的な変遷過程が検討されている（丹羽：1983）・（加藤：1989）。その具体的な変遷過程は、器形変化・底部周辺の再調整・口径に外する底径比などを指標として以下のような新旧関係が想定されている。

宮前遺跡第 20 号住居跡出土土器→青木遺跡第 21 号住居跡出土土器→東山遺跡土器溜出土土器（→家老内遺跡第 2 号住居跡出土土器）→安久東遺跡第 2 号住居跡出土土器

これらの検討結果を参考にすると、本遺跡第Ⅱａ・ｂ群土器は土師器坏の底部周辺に手持ちヘラケズリの再調整が施されるものが大半を占めることや口径に対する底径比が 1：0.45 前後であることなどからいずれも東山遺跡土器溜出土土器の段階のものと考えられる。したがって、遺構の重複関係から確認できる第Ⅱａ・ｂ耕土器の新旧関係は、この段階の中での変遷と捉えることができる。

第Ⅱａ群土器は、土師器坏、須恵器坏の器形からみると青木遺跡第 21 号住居跡の段階に近いものと考えられ、東山遺跡土器溜の段階の中でも古い段階のものとみられる。これに対し、第Ⅱｂ群土器は、「東山遺跡土器溜出土土器と一部共通した特徴をもつと同時に相違する新しい特徴をもっている」家老内遺跡第 2 号住居跡出土土器に近い内容であり、東山遺跡土器溜の段階の中でも新しい段階のものとみられる。

実年代については東山遺跡土器溜から「平城宮跡ＳＤ650Ａ様式に類似する」灰釉陶器が出土していることから、これらの土器は 9 世紀中葉前後に位置付けられるものと思われる。

(5) 遺構の特徴とその年代

本遺跡で検出された古墳時代の遺構は土壙1基、古代の遺構は竪穴住居跡9軒、土壙2基である。

古墳時代の土壙はその形態、伴出土器から塩釜式期の土壙墓と考えられる。

古代の遺構についてみると、竪穴住居跡は伴出土器から国分寺下層式期が2軒（第6・7号住居跡）、表杉ノ入式期が6軒（第1・2・4ａ・4ｃ・10住居跡）、国分寺下層式期以降のものが1軒（第3号住居跡）である。竪穴住居跡はほとんどが削平を受けており、残存状態は良くない。また、国分寺下層式期の住居はカマドを北側に付設するのに対して、表杉ノ入式期の住居はカマドを東壁に付設する傾向がみられる。土壙（第14・21号土壙）は伴出土器から表杉ノ入式期に所属すると思われる。また、東西に長く調査区を設定しているために、古代の集落構成については不明であるが、概ね、国分寺下層式期の住居は調査区西側の丘陵裾に立地し、表杉ノ入式期の住居はそれよりも東側の乎堰面に立地する傾向が見られる。

引用・参考文献（古代）

氏家和典　（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉還暦記念論文集』
小笠原好彦　（1976）：「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏型土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所
小川淳一　（1980）：「青木遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会
加藤道男　（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ
加藤道男・阿部博志（1980）：「観音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会
土岐山武　（1980）：「安久東遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会
東北学院大学考古学研究部（1975）：鳥屋窯跡群三角田南地区報告書
丹羽　茂ほか　（1981）：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会
丹羽　茂　（1983）：「宮前遺跡－朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集　宮城県教育委員会
真山　悟　（1981）：「東山道跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会
（1981）：「家老内遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会

2．中世以降の遺構について

(1)　舘南囲遺跡・小堤城跡の中世の遺構について

今回の調査で発見された舘南囲遺跡・小堤城跡の中世の遺構群は、出土遺物の年代観からみて､13 世紀後半から 14 世紀代を中心とした時期のものと推定される。両遺跡の特徴を概括すると、小堤城跡は土塁を巡らす城館跡、舘南囲遺跡は城館に隣接する屋敷地と考えられる。そこで、以下では調査によって得られた知見をもとにいくつかの問題点を指摘し考察を加えたい。

舘南囲遺跡の遺構の構成

舘南囲遺跡の中世の遺構群は調査区の東西端部を除くほぼ全域で発見された。これら遺構の分布状況をみると、南北方向の溝跡・道路跡によって区画されたいくつかの敷地が展開し、それぞれの敷地に建物跡・井戸・土壙が分布していたものと推察される。ただし、今回の調査区が東西に狭長なものであったため、具体的な屋敷地の規模や形態は明確でない。

[敷地とその広がり]

中世の遺構は東端が 1・2 号溝跡、西端が 20 号溝跡によって限られた約 140mの間に分布している。

その間にはさらに 20～25m間隔で南北方向の溝跡や 1 号道路跡がみられ、これらを境として柱穴や井戸・土壙の分布はまとまりをもつ傾向がみられる。とくに 6・7 号溝跡、23・24 号溝跡、1 号道路跡は重複する遺構がないことから、遺跡の存続期間を通して敷地の区画施設であったと考えられる。一方、3・4 号、12 号溝跡は数は少ないながら柱穴などが重複しており、限られた時期に各敷地内を細分するために設けられたものとみられる。

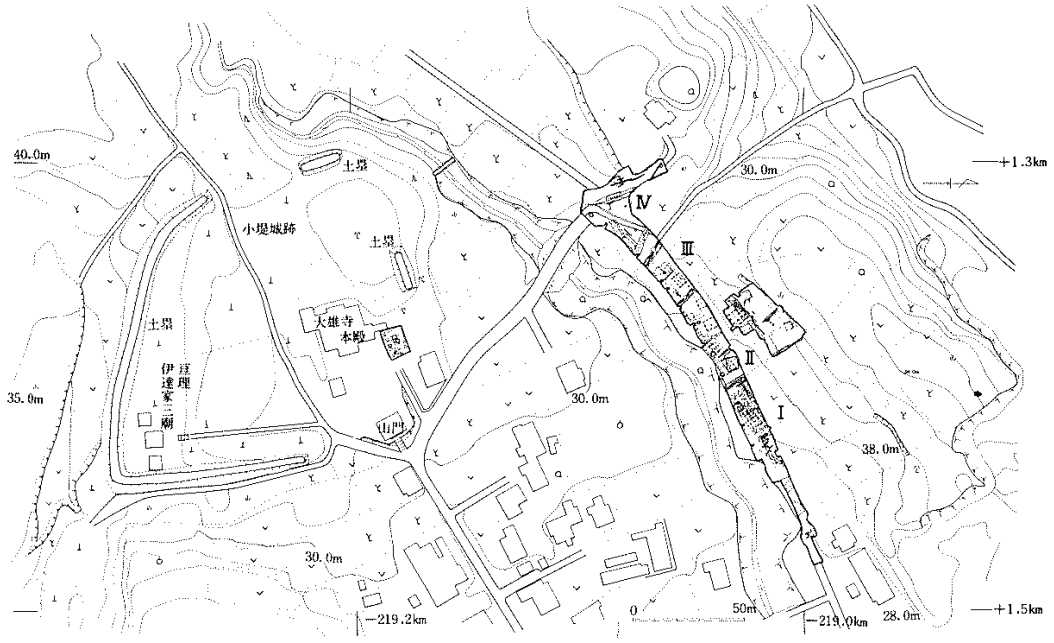
主要な区画施設と考えられる溝・道路間の距離を計測すると、2 号溝と 6・7 号溝の間が約 45m、6・7 号溝と 23・24 号溝の間も 45m、23・24 号溝と 1 号道路の間は約 20m、20 号溝と 1 号道路の間も約 20mである。これら四地域が主な敷地の単位と推定される。そこでこれらを東から第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区と仮称し、その内容を検討する。なお、第 4 次調査区は位置的関係からⅡ区に含まれるものと考えられるのでこれを第Ⅱ地区北部とする。

第Ⅰ～Ⅳ地区の広さをみると、敷地の南北の広がりは不明確であるが、第Ⅰ・Ⅱ地区は東西 45mと広く、1 号道路跡に面する第Ⅲ・Ⅳ地区の東西幅は 20mと狭い。調査地は全体に南向きの緩傾斜地となっており、両側は沢地を挟んで小堤城東側の平坦地と向き合い、北側は尾根を経て沢地へと急激に下っていることから、沢から尾根筋までのおよそ 50～60mの間が敷地の範囲と推定される。

[遺構の配置]

第Ⅰ～Ⅳ地区の四つの敷地の中で、第Ⅰ地区の西部と第Ⅱ地区北部では規模の大きな建物跡が多数重複している。第Ⅰ地区の9・10号建物跡、第Ⅱ地区の34・35号建物跡などである。これらはいずれも廂・縁や束柱をもつもので、とくに10・35号建物跡は同位置で同規模の建て替えが3回繰り返されている。また、陶磁器類とくに中国産の磁器の出土はこれらの建物跡周辺に集中していることから、これらが第Ⅰ・Ⅱ地区の主要な建物であったと考えられる。

一方、第Ⅰ・Ⅱ地区の他の地域や第Ⅲ・Ⅳ地区での建物の配置は希薄で、同位置で継続した建物はみられない。また、竪穴遺構・井戸跡・土壙は各地区の縁辺部に位置しているようである。調査面積の広い第Ⅱ地区について具体的な遺構の配置をみると、溝によって区画された敷地の中央西よりに主屋とみられる建物が位置し、その北西側に竪穴遺構・土壙が分布している。主屋の西側や南側には附属的な建物が配置され、南東隅に井戸が設置されている。主屋の裏手にあたる丘陵の南斜面では遺構が確認されなかったが、畑地などとして使用された可能性も考えられよう。



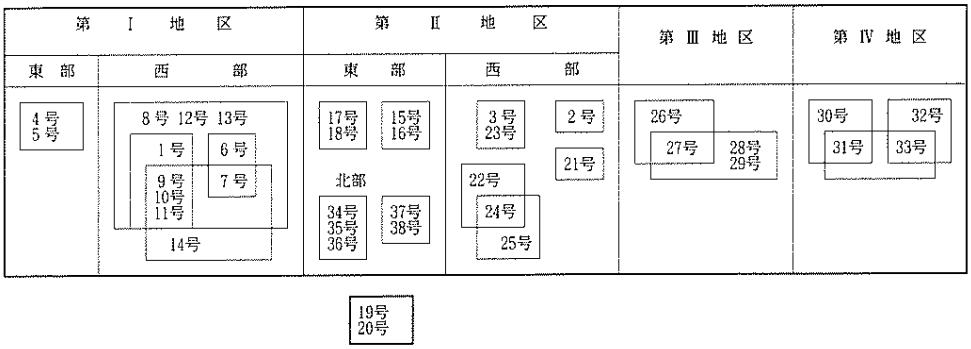
遺構配置図

[遺構の変遷と年代]

遺構群がどの様に変遷していったかを、建物跡の重複関係を中心に整理してみる。

重複する建物跡はいくつかのグループに分かれるが、各グループは溝跡もしくは道路跡によって隔てられているものが多い。これを整理すると以下のようになる。

掘立柱建物跡重複関係　表



このうち柱穴相互の切り合い関係から新旧関係がわかるのは3例のみである。(9号より10・12号が、35号より36号が新しい)この他は具体的な新旧関係を把握できない。

重複する建物の多い第Ⅰ地区西部では同位置・同規模の建て替えを含め11棟の建物が重複し、第Ⅱ地区北部では5棟が重複している。これら2地点以外の地区では2〜3棟の重複が確認される。（ただし、これらは建物として認定したもののみの数であり、この他、組合せ不明の柱穴も多く、重複する建物の実数はさらに多いと推定される。）

建物の新旧関係が不明なため、並存した建物を識別することは困難であるが、第Ⅰ地区西部と第Ⅱ地区北部では9・10号建物跡、34・35号建物跡などの規模が大きく廂・縁や束柱を有する建物跡が継続的に建て替えられているのに対して、他の地域での建物の改廃は断続的であることがわかる。

建物跡の年代については、9・10号建物跡や34・35号建物跡は柱穴出土の陶磁器類から、14世紀初頭前後のものと推定される。他の建物跡については年代を推定する根拠がないが、出土遺物の中に13世紀前半代まで遡るものや15世紀代に下るものは含まれていないこと、あるいは9・10号建物跡や34・35号建物跡との位置関係や重複の状況から、年代的に大きく隔るものはないと考えられ14世紀代を中心とした年代のものとみておきたい。

竪穴遺構・1・2号井戸跡、2〜4・6・7・10〜13・16〜20・22〜24号土壙・溝跡などは出土遺物などから建物群に附属した遺構群とみておきたい。

遺構群の存続期間の下限については明確にできないが、20号溝跡が埋没した後の火葬遺構や、1号道路跡の側溝が埋まりきった後の2道路跡など時期の下る遺構が遺跡の変遷を

考える上で重要と考えられる。20 号溝跡と 2 号道路跡については出土遺物がなく年代を特定できないが、中世のある時期に舘南囲遺跡の屋敷地が墓域もしくは葬送の地に変化した状況がうかがえる。

なお、南北方向の 1〜7 号溝跡は現況の畑地の地境とほぼ一致するものである。同様に 1 号道路跡は現在の農道に重複した位置で検出されている。（1 号道路跡は現在の農道下からやや西に偏した位置にあり路面幅は 6mで農道の 2 倍の広さがある）道路の位置や一部の敷地の地割については現在にいたるまで畑地の地境としてその痕跡が残されていたことが確認される。

[建物跡の特徴]

34・35 号建物跡にみられるように建物の建設にあたって地面の整地を行っている。具体的には建物北側の高い方の斜面を削り出し、南側の低い方に盛土をして平坦地を造成し、北辺には雨落ち溝とみられる 26 号溝が設けられている。他の建物も同様の立地条件にあることから、規模の差はあれ類似した整地作業を経て建物を建てていると考えられる。

次に、建物の規模や構造についてみてみる。遺構の残りが悪く、また調査区が狭いため全容のわかるものは少ないが以下のような特徴が指摘される。

建物跡の方向は、方位や地形の関係から東西棟が大半である（1〜3 号建物跡は南北棟でいずれも掘り形が方形で、他の建物に比べ大きく古代の建物である可能性もある）。

建物跡の規模・構造には以下のような種類がみられ、桁行 5 間、梁行 2 間もしくは桁行 3 間、梁行 2 間で南北に廂・縁が付き束柱をもつ建物跡が多い。

Ａ：桁行 5 間、梁行 2 間の建物跡

1；廂・縁有；床束有（Ⅱ区 35 号、Ⅳ区 32 号）

；床束無（Ⅰ区 4・13 号、Ⅱ区 37 号）

2；廂・縁無；床束有（Ⅱ区 17 号）

；床束無（Ⅰ区 12 号）

Ｂ：桁行 3 間、梁行 2 間の建物跡

1；廂・縁有；床束有（Ⅰ区 6・7・9・10 号、Ⅱ区 19 号）

；床束無（Ⅰ区 5・8 号、Ⅱ区 18・20・21 号、Ⅲ区 27 号、Ⅳ区 31 号）

2；廂・縁無；床束有（Ⅱ区 15 号、Ⅲ地区 28 号）

床束無（Ⅰ区 11・14 号、Ⅱ区 16・17 号、Ⅲ区 26 号）

Ｃ：桁行 2 間、梁行 1 間の建物跡

；廂・縁無；床束無（Ⅱ区 24 号）

桁・梁行の柱間寸法には 5〜10 尺があり、廂・縁の出は半間である。

遺構名	調査区	構造・特徴	間数（桁×梁）	柱間寸法　東より、南より（m）	切り合い	方向	出土遺物
1号建物	2－2区 東側	南北棟　床束 北端部は調査区外	桁行　3間 梁行　2間	西桁　1.8+1.8+1.8 南梁　1.8+1.5		N－44－W	
2号建物	3－1区	南北棟、床束 北部は調査区外	桁行　2間以上 梁行　2間	西桁　2.1+2.1+（ ） 南梁　2.1+2.1		N－26－W	
3号建物	〃	南北棟、床束 北部は調査区外	桁行　2間以上 梁行　2間	東桁　1.5+1.5+（ ） 南梁　2.1+2.1		N－24－W	
4号建物	2－1区	南廂 北部は調査区外	桁行　5間 梁行　1間以上	南桁　2.7　+2.4　+2.4+2.4+2.7 西梁　1.5+3.0+（ ）		N－10－W	S1.E4中世陶器　甕（C-91）
5号建物	〃	南廂 北部は調査区外	桁行　3間 梁行　2間以上	南桁　2.7+2.7+2.7 西梁　0.9+4.0+（ ）		N－55－W	
6号建物	〃	南廂・床束	桁行　3間 梁行　2間	北桁　2.1+2.1+2.1 西梁　1.5+2.4+2.1		N－22－W	S3.E1 土師器甕破片　S3.E4土師質土器　細片 S1.E4　〃
7号建物	〃	南廂？・床束 北側柱穴底面礎石	桁行　3間 梁行　2間	北桁　2.1+2.1+2.1 西梁　1.8+2.1+1.8		N－19－W	S2.E1土師器　細片　S1.E3土師質土器　細片
8号建物	〃	南廂 東半分削平	桁行　3間 梁行　1間以上	北桁　2.0+2.0+2.0 西梁　1.2+（ ）		N－22－W	
9号建物 同位置・同規模で建て替え	2－2区 西側	南・北の二面廂 床束	桁行　3間 梁行　2間	北桁　2.7+2.7+2.7 西梁　1.2+2.0+2.0+1.2	SB10より古 SB12より古	N－18－W	S4.E3須恵器　甕破片　S5.E3土師質土器細片 S4.E4中世陶器　　擂鉢（C-102） S4.E2　〃　　〃（C-173） S1.E2青　磁　　碗　（C-99）
10号建物 同位置で建て替え	〃	南・北の二面廂 床束	桁行　3間 梁行　2間	北桁　3.0+3.0+3.0 西梁　1.2+1.8+2.4+1.2	SB09より新 SD05より古	N－22－W	S2.E4須恵・土師　破片　S2.E2土師質土器皿 S1.E1白　磁　　壺　（C-97） S1.E2土師質土器・鉄製品 S1.E4土師質土器　細片
11号建物	〃		桁行　3間 梁行　2間	北桁　2.5+2.5+2.5 東梁　1.8+1.8		N－17－W	S1.E2土師質土器　細片
12号建物	〃	S1.E3・S2.E1 底面に礎石	桁行　5間 梁行　2間	南桁　2.1+2.1+2.1+2.1+2.1 東梁　1.5+1.5		N－18－W	S1.E6鉄滓
13号建物	〃	南廂	桁行　5間 梁行　1間以上	北桁　2.1+1.8+1.8+1.8+2.1 東梁　1.8+1.8		N－17－W	S3.E4土師質土器　細片
14号建物	〃		桁行　3間 梁行　1間	北桁　1.8+1.8+1.8 東梁　3.6		N－9－W	S1.E4土師質土器　細片
15号建物	2－3区 東側	床束	桁行　3間 梁行　2間	北桁　2.1+2.1+2.1 西梁　2.1+1.8		N－18－W	
16号建物	〃		桁行　3間 梁行　2間	南桁　2.1+2.1+2.1 東梁　2.4+2.1		N－11－W	
17号建物	2－3区 西側	床束	桁行　5間 梁行　2間	南桁　2.1+2.1+2.1 西梁　3.9		N－26－W	
18号建物	〃	北廂	桁行　3間 梁行　2間以上	北桁　2.4+2.4+2.4 東梁　(2.1)　+3.0		N－13－W	S3.E2土師器　坏 S3.E4須恵器　坏
19号建物	〃	床束	桁行　3間 梁行　2間	北桁　2.4+1.8+1.8+2.4 西梁　2.1+3.3		N－20－W	S1.E1土師質土器　細片 S1.E3　〃
20号建物	〃	南廂 西1間目間仕切	桁行　2間 梁行　2間	北桁　3.0+2.1 東梁　2.4+2.4+1.5		N－28－W	
21号建物	3－①区	北廂 南部は調査区外	桁行　3間 梁行　1間以上	北桁　1.5+1.8+1.8 西梁　0.6+（ ）		N－20－W	N1.E3土師器
22号建物	〃	北廂 南部は調査区外	桁行　2間以上 梁行　1間以上	北桁　2.1+2.1+（ ） 西梁　0.9+（ ）		N－25－W	
23号建物	〃	東南部削平	桁行　2間以上 梁行　2間	北桁　4.5 西梁　2.1+2.1		N－23－W	N1.W1土師器　甕
24号建物	〃		桁行　2間 梁行　1間	北桁　2.4+1.8 西梁　2.7		N－17－W	S1.E1土師質土器　細片
25号建物	〃	東部削平	桁行　1間以上 梁行　2間	北桁　（ ）+2.1 西梁　1.8+1.8		N－21－W	
26号建物	3－2区 東側		桁行　3間 梁行　2間	北桁　1.8+1.8+1.8 西梁　3.6		N－25－W	S1.E3土師質土器　細片
27号建物 a	〃	東南部削平	桁行　3間 梁行　2間	北桁　2.7+2.4+2.4 西梁　3.9		N－30－W	S1.W1中世陶器　　甕　（C-107）
b 建て替え		〃	〃	北桁　2.7+2.4+2.4 西梁　3.9		N－33－W	N1.E2土師器　　破片
28号建物	3－2区 西側	床束	桁行　3間 梁行　2間	北桁　1.5+2.1+1.8 東梁　1.5+1.5		N－33－W	N1.E4須恵器　甕 鉄　釘（C-109）
29号建物	〃		桁行　3間 梁行　1間	北桁　2.1+2.1+2.1 西梁　3.3		N－33－W	N2.E1土師質土器　小皿（C-108　　）
30号建物	3－3区 東側	北廂 南部は調査区外	桁行　3間 梁行　1間以上	北桁　2.1+2.1+2.1 東梁　1.2+2.1+（ ）		N－33－W	N2.E2須恵器　　甕
31号建物	〃	北廂・東部消失 南部調査区外	桁行　1間以上 梁行　1間以上	北桁　2.4+（ ） 西梁　0.9+（ ）		N－45－W	N1.W2砥石　　（C-110）
32号建物	3－3区 西側	北廂・床束 南東部調査区外	桁行　5間 梁行　3間以上	北桁(1.8)+1.8+1.8+1.8+1.8 西梁　0.9　+2.1+(2.1)		N－15－W	N1.W3土師質土器　細片
33号建物	〃	西南部削平	桁行　2間以上 梁行　1間	北桁　2.1+2.1 東梁　3.0		N－37－W	
34号建物	4　区 西側	北廂・床束 南西部調査区外	桁行　3間以上 梁行　2間以上	北桁　3.0+2.1+2.1+（ ） 東梁　1.2+2.1+2.1+（ ）		N－23－W	白磁（C-116）
35号建物 同位置・同規模で建て替え	〃	北廂・床束 南西部調査区外	桁行　5間 梁行　3間	北桁　1.5+2.4+2.4+2.4+2.4 西梁　1.5+1.8+2.4	SB36より古	N－23－W	
36号建物	〃	北廂	桁行　1間 梁行　2間	北桁　4.8 東梁　1.2+1.5+1.5		N－24－W	S1.E2土師質土器　細片
37号建物	4　区 東側	南・北の二面廂 南東部調査区外	桁行　5間 梁行　3間	南桁　2.1+2.1+2.1+2.1+2.1 東梁　1.2+3.6+1.2		N－23－W	S1.E6
38号建物	〃	北廂 南東部調査区外	桁行　1間以上 梁行　1間以上	北桁　2.2+（ ） 東梁　0.9+（ ）		N－20－W	S3.E4土師質土器　細片

掘立柱建物跡一覧表

小堤城跡の概要

「亘理町史・上巻」によると、小堤城跡は中世において亘理地域を領有した武石（亘理）氏の居城跡と推察されている。その論拠として武石氏の来歴や、近世亘理要害との位置関係、称名寺の鎌倉期の作とされる「黒本尊」の由来などが詳述されている。しかし、いずれにしろ小堤城跡に関する記録は残されていないし、これまで小堤城跡に関わる具体的な遺構や遺物についての調査は皆無であった。

以下では、今回の発掘調査成果に遺跡周辺の現況の踏査によって得られた知見をあわせ、これまで実態が不明確であった小堤城跡について検討する。

[武石氏の系譜]

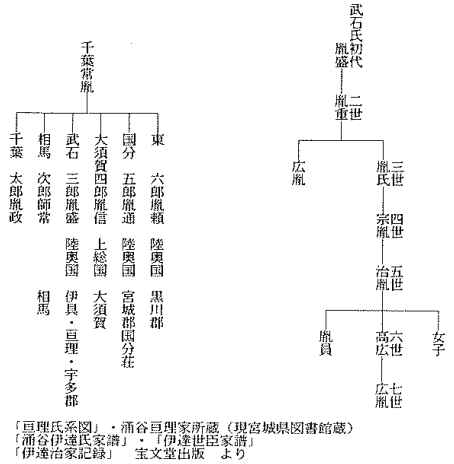
小堤城跡の館主とされる武石氏は乾元元年（西暦 1302 年）四世・宗胤が下総から亘理の地に居を移して後、天正十九年（1581 年）十六世、亘理元宗の代に亘理から涌谷に移るまでの 279 年間、亘理に居を構えたことになる(「伊達世臣家譜」―「涌谷伊達氏家譜」、涌谷亘理家所蔵（現宮城県図書館蔵）「亘理氏系図」）。

この間、南北朝の争乱初期の 14 世紀前半頃には南朝方についた六世武石四郎高広（武石二郎左ェ門尉）が陸奥国の引付衆および伊具・亘理・宇多・行方郡の検断に任ぜられるが、延元二年（1337 年）北畠顕家が泉州石津にて敗死した際、武石高広も戦死している。

延元四年（1339 年）に足利高氏が征夷大将軍に任ぜられると、武石氏七世広胤は上洛し足利高氏より亘理・伊具・宇多を安堵され、氏号を武石氏から亘理氏に改め、以後は北朝方として活動している。

このように武石氏は 14 世紀前半を中心とした時期以降、陸奥南部の国人領主として活発な動きをしていたことがうかがえる。

武石氏の系譜



「亘理氏系図」・涌谷亘理家所蔵（現宮城県図書館蔵）
「涌谷伊達氏家譜」・「伊達世臣家譜」
「伊達治家記録」　宝文堂出版　より

武　石　氏　関　係　年　表
1189（文治五年）：千葉常胤、平泉における論功行賞により海道筋（関東東北地方の太平洋側沿岸）に多数の所領を拝領し、子息に分配。
1190（建久元年）：武石三郎胤盛は　陸奥国　伊具・亘理・宇多郡を拝領する。
1302（乾元元年）：武石宗胤、亘理に居を移す。
1314（正和三年）：武石氏四世、宗胤没
1331（元弘元年）：武石氏五世、治胤没
1333（元弘三年）：建武の新政 北畠顕家、多賀国府に入る。 武石二郎左エ門尉が引付衆に任ぜられる。
1335（建武二年）：武石上総介胤顕（二郎左エ門尉と同一人物か）、伊具・亘理・宇多・行方の検断に任ぜられる。（陸奥国宣）
1337（延元二年）：北畠顕家、霊山に移る。石塔義房、多賀国府に入る。 北畠顕家、泉州石津にて敗死。同じく武石氏六世、高広も戦死。
1339（延元四年）：足利高氏、征夷大将軍に任ぜられる。
1339（延元四年）：武石氏七世広胤、上洛し足利高氏より亘理・伊具・宇多を安堵される。 氏号を武石から日理に改める。
1340（興国元年）：北畠顕家の弟、顕信石巻より葛西城に入る。 北畠顕信、栗駒郡三迫において石塔義房と戦闘。 武石広胤、石塔（北朝）方につく。
1344（興国四年）（康永二年）：武石広胤、石塔義房より宛行状を与えられる。 「亘理郡坂本郷半分と長戸呂村を同郡鷺谷郷の替わりとして、また軍功の賞として宛行う」
1351（正平六年）：北畠顕信の次子、守親、宇津峰に拠り、吉良良貞を攻める。 武石広胤、吉良（北朝）方として刈田郡倉本川（白石川）・舟迫で北畠顕信軍と戦う。 広胤の兄、武石四郎左エ門尉戦死。
1381（永徳元年）：武石広胤没。
1381（永徳元年）：武石氏八世行胤、亘理彦四朗、刈田郡にて伊達宗遠と戦う。
1393（明徳四年）：武石行胤没。
1412（応永十九年）：九世重胤、亘理彦五郎、国分右馬充盛胤と戦い戦死。
1416（応永二三年）：十世胤茂、国分盛経と戦いこれを討つ。
1481（文明十三年）：十一世茂元没。（柴田・名取を領す）
1504（永正元年）：十二世元胤没。
1531（享禄四年）：十三世宗元没。（伊達氏の麾下となる）
1536（天文五年）：十四世宗隆、伊達植宗の部下として大崎に出兵。
1543（天文十二年）：十五世綱宗（伊達植宗の子）、懸田の戦いで戦死。
1556（弘治二年）：十四世宗隆没。 十六世元宗、（伊達植宗の子）。
（元亀元年）：中野宗時、伊達輝宗に背き、十七世重宗、刈田郡に出陣。
（天正十九年）：十六世元宗、十七世重宗、涌谷に移る。

[発見された遺構の年代]

今回の小堤城跡の調査では、整地層 Ⅰ～Ⅲと、各整地層の上面から掘り込まれた柱穴・竪穴遺構・土壙などが確認された。調査範囲が狭いため具体的な建物の構造や遺構の配置はなお不明であるが、整地層 Ⅰ・Ⅲやこれらの上面から掘り込まれた柱穴・土壙群は、出土した陶磁器や土師質土器が舘南囲遺跡出土のものと共通した特徴を有することから、13 世紀後半から 14 世紀代を中心とした年代の遺構群と考えられる。

小堤城跡自体に関する文献史料がないため、その館主についてはなお検討を要するが、武石氏の亘理への入部と小堤城跡の成立・舘南囲遺跡の中世の屋敷群の形成時期は密接な関連があったと考えられる。

[小堤城跡の構造]

小堤城跡の周囲には幅が 5～8m、高さ 2～3mで断面が逆台形の土塁状の高まりが平面形が東を下底とする台形状に断続的に巡っている。（この高まりの性格や構築年代は明かでないが以下では土塁と呼んで記述をすすめる。）土塁南辺の北東隅は地形が改変されているが、この部分では以前から土塁が途切れていたようで、ここが土塁内部への出入口であったと考えられる。土塁の外周の地形をみると、各辺の土塁外周にはわずかな平坦地がみられるが、その外側は西側は堀切、北・南・東側は沢や低地となりいずれも地形的に限られていることから、これが館跡の範囲と推定される。

土塁内部の現況の地形は、南辺から東辺にかけての土塁内側が一段高く、他はほぼ平坦である。土塁に囲まれた内部の北東隅にあたる今回の調査地点では、厚さが約 1mの整地層が確認されており、東側にいくにつれこの層は厚くなることが確認されている。この調査結果からみて、土塁内側の平坦面は南側から東側にかけて 2m近くの厚い整地をおこなって造成されたもので、土塁はその縁辺に巡っているものとみられる。したがって、整地層Ⅱ・Ⅲの形成年代から、これらの平坦面、土塁の造成も中世に遡る遺構である可能性が高い。

遺跡の構成

舘南囲・小堤城跡の両遺跡は発見された遺構・遺物の内容からみて 13 世紀末を前後する時期に領主の居所である城館とその周囲の屋敷地として整備され、14 世紀代に展開した一連の遺跡と考えることができる。小堤城跡内部の様相はなお不明な部分が多いが、その周囲の屋敷地とみられる舘南囲遺跡では溝や道路によって区画されたいくつかの屋敷地に、廂や縁をもつ建物を中心として付属の建物や井戸・土壙などが分布している状況が明らかになった。

また、この屋敷地の西側には屋敷地と並存したとみられる路面幅約 6mの 1 号道路跡が

南北方向に延びている。この道路跡は南側の沢を挟んで小堤城跡の北東隅部と隣接しており、あるいは橋などを介して城館と屋敷地がつながれていた可能性も十分考えられる。さらに、舘南囲遺跡の南側に沢を挟んで位置する泉ケ入（いずみがいり）地区は小堤城跡の北東部に広がる平坦地であり、地形や立地からみてここには、舘南囲遺跡のような遺構群が存在するとみられる。

宮城県内におけるほぼ同時期の屋敷地が調査された主な例として、蔵王町持長寺遺跡（1980：黒川）、仙台市鴻ノ巣遺跡（1983：仙台市教育委員会）、多賀城市新田遺跡（1990：千葉･石川･相沢）、高清水町観音沢遺跡（1985：加藤）などがある。このうち鴻ノ巣遺跡・新田遺跡などでは溝や道路によって区画された屋敷地が調査され、舘南囲遺跡と同様に敷地内に、廂や縁をもつ建物を中心として付属の建物や井戸・土壙などが分布する状況が明らかにされている。

舘南囲・小堤城跡の両遺跡の存続期間とその下限年代については明確でないが、舘南囲遺跡西端の区画施設とみられる 20 号溝跡の堆積土上面で検出された火葬遺構や、1 号道路跡の側溝堆積土を掘り込んで構築されている 2 号道路跡などは遺跡の変容を考える上で重要である。火葬遺構と 2 号道路跡については出土遺物がなく年代を特定できないが、中世のある時期に舘南囲遺跡の屋敷地が廃絶し、墓域もしくは葬送の地に変貌した状況がうかがえる。

火葬遺構のありかたを類例をもとに検討すると、群馬県藤岡市大御堂遺跡の「火葬跡」のように中世寺院跡と密接に関連して存在するものがみられ（1992：綿貫・宮崎・津金沢・飯島）、舘南囲遺跡周辺に中世寺院跡が存在した可能性がある。栃木県足利市の鑁阿寺（ばんなじ）の例にみられるように中世領主の城館の敷地がその菩提寺へと変遷する例があることから、舘南囲遺跡が屋敷地から墓域へと変遷する背景に、小堤城が中世後期のある時期に領主の居館から寺院へと変遷した可能性も十分考えられよう。

引用・参考文献（中世・近世）

黒川利司　（1980）：「持長寺遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集　宮城県教育委員会
亀井明徳　（1981）：「14・15世紀の貿易陶磁－とくに日本出土の中国陶磁－」
「貿易　陶磁研究　NO1」 日本貿易陶磁研究会
仙台市教育委員会（1983）：「鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第23集　仙台市教育委員会
千葉・石川・相沢（1990）：「新田遺跡（第4・11次調査報告）」
多賀城市文化財調査報告書第23集　多賀城市教育委員会
綿貫・宮崎　（1992）：「群馬県藤岡市大御堂遺跡における中世埋葬遺構の検討」
津金沢・飯島　「研究紀要－9－」 群馬県埋蔵文化財調査事業団

写　真　図　版

写真図版1　遺跡周辺の空中写真

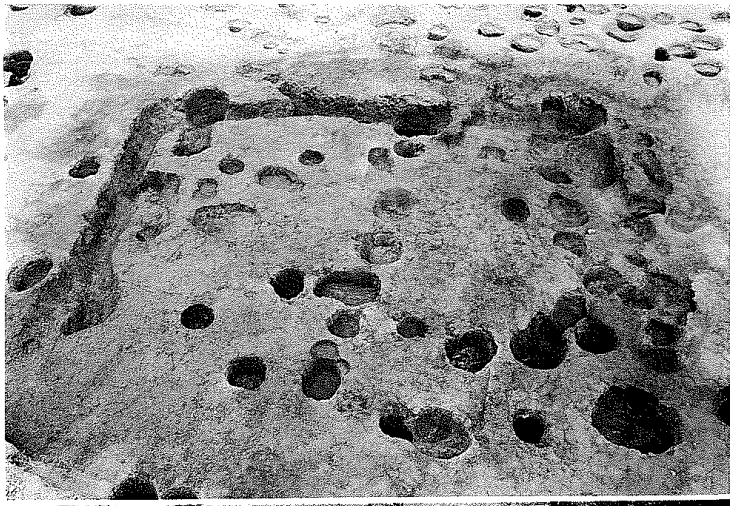
1 舘南から大雄寺を臨む

2 第1号土壙

3 第1号竪穴住居跡

図版2

1 第2号竪穴住居跡

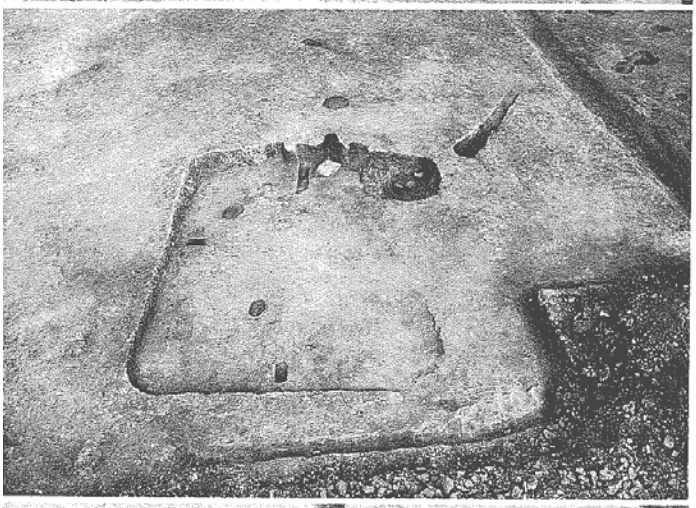


2 第3号竪穴住居跡

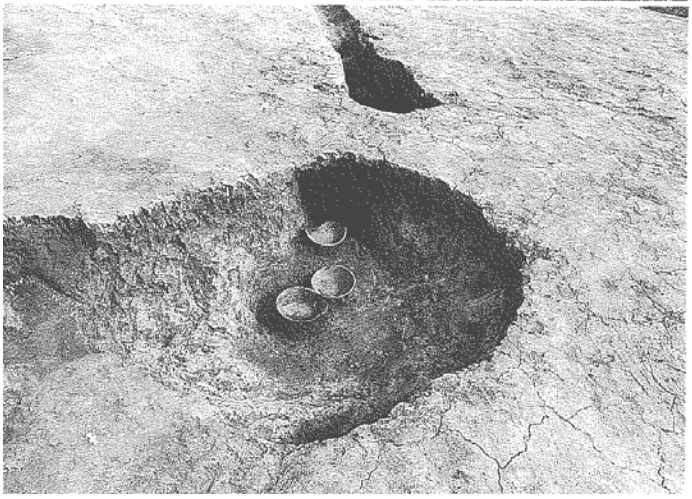
3 第4a号竪穴住居跡

図版3

1 第７号竪穴住居跡



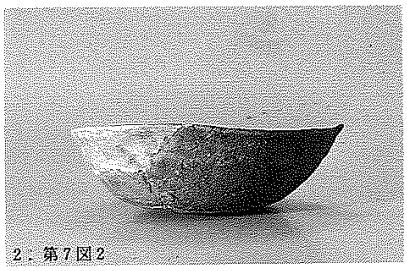
2 第10号竪穴住居跡



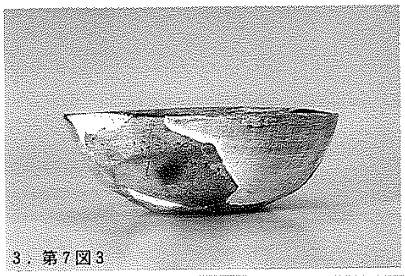
3 第10号竪穴住居跡
遺物出土状況

図版 4

1．第7図1

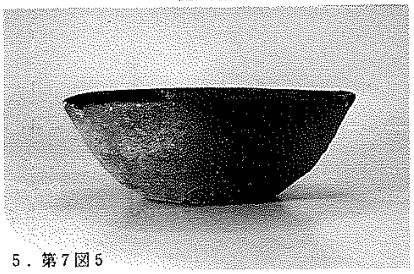


2．第7図2



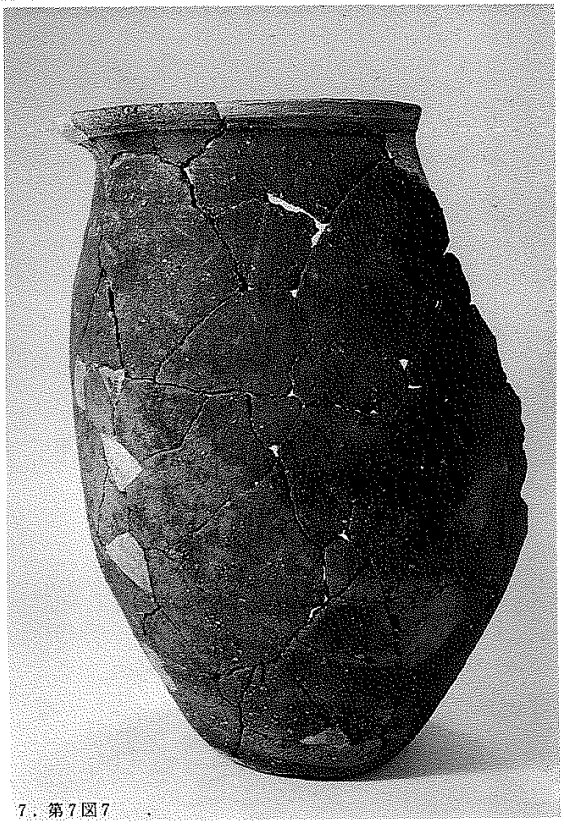
3．第7図3

4．第7図4



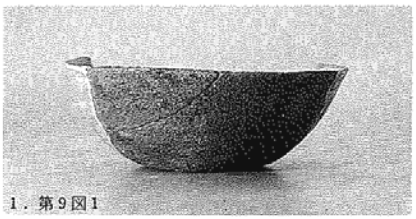
5．第7図5

6．第7図6

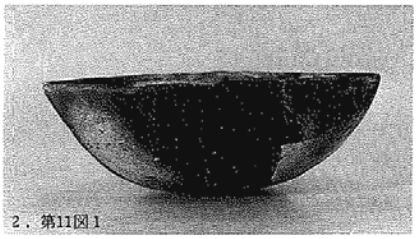


7．第7図7

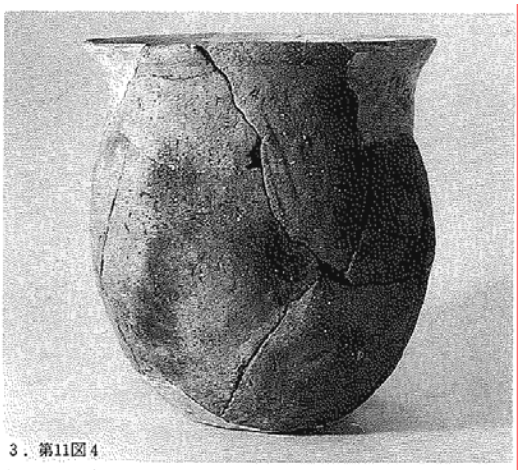
写真図版5



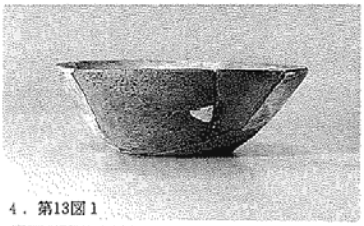
1．第９図１



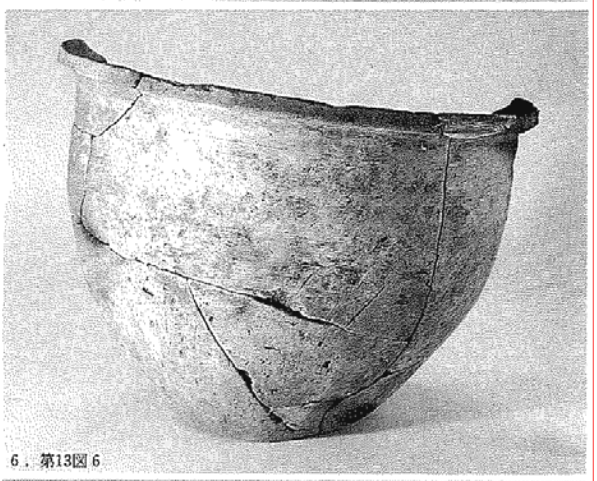
2．第11図１



3．第11図４

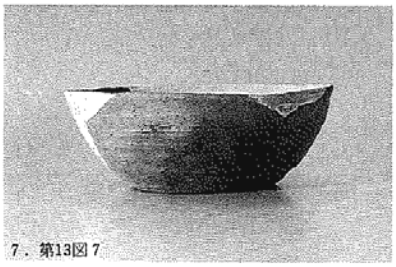


4．第13図１

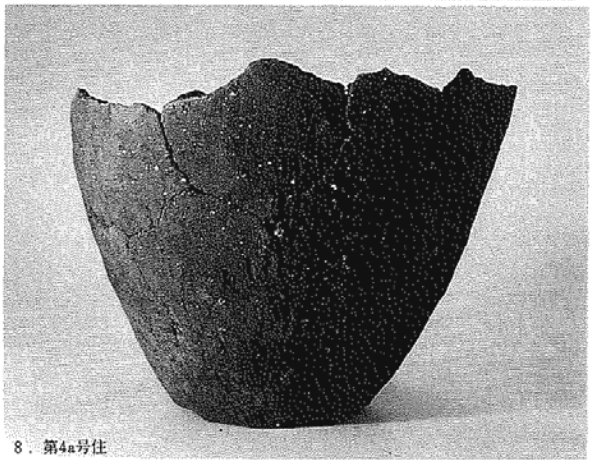


6．第13図６

5．第13図２

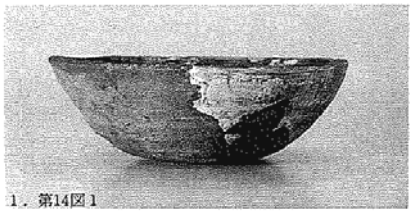


7．第13図７

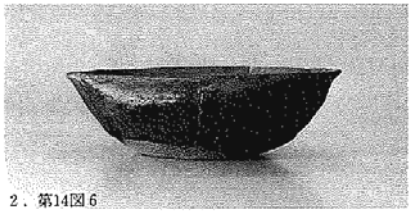


8．第4a号住

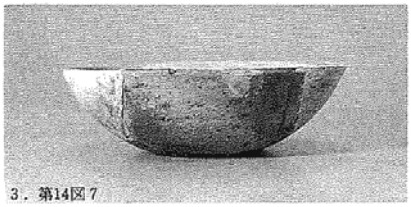
写真図版６



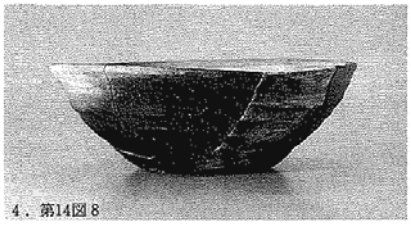
1．第14図1



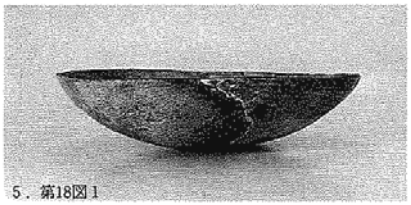
2．第14図6



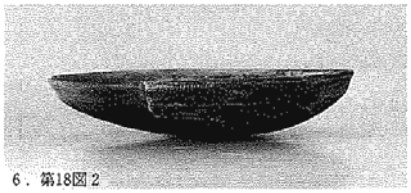
3．第14図7



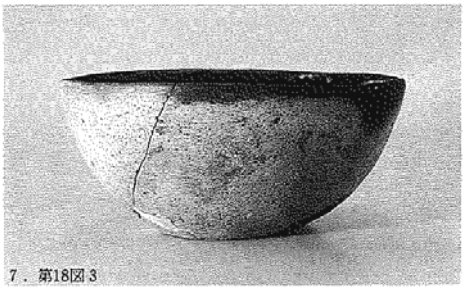
4．第14図8



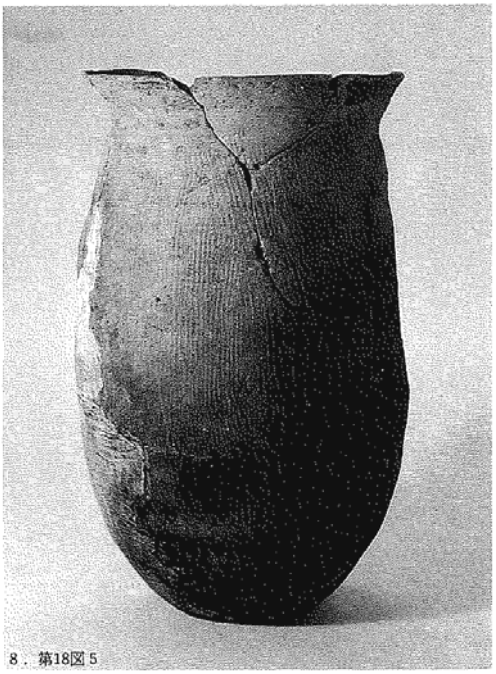
5．第18図1



6．第18図2



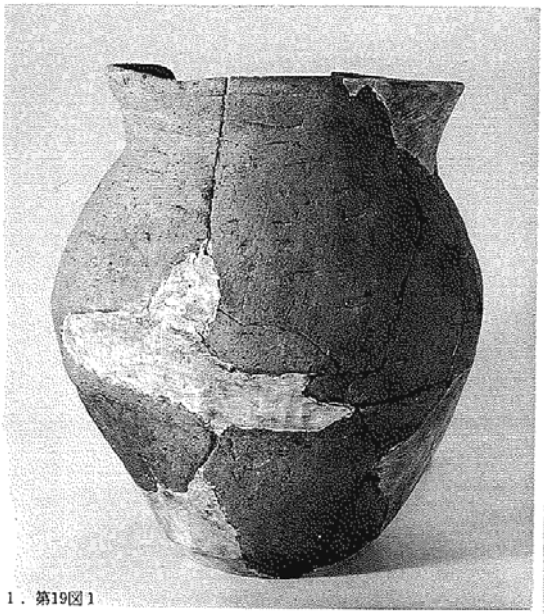
7．第18図3



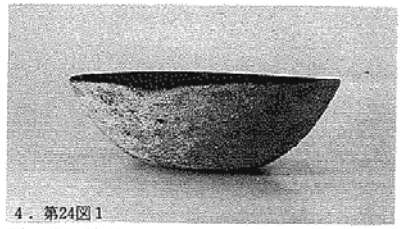
8．第18図5

9．第18図4

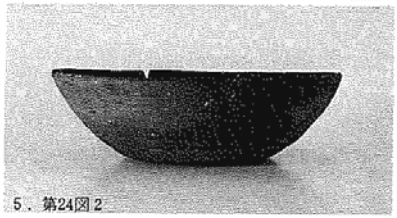
写真図版7



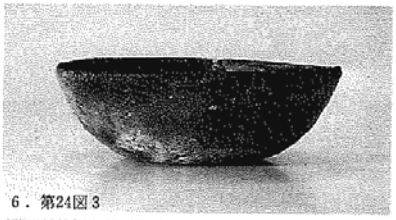
1．第19図1



4．第24図1



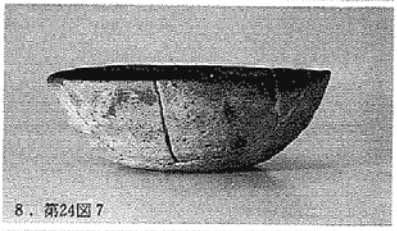
5．第24図2



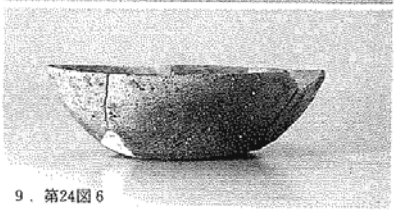
6．第24図3

2．第21図3

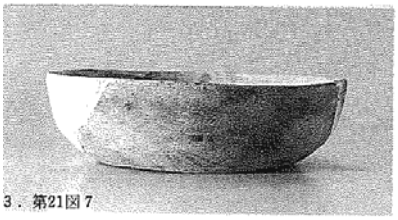
7．第24図4



8．第24図7



9．第24図6



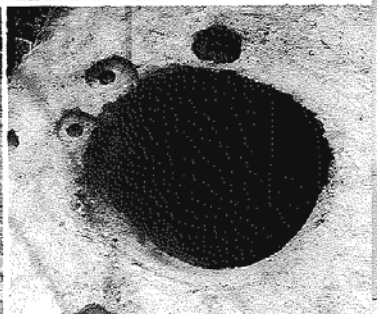
3．第21図7

写真図版8

2－①区
中世の柱穴群
西より

2－②区
同上
東より

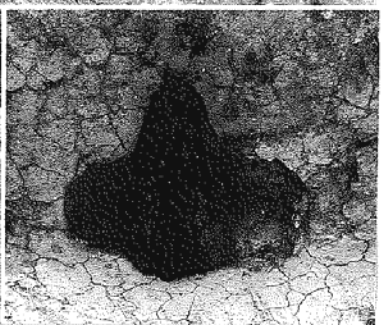
第１号井戸跡
（左下）
第２号井戸跡
（右下）
北より



図版９

3－③区
1・2号道路跡
と
中世の建物群
西より

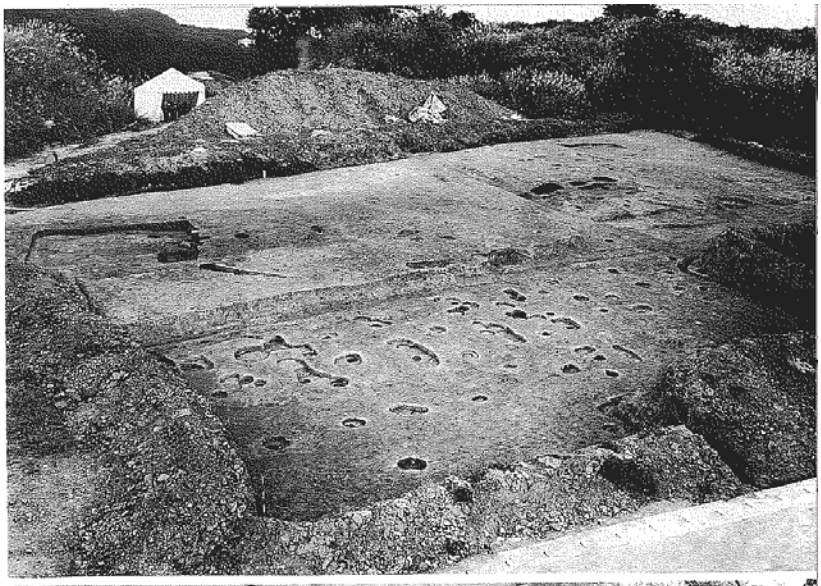
第20号溝跡
第6号竪穴住居跡
第1号火葬遺構
南より



第14・15号溝跡と
道路遺構（左下）
第1号火葬遺構
（右下）

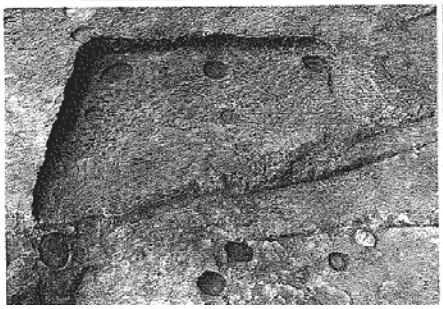
図版10

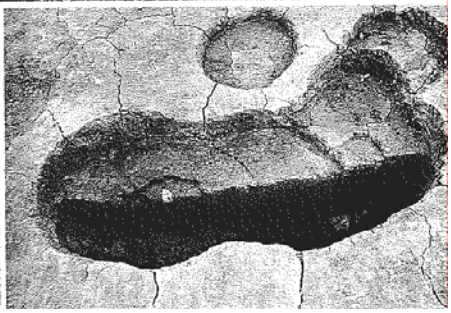
4区全景
南より



第6号掘立柱建物跡
西より

第8号竪穴遺構
(左下)
第6号掘立柱建物跡
柱穴(右下)

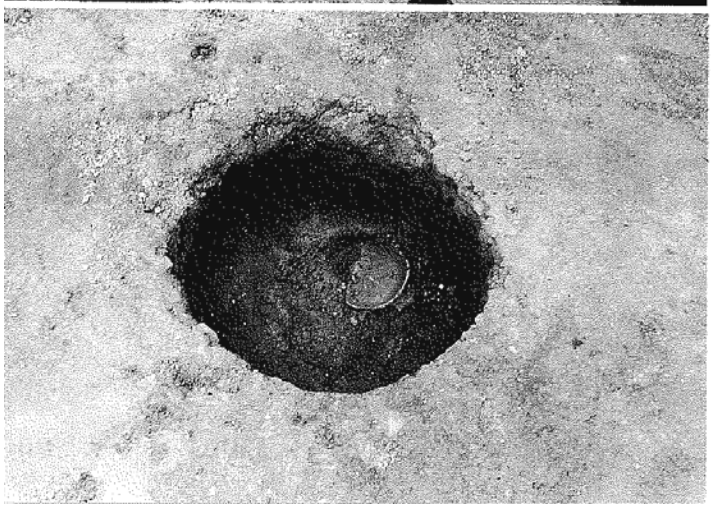




図版11

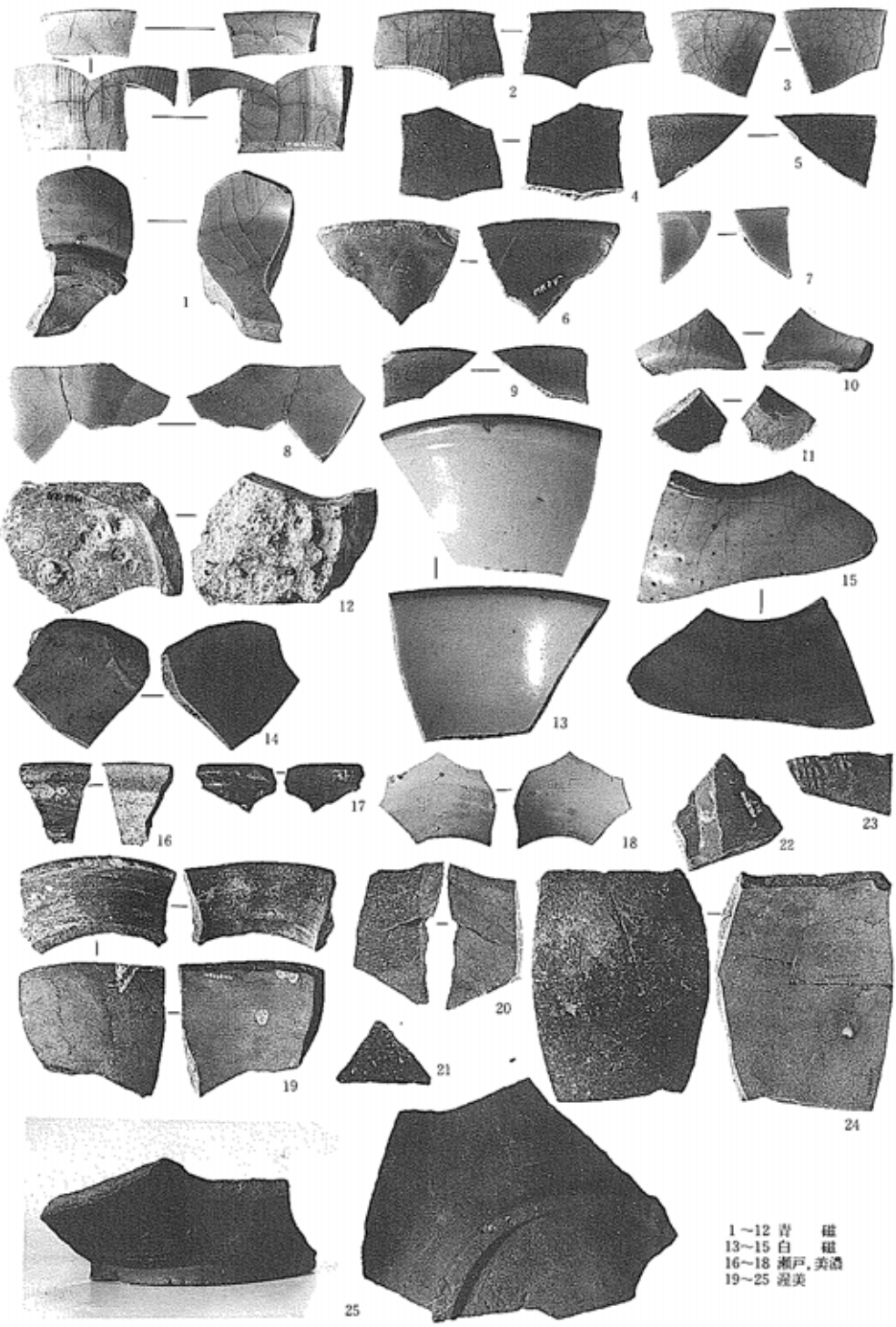
小堤城跡　　（大雄寺）
柱穴群
南より

第100号柱穴列
西より

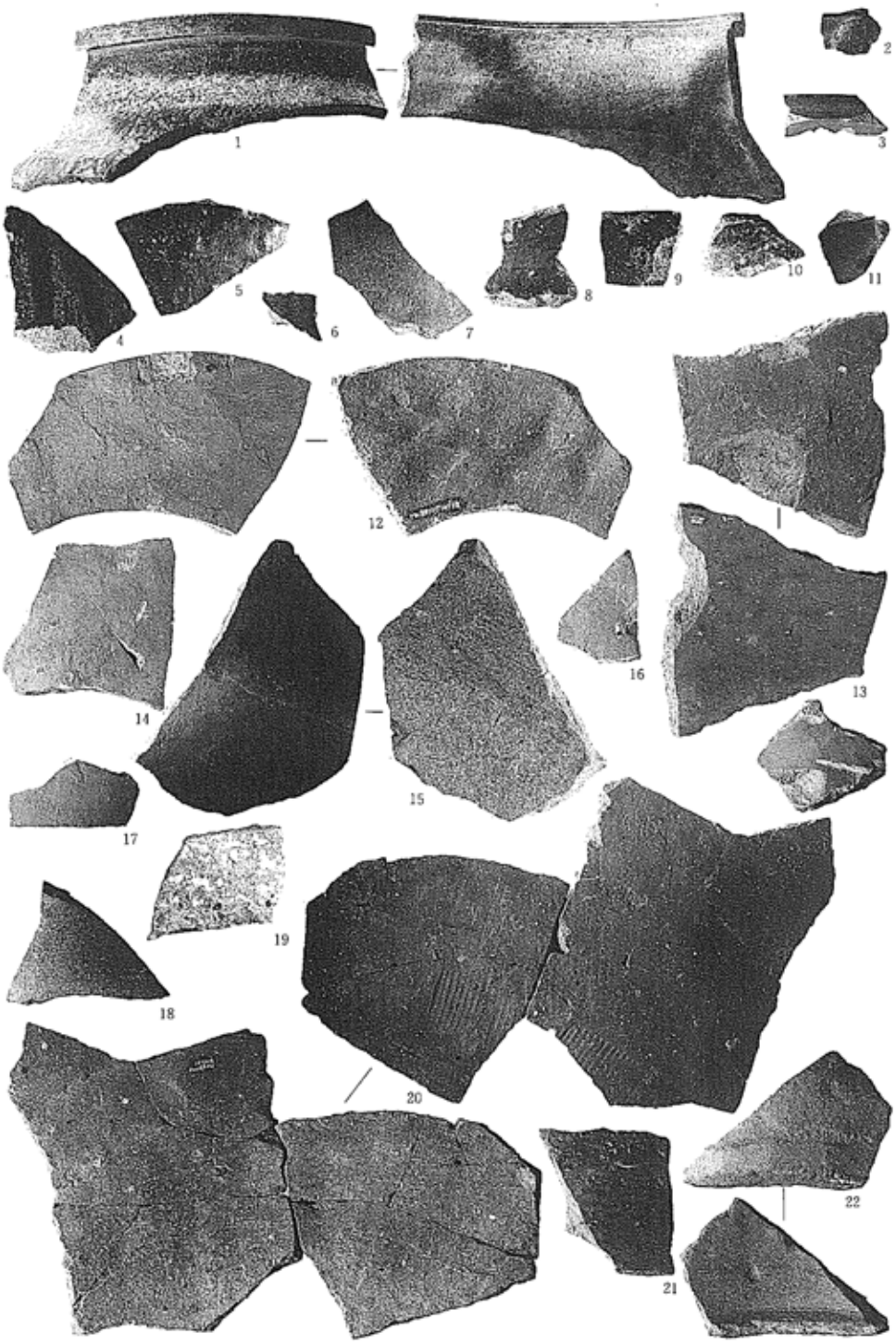


柱穴139
掘方底面のかわらけ

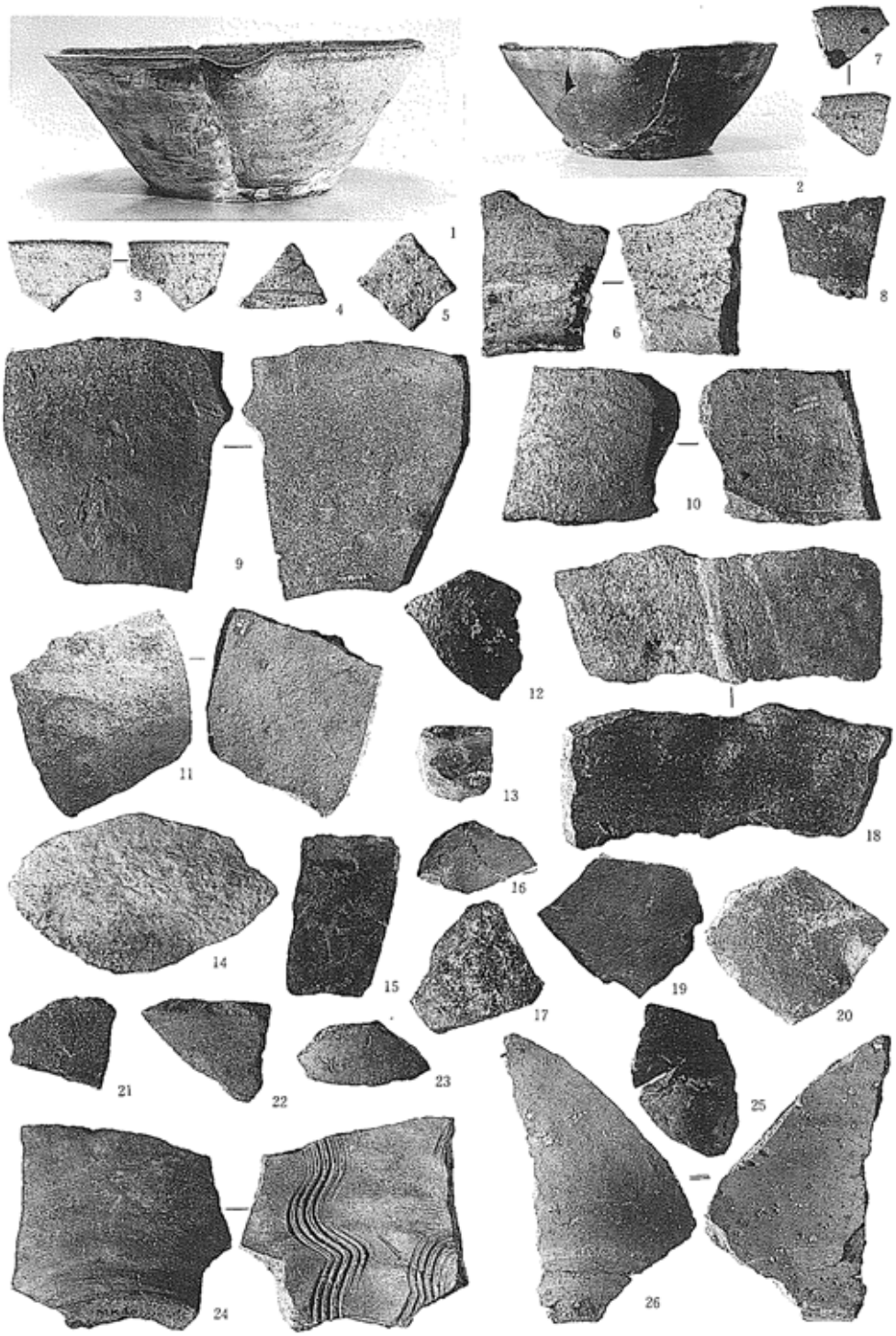
図版12



館南囲遺跡中世出土遺物 (1)
写真図版13

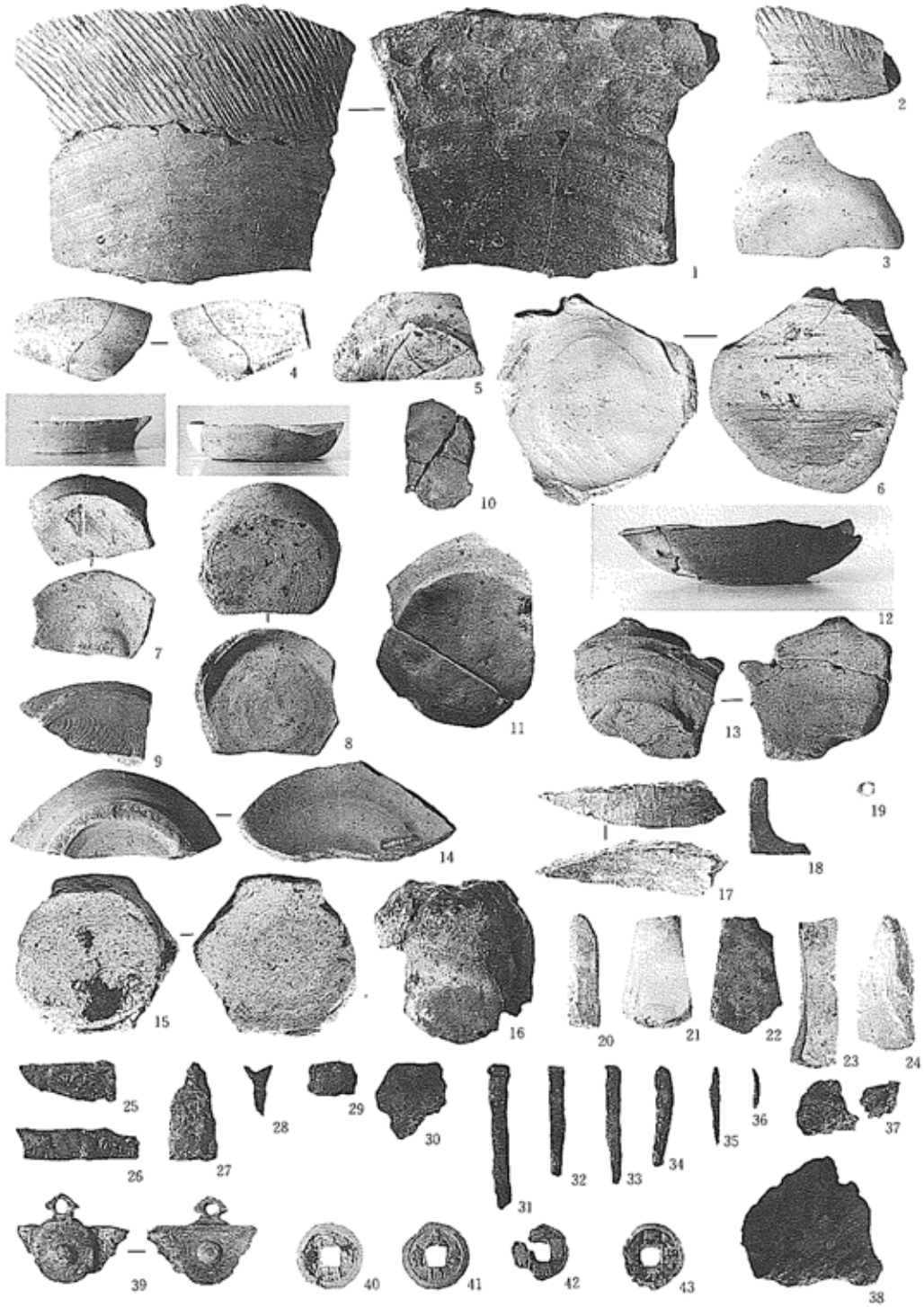


舘南囲遺跡中世出土遺物 (2) 常滑産
写真図版14



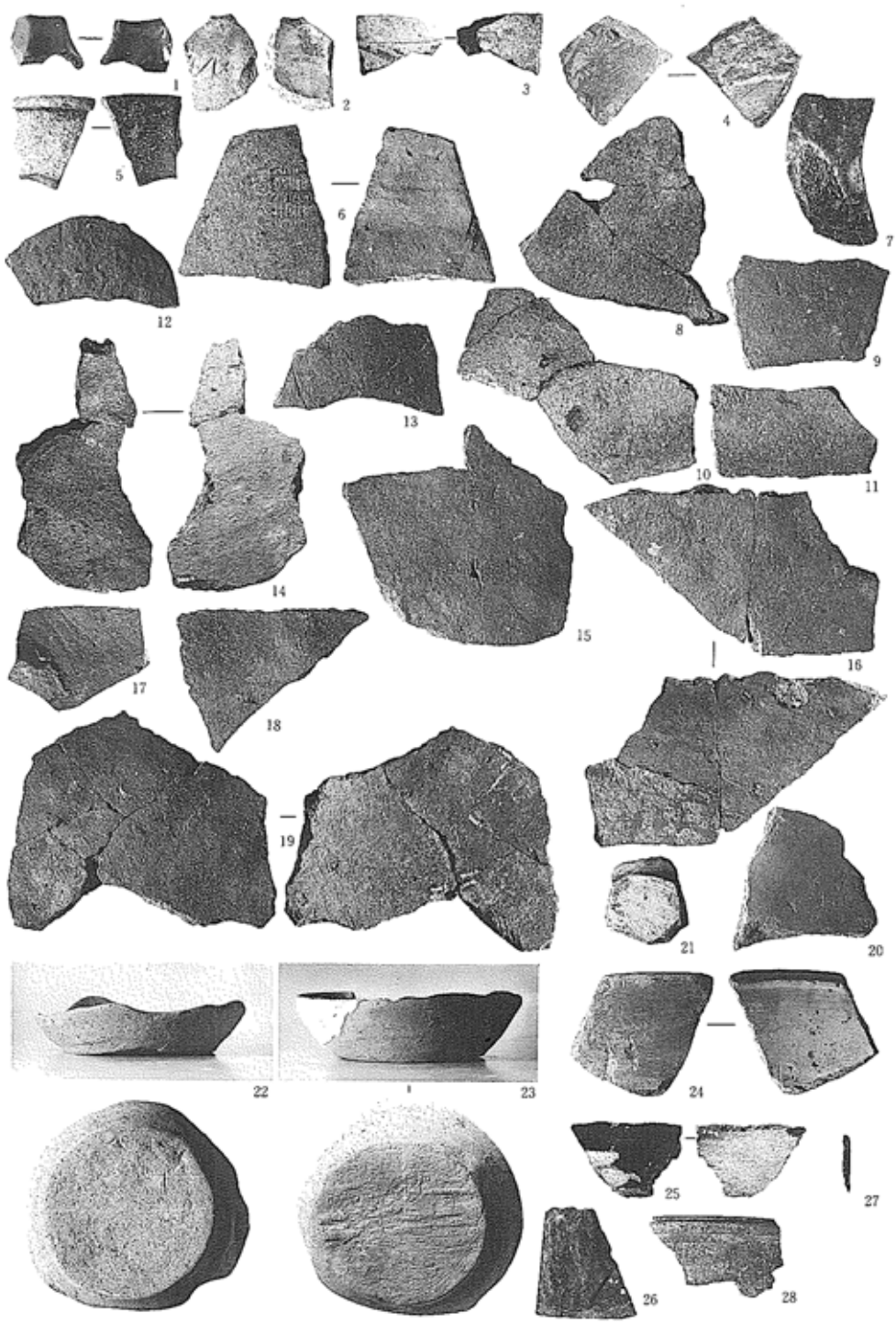
館南囲遺跡中世出土遺物 (3)　　1～8 常滑産，9～26地元産

写真図版15



館南囲遺跡中世出土遺物（4）

写真図版16



小堤城跡中世出土遺物

写真図版17

台町古墳群（だいまちこふんぐん）

目　　次

Ⅰ　はじめに
1　遺跡の位置と環境 ……140
2　台町古墳群の研究史 ……142
3　台町古墳群の概要 ……144
4　調査方法と経過 ……144
Ⅱ　調査の成果
1　第 175 号墳とその出土遺物……149
2　第 176 号墳とその出土遺物……157
3　第 177 号墳 ……160
4　第 178 号墳 ……160
5　表土出土遺物 ……162
Ⅲ　考察
1　出土遺物について ……164
2　古墳の構造と年代について……166
引用・参考文献 ……168

調 査 要 項

遺 跡 名：台町古墳群　だいまちこふんぐん
　　宮城県遺跡地図（昭和 63 年版）遺跡地名表登載番号；10050　遺跡記号；ＮＢ
所 在 地：宮城県伊具郡丸森町字二本木他
調査期間：第 1 次調査：1989 年（平成元年）8 月 22 日～8 月 25 日
　　第 2 次調査：1990 年（平成二年）7 月 30 日～8 月 24 日
調査面積：調査対象面積；3500 ㎡　発掘調査面積；1500 ㎡
調査原因：阿武隈川下流改修工事のうち金山築堤工事
調査主体：丸森町教育委員会・宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　第 1 次調査：白鳥良一・斎藤吉弘・阿部恵・真山悟
　　第 2 次調査：小井川和夫・阿部博志・古川一明・鈴木真一郎・村上利雅
調査協力：㈱本田組

Ⅰ　はじめに

1　遺跡の位置と環境

台町古墳群は、宮城県南部の伊具郡丸森町金山に所在する。丸森町役場の東約 2㎞ の阿武隈川南岸に位置している。

古墳群の所在する丸森町は、阿武隈丘陵北端部に開けた角田盆地の南縁部を占めている。位置的には宮城県の南端にあたり、北は宮城県の角田市・白石市・山元町などに隣接し、南西・南東部の大半は福島県浜通り地方の新地町・相馬市や中通り地方の梁川町・霊山町と境を接している。

丸森町の南部は阿武隈丘陵が占め、北部に角田盆地の平野部がひろがっている。盆地南縁に沿うように阿武隈川が東流し、南岸の丘陵地は阿武隈川支流の五福谷川・雉子尾川などによって樹枝状に開析されている。この丘陵の一支脈が角田盆地に舌状に張り出しており、台町古墳群は、この丘陵の北端部周辺に分布している。古墳群の立地する丘陵は南北長およそ 1㎞・東西幅 300～400mのなだらかな丘陵で、標高は 30～40mである。丘陵周囲の平野部の標高は 20m前後で、台地と平野部との比高は 10～20mである。

古墳の立地する丘陵の東西麓の平野部は、阿武隈川と雉子尾川・五福谷川の合流地点にあたり、過去の河川の氾濫・流路変更によって形成された自然堤防や後背湿地が複雑に分布している。これらの自然堤防上には古墳時代・古代の集落跡が立地しており、台町古墳群の周辺では矢の目遺跡(第１図－26)・中原遺跡(27)・前並遺跡(28)などが確認されている。これらの遺跡では、古墳時代中期の住居跡・祭祀遺構などが発見され、多数の土師器・須恵器・石製模造品などが発見されている（志間：1964）。

古墳

市町村	No.	遺跡名	出土遺物
丸森町	1A	台町古墳群	土師器・須恵器・埴輪
	1B	新町支群	釧・鈴鏡・銀環・直刀・鉄鏃
	1C	上片山支群	勾玉・管玉・切小玉
	2	山崎古墳	勾玉・管玉・刀・釧
	3	深山古墳	刀子・金環・勾玉・丸玉・小玉
	4	西反田古墳	土師器・須恵器・直刀・鉄鏃
	5	榛原古墳	土師器・刀子
	6	宮後古墳群	
角田市	7	沼古墳	円筒埴輪
	8	住社古墳	土師器・須恵器・刀
	9	長泉寺古墳群	
	10	今泉古墳	
	11	郷主内古墳	
	12	光目内古墳	
	13	山中古墳群	土師器・直刀
	14	横倉古墳群	
	15	大久保古墳群	土師器・須恵器・蕨手刀・鉄釘
	16	笠松古墳	
	17	間野田古墳	円筒埴輪
	18	館島田古墳	石製模造品・勾玉
	19	新墓古墳	円筒埴輪
	20	狐塚古墳	

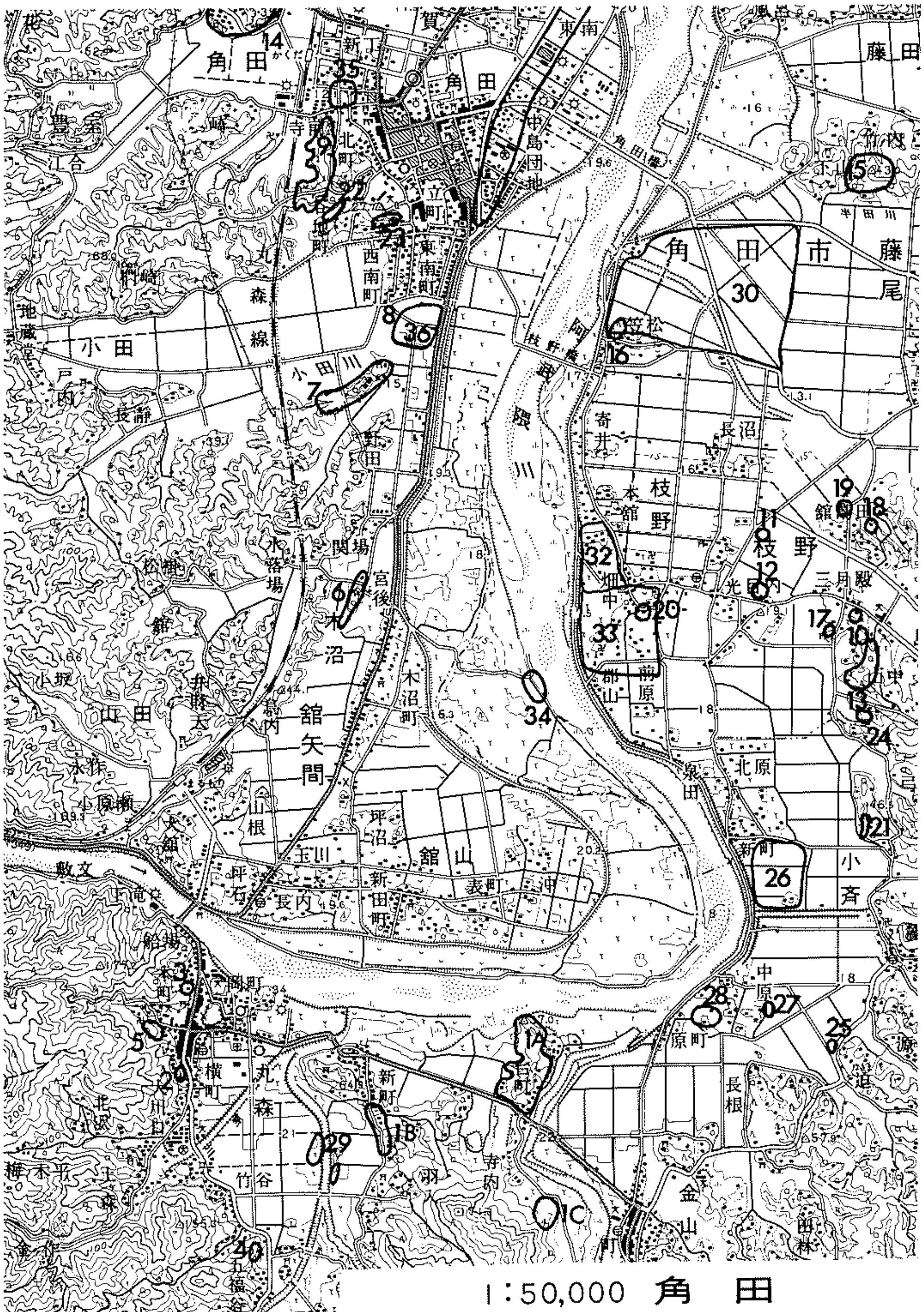
横穴墓

市町村	No.	遺跡名	出土遺物
丸森町	21	篠崎横穴墓群	土師器・須恵器・直刀
角田市	22	沼小屋横穴墓	
	23	牛館横穴墓群	
	24	山中横穴墓群	

遺物包含地

市町村	No.	遺跡名	出土遺物
丸森町	25	根切遺跡	土師器　石製模造品
	26	矢ノ目遺跡	〃　石製模造品
	27	中原遺跡	〃　土師器（中期）
	28	前並遺跡	〃（南小泉・栗囲）石製模造品
	29	越田遺跡	〃（塩釜・南小泉）
角田市	30	大坊遺跡	〃（南小泉・住社・栗囲）
	31	田町裏遺跡	〃（塩釜・南小泉・住社）
	32	品濃遺跡	〃（　〃　）
	33	郡山遺跡	〃（住社・栗囲）
	34	上中島遺跡	〃（栗囲）
	35	寺前遺跡	〃（引田）
	36	住社遺跡	〃（住社）

第１表　周辺の古墳時代の遺跡


1:50,000 角 田
1000 m 0 1000 2000 3000
角田市
藤田
藤尾
角田
小田
阿武隈川
枝野
館矢間
館山
小斉
丸森
金山
長沼
寄井
北原
中原

第１図　遺跡位置図

2　台町古墳群の研究史

丸森町の阿武隈川南岸の丘陵上の台町、新町、片山、小富士山地区におびただしい数の古墳が分布することは古くから知られていた。明治末年から昭和の初め頃には、これらの古墳が相次いで盗掘され、多くの副葬品が出土したと言われている。出土品の大半は売却されるなどして、現在、所在が不明なものも少くない。しかし、その一部は東京国立博物館に寄贈されたり、地元で収集・保管されていたものが残されており、古墳群の内容を知る貴重な資料となっている。なかでも「𤭯を捧げ持つ女性の埴輪」や「鈴鏡」・「鈴釧」などの出土品は全国的にも注目され、広く知られている。

昭和 20 年代から 30 年代にかけて、志間泰治氏の継続的な調査研究によって、古墳の分布状態や内部構造などが明らかにされている。志間氏が行った分布調査の結果では、台町地区に 174 基、新町地区に 17 基、片山地区に 15 基、小富士山地区に 2 基、計 208 基の古墳が発見されている。「台町古墳群」とは、これらの古墳群の総称であり、各地区の古墳群は支群として捉えられている。発見された各古墳には、古墳番号・名称が付され、過去の盗掘で出土した遺物の帰属も聞き取りなどによって追跡調査されている。また、一部の古墳については埋葬主体部を中心とした発掘調査がなされ、内部構遺も明らかにされている。

これら一連の調査研究成果は、学会・研究誌などで発表・報告されており、その成果の事実報告を各古墳毎に整理すると第 2 表のようになる。

1975 年（昭和 50 年）台町地区の一部（第 2 図）は町・県の史跡に指定された。現在、この地区内には遊歩道・解説板などが設置され、見学コースが設けられている。また、古墳群出土遺物の一部は丸森町内の「伊具の里むかし館」において展示公開されている。

関係　文献

清水東四朗；1940；「宮城県（伊具、亘理、牡鹿）に於ける史跡－伊具郡金山町の古墳」
「宮城県史蹟跡名勝天然記念物調査報告」第 13 叢

①志間泰治　；1954；「宮城県伊具郡金山町台町古墳群調査概報」
「歴史」第 7 叢　東北史学会

②　〃　；1955；「宮城県伊具郡丸森町金山字台町古墳群調査概報　第 2 叢」

③　〃　；1961；「宮城県伊具郡丸森町台町古墳群調査概報　第 3 叢」
「東北考古学」第 2 号　別刷

④　〃　；1961；「新町古墳群」

古墳no	規模（径×高）	主体部	主体部規模	出土遺物・備考	文　献
1号墳	24×20×3	箱式石棺5		土師器・三角点有	①・②
2号墳	20×2.5	礫床箱式石棺2	3.3×0.8 他	土師器	①・②
3号墳	6×0.5	未確認			②
11号墳	10×3	未確認		土師器	②
12号墳				未調査	②
13号墳	15×3	箱式石棺	2×0.4		②
18号墳	2.5×3.5	竪穴式石室？	NS/1.7×0.8	須恵器・刀	③
19号墳	24×4	箱式石棺	NS/3.1×0.7		③
20号墳				鈴鏡・釧・耳環・玉・刀	①
21号墳	15×5	未確認			②
22号墳	7×1.5	未確認		礫散乱	②
24号墳	7×1.5	未確認		礫散乱	②
29号墳	20×3.5	箱式石棺	1.4×0.4		②
31号墳	15×3	未確認			②
57号墳	9×1.5	未確認			②
58号墳	不明	箱式石棺	NS/2.3×0.7	鉄鏃	②
60号墳	12×1.5	横穴式石室	SN/1.2×1.2	鉄鏃	②
61号墳	17×2.5	箱式石室3	EW/2.2×0.4	鉄鏃・庚申塔	②
75号墳	？	竪穴式石室？	EW/2.2×0.6	須恵器・刀	③
77号墳	？	竪穴式石室？	EW/1×0.3	鉄鏃	③
95号墳	18×3	竪穴式石室？	EW/2.3×0.7	鹿角装刀子・土師器	③
96号墳	15×2.5	箱式石棺	EW/1.9×0.4		②
97号墳	10×1.5	横穴式石室	SN/1.6×1.3		②
98号墳	10×1	箱式石棺？	SN/1.5×0.6	ガラス玉	③
99号墳	7×0.5	未確認			②
102号墳	13×2.3	横穴式石室？	SN/2×1	須恵器・切小玉	③
104号墳	10×1.5	横穴式石室？	SN/2.2×0.7	須恵器・切小玉	③
109号墳	8×1	横穴式石室	SN/2.3×1.1	鉄鏃	③
110号墳	8×1	横穴式石室？	SN/2.1×0.8	鉄鏃	③
119号墳	13×0.9	箱式石棺	EW/1.8×0.5	鉄鏃	③
120号墳	10×1.5	？			③
166号墳	5×0.5	箱式石棺？	EW/1.8×0.3		②
宮の脇1号		横穴式石室		直刀2・横瓶い	④
宮の脇2号		横穴式石室			④
宮の脇4号	10×？	横穴式石室	SN/2.7×1.3	直刀・鏃・玉・耳環	④
宮の脇5号		横穴式石室		直刀・鏃	④
小林古墳		木炭床			④
作田1号		石室		直刀・土師器	④
狐塚古墳		？		鈴鏡・釧・耳環・玉・刀	④
ひる田古墳	17×3.5			未調査	④
小富士山		横穴式石室	SN/1.9×0.9		③

第2表　台町古墳群一覧表

3　台町古墳群の概要

台町古墳群における古墳の分布は、174 基以上の古墳が群集する「台町地区」と、10 基前後の古墳が分布する西方の「新町地区」、南方の「上片山・小富士山地区」の、大きく 3 地区に分かれている。ここでは今回の調査区が位置する台町地区についての概要を、志間泰治氏の一連の調査成果に基づいて記し、新町地区、上片山・小富士山地区については割愛する。

台町古墳群の中核にあたる台町地区の古墳の分布状況をみると、長軸 33mの前方後円墳(20 号墳)が台地のほぼ中央の最高所に位置し、その周囲に径 25～5mの大小の円墳が群集している。このうち径 20m前後の比較的大きな円墳は尾根上に位置し、周囲の斜面に小規模な古墳が点在している。

志間氏により、このうちのいくつかの古墳の埋葬主体部を中心とした発掘調査が行われ、「礫郭」・「箱式石棺」・「竪穴式石室」・「横穴式石室」など多様な主体部形態が確認されている。大型の円墳（1・2 号墳）では墳頂平坦面に礫郭・箱式石棺などを含む複数の主体部が発見されている。前方後円墳は盗掘により主体部が大きく破壊されているが、盗掘孔周辺には多数の人頭大の角礫が散布しており、竪穴式もしくは横穴式石室であったと考えられる。この他、調査をおこなったが墳頂部に主体部が確認できなかった古墳がいくつかある。

なお、台町古墳群内で埴輪が確認された古墳は、第 103 号墳のみである。現在、103 号墳は削平され墳丘が失われているが、墳丘が削平された際に周辺から埴輪列が発見され、円筒・形象埴輪が出土したとのことである。

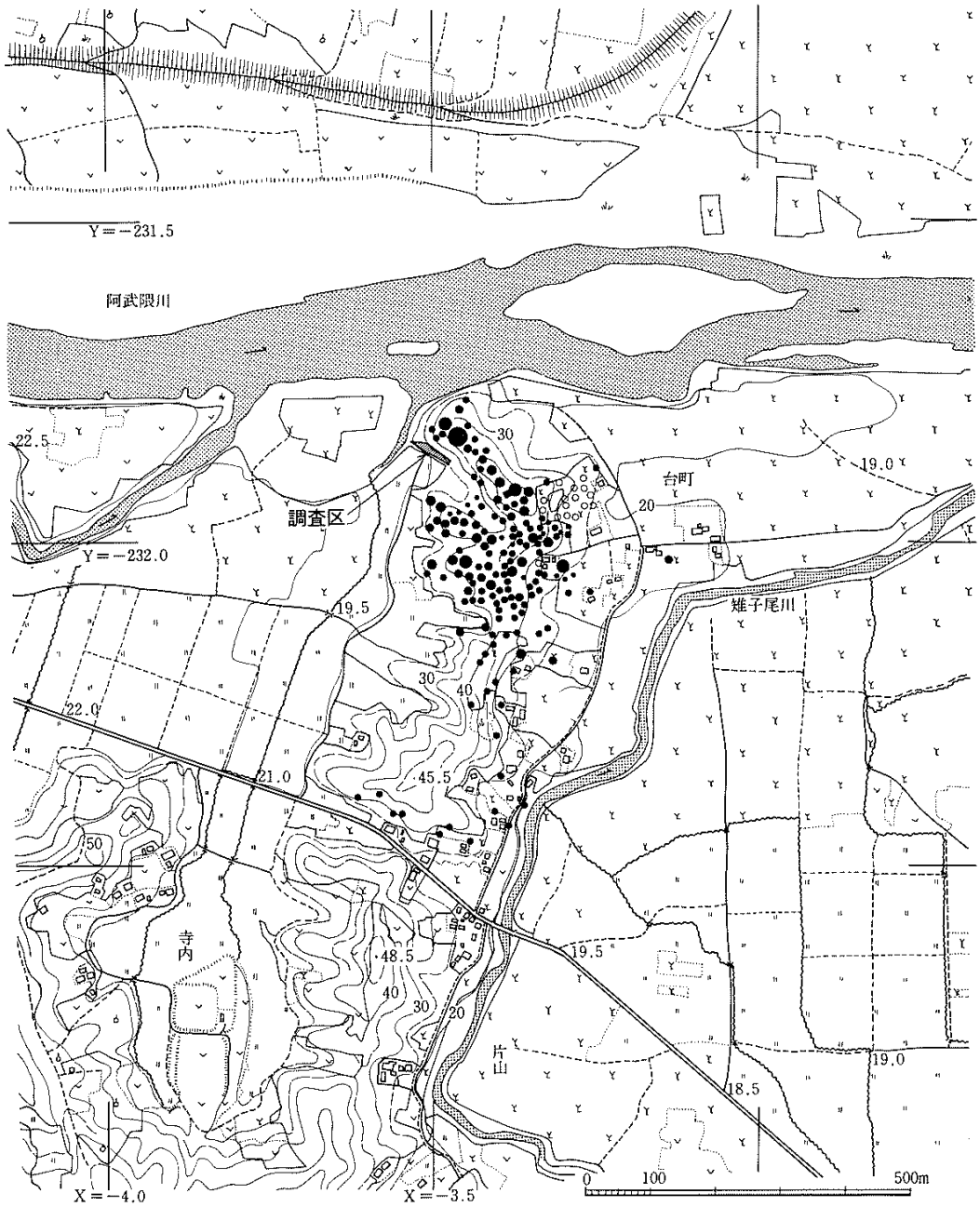
主体部形態や出土遺物の検討から、台町古墳群は 5 世紀末頃から 7 世紀にかけて継続的に造営されたものと考えられている。

4　調査方法と経過

今回の調査は、建設省の阿武隈川築堤工事計画の一部が、台町古墳群の立地する丘陵の北西麓部に及ぶことになったため、これに先立って行われたものである。

調査以前、工事対象地域周辺の古墳の分布状況は不明であった。第 1 次調査で、対象地内の状況を確認するため下草を刈払ったところ、丘陵斜面に古墳とみられるわずかな高まりが 3 ケ所確認された。これらの周囲にトレンチを設定し調査したところ古墳に伴うとみられる遺構・遺物が発見され、これらが古墳であることが確認された。

第 1 次調査の結果を受け、関係機関の間で古墳の保存協議が行われた。確認された 3 基の古墳のうち北側の 2 基の墳丘部は直接工事の影響を受けないものと判断された。しかし、南側の 1 基は、堤防の盛土下になることが避けられず、精査をすることにした。


Y＝−231.5
阿武隈川
22.5
調査区
Y＝−232.0
19.5
30
40
22.0
21.0
45.5
50
寺内
48.5
40
30
20
片山
台町
20
19.0
雉子尾川
19.5
19.0
18.5
0
100
500m
X＝−4.0
X＝−3.5

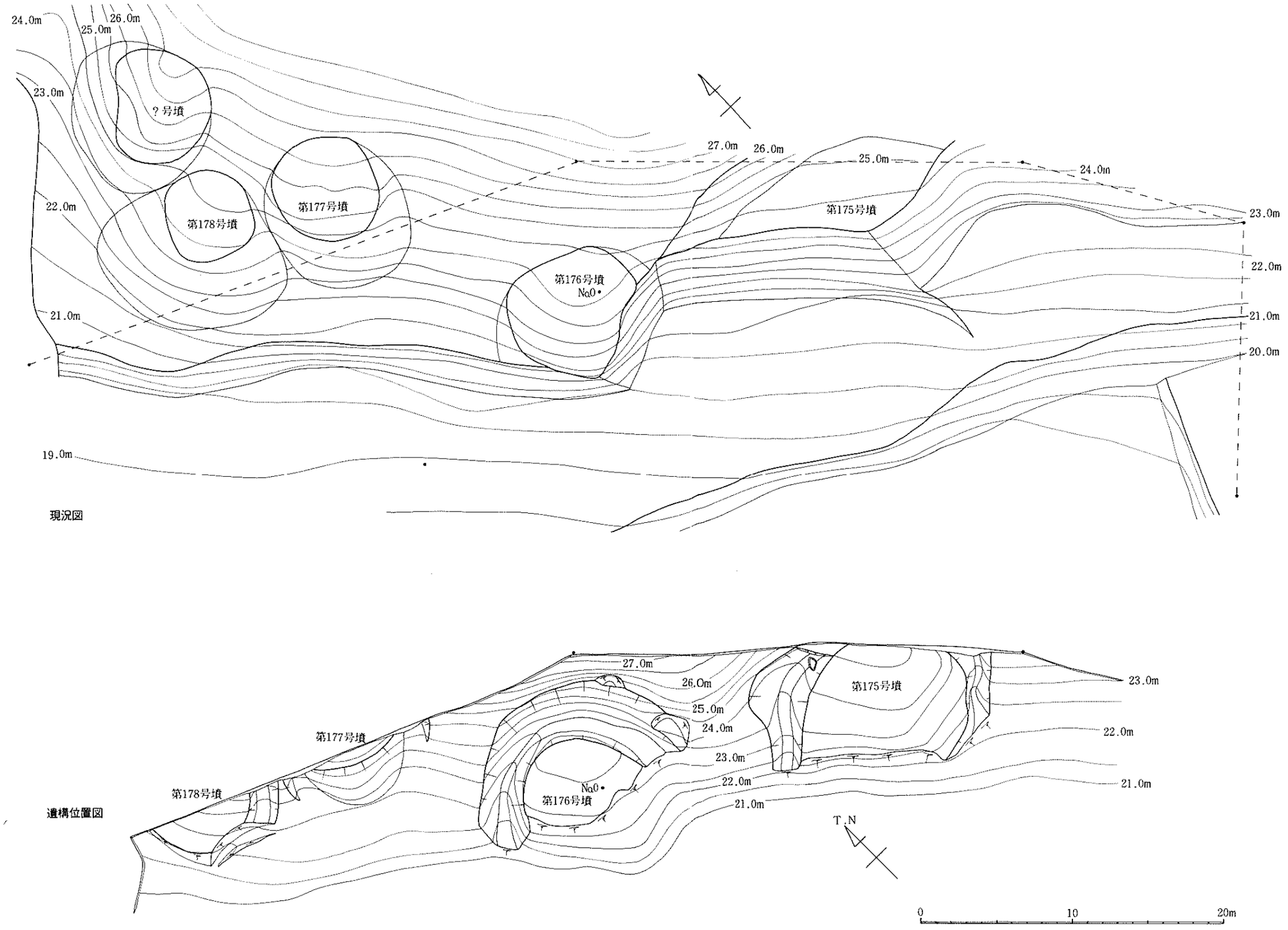
第２図　古墳分布図

第 2 次調査では協議の結果を受け、1 基の古墳の精査を行う予定で調査を開始した。ただし、未発見の古墳の存在が予想されたため、対象地内全域の表土を剥ぐことにした。その結果、堤防の盛土予定範囲の南端部で新たに古墳が 1 基確認された。また、当初、精査の対象からはずされていた北側の 2 基の古墳の裾部が、堤防の盛土下になることが確認されたため、これらについても精査をすることにした。調査結果は、8 月 11 日、現地説明会を開催し、調査現場を一般に公開するとともに、台町古墳群内の主要古墳についての見学会も併せて行った。猛暑の中、100 名前後の参加者があり、有意義な説明会であった。

発見された 4 基の古墳については、志間氏の作成した古墳分布図の古墳の特定が困難であり古墳番号を付けられなかったため、南からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ号墳と仮称して記録した。対象地区全体については、縮尺 1／100 の平面図、各古墳については 1／50 の平面図・1／20 の断面図を作成した。さらにＡ号墳の主体部については 1／10 の平面図を作成し、鉄鏃の出土状況は 1／1 の平面図を作成し記録した。写真は、35mmの白黒・リバーサルフイルム、4×5 の白黒フイルムによって撮影した。

整理作業にあたっては、主な遺物について原寸の実測図を作成し、写真を撮影した。鉄器については錆落しに先立ち、象眼の有無、細部構造を検討するために東北歴史資料館保存科学研究科に依頼しＸ線撮影を行った。なお、整理作業の過程で、今回調査された 4 古墳の名称について、現場で用いたＡ～Ｄの仮称を改め、志間氏が付した古墳番号の継続番号を用いて示すことにし、以下のように変更した。

Ａ号墳＝第 175 号墳
Ｂ号墳＝第 176 号墳
Ｃ号墳＝第 177 号墳
Ｄ号墳＝第 178 号墳


24.0m
25.0m
26.0m
23.0m
？号墳
第178号墳
第177号墳
27.0m
26.0m
25.0m
24.0m
第175号墳
22.0m
第176号墳
NaO•
21.0m
23.0m
22.0m
21.0m
20.0m
19.0m
現況図
遺構位置図
27.0m
26.0m
25.0m
24.0m
23.0m
22.0m
21.0m
第177号墳
第178号墳
NaO•
第176号墳
第175号墳
23.0m
22.0m
21.0m
T.N
0
10
20m

第３図　調査区平面図

II　調査の結果

今回の発掘調査地点は、台町古墳群内では古墳の分布が最も濃密な台町地区の丘陵北端部の西側斜面に位置している。斜面の上方の調査区外にも古墳らしい高まりが確認され、さらにその上方の丘陵頂部には台町 1・2 号墳が位置している。今回発見された 4 基の古墳は標高 24m前後のほぼ同一の高さに分布し、標高的には群中、最下位に位置している。

なお調査区の北側は阿武隈川に臨む侵食崖であり、南側は沢状の低地が入り込み、古墳の分布は調査区の南北には延びない。また、古墳の分布する斜面の下方の丘陵西側裾部も阿武隈川の支流の内川によって侵食されている。以下、各古墳について述べる。

1　第 175 号墳（第 4・5・6 図）

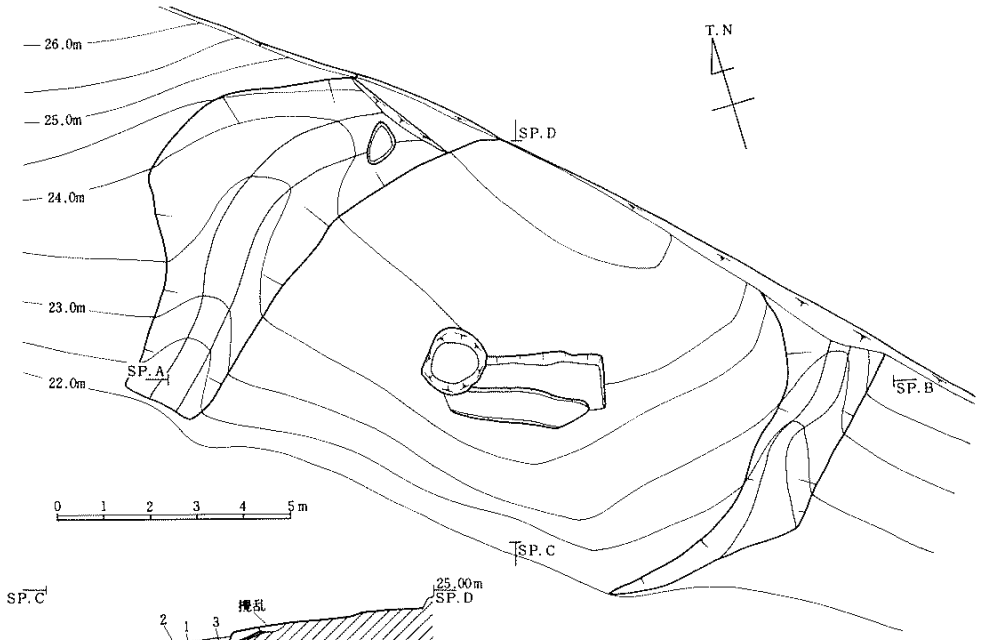
位置・確認状況：調査区の丘陵斜面の南端に立地する。現況は狭い平坦地で、当初は古い畑地跡と考えられ、古墳と認識されていなかった。表土を除去したところ、この平坦地の南北に周溝とみられる溝が検出されたため調査を行った。なお、古墳の東側は調査区外に及んでおり、墳頂部東端から東側周溝にかけての調査はできなかった。

残存状況：墳丘上部の積み土の流失により、墳丘上面は西側に緩やかに傾斜していた。また、西・南裾部は、畑地によって削り込まれ崖面をなしていた。

墳丘：墳丘の直径は周溝内周で約 10m、墳頂部は標高 24m前後、西側周溝下端との比高は約 3mである。積み土は、20 度前後の傾斜地の旧表土上に積まれており 2 層に大別された（第 4 図）。積み土 1 は墳丘上部を覆い、厚さは 10～50㎝ で斜面下方にゆくにしたがい厚さを増している。積み土 2 は墳丘下部の斜面下方にあたる西側半分にのみ分布し、厚さ 30㎝ 前後で旧表土上面を覆っている。いずれも地山起源の土で、周溝部の排土を積んだものと考えられる。版築の痕跡はみられない。

周溝：墳丘東半の丘陵斜面を弧状に掘り切るように巡っている。断面形は逆台形で、底面は緩やかに西側に傾斜している。残りのよい北東側での上幅は 4m、深さは 1.3m、堆積土は自然流入した黒褐色土である。

埋葬主体部：墳丘ほぼ中央の褐色土（墳丘積み土 1 層）上面で、長さ 4m前後、幅 2m前後の長方形の墓壙が発見された（第 5 図）。墓壙の長軸方向はN－72°－Wである。壁の立ち上がりは急で、確認面からの深さは残りのよい南東辺で 20㎝ 前後、北～西辺部は流失し北東部も木の根により撹乱を受けている。墓壙の底面中央で棺の据え形とみられる浅い溝状の掘り込みが確認された。長さ 3m前後、幅 80㎝、墓壙底面からの深さ 10㎝ 前後で、壁は緩やかに立ち上がる。棺材は確認されなかったが、形状からみて割竹形の木棺が直葬されていたものとみられる。また、出土した刀の切先がいずれも西に向いていることから、被葬者の埋葬頭位は東側であったと推定される。墓壙は積み土の上部から掘り込ま



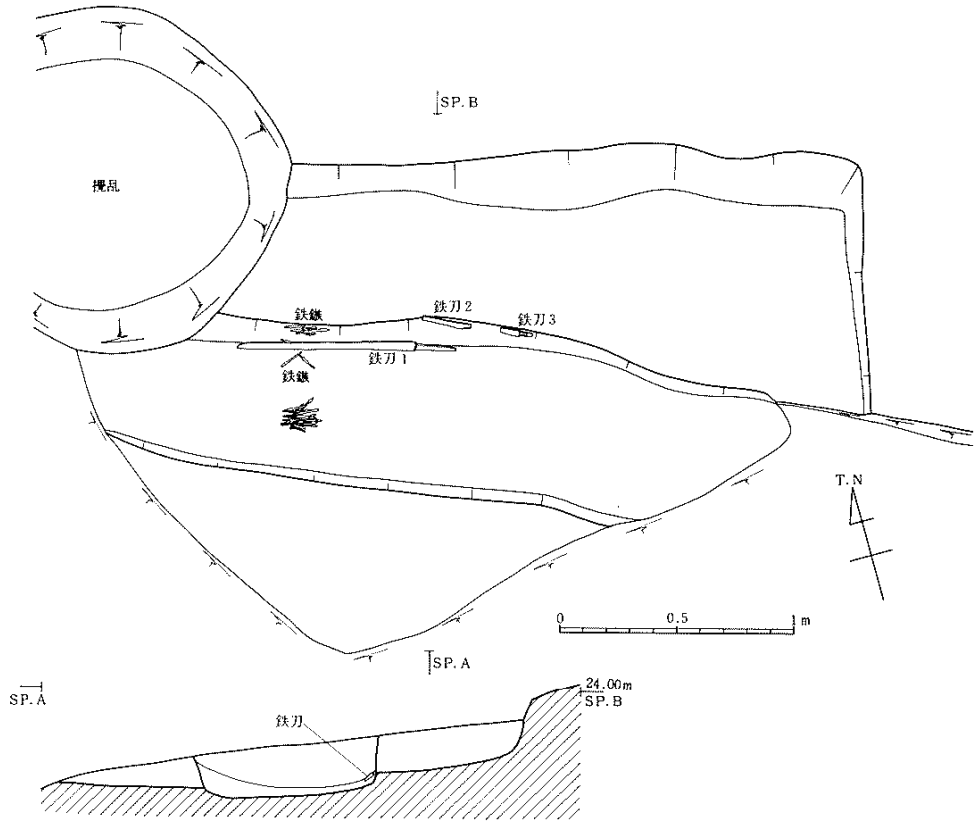
層No.	土色	土性	層の性格
1	褐色（7.5YR 4/4）	シルト　凝灰岩を多く含む	主体部埋土1
2	褐色（7.5YR 4/4）	シルト　凝灰岩を多く含む	〃　2
3	褐色（7.5YR 3/3）	シルト	〃　3
4	褐色（7.5YR 3/3）	シルト　地山粒を含む	墳丘積土1
5	にぶい黄褐色（10YR 5/4）	粘土質シルト　〃	〃　2
6	黒褐色（10YR 2/2）	シルト質粘土	旧表土
7	黒褐色（10YR 3/2）	粘土質シルト	周溝堆積土

第4図　第175号墳平面図・断面図

れ、底面・壁はともに墳丘積み土1層の褐色土からなる。墓壙内の堆積土はしまりのない地山起源の黄褐色土で、周溝部の排土を埋め戻したものとみられる。版築の痕跡はない。

出土　遺物：棺の痕跡内から鉄鏃（30本前後）・刀（3本）が出土した。これらはいずれも底面よりやや浮いた状態で出土している。この他、周溝堆積土や墳丘積み土などから土器が出土している。以下、個別の出土状況と特徴を記す。

鉄鏃（7・8図）：棺の痕跡の西半部ほぼ中央で、先端部を東に向け、先端部をほぼ揃えた状態で出土した(第6図)。重なっていたため相互に錆着し、鏃身の原形をとどめるものは少ない。総数は箆被の関部の数で数えると30本ある。いずれも「細根式」で、箆被が長く、鏃身は「柳葉形・三角形」の「片丸造」(末永：1941)である。細部の形態に以下のA・B



第5図　第175号墳主体部平面図，断面図

の2類がある。さらにB類は箆被の寸法に違いがあり4類がみられる。

A類：（第7図1～8）鏃身が柳葉形で、逆刺が深く切れ込むもの。

鏃身長は3cm前後で箆被長はいずれも6.5cm前後である。

B類：鏃身が三角形のもの。鏃身長が2cm前後で箆被長の長さに以下の4種がある。

1類：（第8図18）　箆被長が約6cmのもの。

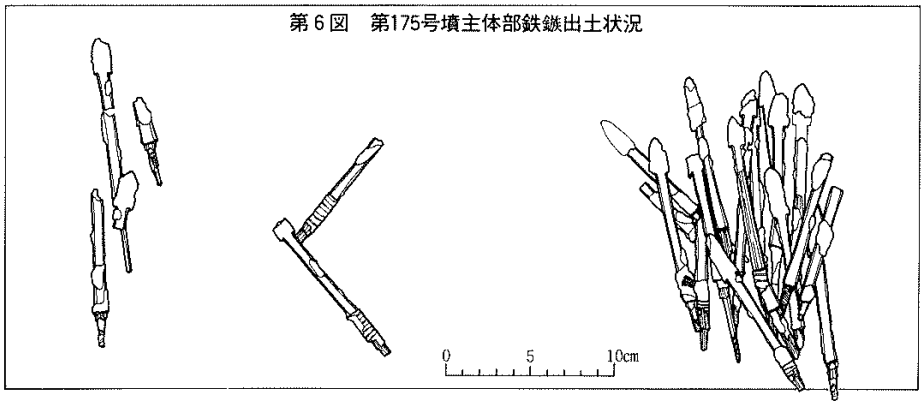
2類：（第8図13～17）箆被長が約7cmのもの。

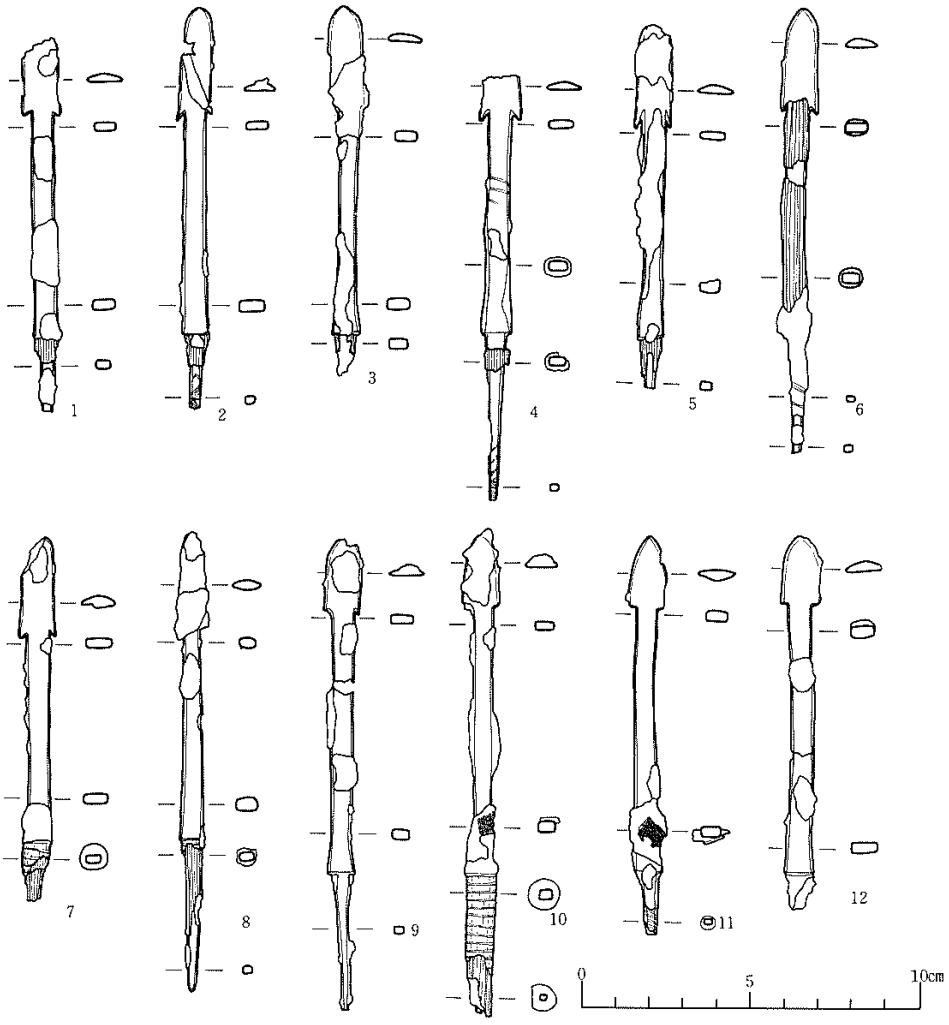
3類：（第7図9～12）箆被長が約8cmのもの。

4類：（第8図19）　箆被長が約9cmのもの。

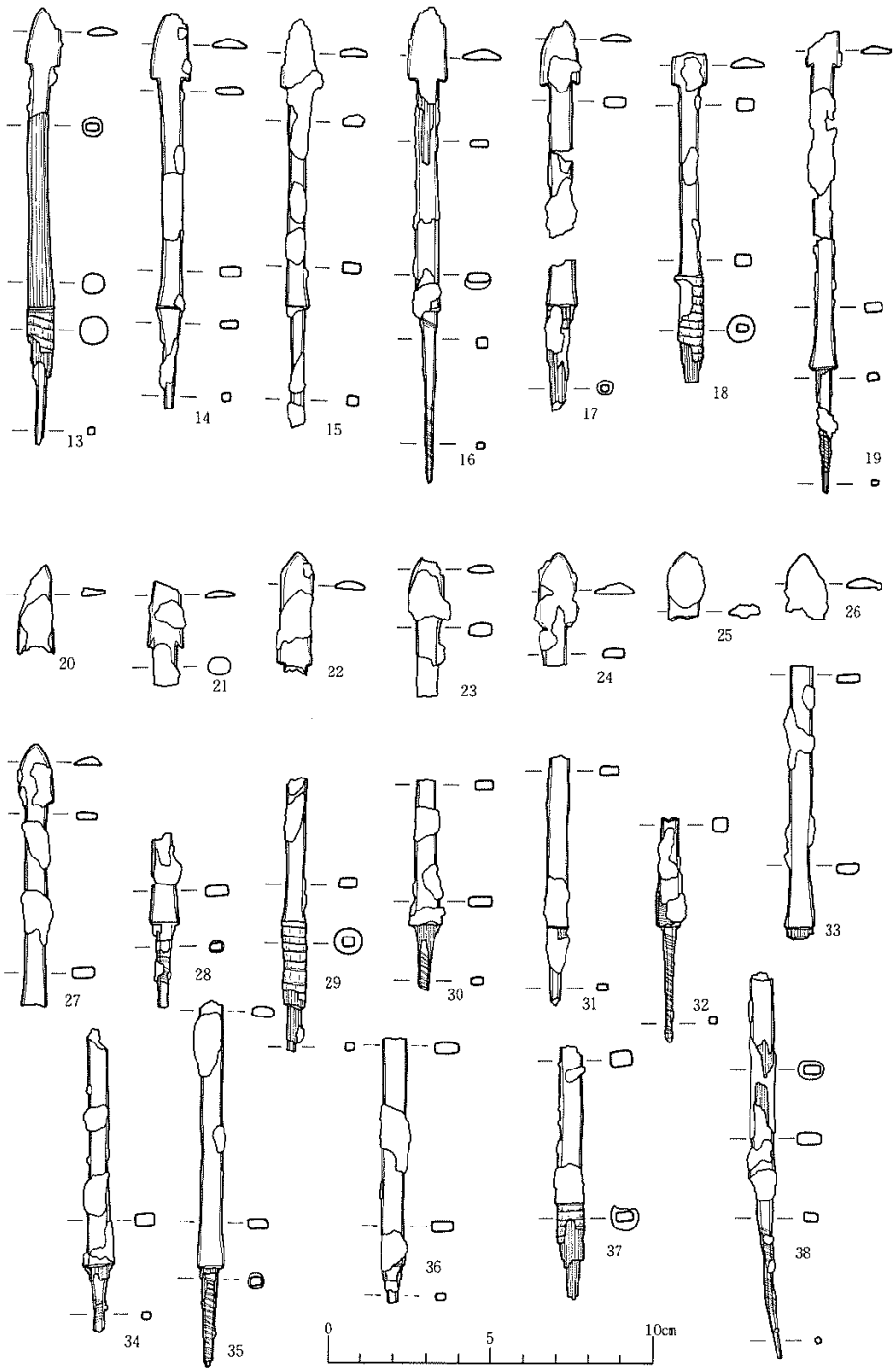
これらの鏃身の縞の有無は錆のため明確でない。箆被はいずれも細い板状で、鏃身側と茎側でわずかに幅・厚さを増している。箆被の関の部分に布片が付着したものが2例（第7図10・11）ある。茎が完存するものは少ないが、長さは4.5～5.5cmである。先端は針状に尖り、捻を加えたもの（第8図38）もある。茎に木質・糸巻が残っているものが多く、

第６図　第175号墳主体部鉄鏃出土状況





第７図　第175号墳出土遺物（１）



第８図　第175号墳出土遺物（２）

これらをみると、茎にはまず糸が巻かれ、これが竹製とみられる矢柄の木質部に挿入され、その表面が幅 3mmほどのコイル状の樹皮で巻かれている。なお、箆被の表裏に木質様の錆が残る例があるが（第 7 図 6、第 8 図 13・16・38）、これらが木質か否か明確でない。

鉄刀 1（第 9 図 1）：棺の据え形の北辺部の西側寄りで切先を西に向け、刃を外側に向けた状態で発見された。切先部が腐食してわずかに欠損しているがほぼ完存する。平棟・平造の直刀で、刃関が大きく切れ込む片関で、切先は丸みをもつ。茎には、径 3mmの目釘穴が 2 つある。また、刃側の茎端と関から 1.5㎝ の 2 ケ所に「切欠き」がある。

刀身には鞘の木質が部分的に残存し、茎には把木の木質と、これに密着して巻かれた緒が遺存している。鞘木は板目材とみられ、棟側に表裏の合わせ目が観察される。把木は棟側から溝をうがち、その中に茎を落し込み、2 カ所を目釘で留めて固定している。目釘は腐朽しているが、木もしくは竹製と考えられる。把木に巻かれた緒は太さ約 1mmである。

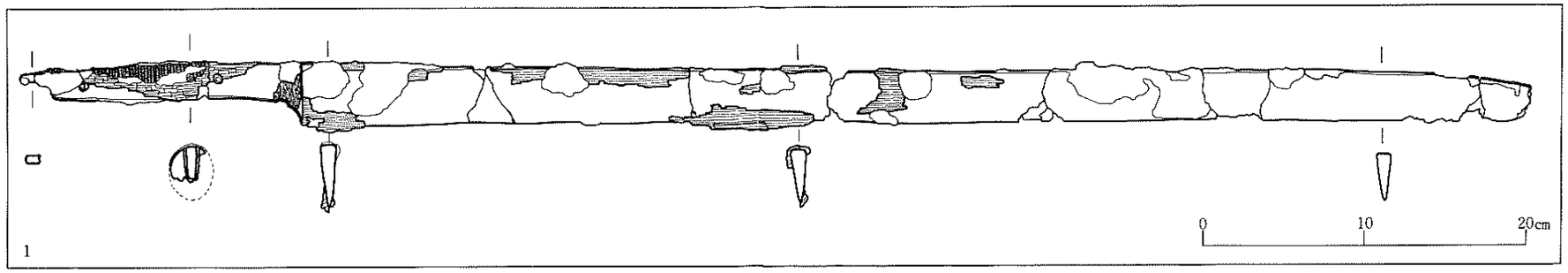
鉄刀 2（第 9 図 2）：鉄刀 1 の東隣で切先を西に向け、刃部を外側に向けた状態で出土した。茎端部が欠損している。茎に把木の木質がわずかに遺存し、刀身部表裏には布の断片が付着している。布断片は刀身に直に付着している。平棟・平造りで、刀身は直線的に延び、切先にむかって幅を減じる。両関で、棟関は大きく、刃関はわずかに切れ込む。

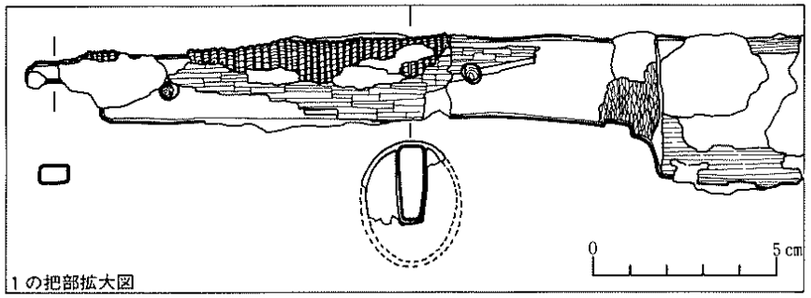
鉄刀 3（第 9 図 3）：鉄刀 2 の東隣で、切先を西に向け、刃部を外側に向けた状態で発見

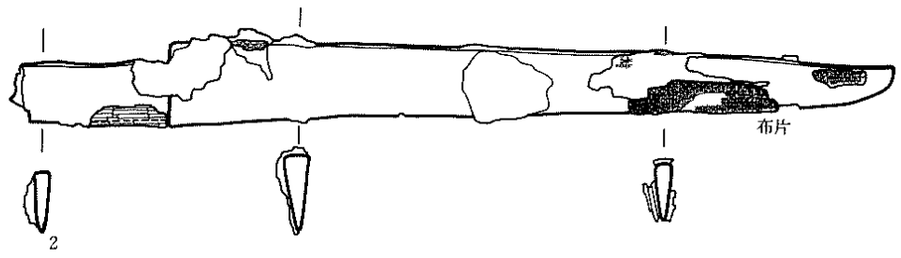
登録No.	全長（残存）	鏃身 長さ	鏃身 刃幅	鏃身 厚さ	被箆 長さ	被箆 幅	被箆 厚さ	茎 長さ	類型	遺物No.
1	(11.1)	(2.4)	1.1	0.3	6.6	0.8	0.3	(2.1)	A1	12-2
2	(11.9)	3.3	1.1	0.3	6.4	0.8	0.3	(2.2)	〃	14
3	(11.0)	3.2	1.1	0.2	6.6	0.7	0.3	(1.2)	〃	15
4	(12.6)	(1.2)	1.0	0.2	6.5	0.7	0.3	(4.9)	〃	19-2
5	(10.9)	(2.8)	1.1	0.3	6.7	0.8	0.3	(1.4)	〃	23-1
6	(13.2)	3.0	1.1	0.3	6.7	0.7	0.3	(3.5)	〃	一括-1
7	(10.8)	(2.9)	1.0	0.3	6.1	0.8	0.3	(1.8)	A2	8
8	(13.6)	(3.1)	1.0	0.3	6.0	0.6	0.3	4.5	〃	11
9	(14.0)	(2.1)	1.1	0.2	7.9	0.7	0.3	(4.0)	B1	2
10	14.2	2.1	1.1	--	7.9	0.7	0.3	4.2	〃	22
11	(11.8)	2.1	1.1	0.3	7.9	0.7	0.3	(1.8)	〃	12-1
12	(11.1)	2.1	1.2	0.3	7.9	0.7	0.4	(1.1)	〃	一括-2
13	(13.4)	(1.7)	1.1	0.2	7.5	0.5	0.2	(4.2)	B2	13+16
14	(12.2)	(2.0)	1.2	0.3	7.0	0.8	0.2	(3.2)	B3	18
15	(12.5)	(2.1)	1.2	0.2	6.7	0.7	0.3	(3.7)	〃	23-2
16	14.6	2.2	1.2	0.3	7.1	0.7	0.3	5.3	〃	19-1
17	(12.1)	(2.0)	1.2	0.2	(6.9)	0.7	0.3	(3.2)	〃	7-1
18	(10.1)	(1.0)	1.1	0.3	5.8	0.5	0.4	(3.3)	B4	5
19	(14.1)	(1.1)	1.1	0.2	9.2	0.8	0.3	(3.8)	C	21

No.	残存長	鏃身 長さ	鏃身 刃幅	鏃身 厚さ	被箆 長さ	被箆 幅	被箆 厚さ	茎 長さ	類型	遺物No.
20	(2.8)	(2.8)	1.2	0.2	---	---	---	---	A	一括
21	(3.2)	(2.0)	1.1	0.2	(1.2)	0.7	0.3	---	〃	一括
22	(3.8)	3.4	1.1	0.2	(0.4)	0.7	0.3	---	〃	6
23	(4.3)	(1.8)	1.1	0.2	(2.5)	0.8	0.4	---	B	一括
24	(3.5)	(2.2)	1.2	0.2	(1.3)	0.7	0.3	---	〃	1
25	(2.1)	(2.1)	1.0	0.2	---	---	---	---	〃	3
26	(2.0)	(2.0)	1.1	0.3	---	---	---	---	〃	17
27	(8.1)	(1.8)	1.1	0.2	(6.3)	0.7	0.2	---	〃	7-2
28	(5.3)	---	---	---	(3.3)	0.8	0.3	(2.6)	?	4
29	(8.4)	---	---	---	(4.5)	0.6	0.3	(3.9)	〃	6
30	(6.5)	---	---	---	(4.4)	0.7	0.3	(2.1)	〃	24
31	(7.7)	---	---	---	(5.2)	0.6	0.2	(2.5)	〃	25
32	(6.9)	---	---	---	(3.4)	0.5	0.5	(3.5)	〃	26
33	(8.4)	---	---	---	(8.0)	0.7	0.3	(0.4)	〃	一括
34	(9.3)	---	---	---	(7.2)	0.6	0.4	(2.1)	〃	3
35	(11.2)	---	---	---	(8.2)	0.7	0.3	3.0	〃	9
36	(8.1)	---	---	---	(7.0)	0.7	0.3	(1.1)	〃	10
37	(7.8)	---	---	---	(4.9)	0.7	0.4	(2.9)	〃	20
38	(11.8)	---	---	---	(6.4)	0.7	0.3	5.4	〃	17

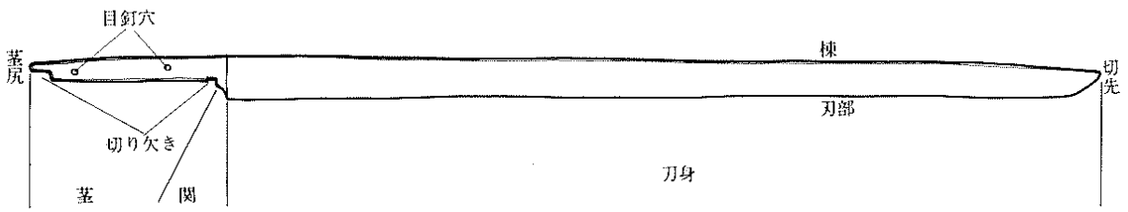
第175号墳出土鉄鏃計測値（単位㎝）

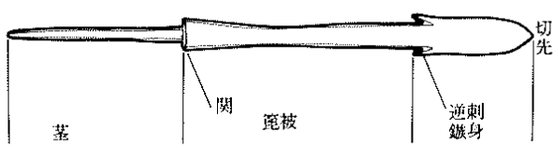


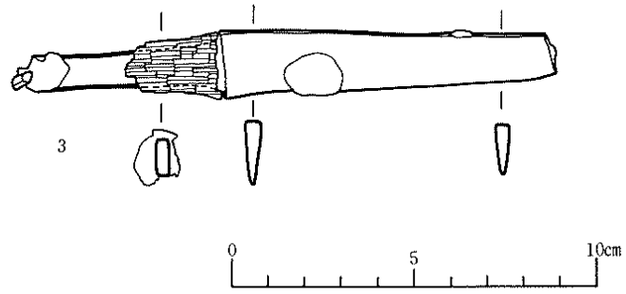




刀・鏃部位名称概念図

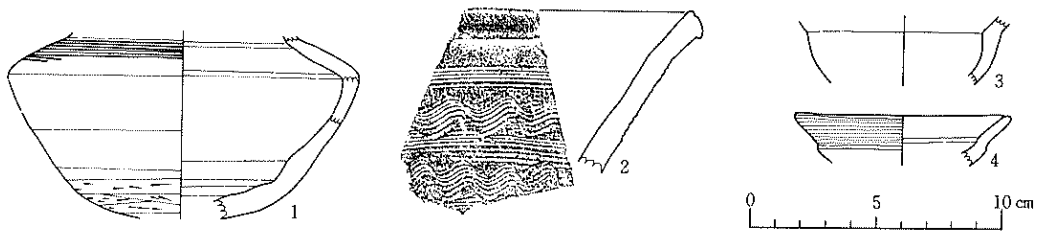






No.	長（残存長）	切先～関			茎		
		長さ	刃最大幅	厚さ	長さ	幅	厚さ
1	93.0	76.5	3.7	1.0	16.5	2.0	0.8
2	(23.5)	19.2	2.2	0.7	(4.3)	1.6	0.4
3	(14.5)	(9.8)	1.7	0.45	(4.7)	0.8	0.3

第９図　第175号墳出土遺物（３）



No.	出土地点・層位	器　種	口径	底径	器高	登録No.
1	周溝　堆積土	須恵器　壺	／	／	／	1
2	周溝　堆積土	須恵器　甕	／	／	／	2
3	墳丘　積土3層	土師器　杯	／	／	／	3
4	墳丘　積土下旧表土	土師器　杯	（8．6）	／	／	4

第10図　第175号墳出土遺物（4）

された。切先と茎先端部が欠損している。茎部には把木の木質が遺存している。平棟・平造りで、刀身は直線的に延び、切先にむかって幅を減じる。把木の木質が遺存するため関の形態は明瞭でないが、両関で棟・刃側ともわずかに切れ込むようである。

須恵器　壺（第 10 図 1）：北側の周溝堆積土より出土した。底部と肩部の破片があり、胎土・焼成などから同一個体と判断され、器形は短頸の壺と推定される。肩が張り、底部は丸底である。肩部にはカキメがみられ、底部は大きな単位のヘラケズリにより整形されている。内面のロクロ目は明瞭である。

須悪器　甕（第 10 図 2）：南側の周溝堆積土より出土した。口縁部の破片である。口縁端部はわずかにつまみ上げられ、頸部には 2 段の櫛描波状文がみられる。

土師器　杯（第 10 図 3）：墳丘積み土 1 層より出土した。口縁部から体部にかけての破片である。内面の口縁部と体部の境には明瞭な稜が形成されている。

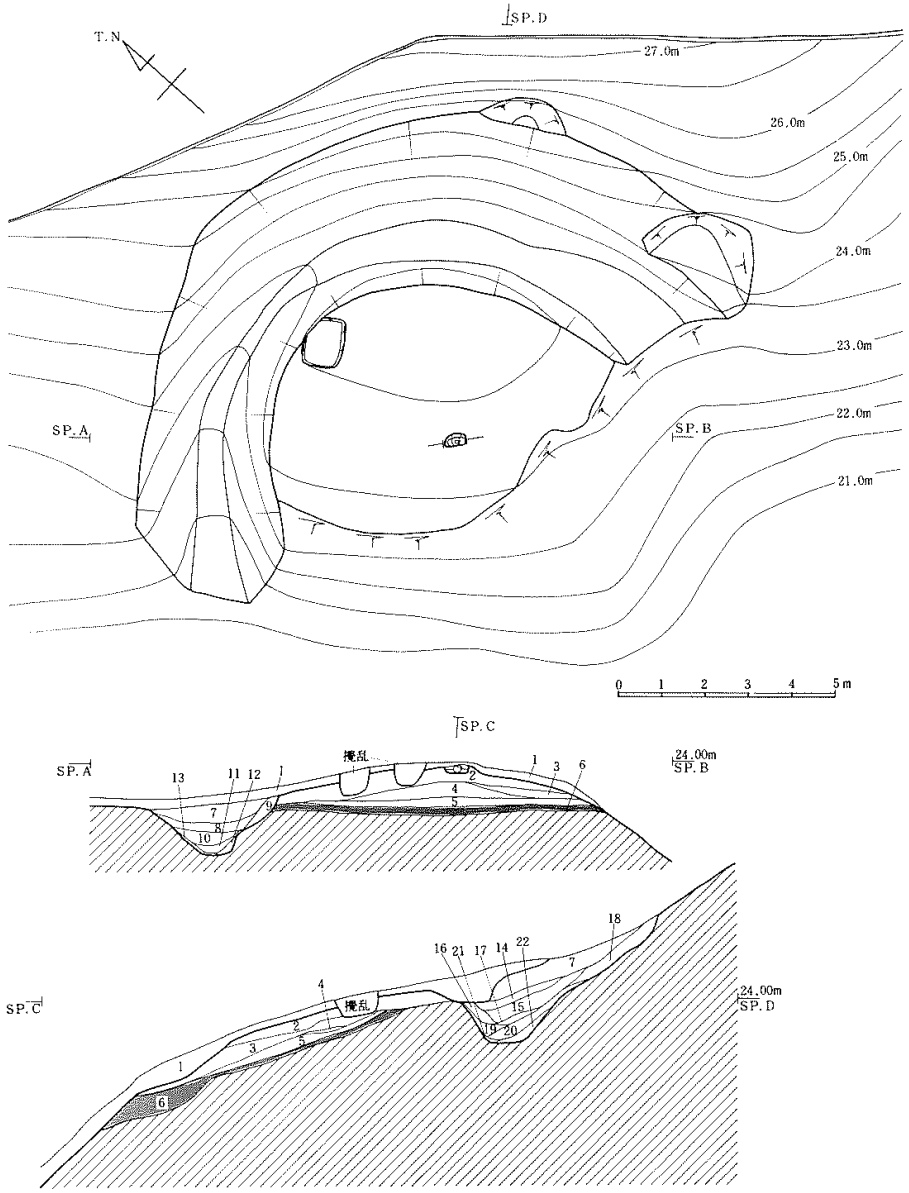
土師器　杯（第 10 図 4）：墳丘下の旧表土層より出土した。口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は外反し、内外の口縁部と体部の境に段が形成されている。

2　第 176 号墳（第 11・12 図）

位置・確認状況：調査区の丘陵斜面のほぼ中央に立地し、最も西側に張り出している。発掘調査前の表面観察の際には、墳丘の存在が最も明瞭であった。

残存状況：上部の積み土および、墳丘の西半部が大きく崩落している。

墳丘：墳丘の直径は周溝内周で約 8m、墳頂部は標高 23m前後、西側周溝下端との比高は約 2mである。積み土は、20 度前後の傾斜地の旧表土上に積まれており 4 層に大別された（第 11 図）。積み土 1 は墳丘上部を覆い、厚さは 20～50㎝ある。積み土 2 は墳丘下部の斜面下方にあたる西側に分布し、厚さは 10～40㎝で斜面下方にゆくにしたがい厚みを増

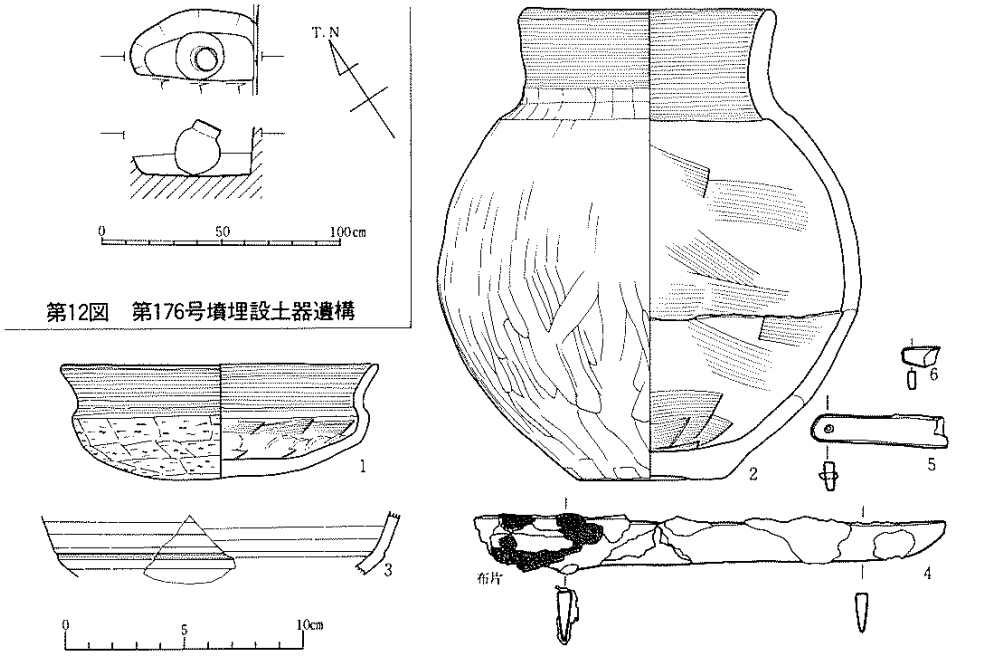


層No	土　色	土　性	層の性格
1	にぶい褐色（7.5YR 4/6）	砂礫まじりシルト	現表土
2	明褐色（7.5YR 5/6）	砂まじりシルト	墳丘積土1
3	褐色（10YR 4/6）	砂質シルト	〃　2
4	明褐色（7.5YR 5/8）	〃	〃　3
5	にぶい褐色（7.5YR 5/3）	〃	〃　4
6	暗褐色（7.5YR 3/3）	シルト	旧表土
7	褐色（7.5YR 4/4）	〃	周溝（北部）堆積土
8	暗褐色（10YR 3/4）	粘土質シルト	〃
9	灰褐色	砂質シルト	〃
10	赤褐色（7.5YR 4/6）	砂まじりシルト	〃
11	明赤褐色（7.5YR 5/6）	〃	〃

層No	土　色	土　性	層の性格
12	灰褐色	砂質シルト	〃
13	褐色	〃	〃
14	暗褐色（7.5YR 3/4）	砂まじりシルト	周溝（東部）堆積土
15	にぶい赤褐色（5YR 5/4）	〃	〃
16	にぶい赤褐色（2.5YR 4/3）	〃	〃
17	暗褐色（10YR 3/3）	粘土質シルト	〃
18	にぶい褐色（7.5YR 6/3）	砂まじりシルト	〃
19	暗赤褐色（2.5YR 3/3）	シルトまじり砂	〃
20	明赤褐色（5YR 5/8）	〃	〃
21	灰褐色	〃	〃
22	赤褐色	〃	〃

第11図　第176号墳平面・断面図

第12図　第176号墳埋設土器遺構



No.	出土地点・層位	器　種	口径	底径	器高	登録No.
1	周溝　堆積土	土師器　杯	13.4	/	4.9	5
2	墳頂　土壙	土師器　甕	10.9	6.0	19.8	6
3	周溝　堆積土	須恵器　蓋無高杯	15<	/	/	7

No.	全長（残存長）	切先～関			茎		
		長さ	刃最大幅	厚さ	長さ	幅	厚さ
4	(19.8)	(19.8)	1.8	0.6	---	---	---
5	(5.6)	---	---	---	(5.6)	1.3	0.4
6	(1.5)	---	---	---	(1.5)	(0.8)	0.3

第13図　第176号墳出土遺物

している。積み土 3 は墳丘下部の中央部に分布し、厚さ 30㎝ 前後である。積み土 4 は墳丘下部の西側に分布し、厚さは 10～20㎝ で旧表土上面を覆っている。いずれも地山起源の土で、周溝部の排土を積んだものと考えられる。版築の痕跡はみられない。

周溝：墳丘東半の丘陵斜面を弧状に掘り切るように巡る。断面形は逆台形で、底面は緩やかに西側に傾斜し、残りのよい東側での上幅は 4m、深さは 3m、堆積土は自然に流入した赤褐色の砂質土である。

埋葬主体部：埋葬主体部とみられる遺構は発見されなかった。埋葬主体部は、上部の積み土が流失したために失われたものと考えられる。なお、墳丘中央のやや南よりの積み土 1 層上面で、土器が埋設された径 50㎝ の楕円形の土壙が発見された(第 12 図)。壁は底面から急に立ち上がり、確認面からの深さは 20㎝ 前後である。土壙は積み土の上部から掘り込まれており、底面・壁はともに墳丘積み土 1 層の明褐色土からなる。この土壙の構築時期・性格は明確でないが、墳丘築成後の遺構であることは明白であり、位置的にみて古墳の埋葬主体部に付随したなんらかの施設と考えられる。

出土　遺物：土壙内から土師器壺、周溝堆積土から土師器杯が出土した。この他、周溝堆積土や周辺の表土から土器・刀片が出土している。以下、個別の出土状況と特徴を記す。

土師器　杯(第 13 図 1)：東側の周溝の底面に近い堆積土から、口縁部を下にした状態で出土した。完形品である。浅い丸底で、体部中位が張り、口縁部と体部の境に稜が形成され、口縁部は強く外反する。

土師器　壺(第 13 図 2)：墳丘中央の土壙内に埋置された状態で出土した。口縁部を上にし、底部は土壙底面に着いていた。ほぼ完形品である。口縁部は直立し、長胴で中位に最大径をもち、底部はわずかに揚げ底である。

須恵器　高杯(第 13 図 3)：南側の周溝堆積土から出土した。口縁部の小破片で、口縁部は内湾気味に外傾し、口縁部と体部の境に明瞭な段が形成されている。

刀（第 13 図 4・5・6）：墳丘のほぼ中央の表土下部から刀の破片が 3 点出土した。切先から刀身部にかけての破片が 1 点、茎端部が 2 点ある。刀身には布が付着している。

3　第 177 号墳（第 14・15 図）

位置・確認状況：調査区の北東部に位置する。発掘前の表面観察で、低平な墳丘が確認された。墳丘の大半は調査区外にあり、古墳の西側約 1／3 のみを調査した。

残存状況：上部の封土が流失し、きわめて低平な墳丘である。

墳丘：墳丘の直径は 8m前後と推定され、墳頂部は標高 26m前後、西側裾部との比高は約 2mである。墳丘西側を断ち割った結果、旧表土上に褐色系の土を積んでいることが確認された。また墳丘裾部が地山を削り出して整形されている状況が確認された。

周溝：墳丘の南西・北西部で周溝が確認された。175・176 号墳の例から、丘陵斜面を弧状に掘り切るように巡ると推定される。断面形は逆台形で、南東側での上幅は 2.5m、深さは 30㎝、堆積土は自然に流入した黒褐色土で、拳大の礫を多量に含んでいる。なお、斜面下方にあたる西側では周溝は確認されなかった。

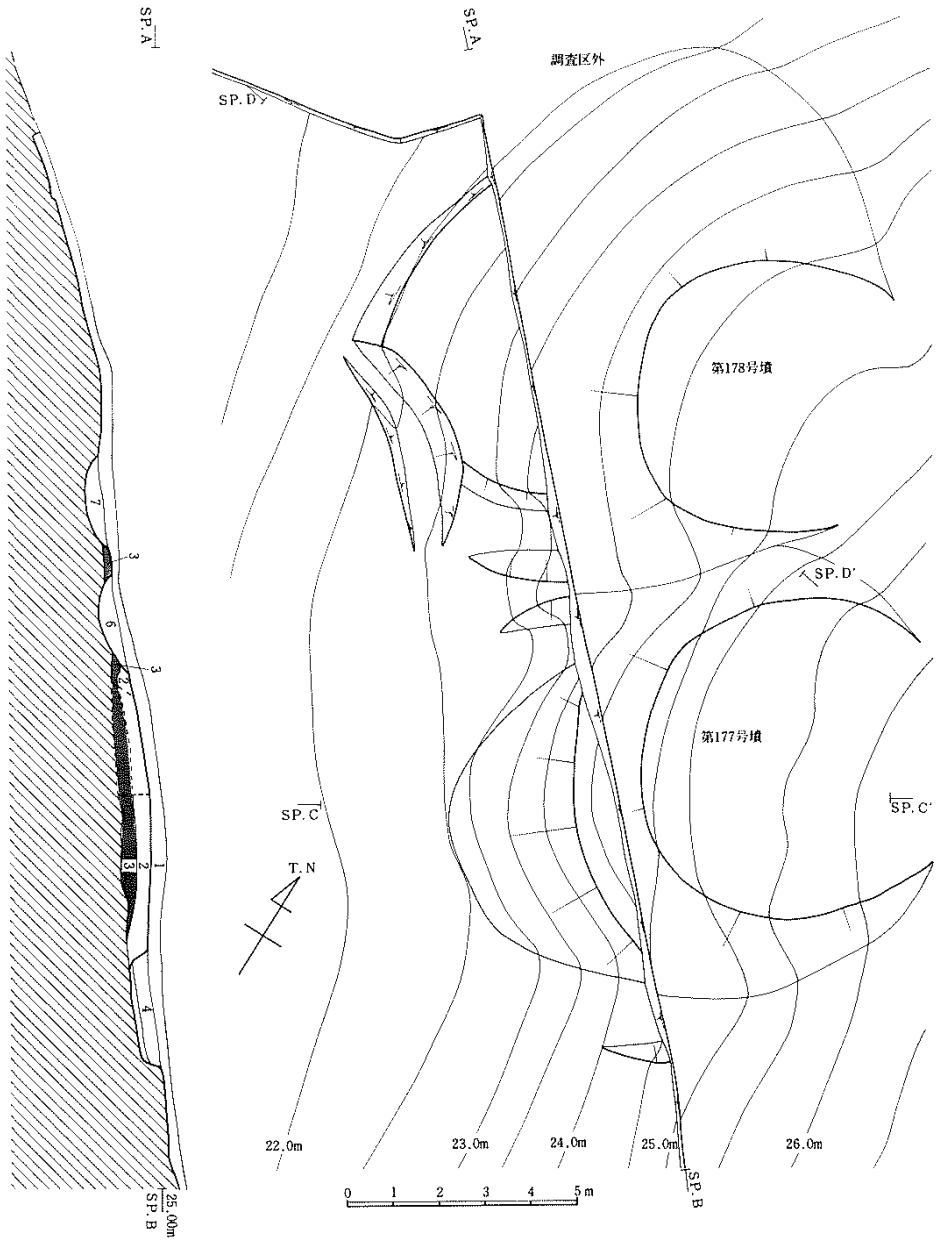
4　第 178 号墳（第 14・15 図）

位置・確認状況：調査区の北東端部に位置する。発掘前の表面観察で、低平な墳丘が確認された。墳丘の大半は調査区外にあり、調査対象となったのは墳丘西側裾部だけである。

残存状況：上部の封土が流失し、きわめて低平な墳丘である。裾部の西端は後世の溝によって破壊されている。

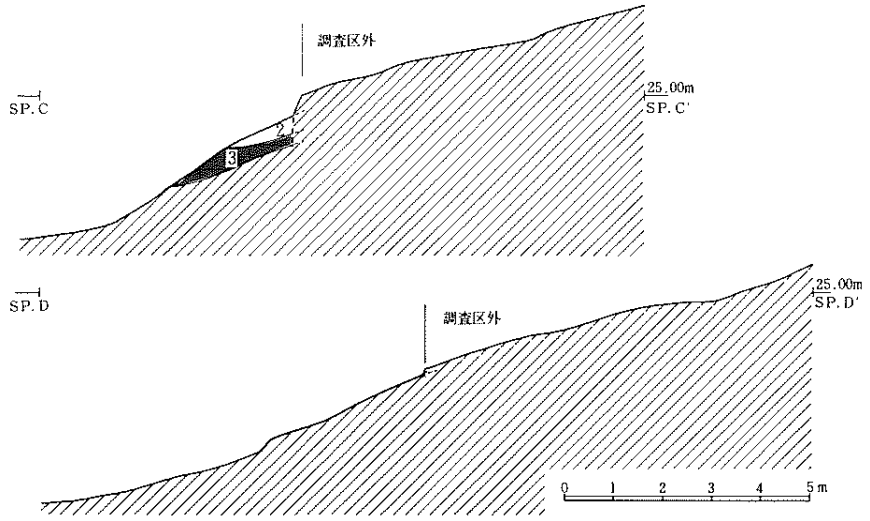
墳丘：墳丘の直径は 8m前後と推定され、墳頂部は標高 24m前後、西側裾部との比高は約 2mである。西側の墳丘の裾部を断ち割ったところ、墳丘裾部が地山を削り出して整形されている状況が確認された。積み土は確認されなかった。

周溝：墳丘の南西部で周溝が確認された。他の例から、丘陵斜面を弧状に掘り切るよう



層No.	土色	土性	層の性格
1	暗褐色（7.5YR 3/4）	砂礫まじりシルト	現表土
2	暗褐色（10YR 3/3）	砂まじりシルト	177号墳墳丘積土1
3	黒褐色（10YR 3/2）	粘土質シルト	旧表土
4	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	177墳周溝南部堆積土
5	黒褐色（10YR 3/2）	シルト（礫を含む）	〃
6	にぶい黄褐色（10YR 5/4）	砂礫まじりシルト	177墳周溝北部堆積土
7	褐色（10YR 4/4）	シルト	178墳周溝南部堆積土

第14図　第177・178号墳平面・断面図



第15図　第177号・178号墳断面図

に巡ると推定される。断面形は「U」字形で、上幅は 2m、深さは 30㎝、堆積土は自然に流入した褐色土である。なお、斜面下方にあたる西側では周溝は確認されなかった。

5　表土出土遺物（第 16 図）

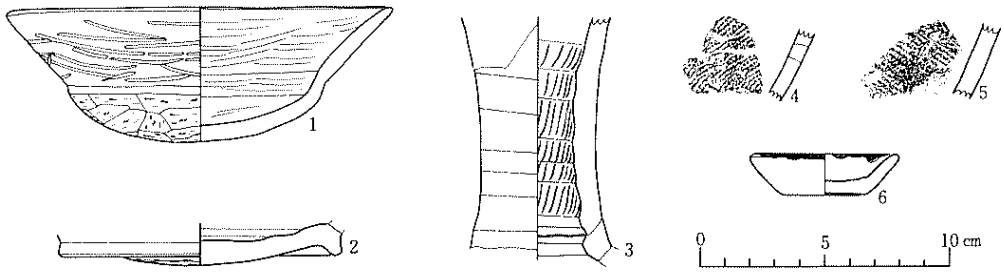
土師器　杯（第 16 図）：第 176 号墳東方の丘陵斜面から出土した。完形品で、焼成は軟質で内外面とも赤褐色である。浅い丸底で、体部中位に段が形成され、口縁部は直線的に外傾する。底部外面はヘラケズリ、口縁部内外面ヘラミガキ、内面底部はヘラナデである。器形的特徴や内面が黒色処理されていないことから、東北地方南部の土師器編年（氏家：1957）における「住社式」期のものとみられる。

須恵器　高台杯(第 16 図 2)：第 176 号墳西側から出土した杯底部の破片である。丸底で、杯底部が高台部よりも突出する特徴的な器形である。年代的には、7 世紀後半から 8 世紀中葉のものとみられる。

須恵器　長頸瓶(第 16 図 3)：第 175 号墳の南側から出土した。頸部のみの破片で全体形のと考えられる。焼成は堅ちで、緑色の自然釉がみられる。年代的には、7 世紀後半から 8 世紀中葉のものとみられる。

弥生土器(第 16 図 4・5)：第 175 号墳の積み土および南側から出土した。いずれも体部の小破片で、細かい単節の縄文（ＬＲ）が施されている。

土師質土器(第 16 図 6)：第 175 号墳墳頂部の表土から出土した。完形品である。小型の灯明皿で、口縁部にはタール状の付着物がみられる。近世以降のものと考えられる。



No.	出土地点・層位	器種	口径	底径	器高	登録No.
1	176号墳東部	土師器 杯	15.8	／	5.5	8
2	176号墳南部	須恵器 杯	／	11.3	／	9
3	175号墳西部	須恵器 壷	／	／	／	10
4	175号墳積土	弥生土器	／	／	／	11
5	175号墳周辺	弥生土器	／	／	／	12
6	175号墳墳頂	土師質土器	6.0	3.5	1.6	13

第16図　表土遺物

III　考 察

1　出土遺物について

（1）第 175 号墳主体部出土の鉄鏃・鉄刀について

第 175 号墳の埋葬主体部出土の鉄鏃・鉄刀について出土状況・個々の構造上の特徴・年代的位置付けなどについて検討したい。

棺内において、鉄刀 3 振は、遺骸右側の腰部付近に置かれていたと推定される。このうち鉄刀 1 は、長さ 93㎝・刃幅 3㎝ 以上と長大であること、刃関が大きく切れ込む片関であること、把木の溝に茎を落し込む構造をとることなど、6 世紀代の刀の形態・構造的特徴をよく示している。さらに茎の二カ所にみられる切欠きは、把木と茎の固定を強化するためと、把に護拳用の帯を装着するための細工と考えられているもので、5 世紀後半から 6 世紀前半に位置付けられる古墳出土刀に多いとされている（置田：1985）。

鉄鏃は遺骸の足元中央付近に置かれていたと推定される。茎に木質が遺存するものが多く、埋納時には矢柄に装着されていたとみられる。また、先端部がほぼ揃った状態で出土していることから、推定をたくましくすれば靫もしくは胡録などの矢を盛る容器に収納されていた可能性も考えられる。

出土した鉄鏃の総数は箆被の関部の数で 30 本あり、いずれも長い箆被をもつ細根式、片丸造の三角・柳葉形の鏃で、箆被関部が肥厚し茎との境が段をなしている。これらの鏃の年代的位置付けについて考えてみたい。まず、長い箆被をもつ鏃の中では古い段階の資料(小久保他：1983)とされる埼玉県稲荷山古墳第 1 主体部出土資料と比較すると、鏃身が片丸（片縞）造であること、箆被関部が肥厚し段をなすことなど多くの共通点がみられるが、稲荷山古墳例では逆刺が鋭くしかも大きく外反している。台町第 175 号墳の鏃は逆刺が小さく箆被に接近しやや退化的な形態を示している。一方、同じく長い箆被をもつ鏃は、7 世紀代には宮城県色麻古墳群出土資料（古川：1985）のような片刃箭を主体とし箆被の関部が棘状の突起をもつ形態に変化する。このような鏃身・箆被関部の形態変化は、6 世紀後半以降に顕在化するとの見解がある(関：1986)。これらのことから、第 175 号墳出土の 30 本の鉄鏃は、長い箆被をもつ鏃の形態変遷の中において 6 世紀前葉から中葉に位置付けられる形態的特徴・組成を有していると考えられる。

以上のように第 175 号墳主体部出土の副葬品のうち、鉄刀 1 は 5 世紀後半から 6 世紀代、鈦鏃は 6 世紀前葉から中葉に位置付けられるものである。

（2）第 175・176 号墳出土土器について

第 175・176 号墳の周溝堆積土・土壙・墳丘積み土から土師器・須恵器が出土している。これらの編年的位置について大阪府陶邑の須恵器編年(田辺；1981)、宮城県周辺地域の古墳時代の土師器編年（氏家；1957・加藤；1989）を参考にして検討してみたい。

第 175 号墳では、周溝堆積土から須恵器壺･甕が、また墳丘積土 2 層から土師器杯が出土している。これらはいずれも破片資料で詳細な検討は困難であるが、須恵器壺については、肩部のカキメが鋭く底部が丸底であるなどの点から、陶邑の第Ⅱ期のＴＫ10 型式（田辺；1981）に比定され、須恵器甕も口縁端部形態などからほぼ同様の段階のものと推定される。

第 176 号墳では周溝堆積土から土師器杯・須恵器高杯が、また墳丘中央の土壙内から土師器壺が出土している。このうち土師器杯・壺はいずれも完形品で、出土状態などからみて古墳に密接に関係する遺物であり、古墳の造営年代を示唆する遺物と考えられる。

周溝堆積土出土の土師器杯は、浅い丸底で、口縁部が強く外反し、口縁部と体部の境に稜が形成されるなどの特徴から、宮城県角田市田町裏遺跡出土土器（志間；1965）の中に近似した器形を見いだすことができ、東北地方南部地域の土師器編年（氏家；1957）における「住社式」期のものと考えられる。しかし、本例は体部中位が張り、体部最大径が口径にほぼ等しいなど、厳密には「住社式」の範疇から逸脱する特徴を有している。これについては、南小泉式の杯の器形的特色を色濃く残した「住社式」の資料とみることもできるが、類例が隣接する福島県南部地域にみられ、土器の地域性が反映している可能性も考えられる。具体的な類例としては福島県中通り地方南部の天栄村舞台遺跡（玉川：1981）の資料がある。舞台遺跡ではこれらの土器とともに関東地方の鬼高Ⅱ式に近似した土器が出土しており、土器の系譜、関東地方との併行関係を考える上で示唆に富む資料と言える。

土壙出土の土師器壺は、口縁部が直立し、長胴で中位に最大径をもち、底部はわずかに揚げ底であるなどの特徴を有している。上述の杯と同様、角田市田町裏遺跡出土土器の中に近似した器形を見いだすことができ、「住社式」段階のものと考えられる。福島県中通り地方の資料についてみると、東村佐平林遺跡(目黒他；1978)、郡山市丸山遺跡(押山；1988)などに類例がみられる。これらは共伴した土師器杯の形態変遷から「住社式に先行する段階」(目黒他；1978)、もしくは「住社式古段階」(柳沼；1990)とされている。

第 176 号墳周溝出土の須恵器高杯破片については、杯部下端の沈線が鈍く底部の器壁が薄いことなどから、陶邑の須恵器編年におけるⅡ期中・後半段階のものと推定される。

検討してきた土器の実年代についてみると、須恵器は陶邑の年代観(田辺；1981)から、第 175 号墳出土の須恵器壺・甕が 6 世紀中葉、第 176 号墳出土の無蓋高杯が 6 世紀中～後葉にそれぞれ位置付けられる。

土師器の実年代については、宮城県名取市清水遺跡第 40 号住居跡で「住社式の古い段階」に比定される土師器とＴＫ10 型式に比定される須恵器が共伴していることから「住社式の古い段階」については 6 世紀中葉を中心とした年代が想定されている(丹羽他:1981)。第 176 号墳出土の土師器杯・壺も、「住社式」の中でも古い要素をもつものと考えられ、同様に 6 世紀中葉前後の年代を想定することができよう。このような編年的位置付けや年代観に関しては、類例として示した福島県地域における土師器の編年や、舞台遺跡における鬼高Ⅱ式との関係とも矛盾せず、妥当なものと考えられる。

2　古墳の構造と年代について

（1）墳丘について

調査を行った 4 基はいずれも直径 10m前後の円墳である。調査の知見をもとにこれらの墳丘の築成方法について考察する。

まず、墳丘積み土の状況を第 175・176・177 号墳でみると、墳丘積み土の層序・土質は、いずれも周溝の壁や墳裾などで観察される墳丘下の地山とほぼ同質のものである。このことから、墳丘積み土の供給源は主に周溝部からの排出土とみられ、これを斜面下方に流し落とすようにして順次積み重ねて墳丘が造成されたものと考えられる。

次に、周溝の形状を第 175･176･177 号墳でみると、平面形はいずれも墳丘の山側に弧状に巡るとみられる。斜面の斜度や周溝底面の高低差を勘案すれば、周溝は全周せず、当初から墳丘の山側にだけ弧状に掘り込まれたものだったと推定される。また周溝の断面形態を第 175 号墳でみると、外側の壁はなだらかに立ち上がるが、内周の壁は高さ 1m前後で、急角度で立ち上がっている。このような構造は、墳頂の平坦面を丘陵斜面から明確に切り放し、特殊な領域として外界からの隔絶性を高める効果を意図したものと考えられる。

一方、谷側の墳丘裾部についてみると、第 177・178 号墳の裾部の地山の等高線が円形にまわることから、これらの部分は地山を削り出して整形されたものと考えられる。第 175・176 号墳では墳裾が削平されて明確でないが、このような裾部の整形が同様になされていた可能性は十分考えられる。谷側の墳裾部を削り出すことは、墳丘形態を整えると同時に、谷側からみた古墳の高さを強調する上で大きな効果があったと考えられる。

これらの古墳の造営にあたっては、土の移動が斜面の上から下への短距離の移動ですみ、しかも版築などの複雑な作業の痕跡もみられないことから、さほど大きな労働力や特殊な技術を要さず、しかも、かなり短期間に造営可能であったと推定される。

（2）埋葬主体部の構造と年代

第 175 号墳の主体部は長さ 4m前後、幅 2m前後の長方形の墓壙に割竹形の木棺を直葬したもので、粘土などによる被覆・棺床の構築は一切みられない。周辺地域におけるこのような埋葬主体部の類例として福島県浪江町加倉 3 号墳（生江：1979）・宮城県仙台市六反田遺跡木棺墓（田中：1981）・同大和町八谷館跡Ｂ平場墓壙（斎藤：1983）などがある。これらはいずれも長さ 4m前後、幅 2m前後の長方形の墓壙内に、長さが 3m前後の割竹形木棺を埋置したと考えられる埋葬施設で、台町第 175 号墳の主体部に規模・構造ともに類似している。ただし、加倉 3 号墳・六反田木棺墓では粘土を用いて棺床の設置や棺の目張りなどがなされているが八谷館跡墓壙・台町第 175 号墳にはそれがみられない。副葬品は、加倉 3 号墳・八谷館跡墓壙から鉄刀・刀子・鉄鏃・玉類が出土しており、造営年代については加倉 3 号墳が 5 世紀末葉、他の二古墳も 5 世紀末前後のものと考えられている。

周辺地域におけるこの種の埋葬主体部の造営年代については、従来漠然と 5 世紀代とされてきた(伊藤他；1985)。しかし、台町第 175 号墳の造営年代は、主体部出土遺物や周溝出土須恵器の検討からみて 6 世紀中葉ころとみられ、5 世紀代まで遡ることは考え難い。したがって、ここでは割竹形木棺の古墳の造営が 6 世紀中葉まで継続した可能性を指摘しておきたい。なお、台町第 175 号墳に隣接する第 176 号墳は主体部が確認されなかったが、石材などが全く確認されていないことから第 175 号墳と同様の木棺直葬であった可能性が高く、その造営年代も出土した土師器から 5 世紀中葉前後とみられ、第 175 号とあい前後する時期のものと考えられる。

6 世紀中葉前後に古墳群の外縁部にあたる丘陵突端の斜面最下段に上述したような古墳が造営されていることが確認されたことは、台町古墳群の形成過程や群の構成を検討する上で貴重を資料となろう。

引用・参考文献

伊藤玄三他；1985；「本屋敷古墳群の研究」　法政大学

氏家和典；1957；「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」14叢　東北史学会

置田雅昭；1985；「古墳時代の木製刀把装具」「天理大学学報」145叢　天理大学

置田雅昭；1988；「天理参考館所蔵の鉄製品」「天理参考館報」創刊号　天理参考館

押山雄三；1988；「丸山遺跡」　郡山カルチャーパーク関連報告第2集　郡山市埋蔵文化財事業団

加藤道男；1989；「宮城県における土師器研究の現状」考古学論叢Ⅱ　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

小久保他；1983；「埼玉県における古墳出土遺物の研究　Ⅰ　－鉄鏃について－」「研究紀要　'83」　埼玉県埋蔵文化財事業団

志間泰治；1965；「田町裏遺跡」宮城県文化財調査報告書第8集　　宮城県教育委員会

末永雅雄；1981；増補「日本上代の武器」木耳社

関　義則；1986；「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」　日本古代文化研究第3号　古墳文化研究会

田中則和他；1981；「六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第34集　仙台市教育委員会

田辺昭一；1981；「須恵器大成」角川書店

玉川一郎；1981；「舞台」－福島県岩瀬郡天栄村における古墳時代集落址の調査　福島県岩瀬郡天栄村

丹羽・小野寺・阿部；1981；「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会

生江・寺島；1979；「加倉古墳群」浪江町

目黒・佐藤・大越；1978；「佐平林遺跡（I～IV区）」母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ　福島県埋蔵文化財発掘調査報告書第67集　福島県文化センター

柳沼賢治；1990；「福島県中通り地方の土師器」シンポジウム「福島県における古代土器の諸問題」鹿島町教育委員会

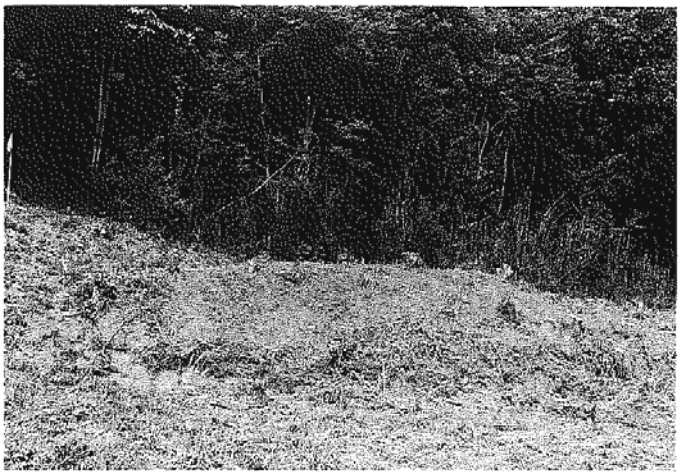
斎藤吉弘；1983；「御所・八谷館跡」宮城県文化財調査報告書第93集　宮城県教育委員会

藤沢　敦；1990；「宮城・岩手」「古墳時代の研究11　地域の古墳Ⅱ　東日本」　雄山閣

遠　景　1

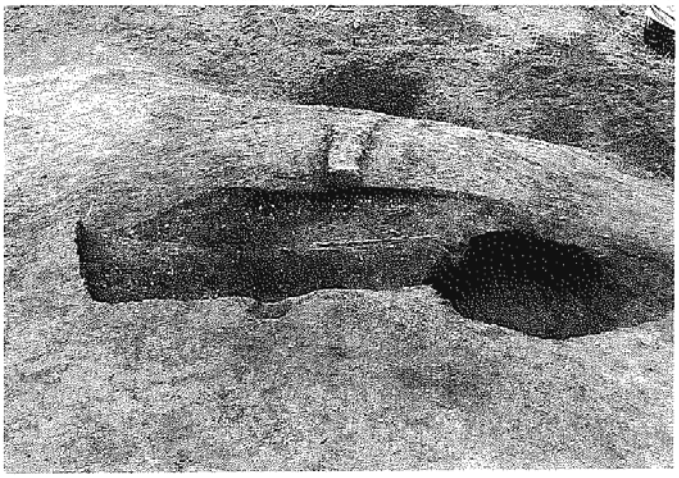
遠　景　2

図版 1



第175号墳現況
（西より）

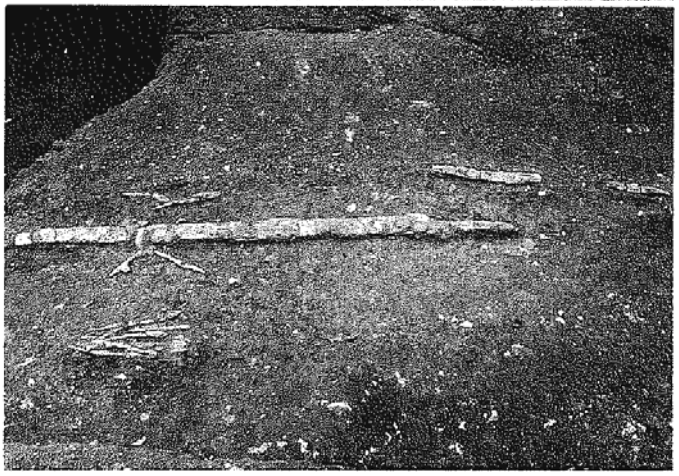
第175号墳表土除去後
（西より）



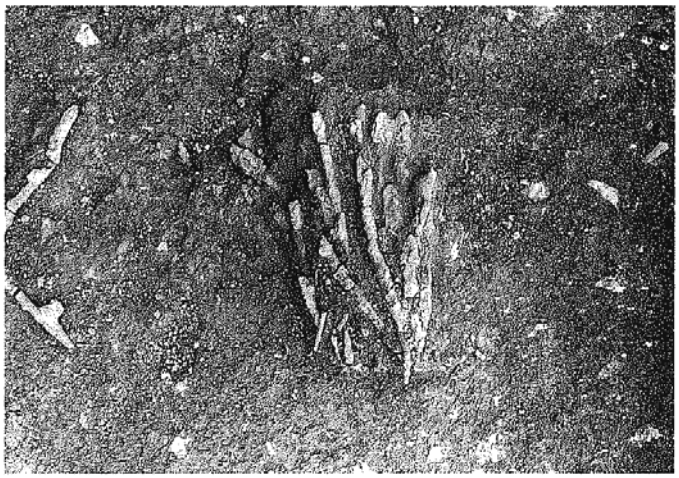
第175号墳主体部
（東より）

図版 2

第175号墳主体部
（北より）

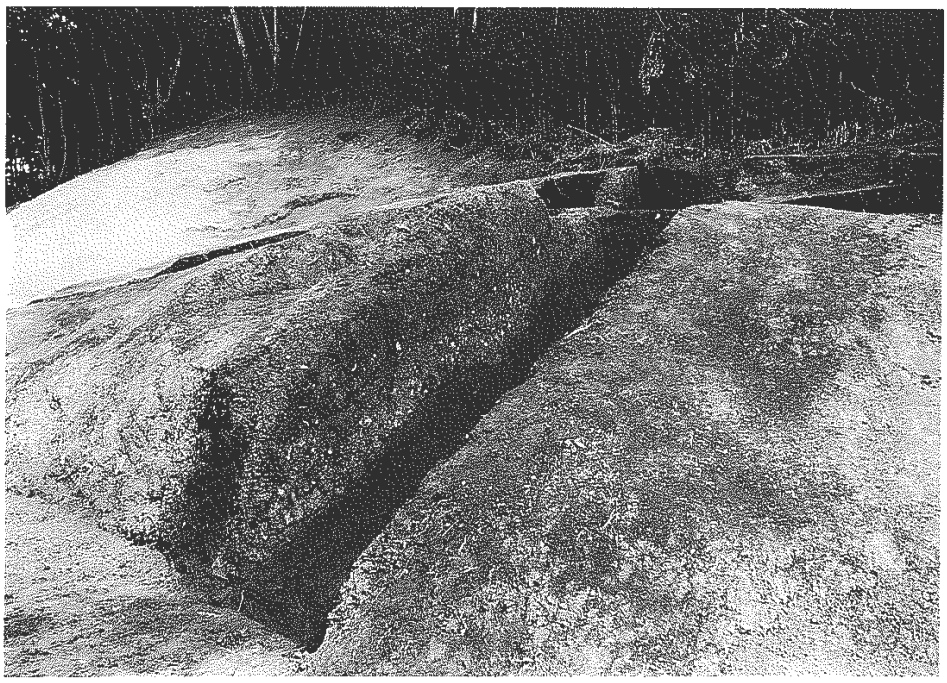


第175号墳主体部
遺物出土状況
（西より）



第175号墳主体部
鉄鏃出土状況

図版 3

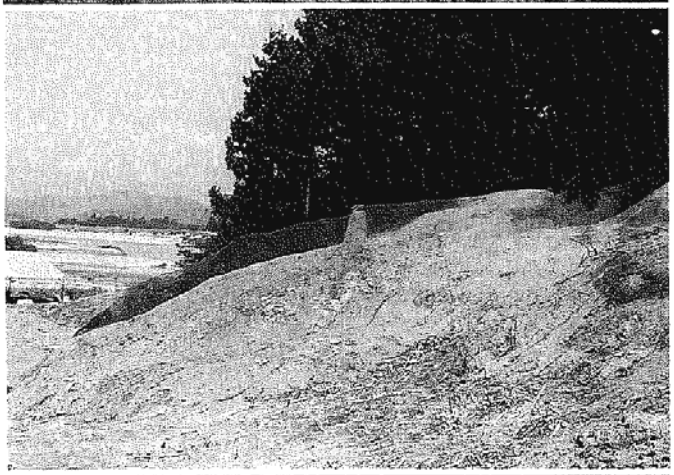


第175号墳 墳丘積み土の状況（西より）

同上（北より）

図版 4

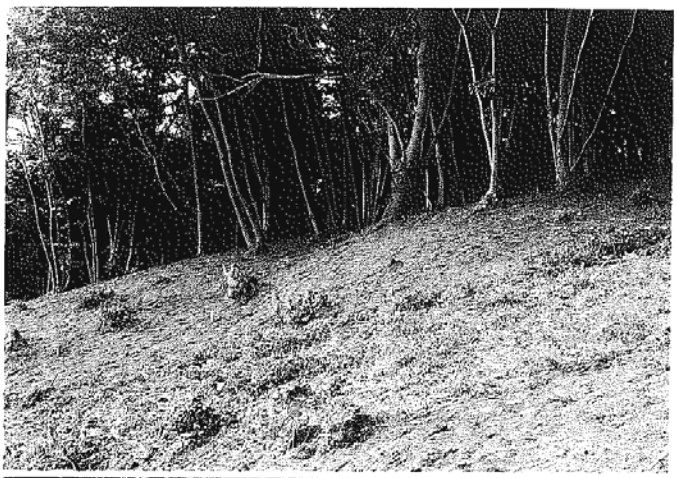
第176号墳
（北より）



第176号墳
墳丘断面
（南より）

第176号墳
周溝堆積土
（南より）

図版 5



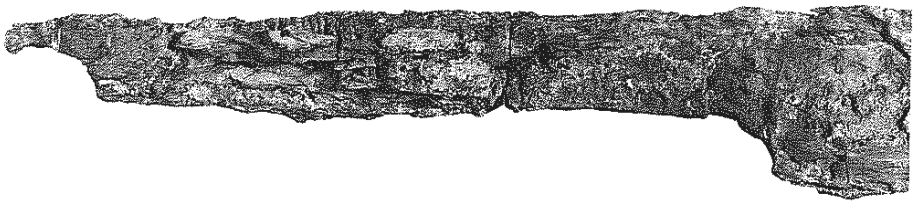
第177・178号墳
現況

同上
表面清掃後

同上
表土除去後

図版 6

1：第9図1



2：同上拡大

3：同上拡大

4：第9回2

5：第9回3

6：第13回4

7：第13回6

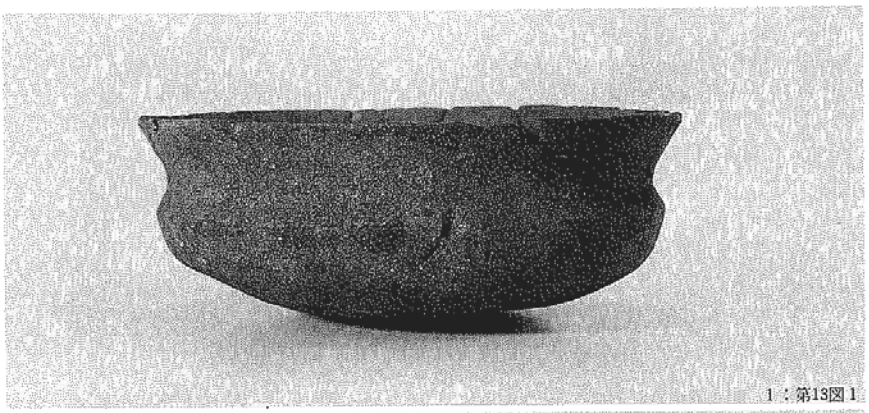
8：第13回5

鉄刀・刀子

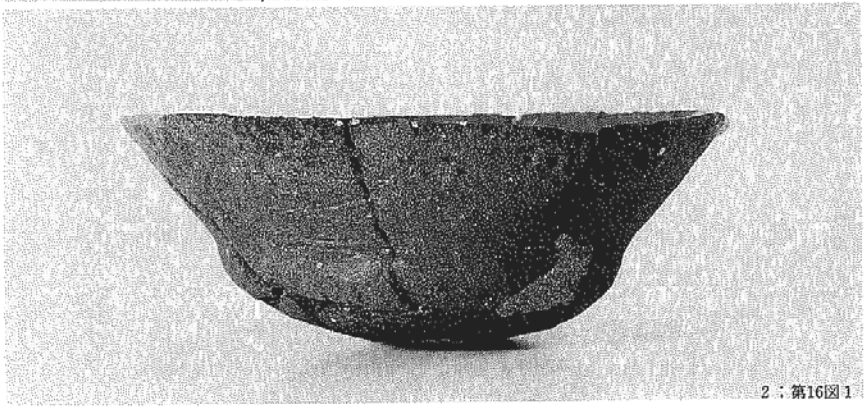
図版7

第175号墳出土鉄鏃

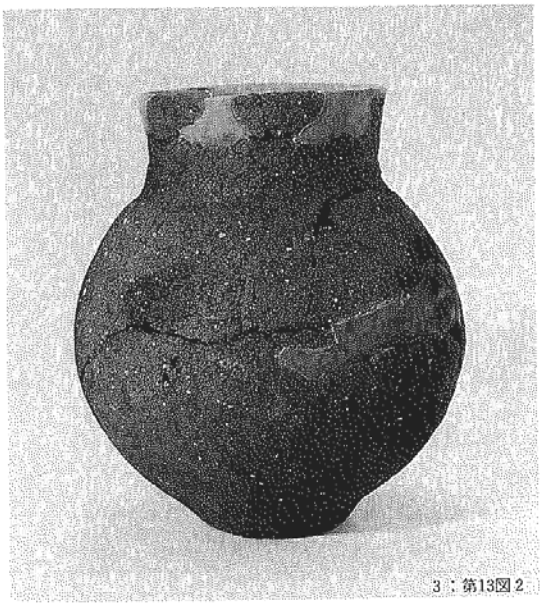
図版 8



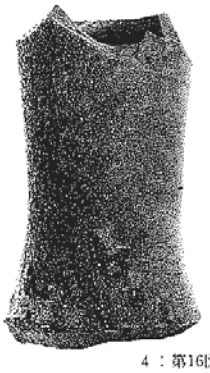
1：第18図1



2：第16図1

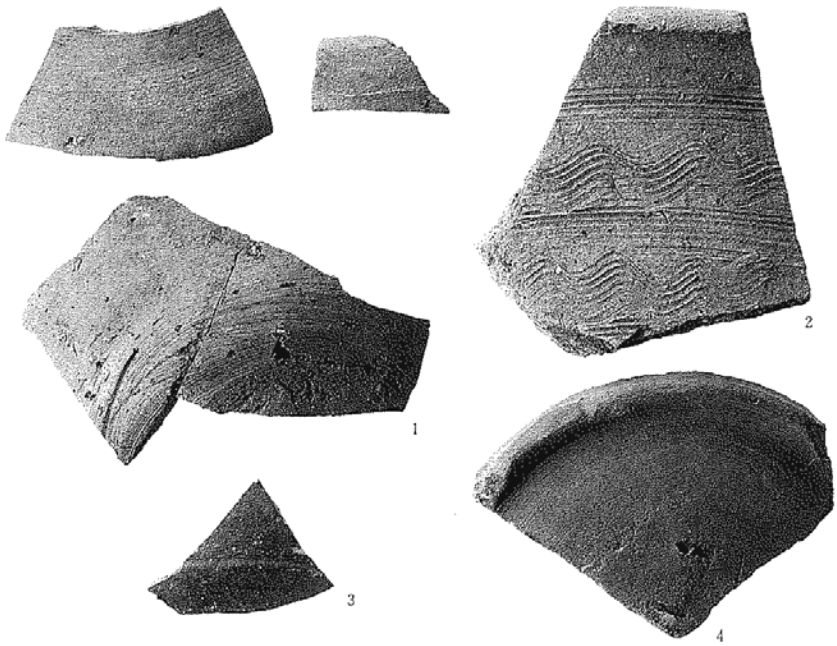


3：第13図2



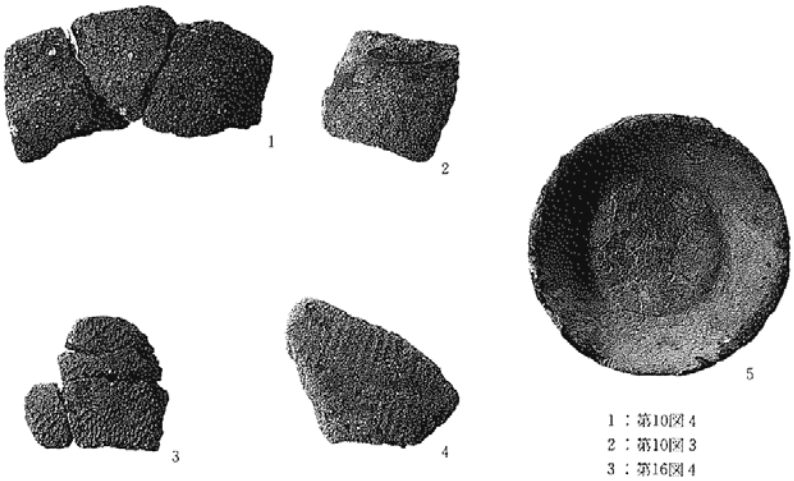
4：第16図3

図版9



須恵器

1：第10図1
2：第10図2
3：第13図3
4：第16図2



1：第10図4
2：第10図3
3：第16図4
4：第16図5
5：第16図6

弥生土器・土師器・土師質土器

図版10

下南山遺跡（しもみなみやまいせき）

目　　次

1. 位置と環境 ……181
2. 調査内容 ……182
3. 出土土器の年代 ……184
4. まとめ ……186

調 査 要 項

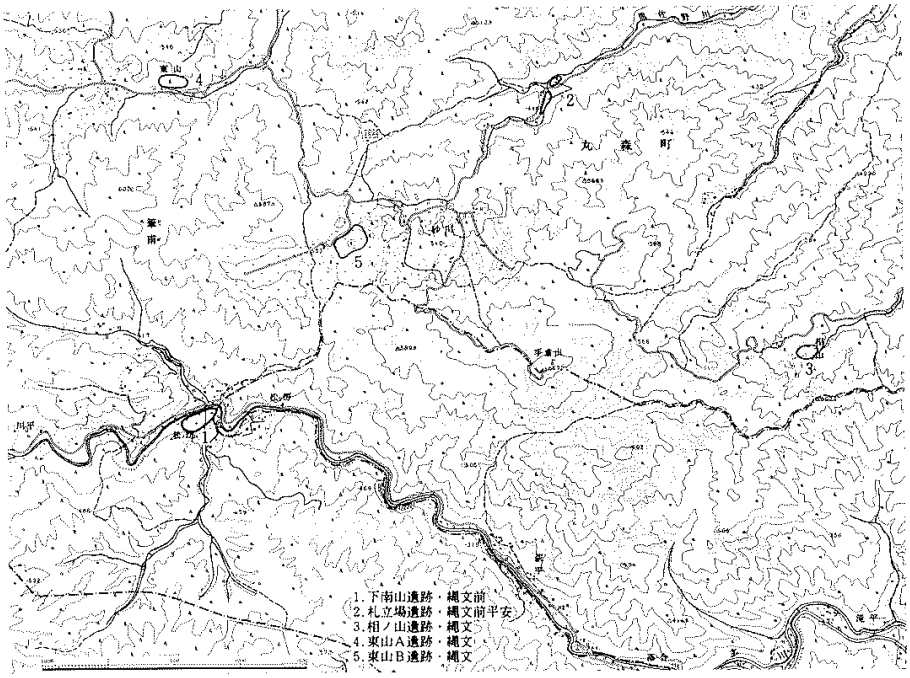
遺　跡　名：下南山遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 10152）
遺跡所在地：伊具郡丸森町筆甫字下南山
発 掘 面 積：約 650 ㎡
調 査 期 間：平成 2 年 9 月 27 日～9 月 28 日
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：真山悟・須田良平・岩見和泰

下南山遺跡（しもみなみやまいせき）

1．位置と環境

下南山遺跡は伊具郡丸森町筆甫字下南山に所在している。これは町役場から南へ約 13㎞の地点にあたっている。付近は福島県との境に近く、阿武隈山地の北部に位置する標高 500～650mの山々に囲まれた山間部であり、遺跡は福島県の霊山に源を発し、太平洋に向かって東流する宇多川右岸の低平な丘陵上に立地している。この丘陵は東西に細長く延びており、北・東・南の三方に緩やかに傾斜する。標高は 370～390mで、現状は山林、桑畑、水田、牧草地、宅地などになっている。

歴史的環境についてみると、丸森町には現在約 160 の遺跡が発見されている。このうち縄文時代の岩ノ入遺跡や入大遺跡、古墳時代の台町古墳群や矢ノ目遺跡、古代の中平遺跡などで発掘調査が行われ、内容の一端が明らかになっている。そうしたなかにあって、本遺跡周辺ではまだ調査された遺跡がなく不明な点の多い地域であるが、時代別にみると東山Ａ・Ｂ遺跡や札立場遺跡のほか鳥ノ子遺跡など、狩猟採集を専らとする縄文時代の遺跡が多くみられるのに対し、それ以降の遺跡は極めて少なく、この地域の山がちな地理的環境による影響がうかがえる。

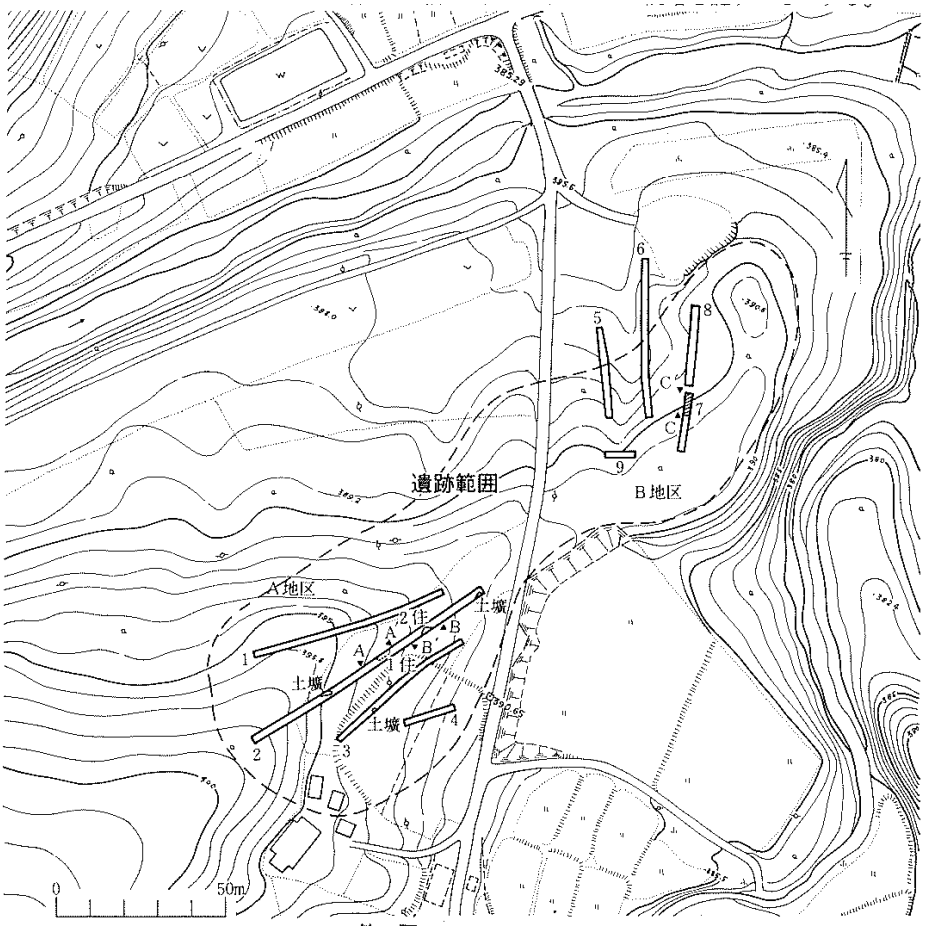


第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡

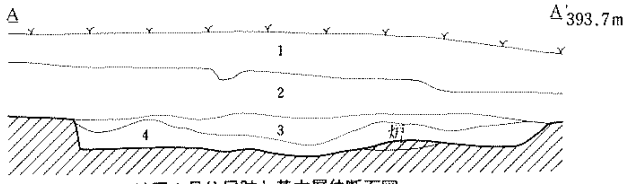
2．調査内容

本遺跡については昭和 56 年に宮城県教育委員会によって実施された分布調査の結果、松ケ房ダム予定湛水域における遺跡の面積は約 13000 ㎡で、第 2 図に示したような広がりをもつことが明らかになっている。今回の調査は発掘による遺跡の範囲の再確認および遺構の分布状況を把握するためのもので、平成 2 年 9 月 27 日～28 日にかけて実施された。

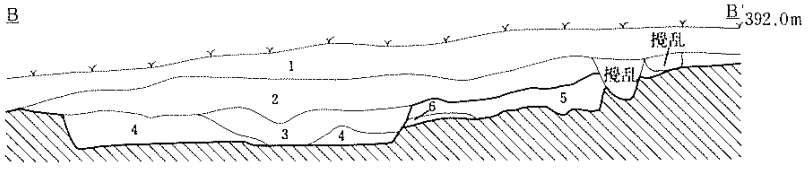
調査では遺跡中央を南北に延びる遺跡を境として西側をＡ地区、東側をＢ地区とし、地形状況に応じて、重機を用いたトレンチ調査を行った。その結果Ａ地区から縄文時代の竪穴住居跡 2 棟のほか、時期不明の土壙 3 基などが検出され、住居跡付近の堆積層から縄文土器が出土した。またＢ地区では遺構は確認されなかったが、縄文土器がやや集中する箇所があり、付近に何らかの遺構の存在が予想された。調査の記録にあたっては、遺構分布図作成を縮尺 1/200 の平板測量によって行い、基本層位や主な遺構については縮尺 1/20 の断面図を作成した。以下、基本属位・遺構・出土土器について概略を記すことにする。



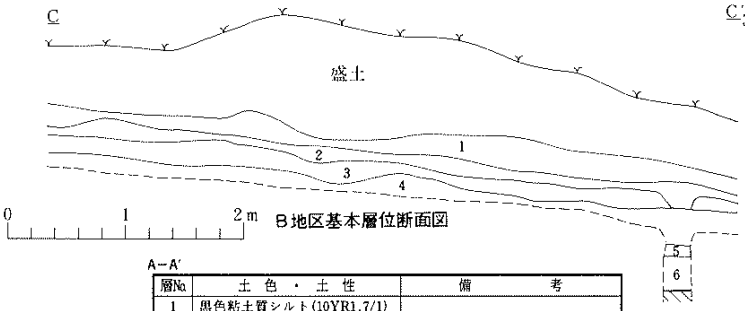
第 2 図　トレンチ配図



A地区１号住居跡と基本層位断面図



A地区２号住居跡と基本層位断面図



B地区基本層位断面図

A－A'

層No	土色・土性	備考	
1	黒色粘土質シルト(10YR1.7/1)		
2	暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)		
3	暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)	地山粒を若干含む	1住埋土
4	暗褐色粘土質シルト (10YR3/4)	地山ブロックを多く含む	

B－B'

層No	土色・土性	備考	
1	暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)	黒色土を斑状に含む	
2	暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)		
3	暗褐色粘土質シルト (10YR3/2)	地山粒・炭化物を含む	2住埋土
4	にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR5/6)	地山粒・炭化物を含む	
5	にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR5/5)		土壙埋土
6	にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR5/6)	地山粒を多く含む	

C-C'

層No	土色・土性	備考
1	暗褐色粘土質シルト (10YR3/4)	
2	黒褐色粘土質シルト (10YR2/3)	
3	褐色粘土質シルト (10YR4/6)	炭化物を若干含む
4	暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)	炭化物・地山粒を含む
5	暗褐色粘土質シルト (10YR3/4)	地山粒を含む
6	暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)	4層よりやや暗い、地山粒を含む

第３図　住居跡と基本層位断面図

【基本層位】

Ａ地区ではほぼ全域に黒褐色～暗褐色土が 60～70㎝ の厚さで堆積している。全体にしまりがなく、やや粘性をもつシルト層で、土色の違いから大きく２枚の層に分かれる。住居跡は第２層下の地山面で確認されている。

Ｂ地区は北半部において黒褐色～暗褐色土が約 1mの厚さで堆積している。しまりなく、やや粘性をもつシルト層で、土色の違いから５枚の層に分かれる。縄文土器がややまとまって出土する箇所は、第７トレンチの第４層中である。

Ｂ地区南半部はかなり削平を受けており層相は不明である。

【遺構】

遺構については平面や断面の観察のみで精査は行っていないため、詳細は不明である。

このうち時代の明らかな住居跡について判明した事柄を記すと次のようになる。

第 1 号住居跡については断面観察で壁・床・炉跡と思われる焼け面を検出したが、平面形は明確でない。堆積土は暗褐色のしまりがないシルト層で、若干の縄文土器片を含んでおり、土色の違いから 2 枚に細分される。壁面は地山で、南側が急角度、北側が緩やかに立ち上がり、壁高は 20〜30㎝ である。床面は地山で、やや凹凸がみられ、全体にしまりがない。炉は地床炉と考えられる。規模は南北軸が約 60㎝ で、表面は加熱のため硬化し赤変している。

第 2 号住居跡は長軸が 4m以上の方形を呈すると思われるものである。堆積土は第 1 層が暗褐色、第 2 層が黄褐色のシルトで、ともにしまりがない。各層から少量の炭化物とともに縄文土器が出土する。壁面は一部が土壙堆積土のほかは地山となっており、壁高は約 30㎝、立ち上がりは急である。床面は礫まじりの地山で、細かな凹凸がみられ、あまりしまりがない。

【出土土器】

第 5 図 1〜9 は胎土に植物繊維を含む土器である。このうち 1〜5 はA地区の住居跡から出土した深鉢の胴部資料で、いずれも繊維の混入が多く、焼成は不良である。また器面に凹凸があり、内面に擦痕が認められるのが特徴で、外面には 1 が単節斜行縄文、2〜5 は縦位回転の撚糸文が施されている。

6〜9 はB地区 7 トレンチの第 3 層から出土した深鉢の口縁部資料である。前者に比して、繊維の混入は少ない。口縁部形態は外傾するもの（6〜8）と、外反するもの（9）とがあり、このうち 6 は上部に刻目と横位沈線が、その下に半截竹管による斜位の平行短沈線と撚糸圧痕による弧状文が施されている。7〜9 は羽状縄文が施されるもので、口縁上端には 7 が刻目状の撚糸圧痕と一部に指頭状圧痕、8 は半截竹管の先端を用いた連続刺突、9 では棒状工具による連続刺突が施されている。

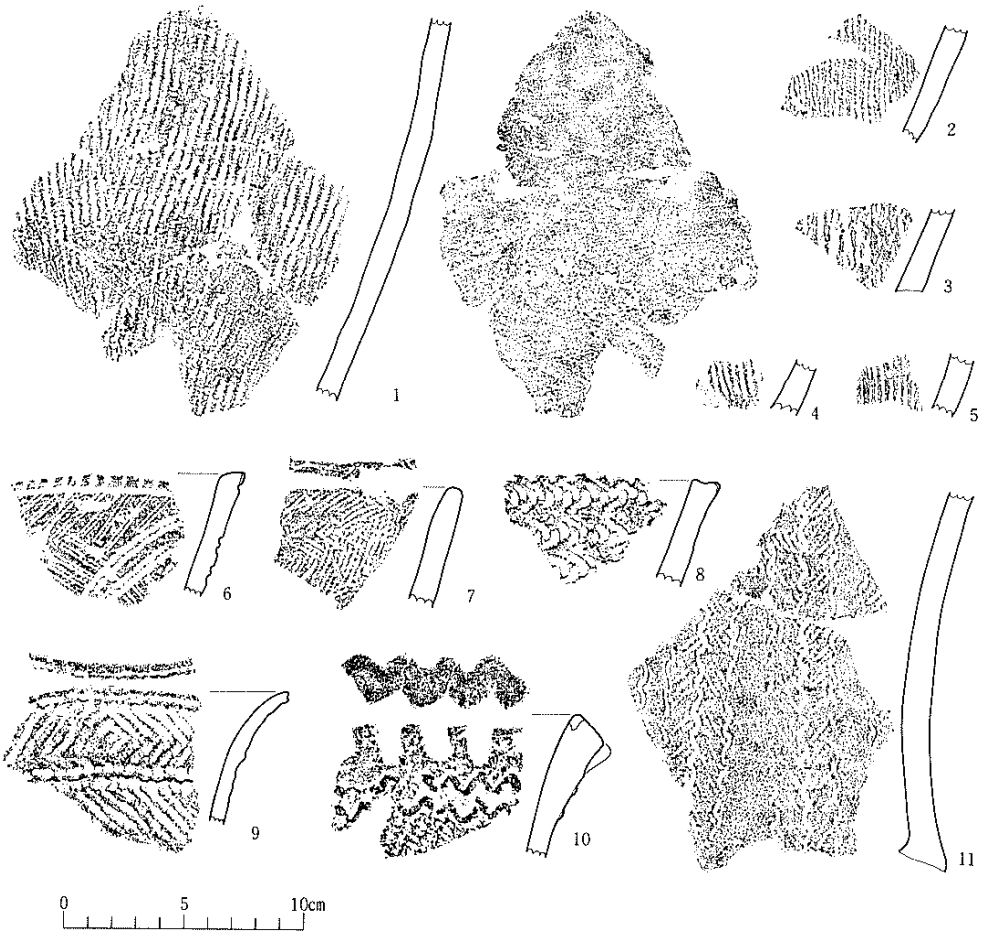
第 5 図 10・11 はB地区の表土から出土したものである。10 は波状をなす深鉢の口縁部資料で、波頂上端がジグザグにつくり出され、その直下には粘土紐貼付による鋸歯状文が横位に 2 段施されている。

11 は深鉢の胴部資料で縦位の結節文と斜行縄文が施されている。

3．出土土器の年代

これらの土器の年代を検討すると、胎土に植物繊維を含むもののうち、1〜5 および 7〜9 は石巻市南境貝塚妙見地区第 1 層土器群（後藤：1969）、6 は柴田町上川名貝塚上層土器群(上川名Ⅱ式－加藤：1951)などに類例がみられ、いずれも縄文時代前期初頭のものとされている。

ただしA地区の住居跡としてまとまりをもつ1〜5については、一方で岩出山町天神山遺跡第Ⅳ類土器（小徳：1982）や七ヶ宿大倉跡（笹原：1985）などにも出土例があり、報告書では前者が縄文時代早期末葉の条痕文土器の最終型式である船入島下層式に「撚糸文のほどこされた焼成不良の土器が伴う」（林：1965）とされる点に注目して同時期に含めている。また後者ではこうした状況をふまえ、文様形態や内面の調整技法の点から、早期末葉である船入島貝塚貝層下黒色土層出土土器に後続し、前期初頭である上川名Ⅱ式より先行するものとしている。



No.	出土地区・層位	外面	内面	備考	No.	出土地区・層位	外面	内面	備考
1	2住・床	縄文RL	擦痕	繊維含む	6	7トレンチ3層	撚糸圧痕文Lr・刻目・平行短沈線文	ミガキ	繊維含む
2	2住・1〜2層	撚糸文Rl	擦痕	繊維含む	7	7トレンチ3層	縄文LR・RL、口縁端部ー指頭状圧痕文、撚糸圧痕文Lr	ミガキ	繊維含む
3	2住・1〜2層	撚糸文Lr	擦痕	繊維含む	8	7トレンチ3層	縄文LR×RL、口縁端部ー連続刺突	ミガキ	繊維含む
4	1住・2層	撚糸文Rl	擦痕	繊維含む	9	8トレンチ3層	縄文LR・RL、口縁端部ー連続刺突	ミガキ	繊維含む
5	1住・2層	撚糸文Rl	擦痕	繊維含む	10	8トレンチ1層	鋸歯状貼付文、縄文LR	ミガキ	
					11	6トレンチ1層	縄文LR・RL、結節文Lr・Rl	ミガキ	

第4図　出土土器

本遺跡の場合、詳細に検討するには数量に乏しいが、大きな特徴として1〜5の土器群には早期末の特徴である条痕文の施された土器が全くみられないこと、従来前期初頭とされてきた上川名Ⅱ式土器とは特徴や出土地点を異にしているなどの点から、それを時期差の所産、すなわち船入島貝塚黒色土層出土土器群と上川名貝塚出土土器群の中間的様相を示すものと考えた。

その他胎土に繊維を含まないもののうち 10 についてはその特徴から前期後葉の大木 5 式に、11 については中期初頭の大木 7ａ式に位置付けられる（伊東：1957・伊東他：1981）。

4．まとめ

1．本遺跡は伊具郡丸森町の南部に位置し、阿武隈山地北部にある標高 380mの小丘陵上に立地している。

2．松ケ房ダム建設計画との係りで確認調査を行った結果、縄文時代の竪穴住居跡 2 棟が検出された。出土土器からそれが早期末葉〜前期初頭のものであること、また密度は薄いが、土器の散布状況や地形から遺跡は 13000 ㎡の広がりをもつことが明らかになった。

またその他の土器として前期後葉と中期初頭のものがみられ、同期の遺構が検出される可能性も強いと考えられた。

引用参考文献

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』1

伊東信雄（1961）：「船入島貝塚」『宮城県史』4

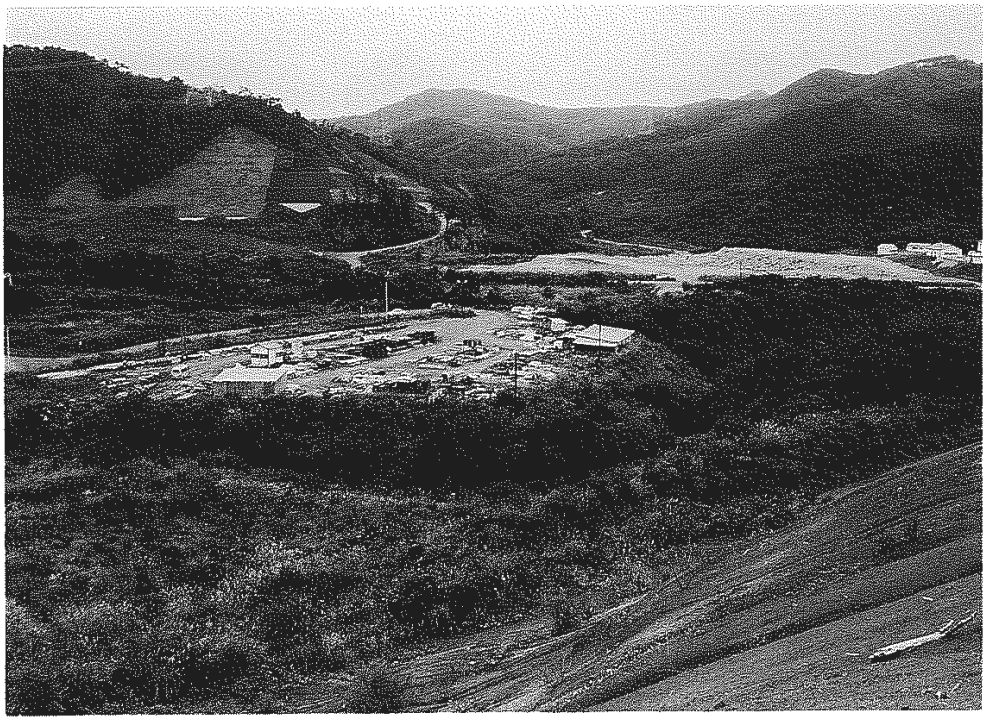
加藤　孝（1951）：「宮城県上川名貝塚の研究－東北地方縄文式文化の編年学的研究(1)－」『宮城学院女子大学研究論集』Ⅰ

笠原信男（1985）：「大倉遺跡－七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ－」『宮城県文化財調査報告書』第107集　宮城県教育委員会

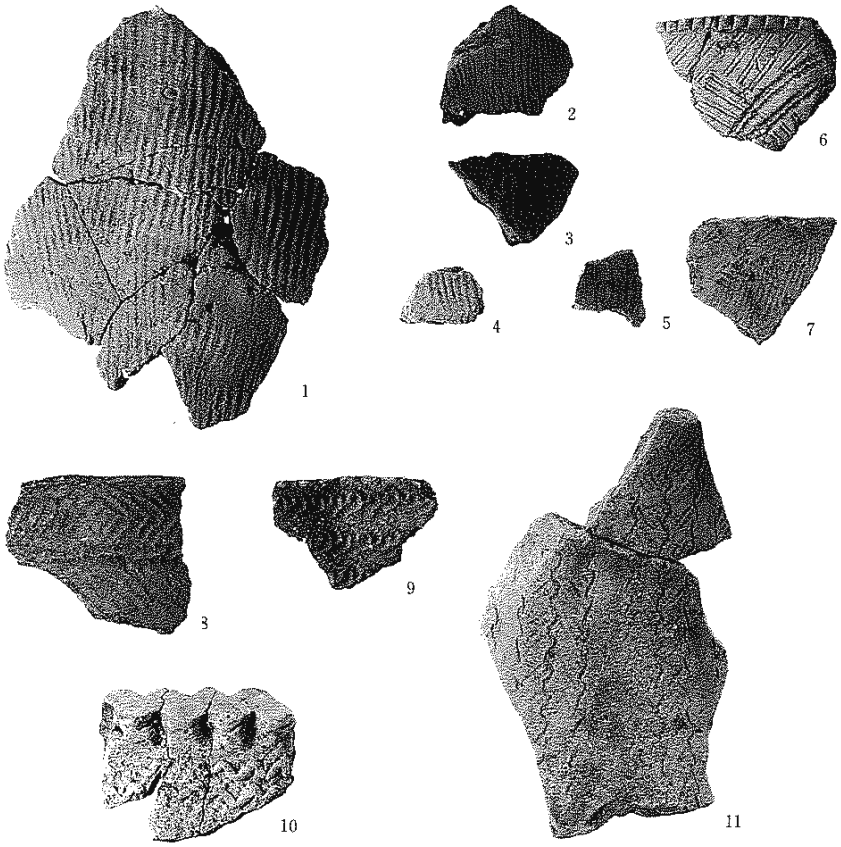
小徳　晶（1982）：「天神山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第89集　宮城県教育委員会

後藤勝彦（1969）：「埋蔵文化財第４次緊急調査概報－南境貝塚－」『宮城県文化財調査報告書』第20集　宮城県教育委員会

林　謙作（1965）：「縄文文化の発展と地域性－東北－」『日本の考古学』Ⅱ



図版１　上：遺跡遠景（東より）
　　下：第２号住居跡確認状況



1．4図1　　4．4図4　　7．4図7　　10．4図10
2．4図2　　5．4図5　　8．4図9　　11．4図11
3．4図3　　6．4図6　　9．4図8

図版2　出土土器

高田遺跡（たかだいせき）

目　　次

Ⅰ．はじめに ……191
Ⅱ．遺跡の位置と環境 ……191
Ⅲ．調査の方法と成果 ……194
　1．調査の方法
　2．調査の成果
Ⅳ．まとめ ……196

調 査 要 項

遺 跡 名：高田遺跡　たかだいせき
　　宮城県遺跡地図（昭和 63 年版）遺跡地名表登載番号；01256　遺跡記号；ＮＰ
所 在 地：宮城県仙台市若林区日辺字千刈田 37 番地
調査期間：平成 2 年 5 月 22 日～6 月 2 日
調査面積：事前調査区 200 ㎡、範囲確認トレンチ 1,400 ㎡
調査原因：仙台南有料道路の建設工事
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　白鳥良一・小井川和夫・阿部博志・菊地逸夫・近藤和夫・吾妻俊典

高田遺跡（たかだいせき）

Ⅰ．はじめに

今回の仙台市高田遺跡の調査は、高規格道路である仙台南有料道路の建設工事に伴って実施したものである。

本遺跡については昨年度、カルバートボックスなど横断構造物設置場所２ヶ所の試掘調査を行った。その結果、弥生時代の遺物包含層の存在が確認されたため、本年度は、現市道との交差部分の約 200 ㎡については事前調査を、また他の本線敷部分については遺跡の広がりを調べるための範囲確認調査を行なうことにした。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

高田遺跡は仙台市若林区日辺字千刈田・日辺字高田ほかに所在し、仙台市今泉清掃工場の北北西約600mのところに位置している。東方は約5㎞で海岸線に達し、西方約1.5　㎞の地点には名取川と広瀬川の合流点がある（第１図）。

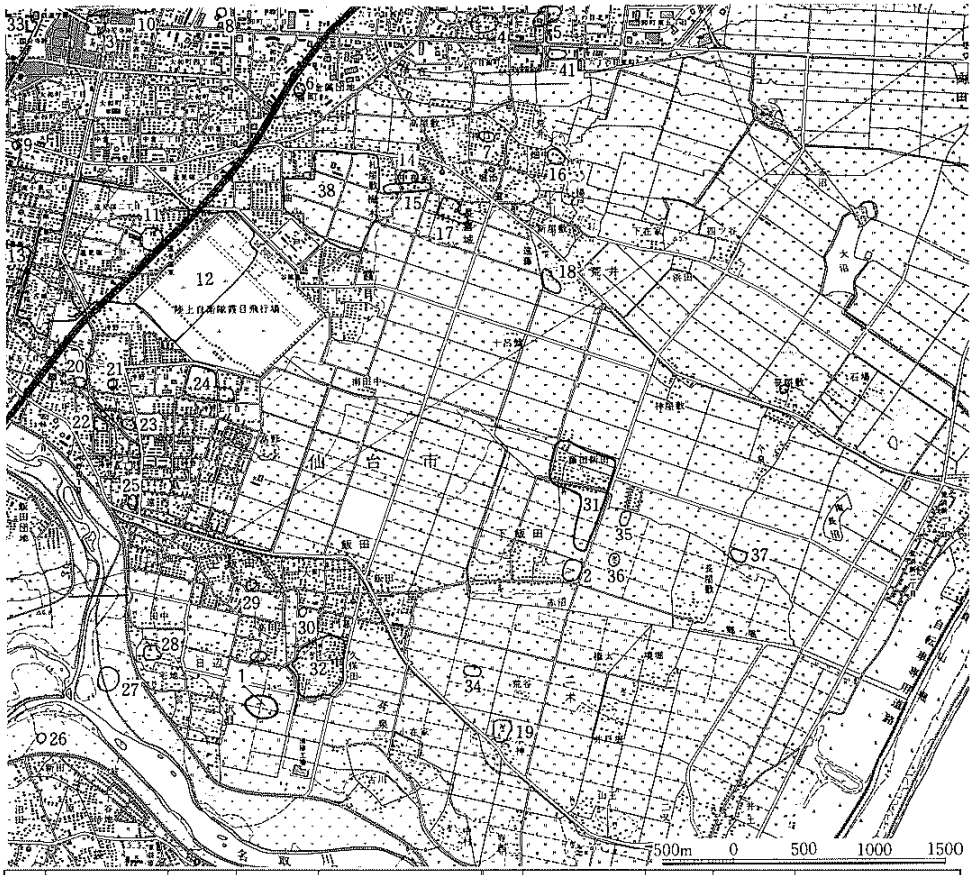
仙台市の地形を概観すると、西側には奥羽脊梁山脈が南北に延び、東側には仙台沖積平野が広がっており、これを七北田川・名取川・広瀬川が開析している。名取川は、青葉山丘陵と高館丘陵の間を東流し、丘陵東部において、七北田丘陵と青葉山丘陵の間を東流してきた広瀬川と合流して太平洋に注いでいる。名取川両岸の沖積面上の地形には、自然堤防・後背湿地・旧河道等の微地形が認められる。自然堤防は名取川・広瀬川の両側に顕著に発達し、その中に旧河道・後背湿地が複雑に入り込んでいる。

高田遺跡は名取川左岸沖積面の自然堤防上に位置し、付近の標高は 3～4mで、現状は水田地帯である。

名取川流域は、宮城県内でも遺跡の多いところとして知られている。その中で、本遺跡の立地する名取川左岸沖積面およびその周辺の遺跡を概観してみる。

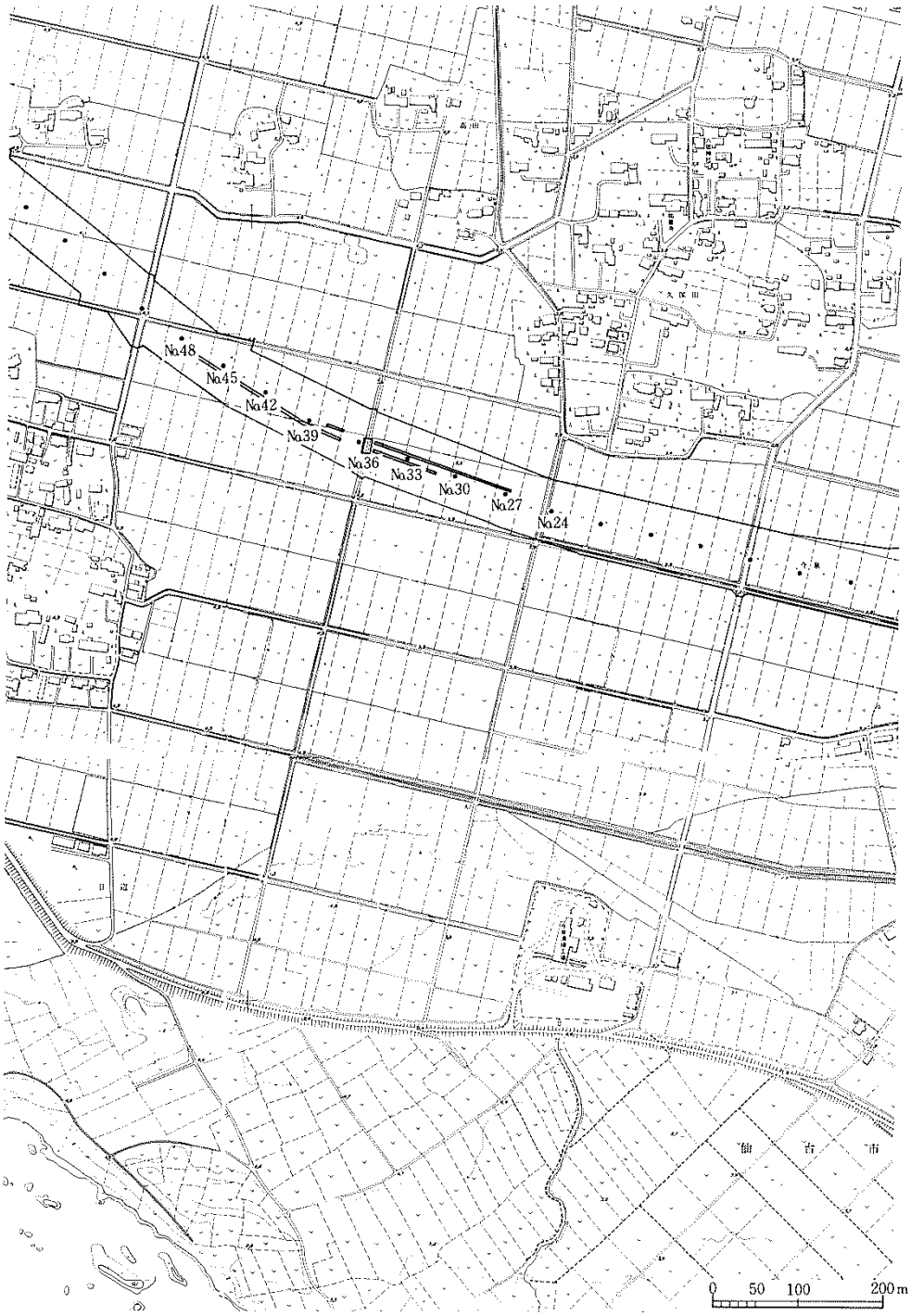
名取川下流域の自然堤防と仙台海岸平野の浜堤には縄文時代やそれ以前の時代の遺跡はほとんど確認されておらず、遺跡の進出は弥生時代以降に水田耕作をともなって本格的に開始されるようになる。弥生時代の遺跡としては本遺跡の北北西約 3.5㎞ に南小泉遺跡、東約 0.5㎞ に今泉遺跡、北東約 3㎞ の浜堤上に藤田新田遺跡が知られている。また、北北東約 4㎞ には、中在家南･押口の両遺跡があり、両遺跡で確認された旧河道からは、弥生時代から古墳時代にかけての農具を含む多量の木製品が出土している。これらの遺跡の多くは水田耕作による生産力の向上を背景にその後の時代の遺跡へと続いていく。古墳時代の遺跡は前述の南小泉遺跡とその中央部にある遠見塚古墳（前方後円墳）が良く知られている。特に東北地方第３位の規模をもつ遠見塚古墳の出現は、権力の集中とともに前時

代からの農業生産力の増大が大きな背景になったものと考えられる。7 世紀になると、本遺跡の西北西約 3㎞ の地に郡山遺跡が、さらに奈良時代には、本遺跡の北北西約 5㎞ の地に陸奥国分寺・国分尼寺が造営されるようになる。中世から近世にかけては本遺跡東の今泉城や北約 2㎞ の沖野城をはじめ、いくつかの城館が築かれている。

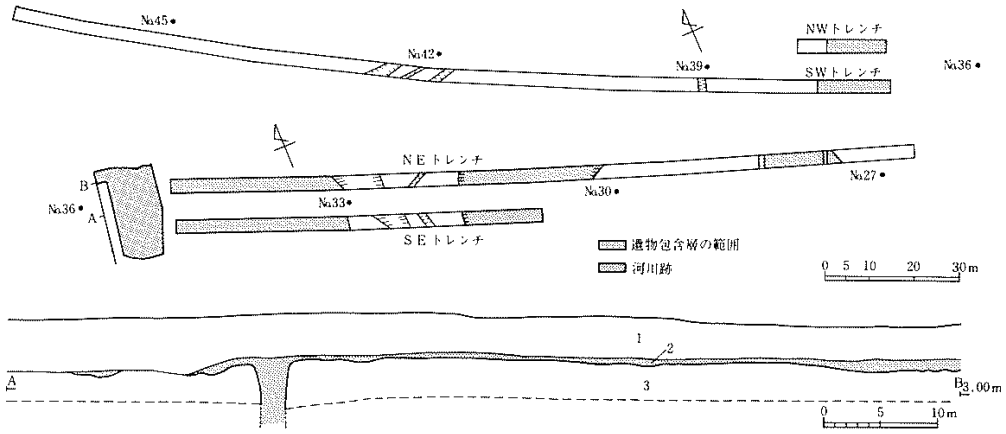


番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	高田遺跡	自然堤防	包含地	弥生、古代	20	砂押Ⅰ遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
2	下飯田遺跡	浜堤	集落跡	古墳	21	神棚遺跡	自然堤防	包含地	縄文、弥生、古墳、古代
3	陸奥国分尼寺跡	台地	寺院跡	奈良、平安	22	砂押Ⅱ遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
4	北屋敷遺跡	自然堤防	包含地	平安、中世	23	中棚西遺跡	自然堤防	包含地	弥生、古墳、古代
5	明屋敷遺跡	自然堤防	包含地	平安	24	沖野城跡	自然堤防	城館	中世
6	曽利松明神古墳	沖積地	円墳	古墳	25	河原越遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
7	押口遺跡	沖積地	包含地	古代	26	大塚山古墳	河川敷	円墳	古墳
8	谷地館跡	自然堤防	城館	中世	27	日辺遺跡	河川敷	包含地	古墳（中）
9	法領塚古墳	自然堤防	円墳	古墳	28	日辺館跡	自然堤防	城館	室町
10	志波遺跡	沖積地	集落跡	古代	29	上屋敷遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
11	遠見塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳	30	小兜塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
12	南小泉遺跡	自然堤防	集落跡	弥生、古墳、奈良、平安	31	藤田新田遺跡	浜堤	集落跡	弥生、古墳、平安
13	若林城跡	自然堤防	城館他	古墳、平安、中世、近世	32	今泉城跡	自然堤防	城館	中世
14	中在家遺跡	自然堤防	包含地	平安	33	陸奥国分寺跡	台地	寺院跡	奈良、平安
15	中在家南遺跡	旧河道	包含地	弥生、古墳	34	築道遺跡	沖積地	包含地	古代
16	荒井館跡	自然堤防	城館	中世	35	屋敷末遺跡	浜堤	包含地	古墳、古代
17	長喜城跡	自然堤防	城館	中世	36	下飯田薬師堂古墳	浜堤	円墳	古墳（後）
18	下荒井遺跡	自然堤防	包含地	平安	37	岡崎囲遺跡	浜堤	包含地	中世、近世
19	二木館跡	自然堤防	城館	安土桃山	38	仙台東郊条里跡	沖積地	条里跡	奈良

第 1 図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　道路予定地と調査区



層No.	土　色	土　性	備　考
1	オリーブ褐（2.5 Y 4／6）	砂質シルト	水田の堆積土、全体に褐色（7.5 YR 4／6）の土をブロック状に含む
2	黒褐（10YR 2／2）	シルト	遺物包含層、全体に径 5 mm程のマンガン粒を含む、わずかに炭を含む
3	オリーブ褐（2.5 Y 4／4）	粘土	全体に黒褐色（2.5 Y 2／3）の粘土・マンガンを大量に含む

第 3 図　遺物包含層の広がりと基本層位

III．調査の方法と成果

1．調査の方法

カルバートボックスが設置される事前調査部分については、計画道路の中心杭を基準として東西約 10m、南北約 20mの調査区を設定し、重機で表土を除去して包含層の精査を行った。精査は 3m単位のグリッド毎に行い、最後に 1／20 の平面図を作成した。

範囲確認部分については、幅 3mのトレンチを事前調査区の東西に 2 本ずつ設定し、東側のトレンチを北からＮＥトレンチ、ＳＥトレンチ、西側のトレンチを北からNWトレンチ、SWトレンチと呼ぶことにした。トレンチの長さはＮＥトレンチ約 170m、ＳＥトレンチ約 80m、NWトレンチ約 20m、SWトレンチ約 200mである。表土を除去して包含層やその他の遺構の広がりについて調査したのち、平板測量で 1／200 の平面図を作成した。

2．調査の成果

Ａ．基本層位

調査区の層位はほぼ一様な堆積状況を示しており、基本層位はいずれも 3 層である（第 3 図）。第 1 層は水田耕作土で褐色土を含む砂質シルト質のオリーブ褐色土、第 2 層は遺物包含層でマンガン粒や炭を含むシルト質の黒褐色土、第 3 層は地山で粘土やマンガン粒を含む粘質のオリーブ褐色土である。

Ｂ．事前調査区

遺物包含層である第 2 層が、調査区全域に 5㎝～10 ㎝の厚さに堆積しており、表土を除去すると第 2 層上面に土器片が多量に検出され、遺物は下面までほぼ万遍なく分布する。

グリッド毎に第 2 層を掘り下げ精査を行った結果、地山面でピットが大小合わせて 17 個、円形に巡る溝状遺構が 1 ケ所、焼土の分布が 1 ケ所検出されたが、それぞれの性格などについては不明である。

C．範囲確認調査区（第 3 図）

[東側トレンチ]

ＮＥ・ＳＥトレンチともに事前調査区東端より東側約 40mまで遺物包含層である第 2 層が延びている。精査は行っていないが、包含層上面には遺物がほぼ万遍なく分布する。これより東側は約 90mにわたって第 2 層は認められないが、事前調査区東端より約 135mのところで約 16mにわたって再び第 2 層が認められた。また、第 2 層が認められなかった範囲で、幅約 30mの河川跡が確認された。精査を行っていないので詳細は不明だが、一部探掘りを行った部分から弥生土器片や植物遺体（クリ・トチノミ・クルミなどの植物種子や木）が出土している。出土土器が第 2 層出土土器と同じ時代のものとみられることから、この河川跡は遺物包含層の時代のものである可能性がある。

[西側トレンチ]

ＮＥ・ＳＷトレンチとも事前調査区西端より西側約 40mまで遺物包含層である第 2 層の延びが認められ、それより西側は後世の削平により第 2 層は失われていた。第 2 層の堆積は西に向かうにつれて徐々に薄くなっており、遺物の分布も事前調査区や東側トレンチに比べるとまばらである。

D．発見された遺物

遺物はすべて第 2 層中から出土している。出土遺物はすべて弥生土器と石器で、それ以外の時代のものは出土していない。

遺物量は整理用コンテナで約 12 箱あるが、本書では土器は器形のわかるものや文様に特徴のあるもの、石器は製品を中心に抽出し、写真のみを掲載する。

[土器]

今回出土した土器には、器形全体が復元できるものは少ないものの、甕・蓋・深鉢・壺が認められた。各資料についての文様の特徴などは、図版の部分に表を掲載している。

甕は、口縁部に横ナデ・頸部に列点文・体部にＬＲ縄文を施すものが多くみられる。蓋・深鉢・壺の文様構成には、平行沈線・連続山形文・連続山形文に縦位の沈線が加わった文様などがみられ、縄文や擬縄文を施したり、その後磨消されたりしている。これらの特徴は多賀城市桝形囲貝塚出土資料や仙台市南小泉遺跡出土資料などに共通した要素が多数認められ(須藤：1990)、東北地方中部の弥生時代中期中葉にみられる桝形囲式のものと思われる。現在整理中であるが、今回出土した土器はほぼすべてが桝形囲式に属すると思われ

る。なお（図版 4-5）の破片は、二条の沈線の間に横長列点文を施した遠賀川系のものと思われる。

[石器]

今回出土した石器には製品が少なく、大型蛤刃石斧 1 点（図版 4－10）・石鏃 3 点（図版 4－13～15）・石錐 2 点（図版 4－11・12）・箆状石製品 1 点（図版 4－16）のみである。また、安山岩製の板状石製品が数点出土しており（図版 4－17～19）、石鍬として使用された可能性もある。

Ⅳ．まとめ

1．高田遺跡は、名取川下流域左岸の自然堤防上に位置している。

2．今回の調査では、弥生時代中期中葉の桝形囲式の一時期にほぼ限定できる遺物包含層が検出された。出土遺物は桝形囲式の弥生土器（甕・蓋・深鉢・壺）および石器であり、それ以外の時代のものは認められない。

3．範囲確認調査の結果、遺物包含層の広がりは東西に最低でも約 90m、東側トレンチの東端で確認された遺物包含層も同一のものと考えると約 200mの幅をもつ。南北方向については範囲の限定はできなかったが、広範囲に延びるものと思われる。

4．東側トレンチで確認された河川跡は、出土遺物や植物遺体などからみて、桝形囲式期（弥生時代中期中葉）の可能性がある。また、植物遺体の保存状態からみて木製品などの出土も予想される。

引用参考文献

阿久津久（1986）　；「4弥生土器の紋様　5縄紋」『弥生文化の研究3　弥生土器I』雄山閣

金関　恕・佐原　眞（1987）；「弥生文化の研究4　弥生土器II」雄山閣

木村・金森ほか（1985）　；「郡山遺跡V」『仙台市文化財調査報告書』第74集　仙台市教育委員会

工藤哲司・荒井格（1989）　；「中在家南遺跡」『平成元年度　宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨　宮城県教育委員会』

工藤哲司・荒井格（1990）　；「押口遺跡」『平成２年度　宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨　宮城県教育委員会』

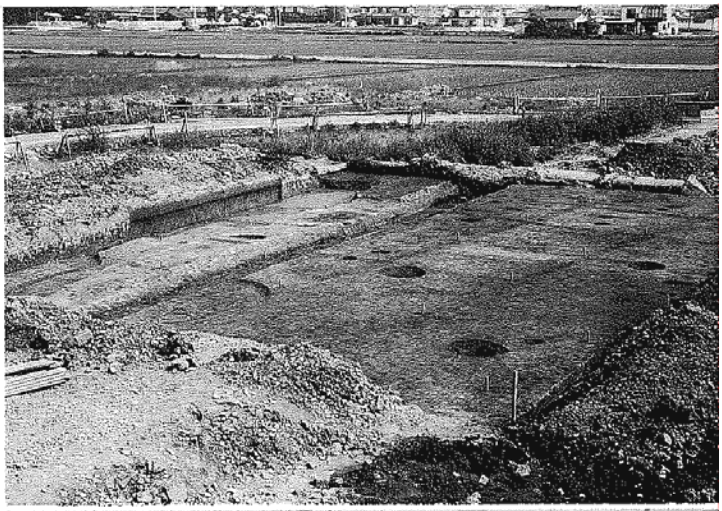
佐藤甲二（1985）；「南小泉遺跡ー第12次発掘調査報告書ー」『仙台市文化財調査報告書』第80集　仙台市教育委員会

佐藤　洋（1983）；「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書』第58集　仙台市教育委員会

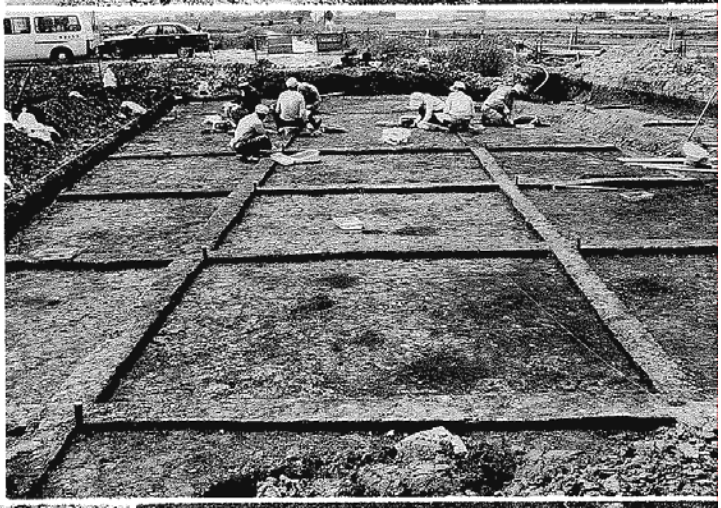
須藤　隆（1990）；「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』　伊藤信雄先生追悼論文集刊行会

丹羽　茂ほか（1981）　；清水遺跡「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会

事前調査区全景
（南東から）

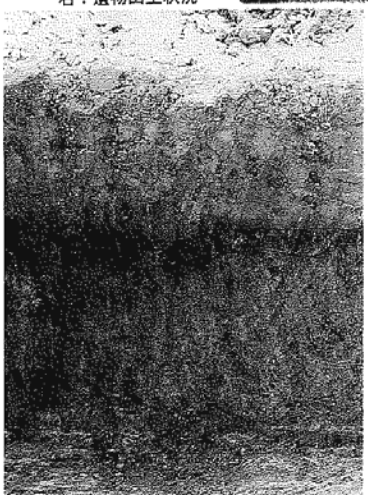


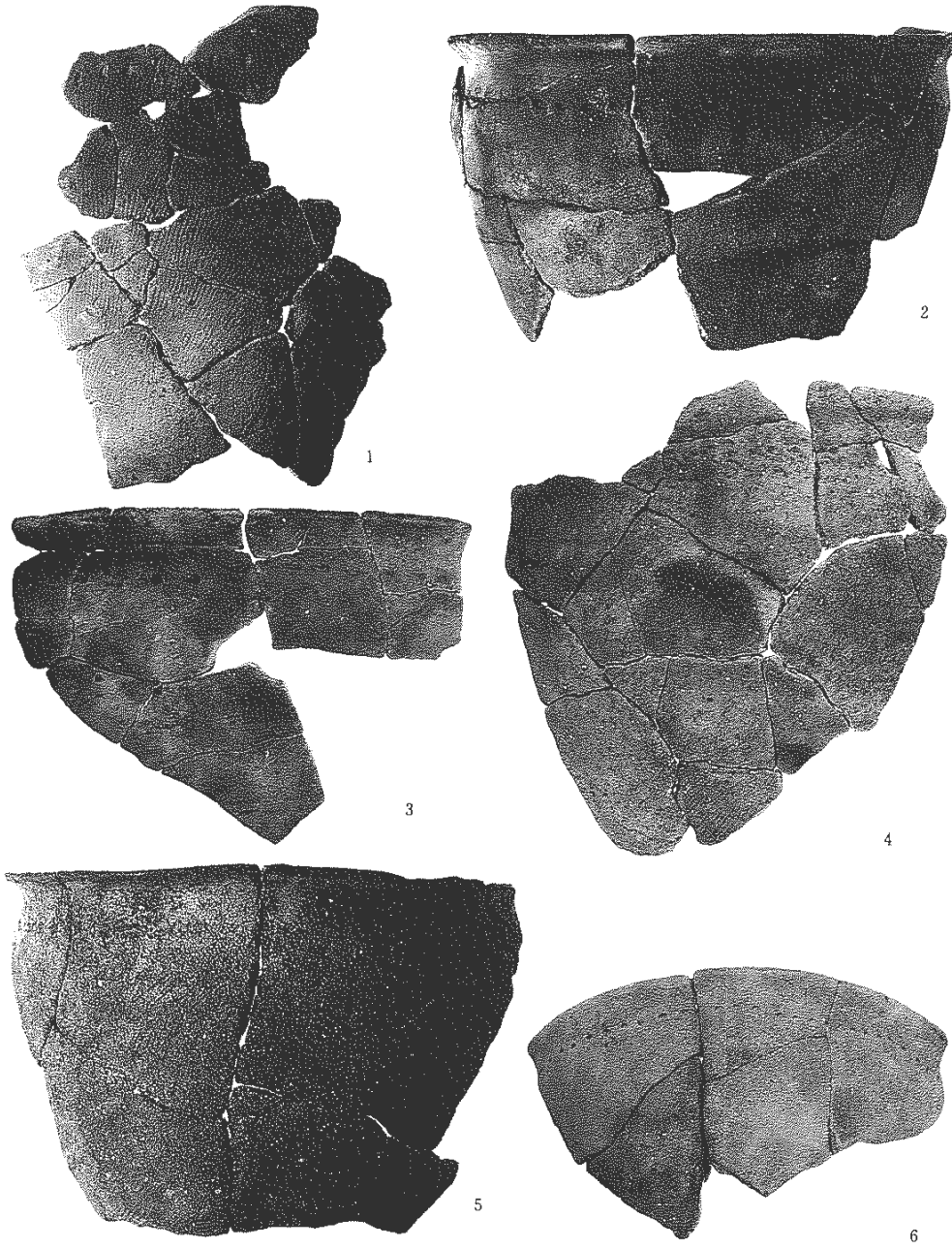
調査風景



図版1

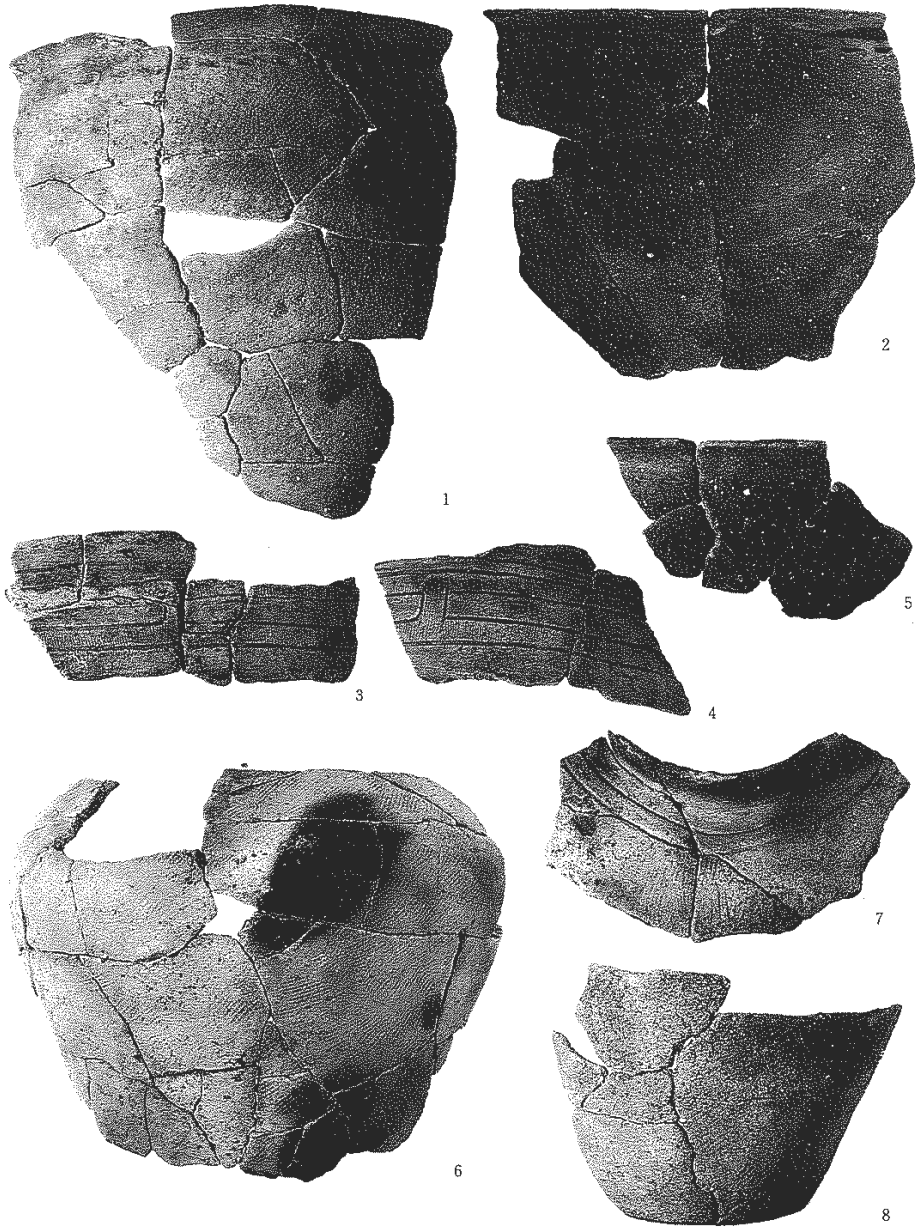
左：調査区基本層位
右：遺物出土状況





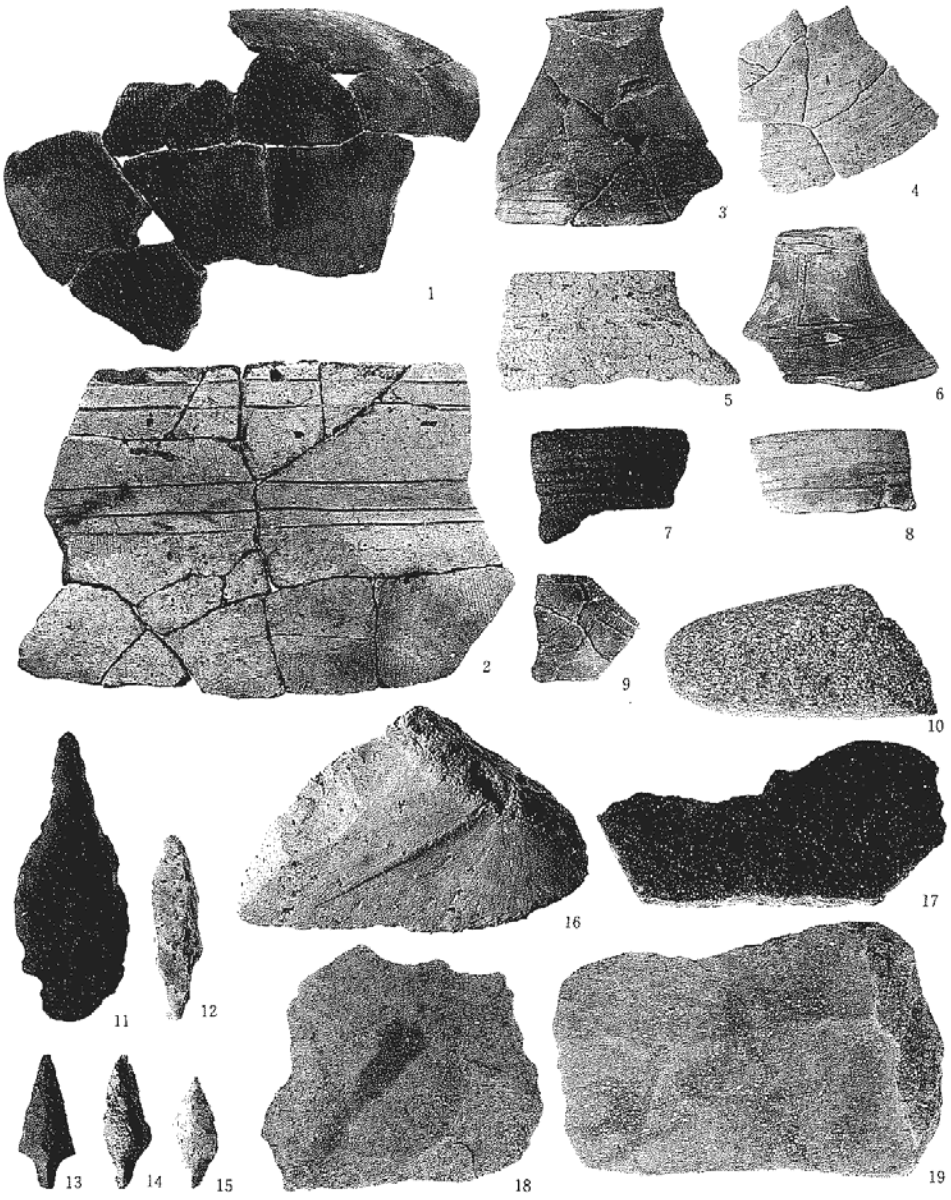
番号	器種	出土地・層	施文、調整（外面）	（内面）
1	甕	事前調査区　第２層	口縁部横ナデ、列点文、Ｌ［Ｒ・Ｒ・Ｒ縄文	ミガキ
2	甕	ＳＥトレンチ第２層	口縁部横ナデ、列点文、ＬＲ縄文・底部木葉痕	横位ミガキ
3	甕	事前調査区　第２層	口縁部横ナデ、列点文、（ＬＲ？）縄文	ミガキ？
4	甕	事前調査区　第２層	口縁部横ナデ、列点文、（ＬＲ？）縄文・底部布痕	ミガキ
5	甕	ＳＥトレンチ第２層	口縁部横ナデ、列点文、Ｌ［Ｒ・Ｒ・Ｒ縄文	ミガキ
6	甕	ＳＥトレンチ第２層	列点文、（ＬＲ？）縄文	不明

図版２



番号	器　種	出土地・層	施文、調整（外面）	（内面）
1	甕	事前調査区　第２層	口縁部横ナデ、列点文、ＬＲ＋Ｒ縄文	ミガキ
2	甕	ＳＥトレンチ第２層	口縁部横ナデ、列点文、Ｌ｛Ｒ・Ｒ・Ｒ縄文	横位ミガキ
3	甕？口縁部	事前調査区　第２層	口縁部横ナデ、擬縄文を施した後沈線を施してあいだを磨消、４と同一個体か？	不明
4	甕？口縁部	事前調査区　第２層	擬縄文を施した後沈線を施してあいだを磨消、３と同一個体か？	口縁部に横位沈線一条
5	甕・口縁部	ＮＥトレンチ第２層	口縁部横ナデ、列点文、縄文？	不明
6	壺	事前調査区　第２層	体部ＬＲ縄文、底部木葉痕	横位ミガキ
7	壺・口縁部	事前調査区　第２層	肩のところに二条の平行沈線、縄文？	ミガキ
8	深鉢	事前調査区　第２層	体部～底部（ＬＲ？）縄文	不明

図版３



番号	器　種	出土地・層	施文、調整（外面）	（内面）
1	壺	事前調査区　第２層	擬縄文	横位ミガキ
2	深鉢・口縁部	事前調査区　第２層	口縁上部二条・下部一条・頸部二条の横位沈線、擬縄文を施した後磨消	横位ミガキ
3	鉢	ＳＥトレンチ第２層	二本一組の平行沈線および連続山形文、山形文の中に沈線を一条施す、胴部に横位沈線一条	口縁部に横位沈線二条、ミガキ
4	鉢	事前調査区　第２層	連続山形文に縦位の沈線が加わる	口縁部に横位沈線二条
5	破片	ＳＥトレンチ第２層	二条の沈線の間に横長列点文…連貫用系	ミガキ？
6	鉢	事前調査区　第２層	二本一組の平行沈線および連続山形文、磨消縄文、天井部木葉痕、天井部から二本一組の沈線が五ヶ所懸垂	口縁部に横位沈線一条、ミガキ
7	口縁部破片	ＳＥトレンチ第２層	六条の平行沈線	口縁部に横位沈線一条、ミガキ
8	口縁部破片	ＮＥトレンチ第２層	五条の平行沈線	ミガキ
9	破片	事前調査区　第２層	擬縄文・沈線を施した後磨消	ミガキ

図版４

大畑遺跡（おおはたいせき）

目　　次

Ⅰ．はじめに ……203
Ⅱ．遺跡の位置と環境 ……203
Ⅲ．発見された遺構と遺物 ……204
Ⅳ．遺構・遺物の検討 ……207
Ⅴ．まとめ ……210

調 査 要 項

遺 跡 名：大畑遺跡　　おおはたいせき
　　宮城県遺跡地図（昭和 63 年版）遺跡地名表登載番号；02262　遺跡記号；ＯＢ
所 在 地：宮城県白石市字東大畑 107 番地
調査期間：平成 2 年 6 月 28 日～7 月 6 日
調査面積：700 ㎡
調査原因：国道 113 号線の道路改良工事
調査主体：宮城県教育委員会・白石市教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課・白石市教育委員会
調 査 員：小井川和夫・阿部博志・菊地逸夫・近藤和夫（宮城県教育庁文化財保護課）
　　清野俊太朗・佐藤康治（白石市教育委員会）
　　中橋彰吾（白石市文化財保護委員長）

大畑遺跡（おおはたいせき）

Ⅰ．はじめに

今回の調査は、国道 113 号線のバイパス建設に伴う宮城県白石市大畑遺跡の範囲確認調査である。

バイパス建設予定地周辺には土師器・須恵器・瓦などが散布しており、遺跡の範囲やその性格についての究明が急がれていた。そこで、用地の買収が終了した約 700 ㎡について調査を実施した。

Ⅱ．遺跡の位置と環境（第1図）

大畑遺跡は白石市字東大畑に所在し、東北本線白石駅の北東約 500mの所に位置している。本遺跡の所在する白石市は、宮城県内陸部の最南端にあたり、東部の角田丘陵地性山地と角田丘陵等からなる阿武隈山地帯､西部の奥羽山脈と蔵王火山帯からなる奥羽山地帯、これらの山地帯に挟まれた中央部低地帯の三地域に分けられる。中央部低地帯は一般に白石盆地と呼称され、その中の北部を東流する白石川やそれに合流する斎川などの支流によって形成された南北に長い盆地状の低地で、南北約 6.5㎞、東西 2.5㎞ 程の規模をもつ。斎川は、盆地南部の山地中に源を発し、流域に自然堤防を形成しながら盆地南半のほぼ中央を北流、郡山地区で丘陵を避けて蛇行しながら白石川に合流している。

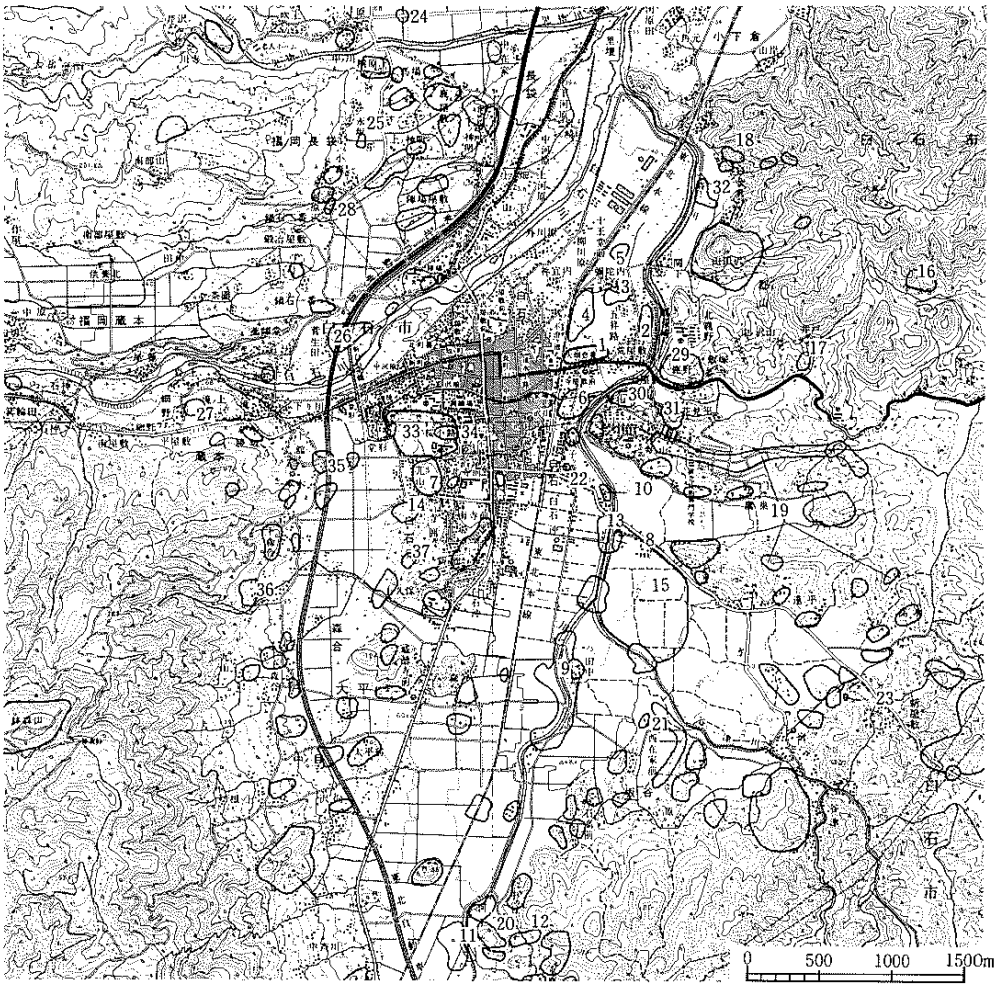
本遺跡は斎川西岸の自然堤防上に立地しており、付近の標高は約 45mである。遺跡のすぐ西側には東北本線があり、東側は住宅地を挟んで斎川が蛇行しながら北上している。現状は、宅地・水田・畑地である。

白石市ｉは多くの遺跡が分布しており、現在約 400 ケ所以上の遺跡が確認されている。本遺跡の立地する白石盆地は、古墳時代以降斎川流域を中心に遺跡の分布が認められ、集落跡として、亀田西遺跡、田中遺跡、梅田遺跡、北無双作遺跡、観音崎遺跡などが確認されている。さらに、斎川東側の阿武隈山地帯から派生した低丘陵上には鷹巣古墳群や亀田古墳群などが築造されており、上蟹沢古墳、塔ノ入古墳、坂谷古墳群などの小円墳や、郡山横穴古墳群ほか数群の横穴墓も存在している。これらの古墳は、盆地内の肥沃な農耕地を基盤として成立したと考えられる。古墳時代以降も斎川流域地域はほぼ連続的に遺跡が密集する。遺跡の中には兀山遺跡、前山遺跡、鹿島山遺跡、堂田遺跡など古瓦を出土するものもあり、前 2 者は窯跡、堂田遺跡は寺院跡と考えられている。

本遺跡は、付近に「郡山」という地名があり、周辺からは地元の郷土史家らによって布目瓦が採集されていることなどから、古代の役所跡の存在も考えられていた。

III．発見された遺構と遺物

今回の調査は、遺跡の範囲や遺構のあり方を確認するため、バイパス建設予定地の中に現道に沿って幅 6m×長さ 20m、幅 6～13m×長さ 65mの任意のトレンチを設定して

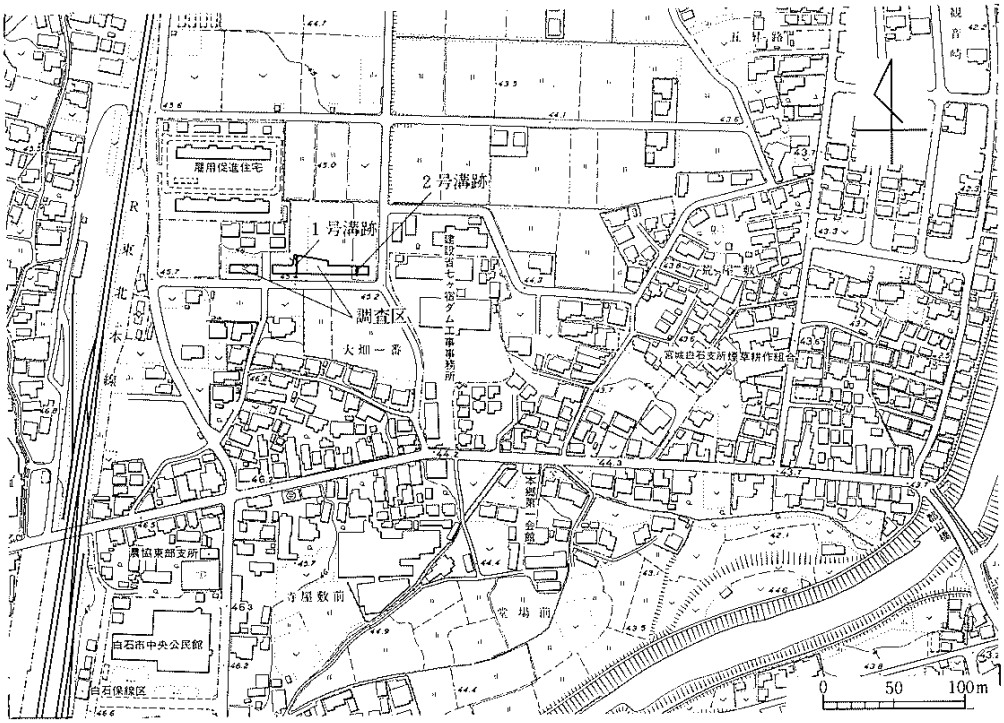


No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	大畑遺跡	弥生・古代	14	八幡坂西遺跡	古代	27	滝ノ上遺跡	古代
2	観音崎遺跡	古墳（後）・平安	15	白石築理制跡	古代・中世	28	入屋敷前遺跡	縄文・古代
3	弥栄内遺跡	弥生・古代	16	黒岩横穴古墳群	古墳（後）・奈良	29	鹿島山遺跡	縄文・古代・中世
4	大畑B遺跡	古代	17	上蟹沢古墳	古墳（後）	30	七屋敷遺跡	古代
5	弥栄内B遺跡	古代	18	郡山横穴古墳群	古墳（後）・奈良	31	雨ケ作遺跡	古代
6	本郷遺跡	古代	19	鷹巣古墳群	古墳・古代	32	金倉遺跡	古代
7	兀山遺跡	縄文（中）・奈良・平安・中世	20	亀田古墳群	古墳	33	白石城跡	近代
8	梅田遺跡	弥生・古墳	21	坂谷古墳群	古墳・奈良	34	益岡遺跡	古代
9	田中遺跡	弥生・古墳・古代・中世	22	銚子ケ盛古墳	古墳	35	下館遺跡	古代
10	北無双作遺跡	古墳・奈良	23	塔ノ入古墳	古墳（後）	36	内田前遺跡	古代
11	亀田西遺跡	古墳・平安	24	窯田遺跡	平安	37	前山遺跡	縄文・弥生・古代
12	亀田遺跡	古墳・古代	25	長坂前遺跡	古代			
13	白石神遺跡	縄文・古代	26	菅生田遺跡	縄文（前～後）・弥生			

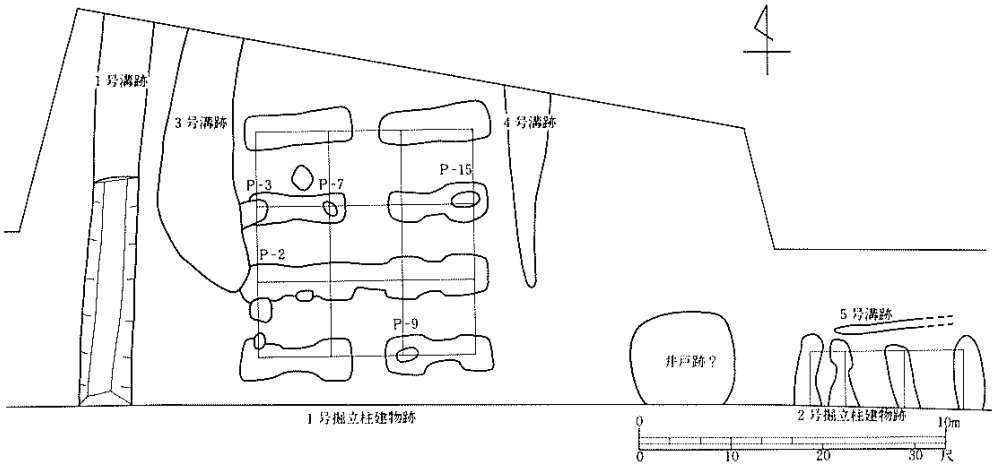
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

行った（第２図）。

調査の結果、表土下 40～50㎝の地山面（細粒砂層）で掘立柱建物跡２棟、溝跡５条、井戸跡１基などが発見された。これらの遺構の埋土や遺構検出面、表土からは、土師器・須恵器・瓦などの遺物が整理用コンテナで約１箱分出土している。以下、主要な遺構、遺物について説明する。



第２図　遺跡の周辺と調査区



第３図　遺構配置図

A　掘立柱建物跡

調査区中央部で 2 棟検出した。

[1 号掘立柱建物跡]（第 3 図）

桁行 3 間×梁行 3 間の南北棟で、総柱の建物跡である。柱穴のほぼ中心に柱位置を推定するとその規模は、桁行が総長約 7.6mで約 2.5m等間であり、梁行は総長約 7.1mで約 2.4m等間である。建物の方向は真北とほぼ一致する。柱穴は約 1m×約 1.2mの方形が東西方向に二個一組づつ連結した布掘りである。P9 からは柱痕跡が認められ、それによると柱は円形で直径約 30㎝である。P3・7・15 からは柱抜き取り痕跡が認められた。

柱穴の埋土から土師器・須恵器・瓦が出土している。図示できるものに須恵器甕の口縁部（第 4 図－1）、瓦（第 4 図－3～5）がある。

[2 号掘立柱建物跡]（第 3 図）

1 号掘立柱建物跡の約 10m東側で検出された東西 3 間×南北 1 間以上の総柱の建物跡である。柱穴のほぼ中央に柱位置を推定するとその規模は、東西方向が総長約 5.2mで柱間寸法は西から約 1.0m、2.1m、2.1mであり、南北方向は総長約 1.8m以上である。建物の方向は真北とほぼ一致する。柱穴の形状は 1 号掘立柱建物跡とほぼ同様であるが、いくぶん小さい。北側柱列と 1 号掘立柱建物跡の南側柱列は柱筋が揃っている。

B　溝跡

溝跡は調査区中央で 4 条、調査区東側で 1 条検出した。

[1 号溝跡]（第 2 図・第 3 図）

1 号掘立柱建物跡西側柱列の約 3.5m西側で検出された。南北方向に延び、方向は 1 号掘立柱建物跡とほぼ同じである。上幅約 1.5m、下幅約 0.7m、深さ約 0.4～0.5mで、断面は逆台形である。堆積土は地山の砂を多く含む暗褐色～黒褐色の自然流入土である。

堆積土から土師器・須恵器・瓦が出土しているが、図示できるものは瓦のみである（第 4 図－6～11）。

[2 号溝跡]（第 2 図）

調査区東側で検出された南北方向に延びる溝である。規模は、遺構検出面の輪郭では上幅 2m～4m程である。

検出面から土師器・須恵器の小片が出土しているが、図示できるものはない。

[3・4・5 号溝跡]（第 3 図）

3 号溝跡は 1 号掘立柱建物跡の西側柱列に、4 号溝跡は東側柱列に、5 号溝跡は 2 号掘立柱建物跡の北側柱列に沿って検出されたが、精査を行っていないため性格は不明である。

C　井戸跡（第 3 図）

2 号掘立柱建物跡西側で検出された。精査は行っていないが、遺構確認面では直径約3.5mの円形を呈する。

堆積土から土師器高坏が 1 点出土している（第 5 図、図版 2－1）。坏部は口径に比して器高が小さく底部の丸味が弱い皿状をなし、外面は段を持ち、内面はわずかに屈曲している。脚部は柱状部から裾部にかけてゆるやかに広がる。坏部の器面調整は、外面が段より以上にヨコナデ、以下にヘラケズリであり、内面が口縁に平行なヘラミガキと黒色処理である。脚部の器面調整は、内外面とも柱状部にヘラケズリ、裾部にヨコナデである。

Ⅳ．遺構・遺物の検討

今回の調査は確認調査であり、遺跡の範囲や性格など詳細については不明な点も多い。ここでは、今回の成果を踏まえて若干の検討を試みたい。

1．遺構について

1 号掘立柱建物跡は桁行 3 間×梁行 3 間の総柱の建物跡で、倉庫と考えられる。2 号掘立柱建物跡は東西 3 間×南北 1 間以上の総柱の建物跡で、1 号掘立柱建物跡と同様に倉庫と推定される。この 2 棟の建物は 10m離れて建っており、1 号掘立柱建物跡の南側柱列と 2 号掘立柱建物跡の北側柱列は柱筋が揃っていることから、この 2 棟は同時期に計画的に配置されたものと思われる。

1 号溝跡は南北方向に延び、建物跡の方向とほぼ同じである。このことから本溝跡は建物跡と同時期に計画的に配置されていた可能性がある。なお、本溝跡の西側では遺構・遺物が発見されないことから、建物群を区画する溝の可能性もある。

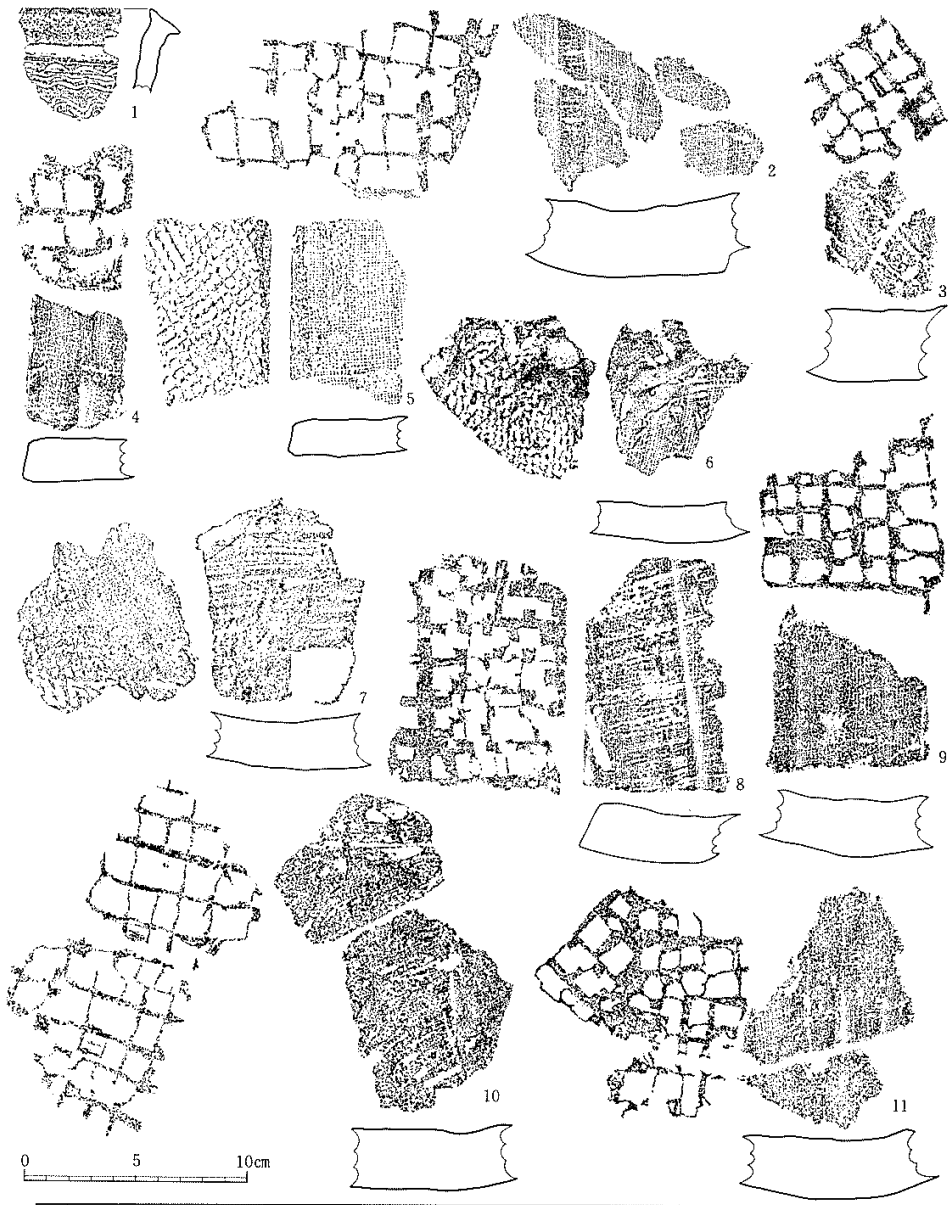
2．遺物について

[平瓦]

出土した瓦はすべて平瓦で、破片のため全体の大きさがわかるものはない。基本的には凸面には格子叩き目・凹面には布目痕を残しているが、叩き目の格子の大きさや器面調整によりいくつかに分類できる。

A類：凸面正格子叩き目で、格子が大きいもの（第 4 図－2.3.4.8.9.10.11）

格子の大きさは 0.8～1㎝ 四方で、0.3～0.7㎝ の深さがある。凹面には布目痕を残しており、ケズリが施されているものもある。最大厚は 2.6～3.2㎝ で、色調は橙色～にぶい褐色である。凹面には模骨痕や布目痕が明瞭に観察されるものが多く、糸切り痕と思われるものも観察できることから、粘土板桶巻き作り技法によるものと考えられる。なお、この類の破片には叩き目に同じようなキズが認められるものがある。キズの部分は、叩き目の同一位置に観察することができることから、これらは同じ叩き板を使用して調整されたものと思われる（第 4 図－3.10）。



No.	種　別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	図版 No.
1	須恵器甕	P-15	波状文	ロクロナデ	2－12
2	平　瓦	1層	凹面布目、糸切り痕？、横骨痕有	凸面　格子叩き目	2－5
3	平　瓦	P-2	凹面ケズリ、横骨痕有	凸面　格子叩き目	2－4
4	平　瓦	P-2	凹面布目、ケズリ痕？、糸切り痕？、横骨痕？	凸面　格子叩き目	2－6
5	平　瓦	P-2	凹面布目→一部ケズリ、横骨痕有	凸面　格子叩き目	2－9
6	平　瓦	SD 01	凹面布目→ナデ	凸面　格子叩き目→ナデ	2－8
7	平　瓦	SD 01　1層	凹面布目→ケズリ、一部ナデ、糸切り痕	凸面　格子叩き目→ケズリ	2－7
8	平　瓦	SD 01　1層	凹面布目→ケズリ、糸切り痕？、横骨痕有	凸面　格子叩き目	2－11
9	平　瓦	SD 01　1層	凹面布目、横骨痕有	凸面　格子叩き目	2－3
10	平　瓦	SD 01　1層	凹面ケズリ、横骨痕有	凸面　格子叩き目	2－2
11	平　瓦	SD 01　1層	凹面布目→ケズリ、横骨痕有	凸面　格子叩き目	2－10

第4図　出土遺物

B類：凸面斜格子叩き目で、格子が小さいもの（第4図－5.6.7）

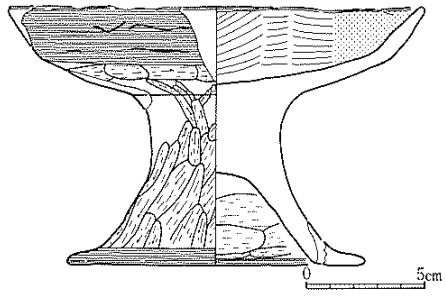
凹面には糸切り痕・模骨痕・布目痕を残すものがあり、粘土板桶巻き作り技法によるものと考えられる。これらはさらに格子の大きさによって、①格子の大きさが 0.3～0.4㎝、深さが0.1㎝以下、②B－①類よりさらに格子が小さく、格子の大きさが約0.3㎝四方、深さが0.1㎝以下の二種類に分けられる。

①凸面にはケズリが加えられている。凹面には部分的にナデが施されている。最大厚は2.5㎝で、色調はにぶい橙色～赤褐色である（第4図－7）。

②凸面には叩き目以後の調整がなく、凹面には部分的にケズリが加えられ、色調が赤褐色のもの（第4図－5）と、凸面・凹面とも部分的にナデが施され、色調がにぶい橙色のもの（第4図－5）の2個体がある。最大厚は1.6～1.7㎝で今回出土した平瓦の中では最も薄い。

以上のように3種類に分類することができる。個体数としてはA類・B－①類が同程度出土しており、B－②類は上記の2個体以外にはない。

ところで、本遺跡の南西約1.5㎞の所には瓦窯跡である兀山遺跡が所在している。出土瓦には平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦がある。平瓦は3種類が報告されており、いずれも凸面は格子叩き目で、粘土板桶巻き作りの可能性も考えられている。しかしながら、兀山遺跡出土の平瓦は非常に厚手で最大跡4.6㎝を測るものがあり本遺跡出土のものよりは一般的に厚いこと、格子叩き目の格子の大きさにかなりの違いがあり、焼き具合・色調に類似しない点があることなど、現段階では、本遺跡出土の瓦と兀山遺跡出土の瓦との関連は認められない。



第5図　井戸跡出土遺物

[その他の遺物]

土師器･須恵器とも小片が数点出土しているが、器形全体がわかるものは井戸跡出土の土師器高坏1点のみである（第5図、図版2－1）。この高坏には、東北地方南部における土師器編年の栗囲式期（氏家：1957）から国分寺下層式期（氏家：1967）にかけての様相が見られるが、共伴資料がなく高坏以外の器種の比較検討ができない現段階では、これ以上の限定はできない。

3．遺跡の性格・年代について

本遺跡の性格については、今回の調査では掘立柱建物跡が2棟と溝跡が検出されたが、建物跡が倉庫と考えられること、これらが計画的に配置されていると考えられること、周

辺から瓦の破片が多数出土しており瓦葺きの建物の存在も考えられることから、ここではひとつの可能性として郡衙遺跡との関連を考えておきたい。

次に年代についてだが、今回の調査では直接的に年代を導く資料は発見されなかった。しかし、建物跡や溝跡から平瓦が出土しており、それらは凸面が格子叩き目で、粘土板桶巻き作りである。桶巻き作りによる平瓦については、ロクロ挽き重弧文軒平瓦との組合せから多賀城創建期以前の指摘がなされている(進藤：1978)。したがって本遺跡は、多賀城創建期以前に存在していた可能性がある。

ところで、本遺跡周辺の地域は、古代においては苅田郡内に含まれる。続日本紀によると、養老 5 年（721 年）に柴田郡から分かれて苅田郡が建置されるが、この新設された郡の範域や郡衙の所在地については推測の域を出ていない。現段階では、本遺跡との関連を述べることはできないが、今後慎重に検討する必要があるだろう。

Ⅴ．まとめ

1．大畑遺跡は白石市地中央部の斎川西岸の自然堤防上に位置している。

2．遺構は、掘立柱建物跡 2 棟、溝跡 5 条、井戸跡 1 基が検出された。
掘立柱建物跡は桁行 3 間×梁行 3 間の総柱の建物と東西 3 間×南北 1 間以上の総柱の建物で、いずれも倉庫と考えられる。また、溝跡を含めてこれらの遺構は同時期に計画的に配置されたものと思われる。

3．本遺跡の性格や範囲、年代については現段階では明確にすることはできないが、郡衙にかかわる遺跡の可能性もある。今後、出土瓦の年代や生産地の問題も含めてさらに調査を進め、検討していく必要がある。

引用参考文献

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題」『柏倉亮吉教授還暦記念輪文集』

遠藤　智・満野俊太朗（1984）：「梅田遺跡調査報告書」『白石市文化財調査報告書』　第22集　白石市教育委員会

佐々木和博・菊地逸夫（1985）　：「白石市兀山遺跡の古瓦」　赤い本第2号

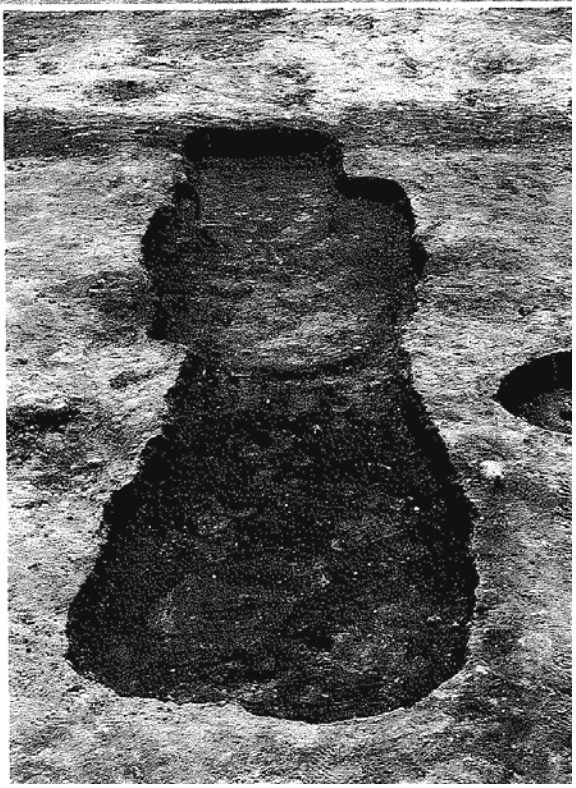
佐原　眞（1972）　：「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』58-2

新庄屋元春（1980）：「角田郡山遺跡」『角田市文化財調査報告書』第３集　角田市教育委員会

進藤秋輝（1978）　：「多賀城古瓦の二系統」『多賀城跡調査研究所研究紀要』Ⅴ

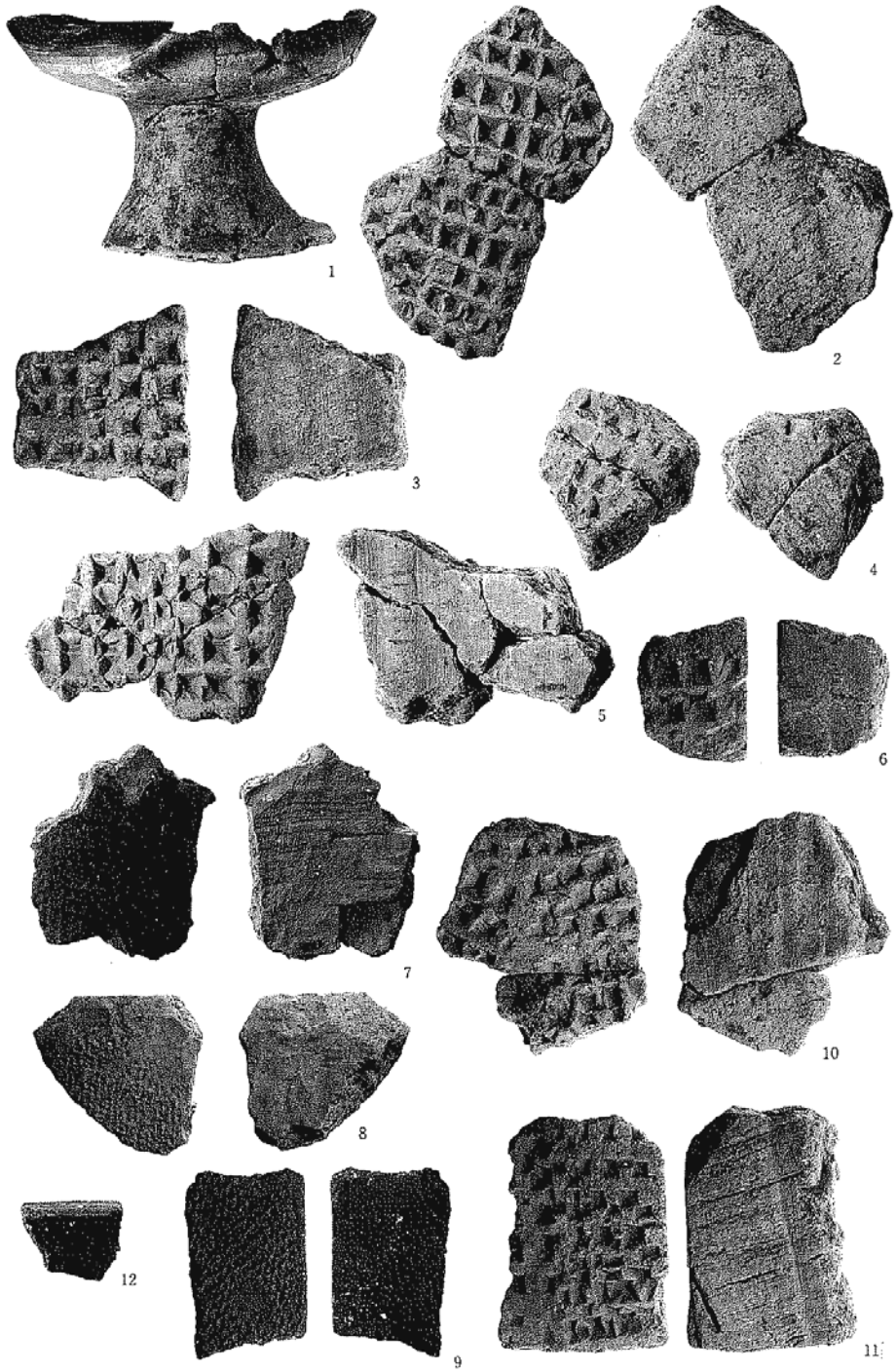
中橋彰吾・清野俊太朗（1978）：「観音崎遺跡調査報告書」『白石市文化財調査報告書』第18集　白石市教育委員会

宮城県教育委員会（1989）　：「亘理町三十三間堂遺跡－昭和61・62・63年度　遺跡詳細分布調査報告書－」　亘理町教育委員会・宮城県教育委員会



上：調査区全景（西から）
　1号掘立柱建物跡
　1号溝跡
右：布掘り状柱穴（東から）
　上－ピットNo.3
　下－ピットNo.7

図版1

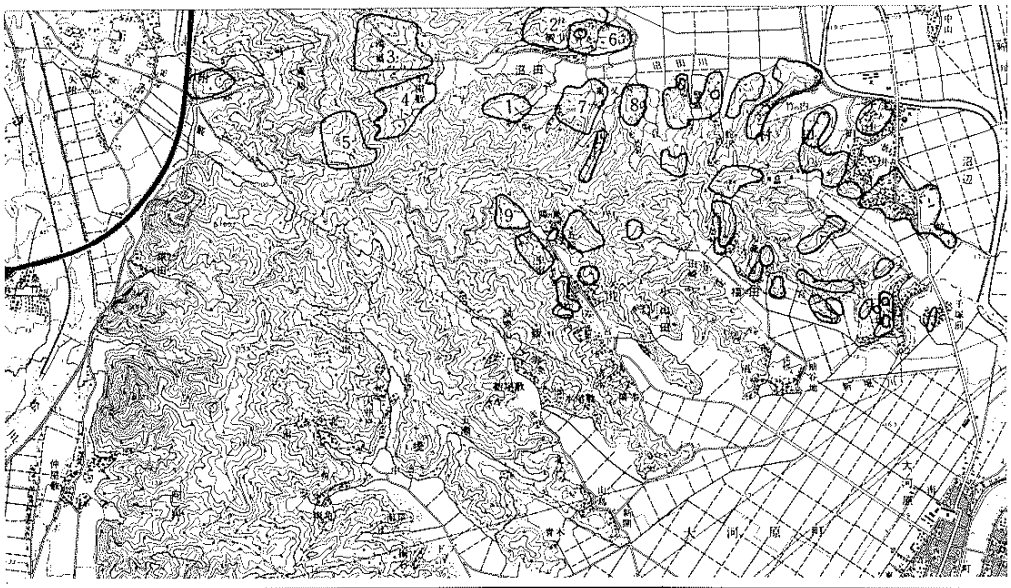


図版２　出土遺物

深沢山遺跡（ふかざわやまいせき）

調 査 要 項

遺　跡　名：深沢山遺跡
遺跡所在地：宮城県柴田郡村田町沼田字深沢
調 査 面 積：423 ㎡
調 査 期 間：1990 年 7 月 9 日～10 日
調査主体者：村田町教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：菊地逸夫　近藤和夫



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	沼沢山遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	4	深沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生、古代	7	見世前遺跡	丘陵屋	包含地	縄文、弥生、古墳
2	姥沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中)、弥生	5	傾城山遺跡	丘陵	包含地	縄文	8	二斗内B遺跡	丘陵	包含地	古代
3	鴉の巣遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中)、弥生	6	沼田鶏塚現遺跡	丘陵	包含地	縄文(中、後)、古墳(中)	9	小林遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中～晩)

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

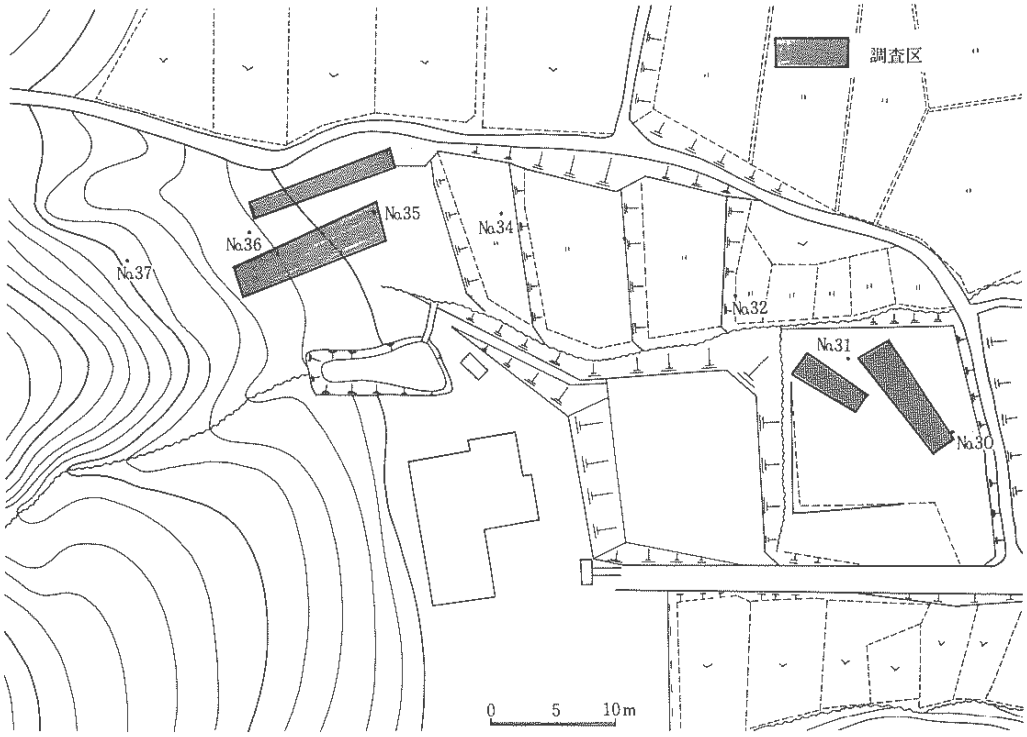
深沢山遺跡は村田町沼田字深沢に所在する。

遺跡は高館丘陵から南東方に派生した愛宕山丘陵上にあり、東側に村田盆地、西側に円田盆地、南側には槻木低地が広がっている。この丘陵は大河原周辺では、槻木低地に向かって6つの舌状小丘陵となって延びており、この小丘陵の基部の谷頭に深沢山遺跡が、立地している。また、これらの舌状小丘陵には縄文～古代までの様々の時代の遺跡の分布が数多くみられ、さらに丘陵端部付近には古墳、横穴墓なども多数認められている。

今回の調査は南仙台ゴルフクラブへの進入道路としての町道改良工事に係わる確認調査である。本遺跡は、改良予定の町道路線敷について分布調査した際に発見されたもので、その後文化財保護課と村田町が協議した結果、道路建設が遺跡に及ぼす影響が最少になるように路線を変更し、その変更予定地について遺構や遺物の有無を把握することを目的で確認調査を行ったものである。

調査は路線敷地内で遺構の存在が考えられる緩斜面については 3～5m幅のトレンチを任意に配置して遺構の検出を試みた。遺構の確認は、表土を重機により除去し、その直下で認められる地山ローム面で行った。

その結果、縄文土器の小破片が表土から数点認められたものの、遺構等は検出されなかった。なお、周辺の遺物の散布状態や地形の観察から、遺跡の主体部は今回の調査地点の北西方向の緩斜面の畑地になるものと考えられる。



第２図　周辺の地形と調査区

遺跡全景

音無遺跡（おとなしいせき）

目　　次

1. はじめに ……219
2. 発見された遺構と遺物 ……220
3. まとめ ……224

調 査 要 項

遺 跡 名：音無遺跡　　おとなしいせき
　　宮城県遺跡地図（昭和 63 年版）遺跡地名表登載番号；17046　遺跡記号；ＮＱ
所 在 地：宮城郡松島町根廻字人筈地内
調査期間：平成 2 年 8 月 23 日、31 日、9 月 1 日
調査面積：調査対象面積；900 ㎡　発掘調査面積；300 ㎡
調査原因：国道 45 号線付け替え道路工事
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　白鳥良一、阿部博志、天野順陽、高橋栄一
調査協力：宮城県道路公社

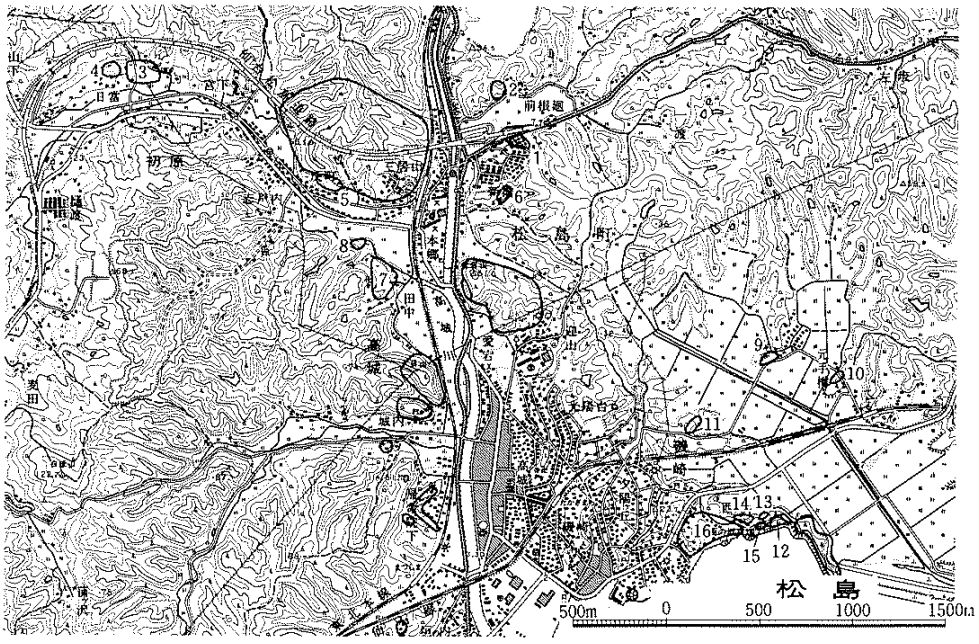
音無遺跡（おとなしいせき）

1．はじめに

音無遺跡は宮城県宮城郡松島町根廻字人筈地内に所在し、東北本線愛宕駅の北東 600m に位置する。根廻地区は、富谷丘陵から連なる丘陵地帯（松島丘陵）と、高城川やその支流によって開析された低地からなる。本遺跡は、丘陵平坦部が住宅と墓地造成によって地形改変を受けているが、全体として北に向かって緩やかに延びる丘陵先端部に立地している。遺跡周辺の標高は約 10mで、周囲の水田との比高は約 3mである。

遺跡周辺には、縄文時代から中世にかけて多くの遺跡が分布している。古代には、松島湾沿岸に多くの貝塚・製塩跡が分布し、一方丘陵上には古墳、寺院跡、集落跡等がある。

今回は三陸縦貫自動車道松島ＩＣ建設による国道 45 号線の付け替え工事に伴って発掘調査を実施した。これまでの分布調査では国道 45 号線の南側丘陵麓で土師器や須恵器が採集



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	音無遺跡	丘陵麓	包含地	古代	9	元手樽製塩跡	丘陵端	製塩跡	古代
2	桐田遺跡	丘陵麓	包含地	古代	10	釜沢遺跡	丘陵	包含地	縄文・弥生・古代
3	金井神遺跡	谷底平野	包含地	古代	11	洞遺跡	丘陵	包含地	古代
4	日当遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・古代	12	館ケ崎遺跡	海岸低地	包含地・製塩跡	縄文晩・弥生・古代
5	反町遺跡	丘陵斜面	包含地	古代	13	新浜Ａ遺跡	旧海浜	製塩跡	奈良・平安
6	勤伝遺跡	丘陵斜面	包含地	平安	14	新浜Ｂ遺跡	旧海浜	製塩跡	奈良・平安
7	小森遺跡	丘陵斜面	包含地	古代	15	松島マリーナ脇遺跡	丘陵麓	包含地	古代
8	小森Ｂ遺跡	丘陵斜面	包含地	古代	16	西の浜貝塚	丘陵麓	貝塚・製塩跡	縄文前～晩・弥生・古墳　平安

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

されたことから、古代の集落跡の存在が予想された。

発掘調査は丘陵先端部に南北方向のトレンチを3本入れ、遺構の確認調査を行った。その結果西側のトレンチから竪穴住居跡などが検出されたが、他のトレンチからは遺構・遺物は発見されなかった。

第2図　調査区位置図

2．発見された遺構と遺物

今回の発掘調査によって竪穴住居跡1軒、土壙2基が検出された。いずれも表土下の地山面で確認された。

(1) 1号住居跡

［重複･増改築］北壁、南壁でそれぞれ1号土壙、2号土壙に切られている。また西辺中央

部にカマド、北辺中央部に燃焼部があり、貯蔵穴が二ヶ所に見られることから、一度改築されていると思われる。

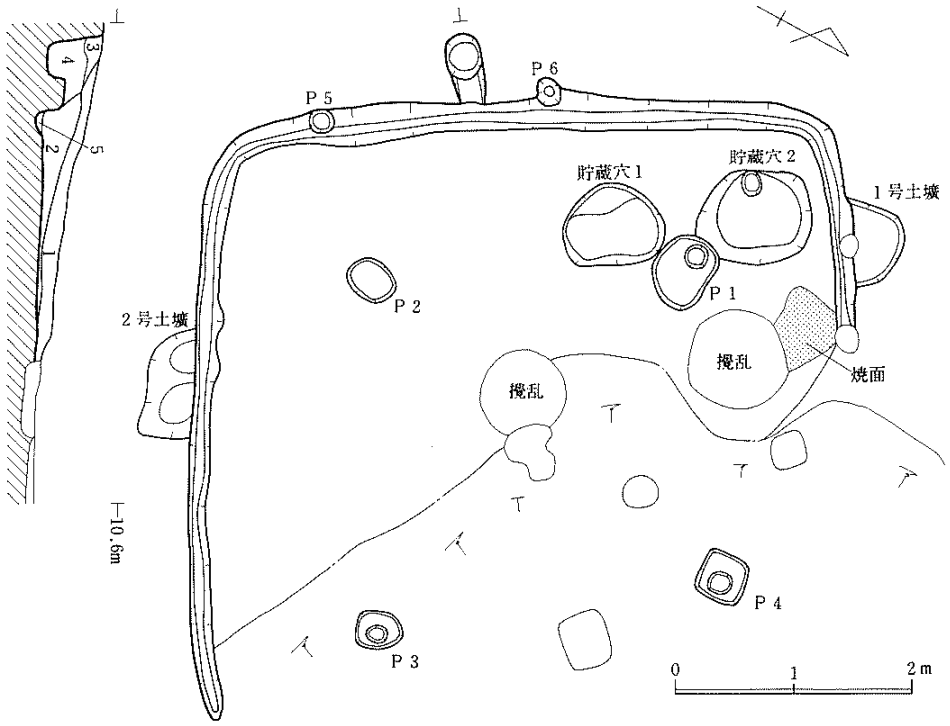
[平面形･規模] 東半部が削平を受けているが、西辺 5.4m、残存する北辺、南辺はそれぞれ 1.8m、5.1mである。主柱穴の位置関係から、一辺が 5.4mの隅丸方形と推定される。

[堆積土] 2 層からなり、いずれも自然堆積土である。

[壁] 壁は周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は保存の良い西壁で 44㎝ である。

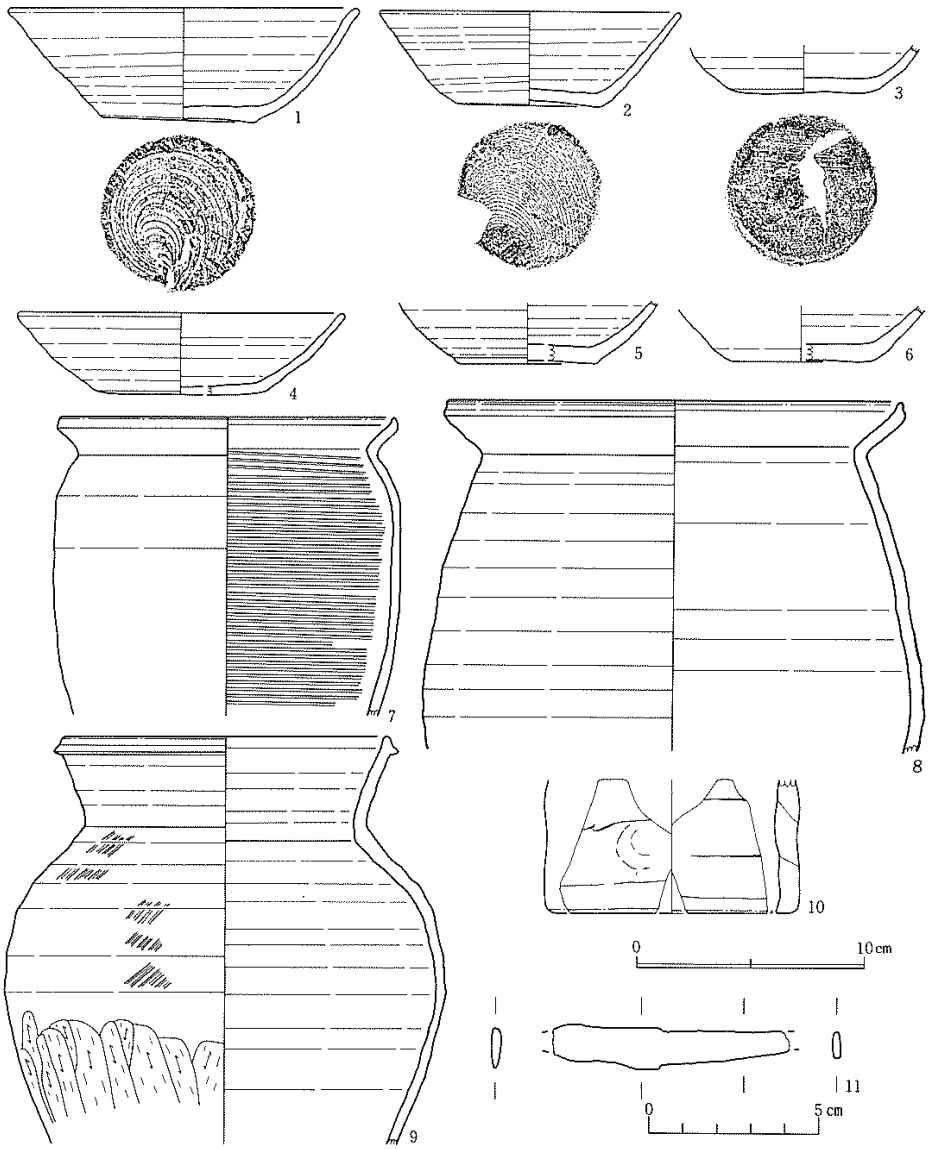
[床] 地山をそのまま床面としており、凹凸はほとんどない。床面レベルは南隅が最も高く、北に内かって緩やかに傾斜している。

[柱穴] 床面で検出されたピットは 6 個(P1～P6)ある。位置関係からP1～P4 が主柱穴であると考えられる。柱穴の平面形は楕円形や隅丸方形で、大きさは 32㎝～60㎝ である。P1・P3・P4 から直径 18㎝～20㎝ の柱痕跡が確認された。深さは 13㎝～16㎝ である。また西壁のカマドの両側に壁柱穴（P5・P6）が設けられている。



層位	色 調	土 性	備 考
1	暗褐色	砂質シルト	地山ブロック多量、炭化物少量含む
2	暗褐色	砂質シルト	炭化物多量・焼土少量含む
3	黒褐色	砂質シルト	地山ブロック少量含む
4	—	——	煙道崩落土
5	暗褐色	砂質シルト	周溝堆積土

第 3 図　1 号住居跡



No	出土地区・層位	器種・器形	外面	内面	底部	口径（cm）	底径	器高	残存率	図版No
1	1住	須恵器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	15.2	6.8	5.1	2／3	2－1
2	1住	須恵器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	13.0	6.2	4.2	2／3	2－2
3	1住	須恵器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り＋手持ちヘラケズリ		6.6	（2.2）		2－3
4	1住 床	須恵器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	14.2	7.6	3.6	1／3	2－4
5	1住	須恵器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		6.0	（2.8）	1／4	2－5
6	1住	須恵器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		6.0	（2.5）	1／3	2－6
7	1住 周溝	土師器・甕	ロクロナデ	回転ハケメ		14.6		（13.2）	1／3	2－8
8	1住 貯蔵穴2	土師器・甕	ロクロナデ	ロクロナデ		19.8		（15.6）	1／6	2－9
9	1住 貯蔵穴2	須恵器・甕	平行タタキ目→ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ		14.2		（13.0）	1／3	2－7
10	1住	土師器・不明	（ナデ・押圧）	（ナデ）			10.4	（5.9）	1／6	2－10
11	1住	鉄製品・刀子				長（6.9）	巾1.2	厚 0.3		2－11

第4図　1号住居跡出土遺物

[周溝] 幅 16㎝～24㎝、深さ 10㎝～19㎝ で、断面「U」字形を呈する。住居内を全周すると見られる。

[カマド] 西辺中央部に設けられている。燃焼部及び側壁は検出できなかった。煙道は地山を掘り抜き、長さ 56㎝ を計る。先端部は深さ 10㎝ のピット状を呈している。また、北辺中央部に強い熱作用を受けた面が見られ、カマドの燃焼部と推定される。両者の前後関係は不明である。

[床面施設] 貯蔵穴状ピットが 2 個見られる。貯蔵穴 1 は大きさ 80㎝×70㎝、深さ 73㎝、貯蔵穴 2 は大きさ 100㎝×80㎝、深さ 85㎝ で、いずれも楕円形を呈する。

[出土遺物] 土師器、須恵器、鉄製品がある（第 4 図）。大部分は堆積土から出土しており、床面上の出土遺物は少ない。

土師器には坏・甕がある。坏は破片資料であるが、外面がロクロ調整、内面がヘラミガキ、黒色処理されている。甕は口頸部付近に最大径をもつもの（7）と、長胴形のもの（8）があり、いずれもロクロ調整されたものである。

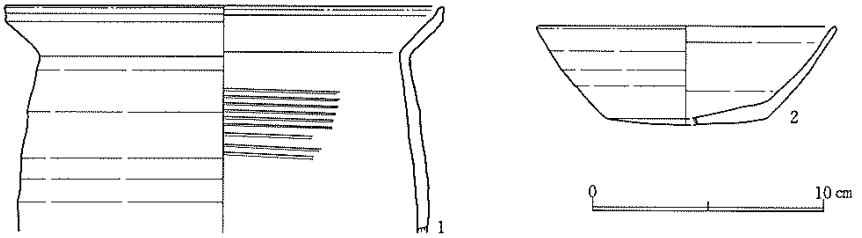
須恵器には坏・甕・壷がある。坏は底部から体部にかけて緩やかな丸みを持ち、口縁部までほぼ直線的に立ち上がる。底部切り離しは回転糸切りのもの（1・2・5・6）と、回転ヘラ切りのもの（3・4）がある。回転ヘラ切りのものには手持ちヘラケズリの再調整が見られる（3）。甕（9）は体部中央部に最大径をもち、ロクロ調整前の平行タタキ目の痕跡が見られる。壷は破片資料で全体の器形はわからない。

また器種不明の土器（10）も出土している。

鉄製品には刀子（11）がある。区は両区である。

(2) その他の遺構

住居跡を切る 1 号土壙、2 号土壙がある。1 号土壙は、平面形が隅丸方形で、大きさ 60㎝×60㎝、深さ 12㎝ である。堆積土には焼土が含まれる。出土遺物には、土師器甕（第



No	出土地区・層位	器種・器形	外面	内面	底部	口径（cm）	底径	器高	残存率	図版No
1	1号土壙	土師器・甕	ロクロナデ	回転ハケメ		19.0		(10.1)	1／6	2－12
2	2号土壙	須恵器・坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	12.8	7.0	4.3	1／5	2－13

第 5 図　1 号・2 号土壙出土遺物

5 図 1）、須恵器坏がある。2 号土壙は、平面形が楕円形で、大きさ 92㎝×60㎝、深さ 36㎝である。出土遺物には、土師器甕、須恵器坏（同図 2）・甕がある。

(3) 年代

土師器には坏・甕があり、いずれもロクロ調整されている。このような特徴を持った土器は、東北地方南部における土師器編年では表杉ノ入式とされ、おおむね平安時代に比定されている（氏家：1957）。

須恵器には坏・甕・壷がある。坏は回転糸切り無調整のもの、回転ヘラ切り無調整のもの、回転ヘラ切り＋手持ちヘラケズリのものがあり、回転糸切り無調整のものが比較的多い。器形は底部から体部にかけて緩やかな丸みを持ち、口縁部までほぼ直線的に立ち上がり、口径に比して底径が小さい。

本遺跡の北東約 17㎞に須恵器窯跡が発見されている須江関ノ入遺跡がある。関ノ入遺跡の 2 号窯跡から出土した須恵器坏は回転糸切り無調整で、1 号住居跡出土の須恵器坏と器形もほぼ同じである。2 号窯跡出土の須恵器坏は 9 世紀後半を中心とする年代が考えられている（中野・佐藤：1990）。

以上より 1 号住居跡の年代はおおむね 9 世紀後半を中心とする年代と考えられる。

3．まとめ

（1） 音無遺跡は松島丘陵の高城川の左岸の丘陵先端部に立地している。

（2） 発見された遺構は、竪穴住居跡 1 軒、土壙 2 基である。

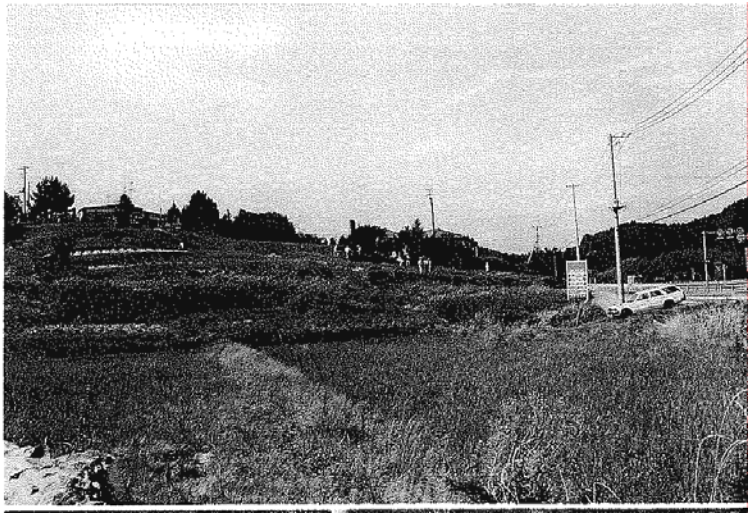
（3） 竪穴住居跡は、遺物の特徴からおおむね 9 世紀後半を中心とする年代が考えられる。

引用･参考文献

氏家和典（1957）；東北土師器の型式分類とその編年「歴史14輯」東北史学会

中野・佐藤（1990）；須江関ノ入遺跡　河南町文化財報告書第4集

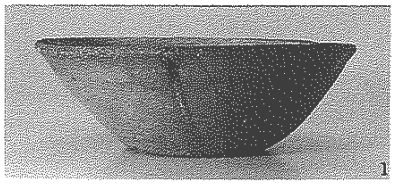
遺跡近景（東から）

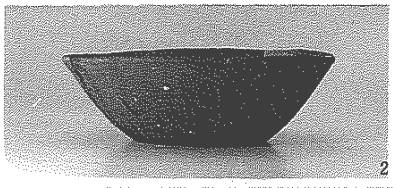


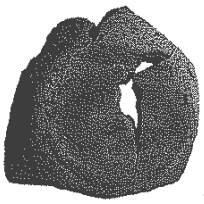
１号住居跡

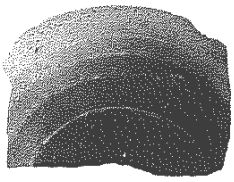
１号住居跡遺物
出土状況

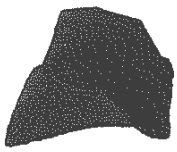
写真図版１

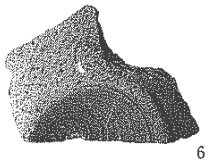

1


2

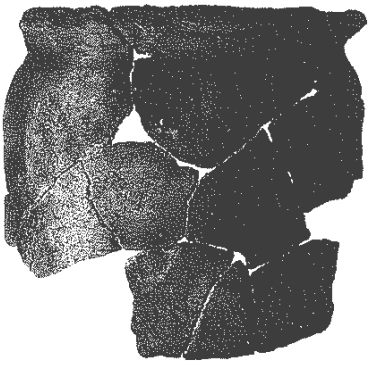

3


4

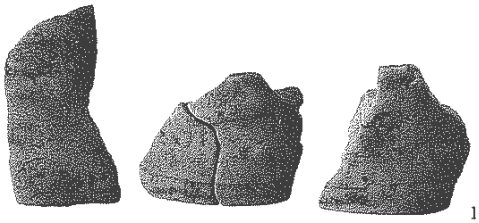

5


6

7


8

9


10

11

12

13

1～11　1号住居跡
12　1号土壙
13　2号土壙

写真図版 2

蒲切沢遺跡（かばきりざわいせき）

調 査 要 項

遺 跡 名：薄切沢遺跡　かばきりざわいせき
　　宮城県遺跡地図(昭和 63 年度版)遺跡地名表登録番号；26083　遺跡記号；ＯＡ
所 在 地：宮城県黒川郡大衡村大瓜字蒲切沢
調査期間：平成 2 年 6 月 8 日、7 月 10・11・16 日
調査面積：約 600 ㎡
調査主体：大衡村教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
　　白鳥良一　小井川和夫　斎藤吉弘　阿部博志
　　大衡村教育委員会社会教育課
　　残間俊二　石川　進
調査協力：大衡村企画課　佐野　晃　斎藤一郎
　　関谷土地家屋調査士　関谷勝雄
　　日東興業株式会社花の杜ゴルフクラブ建設準備室（和田唯志ほか）
　　大成道路株式会社東北支店（土屋優衛　三浦　信ほか）
　　株式会社オオバ東北支店（今福富夫　菅原雅彦ほか）

蒲切沢遺跡（かばきりざわいせき）

1．はじめに

蒲切沢遺跡は大衡村役場の西約 3㎞に位置し、黒川郡大衡村大瓜字蒲切沢と同字山田に所在する。この地区には奥羽脊梁山脈から派生する大松沢丘陵が東に延びており、本道跡はこの大松沢丘陵を開析して南東に流れる善川の段丘上に立地している。蒲切沢はこの善川の小支流によって形成された西から東に延びる小さな沢で、遺跡はこの沢に面した緩い北斜面に広がっている。

沢の南には現在沢沿いに村道蒲切沢線が通っており、村道の北は畑地及び水田、南は山林になっている。村道北側の水田については昭和 56 年 11 月に圃場整備事業が実施されたが、本遺跡はこの工事の際に新たに発見された遺跡である。工事によって、縄文早期から晩期までの多量の土器や石器が採集され、竪穴住居跡とみられる遺構 9 基をはじめ、石組炉や貯蔵穴と見られる遺構も多数検出されたため（大衡村誌 p238～240：1983）、地権者関谷勝雄氏の協力により一部が畑地として保存された(注 1)。また、この後に藤村新一氏によって村道の切り通し面から旧石器も採集されている。

今回の調査は、遺跡の西側一帯に日東興業株式会社によってゴルフ場が建設されることになり、その進入路として大衡村が村道蒲切沢線の拡幅工事を行うことになったのに伴うものである。当初の計画は南側の山林を大幅に削平するものであったため、再三にわたる協議の結果、設計変更により削平範囲を極力少なくし、遺跡に対する影響を最小限に抑えることで合意したため、平成 2 年 6 月と 7 月に調査を実施した。

なお、この調査には平成 2 年 7 月 10・11 日実施に平成 2 年度市町村文化財担当者等研修会（技術研修）に参加した多くの県内各教育事務所・市町村教育委員会文化財担当者並びに文化財保護委員・文化財保護審議会委員、宮城県文化財保護地区指導員のご協力をいただいた。

2．調査の概要

協議により､村道の拡幅が最大幅 4～5m､延長約 90mの範囲に収まることになったため､調査は拡幅部分に幅約 3mのトレンチを東西に 4 本（トレンチ名は東からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの順）設定して行った。

まず、重機で村道建設時の盛土および表土を除去したところ、Ａ・Ｂトレンチの表土下で縄文土器や石器を少量含む黒褐色土の遺物包含層が認められたため、その後の調査は手掘りによる作業に切り替えた。

遺物包含層は南から北に緩やかに、さらに西から東にも僅かに傾斜して堆積しており、

厚さ約 20㎝ほどで黄褐色砂質粘土の地山に達している。Ａトレンチでは 2、3 層に細分された場所もあるが、遺物量は全体的に少なく、層による変化も見られなかった。

また、Ａトレンチの中央部の表土下で、遺物包含層を切って調査区を南西から北東に斜めに横断する幅約 7～10m、深さ約 30㎝の浅い溝が検出された。溝には褐色と砂が互層をなして堆積しており、縄文土器や石器が多量に含まれていた。この溝は、上部に 10 世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰層が堆積していたことや、堆積土中に平安時代の土師器が含まれていたこと、縄文土器がいずれも著しく摩滅していたことから、平安時代に自然の作用によってできたものと判断された。しかし、溝中から多量の縄文土器や石器が出土したことにより、遺跡の範囲が調査区南西の溝上流部に広がっており、そこにも何らかの縄文時代の遺構が存在することが推定された。

西端のＤトレンチでは厚さ 8㎝ほどの黄褐色パミス層下に、上面がやや風化を受けた厚さ約 12㎝の褐色火山灰層が堆積しており、旧石器が出土する可能性があったため、上層との層理面を精査したが、石器は発見されなかった。

3．出土遺物

今回の調査で出土した遺物には縄文土器・石器、土師器があり、出土量はコンテナで約 5 箱分で、その大部分が平安時代にできた溝の堆積土から出土した縄文時代の遺物である。

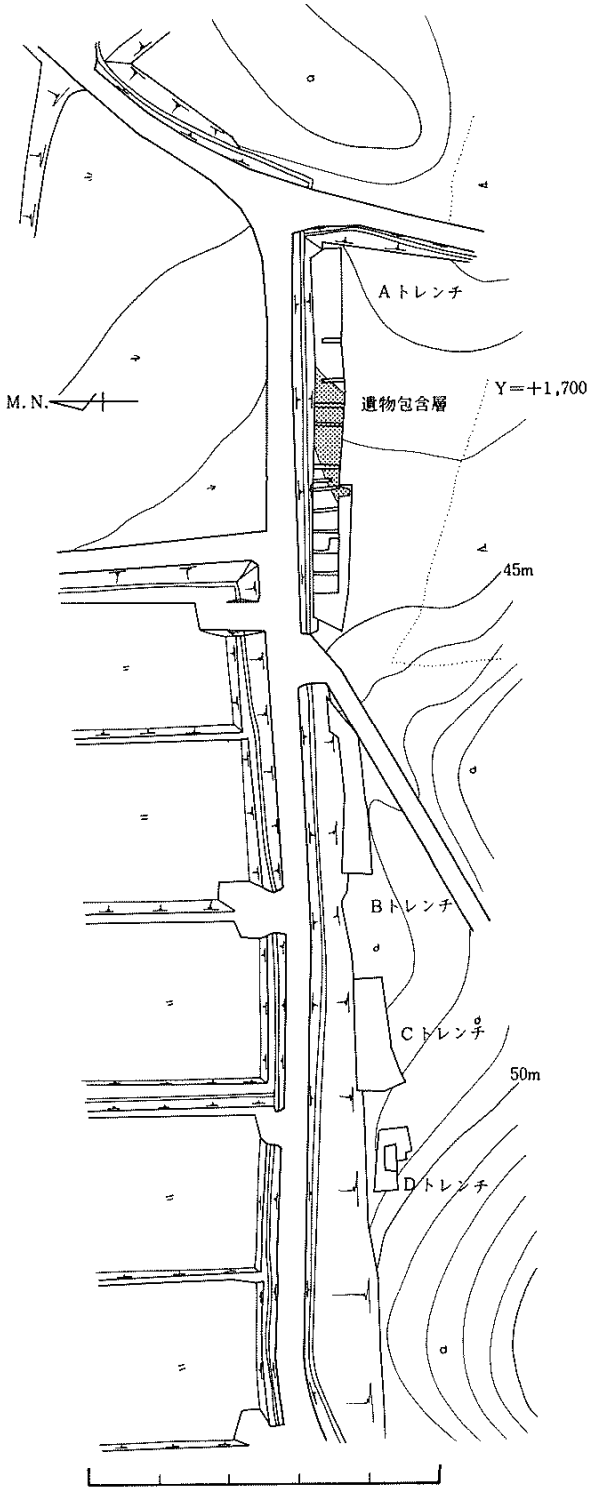
縄文土器は中期および後期のもので、いずれも摩滅の著しい破片資料である。

中期の土器には口縁部に横位渦巻文が施された大木 8ｂ式、胴部に縦位楕円文やΩ文が施された大木 9 式、口縁部に鰭状の隆帯が付された大木 10 式のものがみられるが、量は少ない。

量的に主体を占めるのは後期初頭の南境式に属する土器であり、これには口縁部に窓のあるねじれた突起をもつもの、口縁部下端に刺突を伴う隆線が横走するもの、胴部に下垂する刺突の付いた隆帯が付されたもの、胴部に多条沈線による弧条文が施されたものなど多様な文様がみられる。また、胴部に横位の帯状磨消文が施された後期中葉の金剛寺式土器も少量ある。

土製品としては、土器の胴部破片を円形に加工した円板状土製品が比較的多く出土している。石器には石鏃、石匙、石錘、石篦、石斧、磨石などがある。

土師器は平安時代のもので、表杉ノ入式に属する底部が糸切無調整の内黒坏などがみられる。

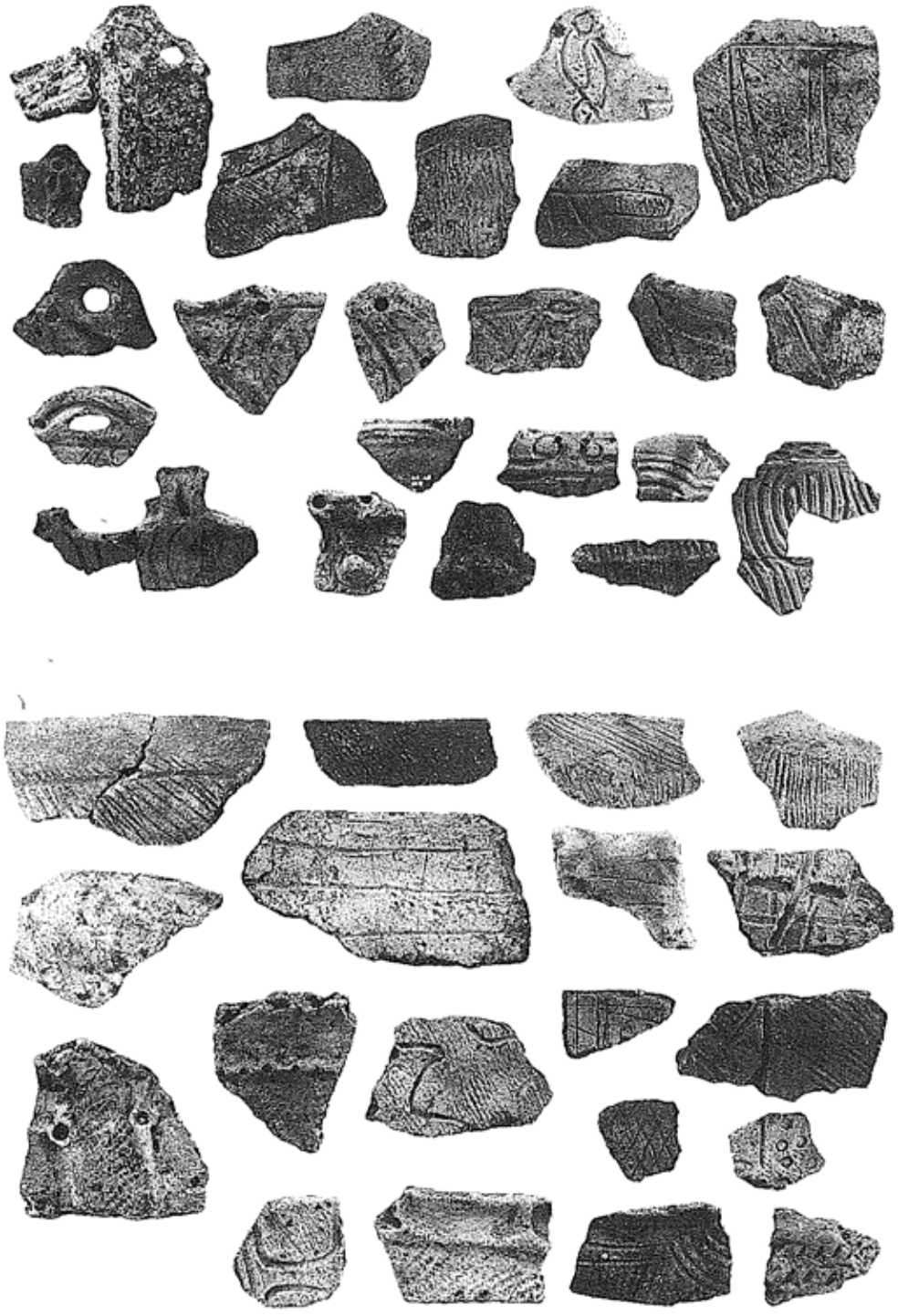


第1図　トレンチ配図

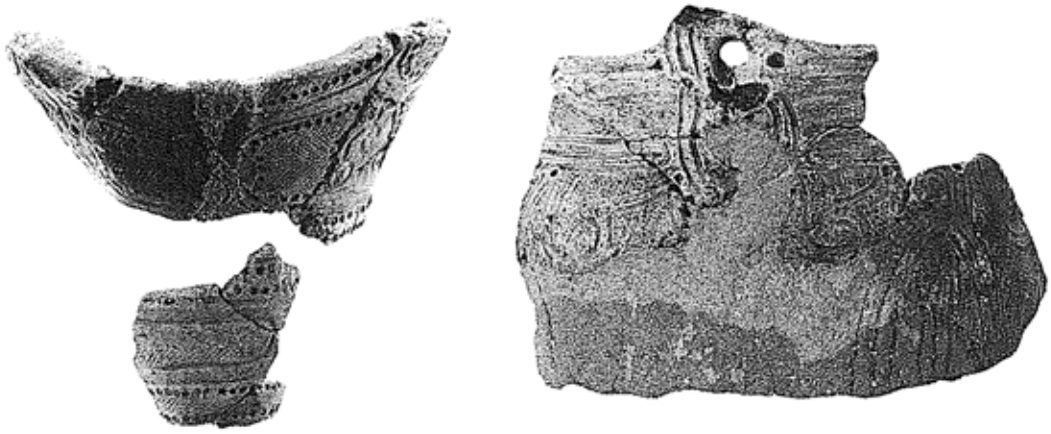
5．まとめ

本遺跡は善川の段丘上に立地する縄文時代の集落跡である。昭和 56 年の圃場整備にともなう工事によって一部が破壊されてはいるものの、この際に住居跡や貯蔵穴などが多数存在することが確認されており、縄文時代の集落研究にとって重要な遺跡と考えられる。

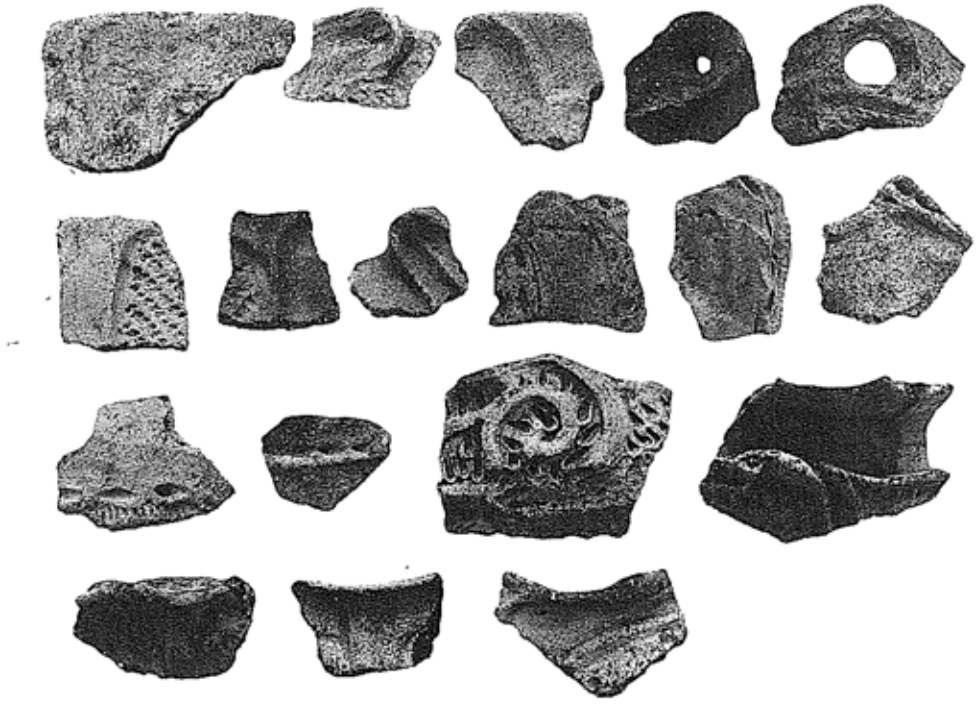
今回の調査は村道の改良工事に伴うものであるが、平安時代に自然作用によってできたとみられる溝が検出されただけで、縄文時代の遺構は発見されなかった。しかし、溝の堆積土から比較的多量の縄文土器や石器が出土したことにより、上流部分にも縄文中期から後期にかけての遺構が存在する可能性が高まったと言える。今後、本遺跡の範囲と性格についてさらに究明する必要があろう。



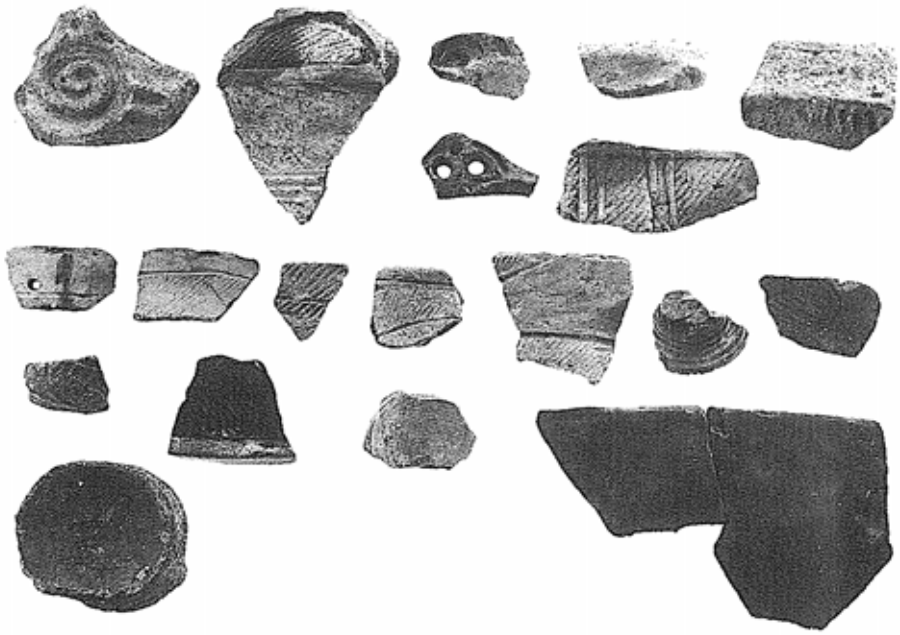
縄文時代後期の土器



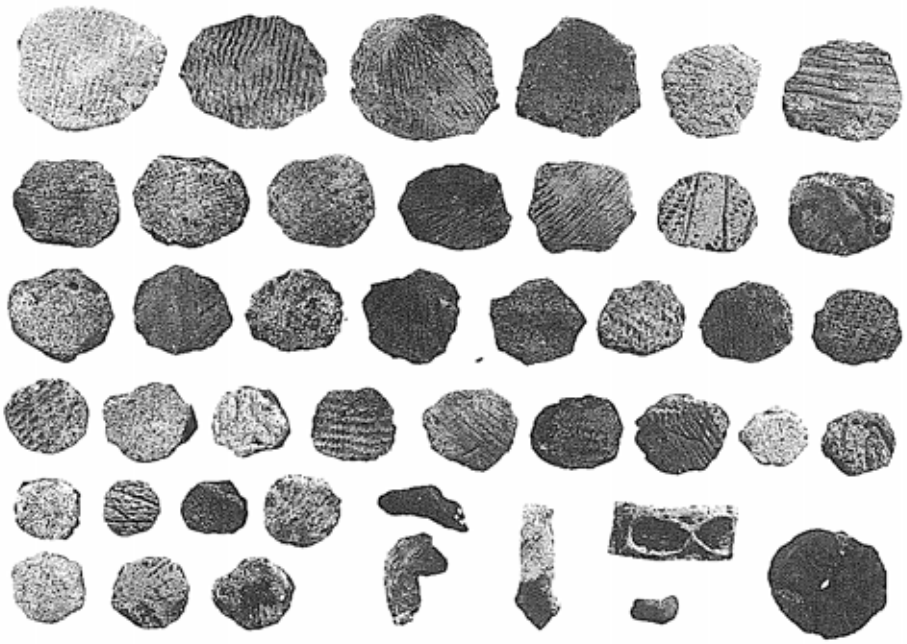
縄文時代後期の土器



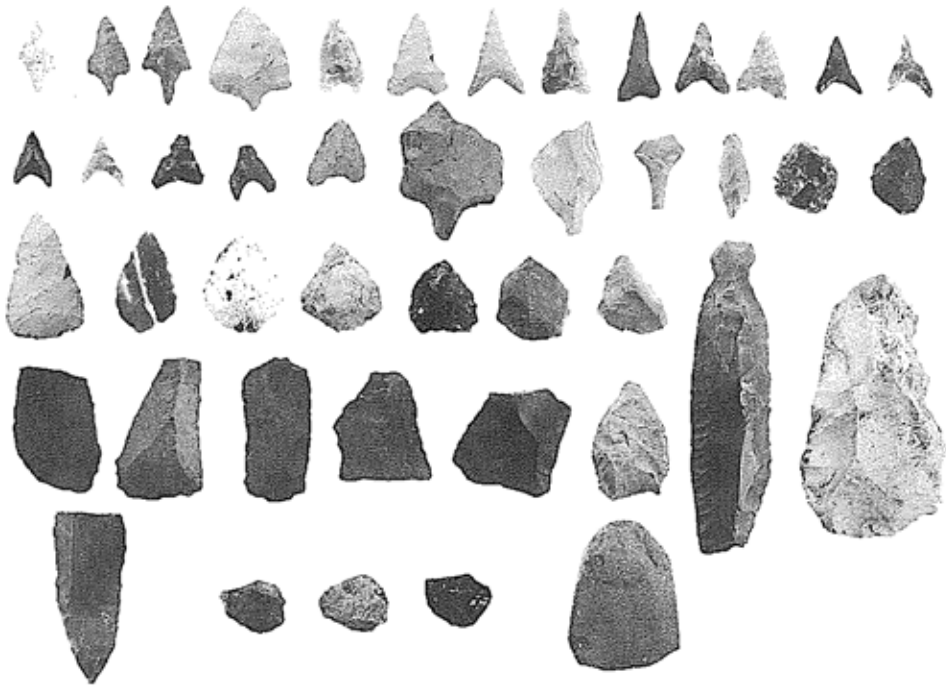
縄文時代中期の土器



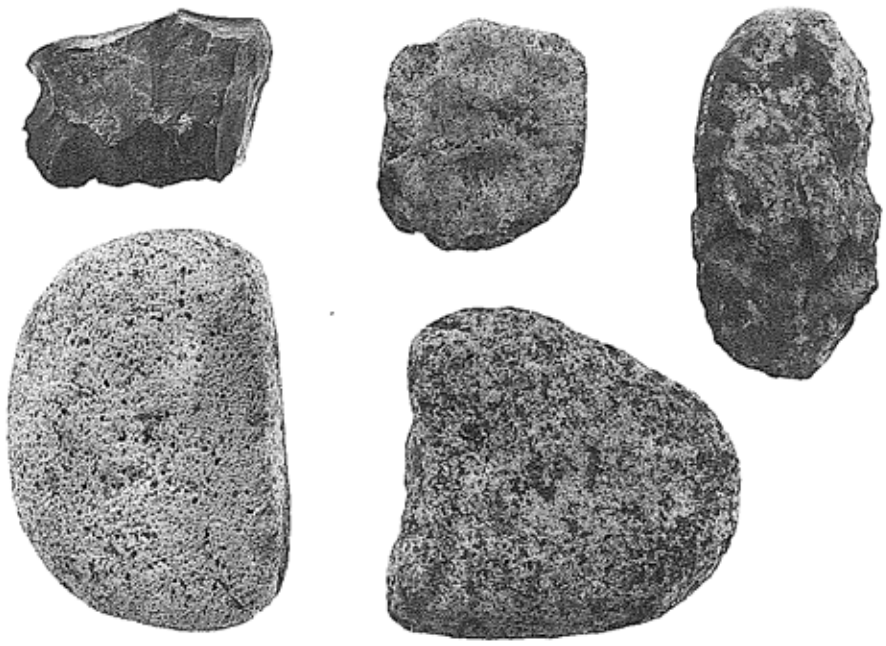
縄文時代中期の土器



土製品



剝片石器



礫石器